

3. 種の解説

(1) 植物

香川県ではシダ植物以上の高等植物は、およそ 2,829 種が自生している（変種・亜種を含み、雑種・品種及び保留種・未確定種を除く：2019 年 6 月 30 日現在の久米作成未発表資料による）。そのうち、1,025 種の帰化植物や野生化植物を除くと、1,804 種の在来植物が自生していることになる。植物のレッドデータブック掲載種の選定にあたっては、これらのシダ植物以上の在来の高等植物のうち調査途中から追加した種も含めて 481 種を対象に現地調査とともに文献調査・標本調査を行った。

現地調査は「香川植物の会」の会員が中心となって行った。調査対象種の写真あるいは標本を根拠資料とした分布についての情報は、それぞれの個別資料ごとに、確認年月日、確認地名、3 次メッシュコード（世界測地系）、確認地点の緯度・経度（世界測地系）、現存株数（概数）、以前からの増減、危険性の要因などを記録した調査票を添付した。調査者の間で特に調査対象地域の分担を行っていないので、資料の重複が起こりうる。

文献調査は前回の調査以降に香川県で新たに発見された植物に関する報告文、香川県の希少野生植物について取り上げた論文および報告文についてリストアップした。また、標本調査は香川大学教育学部生物学教室に所蔵されている植物標本の中から 2004 年発行の「香川県レッドデータブック」掲載種を中心にリストアップしたが、香川県未記録種の標本も何種か発見された。

今回の調査期間である平成 27 年（2015 年）から平成 30 年（2018 年）末までの集計では、絶滅情報や重複情報も含めて、全体で 3,051 件の個別資料が寄せられた。前回の調査期間である 1999 年から 2003 年までの 3,100 件、その後の 2004 年から 2014 年の間に香川植物の会によって収集された 3,070 件、合わせて 9,221 件の現地調査資料をもとに絶滅の危険性の評価を行った。

調査対象種のうち 80 種が新規調査対象種であるが、そのうち 47 種は、前回のレッドデータブック作成の後に新たに県内で生育していることが確認された種である。その中には、過去に県内で採集された標本が新たに見つかったが、50 年以上確認されていないため、絶滅（EX）と判定された種もある。新規調査対象種としたが、絶滅の危険性がないためリストには掲載されなかった 5 種を除いた 476 種について、前回評価と今回評価の比較を行ったのが、下記の表である。絶滅の危険性評価の結果、462 種を今回のレッドデータブック掲載種として選定した。その内訳は、絶滅（EX）14 種、絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）245 種、絶滅危惧Ⅱ類（VU）109 種、準絶滅危惧（NT）80 種、情報不足（DD）14 種となった。

植物の前回評価種数と今回評価種数の比較

| | | 今回評価 | | | | | | | 合計 |
|------|-------|------|----|-------|-----|----|----|----|-----|
| | | EX | EW | CR+EN | VU | NT | DD | 削除 | |
| 前回評価 | EX | 3 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 5 |
| | EW | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | CR+EN | 8 | 0 | 184 | 4 | 0 | 2 | 3 | 201 |
| | VU | 0 | 0 | 22 | 66 | 6 | 1 | 0 | 95 |
| | NT | 0 | 0 | 3 | 20 | 59 | 0 | 7 | 89 |
| | DD | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 7 | 3 | 11 |
| | 新規 | 3 | 0 | 34 | 19 | 15 | 4 | 0 | 75 |
| 合計 | | 14 | 0 | 245 | 109 | 80 | 14 | 14 | 476 |

前回から削除された種は 14 種ある。多くは分類学的な見直しに伴うものである。コハナヤスリ（前回：絶滅危惧Ⅰ類）、クジャクフモトシダ（前回：準絶滅危惧）、オオミズヒキモ（前回：絶滅種）は分類学上雑種であることからリストから削除された。ホソバウマノスズクサ（前回：準絶滅危惧）は、香川県産のものはオオバウマノスズクサ（今回：準絶滅危惧）であること、オオバギボウシ（前回：情報不足）は、香川県産のものは栽培逸出であることから、それぞれ削除された。マルミスブタ（前回：絶滅危惧Ⅰ類）は、スブタと種子の突起だけで区別することから区別せず、スブタ（今回：絶滅危惧Ⅰ類）に統合された。ホシクサ科の仲間は分類学的な見直しによって、サイコククロイヌノヒゲ（前回：絶滅危惧Ⅰ類）はツクシクロイヌノヒゲ（今回：絶滅危惧Ⅱ類）と、シロイヌノヒゲ（前回：準絶滅危惧）はイヌノヒゲ（今回：絶滅危惧Ⅱ類）と、それぞれ同種として統合された。前回に準絶滅危惧と評価されていたシロヤマシダ、ミヤコアオイ、ナンカイアオイ、ヒメバライチゴ、ダイセンミツバツツジはいずれも個体数が多く、園芸採取などによる減少の危険性も少なくなったと判断され、リストから削除された。情報不足としてリストに掲載されていたゴマノハグサは生育根拠がはっきりせず、現在までその証拠が見つかっていないため、リストから削除された。

前回の評価で、絶滅危惧Ⅰ類と評価されていたヨツバヒヨドリとヤナギタンポポ、絶滅危惧Ⅱ類と評価されていたイワカラマツはいずれも情報不足と評価し直された。ヤナギタンポポは標本が残されており生育根拠が不明瞭であること、イワカラマツとヨツバヒヨドリは分類学的該当種として疑問があることによって、それぞれ情報不足とされた。

絶滅種は 14 種と、前回より 9 種増加した。前回の絶滅種は 5 種であったが、いずれも大阪市立自然史博物館に所蔵されている故三木茂氏が香川県で採集した水草の標本リストによるものであった。5 種のうち、イトクズモは今回の調査で 2017 年 5 月 12 日に佐藤明氏によって小豆島で生育していることが確認された。高松市西浜で、故三木茂氏によって 1929 年に採集された標本から見ると、実に 88 年ぶりの再発見とすることになる。再発見されたイトクズモの標本は香川県で所蔵できる公的な施設がないため徳島県立博物館に寄贈された。前回の絶滅種にオオミズヒキモをリストに入れていたが、雑種であるため今回のリストから除かれた。そのため、実質的には絶滅種は 3 種から 14 種と 11 種の増加となる。11 種のうち、ツレサギソウ（1967 年 5 月 20 日採集）、ヒメタデ（1965 年 9 月 4 日採集）、キセワタ（1964 年 10 月 24 日採集）の 3 種は、香川大学教育学部生物学教室所蔵の標本の中から見つかったもので、いずれも採集されてから 50 年以上経っており、現地調査では発見されなかったため、絶滅種と判断された。同じように、1950 年代から 1960 年代にかけて標本が採集されてから 50 年以上生育が確認されていないために絶滅種となった種として、タキミシダ（1961 年採集）、ヒロハノアマナ（1969 年）、ササバギンラン（1963 年）、シラヒゲソウ（1964 年）、モロコシソウ（1953 年）、マネキグサ（1968 年）、ハルノタムラソウ（1969 年）、クマノギク（1964 年）があげられる。現在では香川県に生育していない種が、50 年以上生育が確認されていないために香川県の絶滅種であるというためには 50 年以上前には香川県に生育していたという証拠標本が必要である。タキミシダとササバギンランは文献情報によるもので、タキミシダは東京大学、ササバギンランは金沢大学に標本が保管されていると考えられる。モロコシソウ、マネキグサ、ハルノタムラソウ、クマノギクは故坂口清一氏による標本が高松市市民文化センターに寄贈されている。ヒロハノアマナは故和気俊郎氏、シラヒゲソウは香川植物の会の久米修氏が標本を所蔵している。

前回の調査でも今回の調査でも生育が確認されていない植物が多くあったことから、今後、採集されて

から50年以上経っているために絶滅したと判断される種が増えていくものと考えられる。1970年代に採集されて以降、現地調査で確認されていないハクウンボク（1974年）、スズメハコベ（1972年）、ミズネコノオ（1974年）、ミヤコアザミ（1974年）などは、新たな生育確認がなければ、近いうちに絶滅種の仲間入りをすることになる。前回の現地調査から今回の現地調査までの21年間に生育情報のない種は、絶滅種や情報不足種も含めて64種もあった。生育確認のため既知の産地に調査に行っていないため確認されていない場合もあると考えられるが、絶滅危惧Ⅰ類のなかには、すでに絶滅している種もあるかもしれない。

前回のレッドリスト作成の後に新たに県内で生育していることが確認された47種のうち、3種が絶滅、30種が絶滅危惧Ⅰ類、11種が絶滅危惧Ⅱ類、3種が情報不足と評価された。絶滅危惧Ⅰ類のうち、14種が今回の調査では確認されなかった。オオバシナミズニラ、セイタカスズムシソウ、ハタベカンガレイ、ミヤマツチトリモチのように新たな生育確認地での絶滅が報告された種もあった。

新規調査対象種のうち、新規発見種を除いた掲載種は28種であるが、その内訳は5種が絶滅危惧Ⅰ類、8種が絶滅危惧Ⅱ類、14種が準絶滅危惧、1種が情報不足である。それまで香川県に生育していることが知られているが前回のレッドリストに掲載されなかったと言うことは、前回の調査では絶滅の危険性が少ないと判断されたためである。しかしながら、アカハナワラビとホソバノコギリシダの場合には分類学上の見直しが行われ、それぞれオオハナワラビとノコギリシダから別種となった両種は、いずれも県内では局所的にしか生育しておらず、個体数も少ないため絶滅危惧Ⅰ類と評価されることとなった。また、ヤマタツナミソウのように前回の調査では県内での生育記録を確認できず、リストに未記載であったが、今回の調査で生育が確認されたものの、県内では局所的にしか生育しておらず、個体数も少ないため絶滅危惧Ⅰ類と評価されることになった場合もある。

前回の評価では絶滅危惧Ⅱ類であったが、今回の評価では絶滅危惧Ⅰ類となった種は22種ある。同じように、前回の評価では準絶滅危惧であったが、絶滅危惧Ⅱ類となった種は20種、絶滅危惧Ⅰ類となった種は3種あった。絶滅危惧Ⅰ類であって絶滅した8種と情報不足であったが絶滅危惧Ⅰ類となった1種を含めると、前回の評価から絶滅の危険性が高くなった種は合計54種となる。リストから削除されたり、情報不足と変更されたり、より絶滅の危険性の低いランクに変更された理由は種によって様々であるが、産地・個体数が増加しており、絶滅の危険性が低くなったと判断される種は、イトクズモのように絶滅種が再発見された場合を含めても13種であった。

前回の評価から絶滅の危険性が高くなった54種のうち、28種がため池や湿地に生育する種、26種が陸上に生育する種であった。ため池や湿地に生育する種では、「ため池の改変」が最も多く、25種で絶滅・危険性の要因にあげられている。「湿地の改変」が危険性の要因にあげられているのが12種である。ため池や湿地に生育する植物は、水の中に生育する植物と水際に生育する植物に大きく区分されるが、水の中に生育する植物では「水質汚濁」も危険性の大きな要因となっている。絶滅危惧Ⅱ類から絶滅危惧Ⅰ類になったオニバス、ヒツジグサ、ノタヌキモなどや、準絶滅危惧から絶滅危惧Ⅱ類となったミズニラ、ジュンサイ、ミズオオバコ、タチモ、イヌタヌキモ、ガガブタなどでは、「水質汚濁」の影響が大きい。オニバスは香川県条例によって「指定希少野生生物」に指定されているものの、水質汚濁によって産地・個体数が減少し、より絶滅の危険性が高まっている状態になったことは残念なことである。自然の湿地が少ない香川県では、ため池の水際にできる湿地は、多くの湿性植物にとっては重要な環境である。そのような中で、イヌセンブリ、シロネ、サワギキョウなどが、絶滅危惧Ⅱ類から絶滅危惧Ⅰ類となり、カキラ

ン、ミズギボウシ、キセルアザミなどが、準絶滅危惧から絶滅危惧Ⅱ類となっている。マツカサススキやアキノハハコグサのように産地・個体数が著しく減少したため、準絶滅危惧から絶滅危惧Ⅰ類になったものもある。これらの湿地生植物は、いずれも「自然遷移」も危険性の要因にあげられている。ため池の管理手法の変化などによって、自然遷移が進行し、急速に産地・個体数が減少していったものと考えられる。また、サワギキョウやカキランでは「園芸採取」も大きな危険性要因である。

陸上に生育する26種では、最も多い絶滅・危険性の要因にあげられているのが「森林開発」と「自然遷移」であり、いずれも20種で要因にあげられている。「森林開発」が絶滅・危険性の要因にあげられているのは、クサソテツ、ツクシヤブソテツ、サイコクサバノオ、ヤマホオズキ、ハナタツナミソウ、アワコバイモなど讃岐山脈とその周辺部を生育地とする種と、ムサシアブミ、カンザシキリンソウ、ムラサキセンブリなどのように小豆島などの島嶼部や沿岸部の低山地に生育する種に分けられる。海浜に生育するピロードテンツキ、ケカモノハシ、ハマビシなどは、「海辺の改変」が絶滅・危険性の要因にあげられている。

香川県では条例によって、オニバス、トサコバイモ、カンカケイニラ、ミセバヤ、シコクカッコソウ、ショウドシマレンギョウ、ウンラン、アサザの8種が指定希少野生生物に指定されており、継続的にモニタリング調査が実施されている。しかしながら指定希少野生生物に指定されていることによって絶滅の危険性が回避されているわけではない。これらの8種の指定希少野生生物の現況について、その概要を報告する。

すでに述べたように、オニバスは、絶滅危惧Ⅱ類から絶滅危惧Ⅰ類に変更された。オニバスはこれまでに平野部の70カ所以上のため池で生育が確認されているが、最近では10カ所程度のため池でしか確認されていない。富栄養化による水質の悪化が大きな原因であると考えられる。ため池の水質改善が図られない限り、絶滅の危険性の増大は避けられないだろう。トサコバイモは、讃岐山脈のごく限られた地域にのみ生育する。新たな生育地が見つかったことにより、確認個体数は多くなっているが、人の立ち入りによる踏みつけの危険性が大きい。カンカケイニラは、小豆島のごく限られた地域でしか生育が確認されていない香川県固有種であるが、指定後も個体数が減少し、周辺樹木の庇陰によって絶滅した生育地もある。最近では開花個体が見られなくなり、イノシシによる生育地の攪乱も起こっている。ミセバヤは、小豆島の複数カ所の崖地に点在する。以前から人の手の届くような所ではほとんど見られなくなっていたが、モニタリング調査によって人の手が届かないような高い崖地で生育しているような所が新たに見つかったことによって、以前よりは生育確認個体数は多くなっている。シコクカッコソウは、讃岐山脈の山間部に生育地が点在する。比較的個体数の安定した生育地もあれば、個体数の変化の激しい生育地もある。個体数の変化が激しい原因はよく分かっていない。新たな生育地が見つかる一方で、以前からの生育地で上層木の庇陰や盗掘によって絶滅したところもある。また、生育地の森林開発の影響を受けたところもある。ショウドシマレンギョウは小豆島の限られた地域にしか分布しない香川県固有種である。個体数の多い生育地では大きな変化はないが、生育地によっては、強度の庇陰によって絶滅したところや、ほとんど開花個体が見られなくなったところもある。ウンランは、香川県の1カ所の海浜で生育が確認されており、個体数も多い。しかしながら、開花はしても種子は全く見当たらない状態が続いている。アサザは、香川県では1カ所のため池でしか自生が確認されていない。自生地は「指定希少野生生物保護区」にも指定されている。個体数は多く安定しているが、毎年アオコが発生しており、水質改善は余り進んでいないようである。

(末広喜代一)

種の解説の「種の特徴」の記載に当たっては、以下のような図鑑類を参考にした。

- 倉田悟・中池敏之編. 1979. 日本のシダ植物図鑑1. 東京大学出版会, 東京
- 倉田悟・中池敏之編. 1981. 日本のシダ植物図鑑2. 東京大学出版会, 東京
- 倉田悟・中池敏之編. 1983. 日本のシダ植物図鑑3. 東京大学出版会, 東京
- 倉田悟・中池敏之編. 1985. 日本のシダ植物図鑑4. 東京大学出版会, 東京
- 倉田悟・中池敏之編. 1987. 日本のシダ植物図鑑5. 東京大学出版会, 東京
- 倉田悟・中池敏之編. 1990. 日本のシダ植物図鑑6. 東京大学出版会, 東京
- 倉田悟・中池敏之編. 1994. 日本のシダ植物図鑑7. 東京大学出版会, 東京
- 倉田悟・中池敏之編. 1997. 日本のシダ植物図鑑8. 東京大学出版会, 東京
- 中池敏之. 1992. 新日本植物誌 シダ篇 改訂増補版. 至文堂, 東京.
- 岩槻邦男. 1992. 日本の野生植物・シダ. 平凡社, 東京.
- 海老原淳. 2016. 日本産シダ植物標準図鑑Ⅰ. 学研, 東京
- 海老原淳. 2017. 日本産シダ植物標準図鑑Ⅱ. 学研, 東京
- 北村四郎・村田源・堀勝. 1957. 原色日本植物図鑑・草本編Ⅰ. 保育社, 大阪.
- 北村四郎・村田源. 1961. 原色日本植物図鑑・草本編Ⅱ. 保育社, 大阪.
- 北村四郎・村田源・小山鐵夫. 1964. 原色日本植物図鑑・草本編Ⅲ. 保育社, 大阪.
- 北村四郎・村田源. 1971. 原色日本植物図鑑・木本編Ⅰ. 保育社, 大阪.
- 北村四郎・村田源. 1979. 原色日本植物図鑑・木本編Ⅱ. 保育社, 大阪.
- 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富成忠夫編. 1982. 日本の野生植物・草本Ⅰ 単子葉類. 平凡社, 東京.
- 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富成忠夫編. 1982. 日本の野生植物・草本Ⅱ 離弁花類. 平凡社, 東京.
- 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富成忠夫編. 1981. 日本の野生植物・草本Ⅲ 合弁花類. 平凡社, 東京.
- 佐竹義輔・原寛・亘理俊次・富成忠夫編. 1989. 日本の野生植物・木本Ⅰ. 平凡社, 東京.
- 佐竹義輔・原寛・亘理俊次・富成忠夫編. 1989. 日本の野生植物・木本Ⅱ. 平凡社, 東京.
- 牧野富太郎著・小野幹雄ほか編. 1989. 改訂増補 牧野新日本植物図鑑. 北隆館, 東京.
- 牧野富太郎原著・邑田仁・米倉浩司編. 2017. 新分類牧野日本植物図鑑. 北隆館, 東京.
- 大橋広好・門田裕一・邑田仁・米倉浩司・木原浩編. 2015. 増補改訂新版・日本の野生植物1・ソテツ科～カヤツリグサ科. 平凡社, 東京.
- 大橋広好・門田裕一・邑田仁・米倉浩司・木原浩編. 2016. 増補改訂新版・日本の野生植物2・イネ科～イラクサ科. 平凡社, 東京.
- 大橋広好・門田裕一・邑田仁・米倉浩司・木原浩編. 2016. 増補改訂新版・日本の野生植物3・バラ科～センダン科. 平凡社, 東京.
- 大橋広好・門田裕一・邑田仁・米倉浩司・木原浩編. 2017. 増補改訂新版・日本の野生植物4・アオイ科～キョウチクトウ科. 平凡社, 東京.
- 大橋広好・門田裕一・邑田仁・米倉浩司・木原浩編. 2017. 増補改訂新版・日本の野生植物5・ヒルガ

オ科～スイカズラ科. 平凡社, 東京.

茂木透・高橋秀男・勝山輝男・石井英美・太田和夫・城川四郎・崎尾均・中川重年・吉山寛. 2000. 樹に咲く花・離弁花1. 山と溪谷社, 東京.

茂木透・高橋秀男・勝山輝男・石井英美・太田和夫・城川四郎・崎尾均・中川重年・吉山寛. 2000. 樹に咲く花・離弁花2. 山と溪谷社, 東京.

茂木透・高橋秀男・勝山輝男・石井英美・太田和夫・城川四郎・崎尾均・中川重年・吉山寛. 2001. 樹に咲く花・合弁花・単子葉・裸子植物. 山と溪谷社, 東京.

林弥栄・門田裕一・平野隆久・畔上能力・菱山忠三郎・西田尚道. 2013. 野に咲く花・増補改訂新版. 山と溪谷社, 東京.

門田裕一・永田芳男・畔上能力・菱山忠三郎・西田尚道. 2013. 山に咲く花・増補改訂新版. 山と溪谷社, 東京.

永田芳男. 2015. レッドデータプランツ 増補改訂新版. 山と溪谷社, 東京.

いがりまさし. 2005. 増補改訂・日本のスミレ. 山と溪谷社, 東京.

角野康郎. 1994. 日本水草図鑑. 文一総合出版, 東京.

角野康郎. 2014. 日本の水草. 文一総合出版, 東京.

遊川知久・中山博史・鷹野正次・松岡裕史・山下弘. 2015. 日本のランハンドブック(1) 低地・低山編. 文一総合出版, 東京.

| ミズスギ <i>Lycopodiella cernua</i> (ヒカゲノカズラ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|---|---|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦⑧* 本種は生育環境が特異であり、県内に局地的に生育地が点在していたが、近年個体数がいちはしく減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 常緑性。暖帯のものは茎はやや短くはって分岐し、地についた部分で根を出す。胞子のう穂を頂生させるが、沖縄県など亜熱帯のものは茎は直立し、長さ60cm前後にも達し枝を分岐して、姿が針葉樹のような形になる。葉は線形で、胞子葉は幅広くなる。 | | |
| 分 布 | 国内では、北海道、本州、四国、九州、琉球列島、小笠原諸島に分布する。本県では、今回の調査により、丸亀市、まんのう町で分布を確認したが、過去には、さぬき市、土庄町、小豆島町、直島町、三豊市でも生育が確認されている。日あたりの良い湧水で湿った斜面や路傍の崖地、山麓の草原などにしばしば群生する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 産地は相当数確認されており、個体数も希ではないが、既知の産地の中には生育地が開発で消失したり、生育確認のできなかった場所もある。今後の動向によっては予断を許さない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や湿地の改変、道路建設、土地造成などによる生育地の消失、自然遷移による衰退が考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：高家彦 | | |

| マンネンスギ <i>Lycopodium dendroideum</i> | | 香川県カテゴリー | 情報不足 (DD) |
|---|---|----------|-----------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | 確認年代も標本も不詳であることから情報不足と評価した。 | | |
| 種 の 特 徴 | 常緑性で、茎は地中を長くはい、地上茎は全体の形が樹木状になる。胞子のう穂は小枝の先に1個頂生する。 | | |
| 分 布 | 国内では、北海道、本州、四国、九州、屋久島に分布する。本県では、過去に塩江町で確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地上部の落葉広葉樹林でやや湿気のある安定した林床に生育する。和気俊郎によって確認されたが、その後再確認できていない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 18 | 執筆者：高家彦 | |

| ミズニラ(ミズニラモドキを含む) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|------------------|--|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑦⑧* ため池や水路など水湿地という特殊な生育環境に生育しており、近年個体数が減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉は多数叢生し、長さ10～50cmになる沈水性或は湿生植物。茎は塊茎となる。6月頃から葉の基部内側の葉に小胞子、外側の葉に大胞子が形成される。ミズニラモドキ(<i>L. pseudojaponica</i>)は小胞子表面の模様が異なるが、外部形態での識別が困難である。ここでは区別せず、ミズニラに含めた。 | | |
| 分 布 | 国内では、本州、四国に分布する。特にミズニラモドキは日本固有種であり、国内での生育地がミズニラより限られている。本県では、今回の調査により、東かがわ市、さぬき市、三木町、小豆島町、高松市、綾川町、まんのう町の分布を確認したが、過去には、坂出市、丸亀市、三豊市でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 主としてため池の浅水部や湿地部に生育しており、山際の用水路や湿地にも生育している。2015年以降の調査では、既存産地での確認ができなかったり、株数の減少が顕著な箇所があったりした。ため池の管理放棄や水質汚濁により、絶滅したと考えられる産地が増えた。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 池沼開発や池の管理放棄、水質汚濁により、急速に減少率が高くなっており、絶滅した産地が増えていることからVUと評価された。 | | |
| 特 記 事 項 | 水質悪化・溜池環境の変化で産地が急激に減少している。 | | |
| 文 献 | 19, 36 | 執筆者：高家彦 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| オオバシナミズニラ <i>Isoetes sinensis</i> var. <i>coreana</i> (ミズニラ科) | | 香川県カテゴリ | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|--|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリ | 絶滅危惧ⅠB類 (EN) |
| 選定理由 | ⑤⑦* 本種は香川県内では、ただ1箇所、高松市で自生が確認されている。 | | |
| 種の特徴 | オオバシナミズニラはミズニラやミズニラモドキに酷似し、外部形態では識別できない。大孢子表面の模様がミズニラでは蜂の巣状、ミズニラモドキでは乱れた蜂の巣状になるのに対して、オオバシナミズニラでは不規則に乱れた鶏冠状隆起になることで識別できる。 | | |
| 分布 | 国内では、本州(茨城県・長野県・中国地方)、四国に分布している。本県の今回の調査では、高松市の1箇所自生が確認された。 | | |
| 県内での生育状況 | 本県の自生地は沼が干上がった状態で、イノシシの徘徊の跡が多数残っており、生育を確認することができなかった。 | | |
| 絶滅危険性の要因 | 溜池の改変や管理放棄、水質汚濁による環境悪化が顕著で、動物の食害が加わり、現状では絶滅の恐れがある。 | | |
| 特記事項 | 新たに県内の生育が確認された。 | | |
| 文献 | 19, 34 | 執筆者: 高家和彦 | |

| シチトウハナワラビ <i>Botrychium atrovirens</i> (ハナヤスリ科) | | 香川県カテゴリ | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリ | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選定理由 | ⑤⑥* 県内の産地が少なく、限られた産地に局地的に生育しており、個体数は少ない。 | | |
| 種の特徴 | 本種は、オオハナワラビの裸葉が草質であるのに対してやや革質で光沢があり、色は明るい緑に対して濃い緑となり、裂片の辺縁は鋭い鋸歯状に対して鈍い鋸歯状になる。裂片の幅が狭い型はモトマチハナワラビと称されるが、現時点では暫定的にシチトウハナワラビの仲間として扱われている。 | | |
| 分布 | 国内では、本州(伊豆諸島・関東地方以西)、四国、九州、屋久島に分布する。本県では、今回の調査により、高松市と坂出市の2箇所分布を確認した。本種は太平洋沿岸地に分布が多いが、瀬戸内海沿岸の自生地として極稀である。 | | |
| 県内での生育状況 | 本種は明るい樹林下にオオハナワラビと混生しており、交雑種も多くみられる。オオハナワラビに比べて本種の株数はきわめて少ない。本来のシチトウハナワラビより裂片の幅が狭い型が多い。 | | |
| 絶滅危険性の要因 | 森林開発や管理地放棄による環境の悪化で絶滅の恐れがある。 | | |
| 特記事項 | 新たに県内の生育が確認された。 | | |
| 文献 | | 執筆者: 高家和彦 | |

| アカハナワラビ <i>Botrychium nipponicum</i> var. <i>nipponicum</i> (ハナヤスリ科) | | 香川県カテゴリ | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリ | — |
| 選定理由 | ⑦* 県内の産地が少なく、限られた産地に局地的に生育しており、個体数は少ない。 | | |
| 種の特徴 | 葉身は典型的な三出状五角形、二・三回羽状深裂、裸葉の色は石灰緑色で、冬季に紅変(小豆色)するが、春に元の色に戻る。実葉は長く、胞子は9月～10月頃に熟し、胞子飛散後じきに枯倒する。 | | |
| 分布 | 国内では、北海道、本州、四国、九州に分布する。本県では、今回の調査により、まんのう町で分布を確認したが、過去には小豆島町でも生育が確認されている。 | | |
| 県内での生育状況 | 明るい樹林下で、オオハナワラビやフエノハナワラビと混生している。今回の調査で、1箇所1株のみ確認することができた。他方の産地では確認できなかった。絶滅の可能性が高く、綿密な調査が必要である。 | | |
| 絶滅危険性の要因 | 森林開発や河川開発、管理放棄による環境悪化で絶滅のおそれがある。 | | |
| 特記事項 | オオハナワラビとして処理されていたが、分類学上別種とされた。 | | |
| 文献 | | 執筆者: 高家和彦 | |

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ナツノハナワラビ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|---|----------|----------------|
| <i>Botrychium virginianum</i> (ハナヤスリ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦⑧* 本種は県内では南部山地に局地的に生育しており、個体数はごく少なく、近年著しく減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 夏緑性。実葉は3回羽状で広披針形。裸葉は3回羽状であるが裂片の切れ込みが深く、最下羽片の基部は狭くならず、小羽片は柄をもつ。 | | |
| 分 布 | 国内では、北海道、本州、四国、九州に分布する。本県では、今回の調査により、まんのう町での分布を確認したが、過去には、高松市南部、小豆島町でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 本種は以前から自生地も少なく、また、群生を見ず、単生状態で個数もごく少ない。既存産地の内、3箇所を確認できたが、森林伐採により確認できなかった生育地もあった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や道路建設などによる自生地の減少、また、温暖化などによる気象条件の変化による自然遷移も一因と考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆：高家彦 | | |

| コヒロハハナヤスリ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|---|----------|----------------|
| <i>Ophioglossum petiolatum</i> (ハナヤスリ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦⑧* 本種は県内に局地的に生育しており、近年著しく減少して確認が困難な状況にある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉は高さ8～20cm、栄養葉は広卵形から長楕円形長さ1.5～6cm、幅1～3cm、葉の基部は急に狭くなって、一般に葉柄があるが、無柄のこともある、葉の基部が孢子葉の柄を包まない。 | | |
| 分 布 | 国内では、本州、四国、九州、琉球列島、小笠原諸島(聳島、父島、母島)に分布している。本県では、今回の調査により、高松市、丸亀市、まんのう町での分布を確認したが、過去には、小豆島町、坂出市、普通寺市、綾川町、三豊市でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 本種は生育環境の改変により減少し、今回、高松市、坂出市、丸亀市、まんのう町で確認できた。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 土地造成や草地の減少、また下草刈りや落葉かきなど人手が遠ざかったことによる生育環境の変化や、自然遷移による被圧が考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆：高家彦 | | |

| ヒロハハナヤスリ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---------------------------------------|--|----------|----------------|
| <i>Ophioglossum vulgatum</i> (ハナヤスリ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種はかつてごく限られた地域に僅かに生育しており、1箇所を確認できた。 | | |
| 種 の 特 徴 | 夏緑性。葉は長さ25cm前後に達する。栄養葉の基部は殆ど柄がなく、切形かやや心形で孢子葉の基部を包むような感じになる。孢子の表面はこぶ状の突起をもつ。 | | |
| 分 布 | 国内では、北海道、本州、四国、九州、種子島に分布している。本県では、今回の調査により、まんのう町での分布が確認されたが、過去には、小豆島町、高松市でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査では、まんのう町の1箇所でのみに生育しているのが確認できた。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や草地の減少などによる生育地の減少、山草愛好者による園芸用の採取が危惧される。また自然遷移による衰退も考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆：高家彦 | | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| マツバラシ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|----------|--|---|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選定理由 | | ⑦* 県内に局地的に生育していたが、生育場所の特殊性と、江戸時代より日本のサボテンと珍重された観葉植物で、採集により個体数は著しく減少した。 | |
| 種の特徴 | | 常緑性。茎は地上茎と地下茎に分かれ、地下茎には根はなく、褐色の仮根をもつ。地上茎は叉状に数回分岐する。葉はなく、茎には小さな突起をもつ。ソーラスはほぼ球形をしている。 | |
| 分布 | | 国内では、本州(宮城県以南)、四国、九州、琉球列島に分布する。本県では、今回の調査により、小豆島町、丸亀市、綾川町、多度津町、まんのう町、観音寺市、三豊市での分布を確認したが、過去には、土庄町、高松市でも生育が確認されている。 | |
| 県内での生育状況 | | 年々姿を消すなか、小豆島町、綾川町、多度津町、まんのう町、観音寺市、三豊市で確認できたが、何れも1株か多くても数株である。 | |
| 絶滅危険性の要因 | | 庭石採掘、碎石など森林開発、山草業者や愛好家による採集の人為的被害。風雪、気温などによる自然遷移も現象の一因と考えられる。 | |
| 特記事項 | | | |
| 文献 | | 執筆者：高家和彦 | |

| ヤシャゼンマイ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|----------|--|--|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選定理由 | | ⑦* 本種は溪流植物の仲間であり、生育立地が特殊であり、県内に局地的に少数個体が生育している。 | |
| 種の特徴 | | ゼンマイに似るが、やや小型、栄養葉の葉質はやや厚く2回羽状、小羽片は狭披針形、鋭頭基部もくさび状に細くとがる。胞子葉もゼンマイ同様である。山地の溪流沿いに生じ、洪水時に水をかぶるような水辺の岩上や地面に生じる。 | |
| 分布 | | 国内では、北海道(日高)、本州、四国、九州に分布しており、日本固有種である。本県では、今回の調査により、まんのう町での分布を確認したが、過去には、さぬき市、小豆島町、高松市、綾川町、観音寺市でも生育が確認されている。 | |
| 県内での生育状況 | | 今回調査では、1箇所のみ確認となった。自生地の環境変化が考えられ、今後詳細な調査が必要である。 | |
| 絶滅危険性の要因 | | 河川の護岸改修や川床浚渫などによる河川改修、ダム建設による生育地の消失、隣接する森林の開発による生育環境の減少がある。また、自然遷移も衰退の原因と考えられる。 | |
| 特記事項 | | | |
| 文献 | | 執筆者：高家和彦 | |

| ヤマドリゼンマイ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|----------|--|---|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選定理由 | | ⑤⑦* 本種は県内ただ1箇所だけで生育が記録された。 | |
| 種の特徴 | | 夏緑性。根茎は太く斜上し、葉を叢生する。芽立ちの頃縮毛で覆われているが、後に無毛となる。鱗片はない。栄養葉は狭長楕円状披針形、黄緑色、葉柄基部は翼状に広がっている。単羽状で羽片の数は多く、鋭尖頭で羽状に深裂する。胞子葉は栄養葉より早く出て夏には枯れてしまう。 | |
| 分布 | | 国内では、北海道、本州、四国、九州、屋久島に分布している。本県では、1985年に坂出市の1箇所記録された。 | |
| 県内での生育状況 | | 今回の現地調査では、自生地を確認することができなかった。湿地の水質汚濁や干上がり等の環境悪化で絶滅が考えられる。今後、詳細な現地調査の必要がある。 | |
| 絶滅危険性の要因 | | 溜池の改変や管理放棄、水質汚濁による環境悪化が顕著で、現状では絶滅の恐れがある。 | |
| 特記事項 | | 新たに県内に生育していたことが判明した。 | |
| 文献 | | 39, 52 | 執筆者：高家和彦 |

※選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ホソバコケシノブ | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|-----------------|--|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦※ 県内の産地が少なく、限られた産地に局地的に生育しており、個体数は少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 根茎は針状で細長くのびて不規則に分岐する。葉身は羽状複葉、全縁、包膜は2弁状で基部まで深く裂けている。胞子のう床は棒状。裂片は幅狭く鈍い角度で軸につく。葉身の脈は不鮮明で、葉は明るい緑色。 | | |
| 分 布 | 国内では、本州、四国、九州、琉球列島に分布している。本県では、今回の調査により、綾川町、普通寺市、まんのう町での分布を確認したが、過去には、小豆島町でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の樹林下で樹幹または岩上に着生して群生する。今回の調査では、県内3箇所を確認できたが、小豆島町では生育を確認できなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や流域の改変による自生地の消失、自然遷移による衰退が考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 51 | 執筆者：高家彦 | |

| ハイホラゴケ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|---|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| <i>Vandenboschia kalamocarpa</i> (コケンノブ科) | | | |
| 選 定 理 由 | ⑦※ 香川県では、数箇所局地的に確認されているが、個体数は極少なく、生育環境が湿った崖地や岩上と特殊である。 | | |
| 種 の 特 徴 | 常緑性。根茎は長く地表を這い、直径0.3～0.5mm前後、黒褐色の毛が密生する。葉身の大きさは様々であるが、広卵状披針形から楕円形で3回羽状、長さ3～15cm前後。包膜はコップ状で先は少し広がる。 | | |
| 分 布 | 国内では、本州(伊豆諸島・伊豆半島以西)、四国、九州、琉球列島(沖縄島以北)、小笠原諸島(父島)に分布している。本県では、今回の調査により、高松市、坂出市、綾川町、まんのう町、三豊市での分布を確認したが、過去には、東かがわ市、土庄町、小豆島町でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 生育を確認できた産地が多かったが、生育を確認出来ず絶滅したと考えられる産地もあった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 土石の採掘や森林伐採などの森林開発、河川改修やダムの建設により生育地が消失し、自然遷移による生育環境の変化で衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 51 | 執筆者：高家彦 | |

| デンジソウ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|--------------------------------------|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| <i>Marsilea quadrifolia</i> (デンジソウ科) | | | |
| 選 定 理 由 | ⑦⑧※ 本種は県内において産地が少なく、数箇所局地的に生育しているのが確認されている。水質汚染の進行とともに近年激減している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 根茎は細く、長くは不規則に分岐し、淡褐色の毛がある。葉はやや接してつき、葉柄は10～15cm。先端に4枚の小葉(羽片)を十字状につけ、その形は田の字に似る。小葉は無柄。葉柄の基部の少し上から短い枝に、1～3個の胞子のう果がつく。胞子のう果は楕円形長さ4～5mmで、密に毛がある。 | | |
| 分 布 | 国内では、北海道、本州、四国、九州に分布している。本県では、今回の調査により、土庄町での分布を確認したが、過去には、さぬき市、小豆島町、坂出市、丸亀市、普通寺市、観音寺市でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | もともと産地は少なかったが、1980年代の生育確認を最後に近年の確認情報はなかった。今回の調査では1箇所わずかに生育しているのが確認できた。ほとんどの既存産地は絶滅したと考えられる。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池の浚渫や護岸改修、湿田の乾田化による生育地の消失、除草剤による枯死、水質汚濁や富栄養化による衰退が減少の原因と考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | 執筆者：高家彦 | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| アカウキクサ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|-----------------------------------|--|----------|----------------|
| <i>Azolla imbricata</i> (サンショウモ科) | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧ⅠB類 (EN) |
| 選 定 理 由 | ⑦⑧※ 本種は普通に見られるものではないが、産地は県内に散見され、局地的に生育している。近年水質の悪化とともに激減している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 小形の浮遊植物で赤色を帯びる。茎は密に羽状に分岐して、全体が三角形、長さ1～1.5cm。葉面に著しい粒状の突起が密生。辺縁は半透明の膜質。根に長い根毛あり。 | | |
| 分 布 | 国内では、本州(関東地方以西)、四国、九州に分布している。本県では、県内の平野部から丘陵部にかけて散見され、過去には、土庄町、小豆島町、高松市、直島町、丸亀市、綾川町、まんのう町など広く生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査では生育を再確認できなかった。今後、詳細な調査が必要である。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池や用排水路の改修、湿地や沼地の埋立などの土地造成による生育地の消失、除草剤による枯死、生育地の管理放棄や自然遷移による衰退が考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | 絶滅した既知産地が多く、産地が著しく減少している。 | | |
| 文 献 | | 執筆者：高家和彦 | |

| オオアカウキクサ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|----------------------------------|---|----------|----------------|
| <i>Azolla japonica</i> (サンショウモ科) | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧ⅠB類 (EN) |
| 選 定 理 由 | ⑦⑧※ 本種は普通に見られるものではないが限定的な産地で比較的生育が確認されていた。近年水質の悪化とともに激減している。 | | |
| 種 の 特 徴 | アカウキクサに似るが、次の点で異なる。オオアカウキクサは、植物体は大きく長さ約2cm、葉は長さ約2mm、葉面の細突起は著しくなく、淡紅色を帯び、根は生長して根毛を脱落させる。 | | |
| 分 布 | 国内では、本州、四国、九州(熊本県・大分県)に分布している。本県では、平野部から丘陵部にかけて分布しており、かつては県内に広く散見された。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | かつては水田や池沼に珍しいものではなかったが、1960年代に減少し始め、1986年頃にはごく希な状況であった。今回の調査では生育を確認できなかった。今後生育状況の綿密な調査が必要である。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 除草剤による枯死と湿地の乾田化による生育地の消失が主因と考えられるが、湿地や沼地の埋立、用排水路の改修などによる生育地の消失もある。また近年類似外来種の侵入が著しく、駆逐されている。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 39 | 執筆者：高家和彦 | |

| サンショウモ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|----------------------------------|---|----------|-------------|
| <i>Salvinia natans</i> (サンショウモ科) | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦⑧※ 県内各地に広く散見されたが、近年水質の悪化とともに減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉の形と並び方を、水に浮かんだサンショウの複葉に見立てたもの。浮遊性の水生植物。葉は茎に3輪生し、その内2枚が浮遊葉で長さ1cm前後の楕円形をしている。 | | |
| 分 布 | 国内では、本州、四国、九州(熊本県以北)に分布している。本県では、今回の調査により、東かがわ市、さぬき市、土庄町、小豆島町、高松市、丸亀市、多度津町、観音寺市での分布を確認したが、過去には、綾川町、まんのう町、三豊市でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査では、県内広く生育が確認された。その一方、池の改修工事と水質汚濁により絶滅したと考えられる産地も多数あった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池や用水路の改修や埋立による生育地の消失、除草剤による枯死、汚濁や富栄養化による水質の悪化がある。 | | |
| 特 記 事 項 | 絶滅した既知産地が多く、産地と個体数が急激に減少している。 | | |
| 文 献 | | 執筆者：高家和彦 | |

※選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| タカサゴキジノオ <i>Plagiogyria adnata</i> var. <i>adnata</i> (キジノオシダ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種の自生地は極めて少なく局所的に生育しており、個体数は極めて少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 根茎は塊状、葉は2形性、裸葉は60cm前後、葉身は単羽状、葉柄上部の断面は4角形、羽片の基部は内側で上方に向かい、葉軸に弧のようになり活着、羽片は上に行くにつれ次第に短くなり、頂羽片ははっきりしない。暖地の樹林で半日陰の安定した林床に生育しており、キジノオシダの群落中に稀に混生している。 | | |
| 分 布 | 国内では、本州(伊豆諸島・伊豆半島以西)、四国、九州、琉球列島に分布している。本県では、今回の調査により、琴平町、まんのう町での分布を確認したが、過去には、普通寺市、三豊市でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査では、琴平町、まんのう町において少数の個体が生育しているのを確認できた。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地の森林伐採や自然遷移による衰退が考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆: 高家 和彦 | | |

| クジャクシダ <i>Adiantum pedatum</i> (イノモトソウ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内では、南部山地の和泉層群地帯の、ごく限られた一部の溪流沿いに僅かにみられる。 | | |
| 種 の 特 徴 | 根茎はごく短くは、茶褐色の鱗片がある。葉はこみあい、葉柄は光沢のある褐色。長さ40cmに達し、葉身は孔雀が羽を上げたような感じ。小羽片は半月形で内側に中裂し裂片上にソーラスがつく。 | | |
| 分 布 | 国内では、北海道、本州、四国に分布する。本県では、今回の調査により、高松市、まんのう町での分布を確認できた。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 讃岐山脈山中の落葉樹林下で、溪流沿いの地上、岩上に生育している。今回の調査では、まんのう町、高松市山間部にて3ヶ所で生育を確認できたが、わずか1個体の生育地もある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や河川の改修工事により自生地が消失したり、乾燥などの生育環境の変化による衰退、園芸趣味者の採取があるとおもわれる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 18 | 執筆: 菊間 泰汎 | |

| ヒメウラジロ <i>Aleuritopteris argentea</i> (イノモトソウ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|---|--|----------|-------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は生育環境が特異であり、県内に産地は点在しているが生育範囲が局地的で個体数も限定している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 長さ20cm前後の葉を叢生、葉柄は堅い針金状で、紫褐色。葉面は卵状五角形で、表面は緑褐色、裏面は白色、ソーラスは羽片の辺につく連続する包膜におおわれる。山地の日当たりのよい乾燥した岩上や、民家・路傍・畑などの石垣に生育している。 | | |
| 分 布 | 国内では、本州(岩手県・関東地方以西)、四国、九州、琉球列島(種子島・渡嘉敷島)に分布している。本県では、今回の調査により、小豆島町、高松市、三豊市、観音寺市にて分布を確認したが、過去には、綾川町、普通寺市でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 主に海岸部の産地の岩場に多いが、近年著しく減少し、産地も個体数も希となり小豆島町、高松市、観音寺市、三豊市の生育地において確認できたにすぎない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 岩石採掘などの森林開発、道路建設、農地改修工事による自生地の消失、観葉植物としての園芸採取に加え、自然遷移による生育環境の変化で衰退することが考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆: 高家 和彦 | | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| タキミシダ | | 香川県カテゴリー | 絶滅 (EX) |
|--------------------------------------|---|-----------|----------------|
| <i>Antrophyum obovatum</i> (イノモトソウ科) | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧 I B類 (EN) |
| 選 定 理 由 | ⑨* 本種は香川県内では、ただ1箇所、小豆島で自生が確認されている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉は10cm前後、葉柄は比較的長く、葉身は長楕円形から菱状長楕円形、中肋は発達せず、ソーラスは幾筋も不規則に並ぶ。山地の樹林下で溪流近くの岩上に着生する。 | | |
| 分 布 | 国内では、本州(千葉県以西)、四国、九州、屋久島に分布している。本県では、既存情報として小豆島内海町寒霞溪で採集された標本が残されているのみである。類似した生育環境での発見に期待したい。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 小豆島内海町寒霞溪石門付近で、1961年に樋出誠詢氏によって発見されていたが、その後自生地に登山道が造られ、1970年頃には絶滅状態であった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 自生地に登山道が造られるという森林開発で生育地が消失した。 | | |
| 特 記 事 項 | 1961年に採集されて以降、50年以上確認されていない事から絶滅と判定した。 | | |
| 文 献 | 49, 51 | 執筆者: 高家和彦 | |

| ヒメミスワラビ | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---|---|-----------|------------|
| <i>Ceratopteris gaudichaudii</i> var. <i>vulgaris</i> (イノモトソウ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 産地が出水や水田などの特殊な生育環境に限定され、県内の産地は少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 抽水性から湿生の1年草で、草丈の変異が大きく、稲刈り後の水田では数cm~50cmほどになる。根茎は短く、葉は叢生する。葉は二型性で、栄養葉は柔らかく、1~4回羽状に深裂し、孢子葉はより硬く2~4回羽状に分裂して秋に孢子を形成する。葉柄が葉身の1/3~3/4とミスワラビに比べて相対的に短い。 | | |
| 分 布 | 国内では、本州(山形県以南)、四国、九州、琉球列島(沖縄島以北)に分布している。本県では、平野部に点状に散見される。湧水性の出水や清水の流れる用水路などのほか、除草剤の使用されない水田にも生育する。生育の継続性は不安定で、生育地では群生することがある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査では、東かがわ市、さぬき市、土庄町、小豆島町、高松市、坂出市、綾川町、まんのう町など水田での確認情報が増えており、除草剤使用の緩和による回復傾向との解釈がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 河川のコンクリート化による改修や土地造成による埋立、農地改良により生育地が消失したり、除草剤による枯死、水質汚染による衰退の危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | ミスワラビより名称を変更。除草剤の弱性化で県内の水田等で産地・個体数が増加している。 | | |
| 文 献 | 38, 39 | 執筆者: 高家和彦 | |

| エビガラシダ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--------------------------------------|--|-----------|--------------|
| <i>Cheilosoria chusana</i> (イノモトソウ科) | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は生育環境が特異であり、県内に産地は点在しているが生育範囲が局地的で個体数も限定している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山地の岩崖地で日当たりのよい乾燥した岩上や路傍の石垣の隙間などに生育している。根茎は斜上し、葉柄下部とともに線形に近い茶褐色の鱗片をもつ。葉は20cm前後に達し、葉身は2回羽状、ソーラスは小羽片の辺に離れてつき、包膜でおわれる。 | | |
| 分 布 | 国内では、本州(和歌山県以西)、四国、九州に分布している。本県では、今回の調査により、高松市、観音寺市、三豊市などの海岸山地で分布が確認されたが、過去において、多度津町の島嶼部でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査で、数カ所において自生を確認したがいずれも少数個体である。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 岩石採掘などの森林開発による自生地の消失や自然遷移による生育環境の変化で衰退することが考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | 執筆者: 高家和彦 | |

*選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| シシラン <i>Haplopteris flexuosa</i> (イノモトソウ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 県内では、ただ1箇所ですべて確認されているだけで、個体数も非常に少なく、ごく希少な種である。 | | |
| 種 の 特 徴 | 根茎は短くはいる、褐色で綿形の鱗片を密生する。葉は長さ40cm前後に達し、葉裏で葉軸がもりあがって、はっきりしている。ソーラスは葉の縁近くに長くつき、葉片が折れ曲がってかぶさる。 | | |
| 分 布 | 国内では、本州(関東地方以南)、四国、九州、琉球列島(沖縄島以北)に分布している。本県では、まんのう町の1箇所に自生している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 本県の自生地は、県指定の天然記念物社叢として保護されており、今回の調査でも個体数は少ないながら生育を確認できた。ただ、年々森林伐採が進行しており、絶滅が危惧される。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 最近の調査では、隣接する民家の敷地内の大木とモウソウチクが何本も伐採され、直射日光が当たるようになり、常に水が滴っていた崖も著しく乾燥してきており、自生場所の大半が失われるのではないかと危惧される。さらに最近は園芸目的の採取もあるようである。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 18 | 執筆者：菊間泰汎 | |

| モエジマシダ <i>Pteris vittata</i> (イノモトソウ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 本種は、2002年に県内で初めて生育が確認されたもので、1箇所だけで確認されており、個体数が非常に少なく、極く希少な種である。 | | |
| 種 の 特 徴 | 根茎はごく短い、葉柄下部とともに褐色の鱗片を密生する。葉の長さはほぼ50cm前後に達する。羽片は20対前後で、下部の方はだんだん短くなる。羽片は細かい鋸歯がある。基部は切形に近く、無柄。 | | |
| 分 布 | 国内では、本州(神奈川県・愛知県・紀伊半島)、四国、九州、琉球列島に分布している。国内の分布が徐々に北上しており、最近、四国各県でも生育確認が増えている種である。本県では、豊浜町で確認されているだけである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 本種は2002年2月に豊浜町内で3株の自生が確認された。今回の調査では、時期をずらして3回調査したが、生育を確認できなかった。絶滅の可能性が考えられる。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や土地造成、道路拡張などによる生育地の消失、周辺草木の生長による自然遷移、除草作業や希種であることによる趣味者の採取が危惧される。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 39 | 執筆者：高家彦 | |

| シモツケヌリトラノオ <i>Asplenium boreale</i> (チャセンシダ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 本種は県内では、僅かに1箇所ですべて確認されているだけで、個体数が非常に少なく、極く希少な種である。 | | |
| 種 の 特 徴 | 常緑性で、大きさはヌリトラノオに似るが葉軸の上部に決して不定芽を持たない。羽片は幅広く長楕円形。 | | |
| 分 布 | 国内では、本州(関東地方以西)、四国、九州に分布している。本県では、今回の調査で、まんのう町での自生が確認された。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 本種は、わずか数株の個体数が生育しているのを確認した。最近、生育地が森林伐採されており、環境の悪化で絶滅が危惧される。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 崖・土砂崩れなどの自然災害による自生地の消失や生育環境の悪化、森林伐採による乾燥化、希種であることによる趣味者の採取、周辺樹木の生長にともなう自然遷移による絶滅が心配される。 | | |
| 特 記 事 項 | 新たに県内の生育が確認された。 | | |
| 文 献 | | 執筆者：高家彦 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ヌリトラノオ <i>Asplenium normale</i> (チャセンシダ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|--|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 県内では、僅か1箇所で確認されているだけで、個体数は非常に少なく、ごく希少な種である。 | | |
| 種 の 特 徴 | 根茎は斜上、褐色でほぼ線形の鱗片をもつ。鱗片の辺には毛がある。葉は長さ30cm前後に達し、葉柄と葉軸は、うるしを塗ったような光沢のある褐色。葉身は単羽片でやや鋸歯をもつ。葉軸の先端部には不定芽をもつ。胞子のうは羽軸と辺との中間か、やや辺よりに位置する。 | | |
| 分 布 | 国内では、本州(茨城県以南)、四国、九州、琉球列島(沖縄島以北)に分布している。県内では、まんのう町に分布が確認された。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 2ヶ所の生育地が確認されていたが、今回の調査で1箇所での生育を確認できた。最近、森林伐採が自生地まで達しており、絶滅が危惧される。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 最近、隣接する私有地内の大きな樹木や竹林が伐採され、多くの個体が直射日光にさらされていることが判明した。もともと薄暗い湿った環境に育つシダであるので、ここにある個体の大半が失われるものと推測される。また園芸趣味者による採取もあるようである。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 18 | 執筆者: 菊間泰汎 | |

| コウザキシダ <i>Asplenium ritoense</i> (チャセンシダ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|--|---|-----------|-------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内の産地は少なく、限られた地域に局地的に生育しており、個体数が減少している地域もある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 根茎は短く斜上し、葉柄下部とともに披針形で暗褐色の鱗片をもつ。葉は長さ30cm前後に達し、葉身は3回羽状。ソーラスは小羽片の内側の辺に1つできる。 | | |
| 分 布 | 国内では、本州(千葉県以西)、四国、九州、琉球列島、小笠原諸島(母島・北硫黄島・南硫黄島)に分布する。県内では、三豊市、東かがわ市に分布が確認された。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査で3箇所まで自生を確認できたが、個体数が著しく減少している生育地もあり、今後の推移を注目する必要がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 三豊市の社叢において大岩(4m×4m×4m)に生育していた20株ほどが、すべて消滅していた。斜面の上方約50mほど離れたところに駐車場と進入路が造成されたので、水脈が絶たれ大岩が乾燥したためと思われる。他の生育地では変化はなかった。今後森林開発、ダム建設、道路建設、自然遷移による絶滅が危惧される。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 18, 95 | 執筆者: 菊間泰汎 | |

| クモノスシダ <i>Asplenium ruprechtii</i> (チャセンシダ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 自生地は数か所あるが、いずれも狭い範囲で個体数も極めて少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 根茎は短く斜上し、葉柄の下部とともに褐色で線形の鱗片をもつ。葉はロゼット状に叢生し、長さ10cm前後の披針形で細長くつる状にのび、先端に無性芽をつける。ソーラスは棒状につく。 | | |
| 分 布 | 国内では、北海道、本州、四国、九州(熊本県・宮崎県以北)に分布している。本県では、今回の調査により、高松市、まんのう町での分布が確認された。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 好石灰岩植物であるが、本県には石灰岩が無く、非常に限られた環境での生育で、生育範囲も限られている。今回の調査で、4箇所で生育が確認されたが、個体数は僅かである。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や道路建設などによる自生地の破壊、園芸趣味者や業者による採取、周辺樹木の生長にともなう日照量の減少に伴う自然遷移による絶滅が危惧される。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 18 | 執筆者: 菊間泰汎 | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| コトニワタリ <i>Asplenium scolopendrium</i> (チャセンシダ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 産地が極めて限定されており、そのうえ個体数も少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 斜上する根茎の基部から長さ10cm程度の葉柄がでて、40cm長の単葉がつく。葉身の基部は深い心形で、左右に丸く広がって耳片をつくる。葉柄、葉身の裏面には披針形から線状披針形の褐色の鱗片をつけ、ソーラスは葉身の裏面に線状で長く向かい合って開いてつく。 | | |
| 分 布 | 国内では、北海道、本州、四国、九州に分布している。本県では、今回の調査により、まんのう町での分布が確認された。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | これまで、本種の自生地は4箇所確認されているが、今回の調査では2箇所での生育が確認できた。そのうちの1箇所では10数株であるが、他方は1株のみであった。確認できなかった自生地では絶滅している可能性がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | まんのう町の生育環境は、45度以上の傾斜をもった湿ったガレ場であって、絶えず崩壊して、唯一確認された個体が生育している大きな岩(1m×2m×1m)も数年の後には谷底に転げ落ちる可能性がある。抗しがたい自然遷移である。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：菊間泰記 | | |

| イワトラノオ <i>Asplenium tenuicaule</i> (チャセンシダ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|---|--|----------|-------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内の産地が少なく、限られた産地に局地的に生育しており、個体数は少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 常緑で、コバノヒノキシダに似るが、葉質が柔らかく草質である。小羽片は長卵形で、裂片の先は余り尖らない。葉は環境によって大きさが異なり、長さが3cmから20cm位までと変化がある。湿度の高い苔むした岩上に多く見かける。 | | |
| 分 布 | 国内では、北海道、本州、四国、九州(熊本県、宮崎県以北)に分布している。本県では、今回の調査により、まんのう町で分布が確認されたが、過去には、さぬき市での生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | まんのう町において新たな産地を含めて3箇所で自生しているのを確認できたが、生育地はきわめて限定されている。既存産地であるさぬき市の産地は確認できなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林伐採などの森林開発や砂防ダム建設などの河川開発による自生地の改変、自然遷移による生育環境の変化が考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：高家和彦 | | |

| イヌチャセンシダ <i>Asplenium tripteropus</i> (チャセンシダ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 本種は県内での自生地が限定的で、個体数も非常に少なく、極く希少な種である。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉は塊状の小さい根茎に叢生し、葉柄と中軸は光沢ある紫褐色で折れやすく、両側と裏面に褐色薄質の翼をつけ羽片は長楕円形、辺縁に鈍鋸歯がある。葉柄基部の鱗片は披針形、中軸の上部に通常芽を生ずる。山地の谷間の岩上や岩の隙間、山際の路傍の石垣の隙間などに生育する。 | | |
| 分 布 | 国内では、本州(秋田県・神奈川県以西)、四国、九州に分布している。本県では、今回の調査により、三木町、高松市、善通寺市にて分布が確認されたが、過去には、琴平町、まんのう町でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査では3箇所で自生を確認できたが、いずれも1株から数株と極めて少なかった。また、既存産地の2箇所では確認できなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林伐採などの森林開発による自生地の改変、自然遷移による生育環境の変化が考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：高家和彦 | | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| アオガネシダ <i>Asplenium wilfordii</i> (チャセンシダ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|--|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦⑧* 産地は1箇所であり生育環境も特殊で、近年個体数は著しく減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 根茎は短くは、葉を束生し長さ30cm前後で、葉柄および葉軸の裏面は黒褐色、葉身は3~4回羽状。胞子のうは線形で、裂片に1個つく。 | | |
| 分 布 | 国内では、本州(伊豆諸島・関東地方以西)、四国、九州、琉球列島(沖縄島以北)に分布している。本県では、今回の調査により、坂出市での分布を確認できたが、過去には、小豆島町でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査で、坂出市の自生地では数株生育しているものの森林環境が悪化しており、絶滅状態に近い。既存産地の小豆島町では今回確認できなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | アオガネシダは薄暗くやや湿った環境に生育するイメージであるが、坂出市の生育地は直射日光はあたらぬもの明るく、乾燥した崖の下部付近に生育している。調査の度個体数は減少しており、さらに矮小化してきている。森林開発、自然遷移、さらには好事家による採取が絶滅に拍車をかけている。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 18 | 執筆者: 菊間泰汎 | |

| イブキシダ <i>Thelypteris esquirolii</i> var. <i>glabrata</i> (ヒメシダ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|---|--|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は県内において産地が少なく、数か所で確認されているが、いずれの自生地も個体数が1~3株と少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 根茎は短くは、葉は通常80cm前後に達し相接してでる。1回羽状複葉。羽片は多数。下部の羽片は甚しく短く痕跡的になる。羽片の基部にある通気孔は小さい隆起にすぎない。ソーラスは辺により位置し円腎形の包膜をもち表面は無毛。 | | |
| 分 布 | 国内では、本州(栃木県以南)、四国、九州、琉球列島に分布している。本県では、東かがわ市、高松市、丸亀市に自生が確認できたが、過去には、まんのう町でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査で、3ヶ所で生育が確認されたが、いずれも個体数が1~3株と少なく、絶滅状態に近い。まんのう町では生育が確認できなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 東かがわ市の1株は、峡谷の川底近くに生えているが、ちょっとした土石流があれば一瞬で消滅する。丸亀市の1株は切り立った脆い砂岩上にあり、遠からず崩落する運命にある。高松市の3株は砂防ダム建設で一度は消えた末裔であり、現在のところは一応安定した生育環境にある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 18 | 執筆者: 菊間泰汎 | |

| ウスヒメワラビ <i>Acystopteris japonica</i> (イワデンダ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|--|-----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内の産地が少なく、限られた産地に局地的に生育しており、個体数は少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 根茎は這い、葉は長さ40~80cm。葉柄、葉軸は紫褐色で光沢があり、折れやすく、鱗片がある。葉身は3回羽状複葉、両面に白色の軟毛を疎生する、ソーラスは円形。山地の樹林内の陰湿な林床に生育する。 | | |
| 分 布 | 国内では、本州(宮城県以南)、四国、九州に分布している。本県では、今回の調査により、まんのう町での分布が確認されたが、過去には、さぬき市、三木町、高松市、観音寺市でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 既存産地ではもともと個体数が数株と少なかったが、今回の調査で生育確認できたのは1箇所である。最近の砂防ダム建設により自生地が水没し消滅した産地もあった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 河川開発や森林開発による自生地の消失、それに加え自然遷移など環境の変化による衰退が考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | 執筆者: 高家和彦 | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| サトメシダ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---------------------------------------|--|----------|----------------|
| <i>Athyrium deltoideifrons</i> (メンダ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は県内において産地がごく少なく、数か所で局地的に確認されている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 根茎は斜上し、葉柄基部に淡褐色で、披針形の鱗片をやや密につける。葉は長さ1m前後になり、葉柄は葉身と等長でわら色。葉身は3回羽状深裂。羽片は9～12対漸鋭尖頭。小羽片は三角状卵形。羽状に深裂する。包膜は長楕円形ないしかぎ形。辺縁は細かくさける。 | | |
| 分 布 | 国内では、北海道(手塩・石狩・胆振・後志・渡島)、本州、四国、九州に分布している。本県では、今回の調査により、綾川町での分布が確認されたが、過去には、さぬき市、高松市、坂出市、まんのう町などで確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 低山地のやや日当たりのよい湿った林縁や湿地、小川の縁などに生育する。今回の調査では、1箇所の産地で生育を確認できたが、他の既知産地においては生育を確認することができなかった。絶滅しているおそれがあり、今後生育状況を把握するための綿密な調査が必要である。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や湿地の改変による生育地の消失、自然遷移による生育環境の変化で衰退することが考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆: 高家 和彦 |

| ヘビノネゴザ | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|-----------------------------------|--|----------|------------|
| <i>Athyrium yokoscense</i> (メンダ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は県内において産地がごく少なく、数か所で局地的に確認されている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 夏緑性。根茎は斜上または直立し葉を叢生する。葉は15cm～80cm、葉柄は葉身より短く、わら色～紅紫色。鱗片を下部にやや密に上部にまばらに付ける。羽片は披針形、長鋭尖頭、無柄。小羽片は長楕円形、鋭頭、鋭鋸歯または重鋸歯を持つ。胞子囊群は中肋と辺縁のほぼ中間に付く。包膜は楕円形またはかぎ形、ほぼ全縁。 | | |
| 分 布 | 国内では、本州、四国、九州に分布している。本県では、今回の調査により、高松市、直島町、普通寺市、まんのう町での分布が確認されたが、過去には、小豆島町、坂出市、綾川町でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査で数か所で生育を確認できた。山間部の尾根地の高圧鉄塔下に生育しているのを3箇所を確認したが、銅などの金属鉱物を吸収備蓄する特異な性質を持つ本種が、人為的影響で生育していることを考慮する必要がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林伐採などの森林開発、自然遷移による生育環境の変化が考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | 直島町では普通種に近いが、他の地域では稀。 | | |
| 文 献 | | | 執筆: 高家 和彦 |

| ハコネシケチシダ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|----------|----------------|
| <i>Cornopteris christensenianum</i> (メンダ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は県内において産地が少なく、南部山地の狭い範囲で局地的に生育しているのが確認されている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉柄に鱗片が多く、葉身は三角状卵形。3回羽状深裂。胞子のう群は長楕円形、包膜はなく、2又したものがない。葉は一般に大きく、葉柄は50cm、葉身は60cm、幅50cmに達する。 | | |
| 分 布 | 国内では、本州、四国、九州に分布している。本県では、今回の調査により、高松市、まんのう町での分布を確認したが、過去には、さぬき市、観音寺市でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 本種は従来3倍体として知られるが、本県の個体は4倍体であることが最近の研究で明らかになり、本県本種保護の重要性が高まっている。今回の調査で、5箇所の自生地を確認できた。しかし、まんのう町の4倍体自生地の一つは、最近森林伐採が行われ、個体数が著しく減少し、絶滅の状態に近い。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発による生育地の消失、自然遷移による生育環境の変化で衰退することが考えられる。森林伐採などわずかな環境変化を受けやすく、絶滅が心配される。 | | |
| 特 記 事 項 | 国内のハコネシケチシダ研究先進地である本県自生地の生育環境を保護していく重要性を認識したい。 | | |
| 文 献 | 39, 85 | | 執筆: 高家 和彦 |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ホソバシケシダ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|---|--|----------|--------------|
| <i>Deparia conilli</i> var. <i>conilli</i> (メシダ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は県内に点在して局地的に生育しており、個体数はごく少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山地の林床や平地の日陰に見られ、時に石垣の隙間などに生育する。根茎は細くはい、葉柄は5~20cmで淡褐色の鱗片をつけ、葉は二形あり、胞子葉は長く50cm、幅7cmに達する。葉身は披針形。単羽状で中裂、包膜の辺は鋸歯あり。 | | |
| 分 布 | 国内では北海道、本州、四国、九州に分布している。本県ではさぬき市、まんのう町、観音寺市などで生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査ではまんのう町でかろうじて少数個体を確認することができたが、他の産地では生育を確認できなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発による生育地の消失、森林伐採や自然遷移による生育環境の変化による衰退が考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：高家和彦 | | |

| セイタカシケシダ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--------------------------------------|--|----------|--------------|
| <i>Deparia dimorphophylla</i> (メシダ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は県内の産地が少なく、限られた地域に局地的に生育している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉身は卵状長楕円形、葉の裏や包膜上に毛をもつ。葉柄や葉軸は鱗片をもつ。葉は80cm前後に達する。葉身は単羽状で深裂し、ソーラスは長く、中肋に接している。 | | |
| 分 布 | 国内では本州(秋田県以南)、四国、九州、琉球列島(屋久島・奄美大島)に分布している。本県では、今回の調査により、高松市、まんのう町での分布が確認されたが、過去には、坂出市、丸亀市での生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査では高松市南部、まんのう町の3箇所の生育地を確認できた。そのうち1箇所においては、森林の管理放棄から個体数が減少している所もあった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発による生育地の消失、森林伐採や自然遷移による生育環境の変化による衰退が考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：高家和彦 | | |

| ムクゲシケシダ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--------------------------------|---|----------|--------------|
| <i>Deparia kiusiana</i> (メシダ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は県内の産地が少なく、少数の産地に局地的に生育している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉柄や中軸に鱗片と軟毛が密生。葉は2形性で胞子をつける葉が長く、50cmくらい。葉身は長楕円形、単羽状で羽片は中一全裂、葉質は厚く、毛や鱗片が多い。 | | |
| 分 布 | 国内では本州(山形県以南)、四国、九州に分布している。本県では、今回の調査により、まんのう町での分布が確認されたが、過去には、高松市、琴平町でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査ではまんのう町で新たな生育地を含め2箇所で生育を確認することができた。そのうち既存産地では株数が減少している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発による生育地の消失、森林伐採や自然遷移による生育環境の変化による衰退が考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：高家和彦 | | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| オオヒメワラビ <i>Deparia okuboana</i> (メシダ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--|---|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は県内の産地が少なく、限られた地域に局地的に生育している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 根茎はごく短くはひ、葉は長さ120cm前後に達し、葉柄下部の鱗片は披針形。葉身は2回羽状、小羽片の切れ込みは変化あり、ソーラスは円形、馬蹄形の包膜あり。 | | |
| 分 布 | 国内では本州、四国、九州に分布している。本県では、今回の調査により、東かがわ市、坂出市、まんのう町での分布を確認したが、過去には、さぬき市、高松市、丸亀市、三豊市、観音寺市でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査では新たな自生地を加え、4箇所まで生育を確認できた。しかし、そのうち2箇所は1株であった。他方、生育地を確認できなかった所も多い。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や道路建設による生育地の消失、自然遷移による生育環境の変化による衰退が考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆: 高家和彦 | | |

| ナチシケシダ | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|-----------------|--|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内の産地が少なく、限られた産地に局地的に生育している。 | | |
| 種 の 特 徴 | シケシダに大変よく似ているが、包膜の縁はシケシダで内に巻き込むのが、本種はそのようではなく、縁は細かい鋸歯をもつ。また生時の葉質はシケシダより厚い。 | | |
| 分 布 | 国内では本州(新潟県以南)、四国、九州、琉球列島、小笠原諸島(北硫黄島)に分布している。本県では、今回の調査により、さぬき市、観音寺市、三豊市での分布を確認できたが、過去には、高松市、坂出市、丸亀市、まんのう町でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の溪流近くの湿気が多い林床や崖地、石垣などに生育する。今回の調査で生育が確認された産地では、個体数が数株と少ない。生育確認のできなかった既知産地もあった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発による生育地の消失や自然遷移による衰退が考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆: 高家和彦 | | |

| ミドリワラビ <i>Deparia viridifrons</i> (メシダ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|--|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は県内において南部山地で生育が確認されているが、生育範囲は狭く、個体数もごく少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉身はほぼ三角形状で小羽片は浅～中裂し、羽軸には幅の狭い翼をもつ。根茎は短くはひ。葉は長さ1m前後に達し、葉柄の鱗片はうすく、淡茶色でほぼ広披針形をしており、まばら。ソーラスは円形～楕円形をしており、包膜はカギ形や馬蹄形で辺は不規則な突起を持つ。 | | |
| 分 布 | 国内では本州(太平洋側)、四国、九州に分布している。四国内でも生育地は少ない。本県では、今回の調査により、高松市、まんのう町での分布が確認された。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査で再確認することができたが、そのうちまんのう町の1箇所では森林伐採の影響で乾燥化が進んでいる。さらに環境が悪化すれば絶滅することも考えられる。今後の個体数の変動を注視する必要がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林伐採などの森林開発による生育環境の破壊や生育地の消失、自然遷移による生育環境の変化で衰退することが考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆: 高家和彦 | | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ホソバノコギリシダ <i>Diplazium fauriei</i> (メシダ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内の産地が少なく、限られた産地に局地的に生育しており、個体数は少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉身の幅が狭く、7~10cm、羽片は幅10cm位で、鋸歯縁~羽状浅裂、胞子嚢群は最下前側の小脈につく。 | | |
| 分 布 | 国内では本州(伊豆諸島・伊豆半島以西)、四国、九州、琉球列島(種子島・屋久島・沖縄島)に分布する。本県では高松市山間部とまんのう町での分布が確認された。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査で新たに高松市にて葉が20枚程度の群落地が確認されたので、本県では生育地が2箇所となった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林伐採による生育地の消失、自然遷移による生育環境の変化による衰退が考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | ノコギリシダとして処理されていたが、分類学上別種とされた。 | | |
| 文 献 | | 執筆者: 高家彦 | |

| オニヒカゲワラビ <i>Diplazium nipponicum</i> (メシダ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内の産地が少なく、限られた産地に局地的に生育しており、個体数は少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 夏緑性。根茎は太くよく這うので群落をつくりやすい。葉は大形で葉柄下部に鱗片が付く。鱗片は暗褐色で披針形、縁に明らかな突起がある。葉は3回羽状深裂、裂片の先に鋸歯がある。葉の表面は無毛であるが、下面羽軸、裂片の中肋などの脈状には腺状の短毛がかなりある。 | | |
| 分 布 | 国内では本州、四国、九州、屋久島に分布している。本県では、今回の調査により、高松市、まんのう町にて分布が確認された。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査で、3箇所での生育が確認された。まんのう町の生育地では個体数が増えているが、高松市の自生地は1株、数株と少ない。今後県内での新たな自生地確認が期待される。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発による生育地の消失、森林伐採や自然遷移による生育環境の変化による衰退が考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | 新たに県内の生育が確認された。 | | |
| 文 献 | | 執筆者: 高家彦 | |

| ノコギリシダ <i>Diplazium wichurae</i> var. <i>wichurae</i> (イワデンダ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内において産地が少なく、数箇所でも局地的に生育しているのが確認されている。個体数はごく少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 根茎は長くはう。葉は長さ60cm前後に達し、葉柄の下部には、茶褐色で広披針形、全縁の鱗片を少しもつ。葉身は単羽状で、葉質は革質。羽片の辺ははっきりした鋸歯をもつ。ソーラスは中肋寄り位置し、全縁の包膜をもつ。 | | |
| 分 布 | 国内では、本州(石川県~福島県以南)、四国、九州、琉球列島(沖縄島以北)、小笠原諸島(母島・北硫黄島)に分布している。本県では、今回の調査により、東かがわ市、三木町、三豊市での分布を確認できたが、過去には、高松市でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 湿潤な環境を好む本種にとって、降水量の少ない本県では生育地がごく限られる。今回の調査で3ヶ所で生育が確認されたが、株数は少ない。既存産地であった高松市では今回生育が確認できなかった。森林伐採と護岸工事による影響と考えられる。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | いずれの生育地も生育範囲は数メートル四方と狭く、森林伐採や岩石採掘など森林開発による生育環境の破壊や生育地の消失、自然遷移による僅かな環境の変化(特に乾燥化)で絶滅することが考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 18 | 執筆者: 菊間泰汎 | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④全国固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| イワデンダ <i>Woodsia polystichoides</i> (イワデンダ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--|--|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内の産地が少なく、限られた産地に局地的に生育しており、個体数は少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 夏緑性。葉は長さ30cm前後に達し、全体に毛を持つ。根茎は直立状、葉柄、葉軸、羽軸に僅かに披針形の鱗片を持つ。葉軸の基部には関節がある。葉身は単羽状、羽片はほぼ全縁で基部の上側に耳片を持つ。ソーラスは縁よりに位置し、包膜は楕形で長い辺毛を持つ。山地の岩崖地に生育する。 | | |
| 分 布 | 国内では北海道、本州、四国、九州(熊本県・宮崎県以北)に分布する。本県では、今回の調査により、小豆島町、高松市で生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査で3箇所での生育が確認され、高松市崖地の生育地ではで少数個体が生育しているのを確認できた。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 岩石採掘などの森林開発による自生地の消失や自然遷移による生育環境の変化で衰退することが考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | 小豆島では個体数が多いが、他の地域では極稀。 | | |
| 文 献 | | | 執筆: 高家 和彦 |

| オオカグマ <i>Woodwardia japonica</i> var. <i>japonica</i> (シンガシラ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|--|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤⑦* 県内の産地が少なく、限られた産地に局地的に生育しており、個体数は少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 常緑性。葉は大きく長さ1m以上に達する。葉柄下部に淡褐色～褐色で披針形、全縁の鱗片を密生する。葉身は単羽状、羽片は中裂し葉身上部でやや急に短くなる。葉脈は羽軸沿いに1～2列の網目をつくる。 | | |
| 分 布 | 国内では本州(紀伊半島以西)、四国、九州、屋久島、種子島に分布する。本県では、今回の調査により、過去に善通寺市と三豊市の2箇所で標本が採集されていることがわかった。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査では何れの産地でも生育を確認できなかった。絶滅の可能性も考えられる。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や森林伐採による乾燥化などの環境の変化が考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | 新たに県内に生育していたことが判明した。 | | |
| 文 献 | 39, 86 | | 執筆: 高家 和彦 |

| クサソテツ <i>Matteuccia struthiopteris</i> (コウヤワラビ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|--|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は県内の産地が少なく、少数の産地に局地的に生育している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉は長さ1m前後に達し、栄養葉と孢子葉をもつ。根茎はほぼ直立。葉柄下部には鱗片をまばらにもつ。栄養葉の葉身は単羽状複生で、下部羽片は著しく短くなる。 | | |
| 分 布 | 国内では北海道、本州、四国、九州(熊本県・宮崎県以北)に分布する(植栽や逸出が含まれるものと推定される)。本県では、今回の調査により、高松市での分布を確認できたが、過去には、東かがわ市、三木町、坂出市でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山麓や原野などで、日当たりのよい湿った立地や溪流近くに群生する。今回の調査では、1箇所での生育を確認することができた。一方、生育を確認できなかった産地もあった。なお近年植栽されている場合もあり、自生の取扱いに注意を要する。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や土地造成による生育地の消失、自然遷移による生育環境の変化による衰退が考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | 自然遷移により既知産地での個体数が減少している。 | | |
| 文 献 | | | 執筆: 高家 和彦 |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| メヤブソテツ <i>Cyrtomium caryotideum</i> (オシダ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種の産地は県内では極めて少なく、個体数は僅少である。 | | |
| 種 の 特 徴 | 根茎から葉を叢生し、葉柄下部につく鱗片は卵状披針形で鋭尖頭、暗褐色から淡褐色。羽片の基部前側に鋭い耳片をだし、辺縁に不規則な波状縁ではっきりした鋸歯縁をもつ。本種は石灰岩地帯に好んで生育すると言われているが、石灰岩地帯のない県内では山地の林縁や岩石の間に生育している。 | | |
| 分 布 | 国内では本州(福島県以南)、四国、九州に分布している。本県では、今回の調査により、高松市、まんのう町での分布が確認されたが、過去には、三豊市でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 既知産地の中で、1箇所まで生育を確認できたが、株数は僅かである。他地域では確認できず、生育環境の悪化による絶滅が心配される。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 伐採や採石などの森林開発や道路建設による自生地の消失、自然遷移による生育環境の変化による衰退が心配される。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：高家和彦 | | |

| ヒロハヤブソテツ <i>Cyrtomium macrophyllum</i> var. <i>macrophyllum</i> (オシダ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|--|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内に点在して散見されるが、個体数は少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉柄下部につく鱗片は黒褐色で卵形～披針形、羽片は5対前後でほぼ全縁、幅は広く基部は円形で耳片がない。包膜は灰白色でほぼ全縁。 | | |
| 分 布 | 国内では、本州(新潟県～千葉県以西)、四国、九州に分布している。本県では、今回の調査により、東かがわ市、高松市、綾川町、まんのう町での分布を確認できた。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | あまり群生することがなく、ほとんどの産地で個体数が数株と少なかった。まんのう町の既存産地で生育を確認できなかった所もある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 風通しの良い、陰湿な沢沿いの林床下に生育するので、環境の変化の影響をもろに受けやすい。森林開発、道路建設、自然遷移による衰退が考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 18, 85 | 執筆者：菊間泰洵 | |

| ツクシャブソテツ <i>Cyrtomium macrophyllum</i> var. <i>tukusicola</i> (オシダ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は県内の産地が少なく、南部山地に局地的に生育している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉身は長さ40cm前後、羽片の基部は楔形をしており、包膜は円形で中心は暗褐色、羽片の数は5～10対で短い柄がある。 | | |
| 分 布 | 国内では本州(関東地方以西)、四国、九州に分布している。本県では、今回の調査により、まんのう町での分布を確認できたが、過去には、高松市でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 産地も個体数も限定的なものであり、今回の調査ではまんのう町で少数個体を確認することができたが、今後の推移を注視する必要がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発による生育地の消失、森林伐採や自然遷移による生育環境の変化による衰退が考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：高家和彦 | | |

*選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ミヤコヤブソテツ | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|-----------------|---|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は県内の産地が少なく、限られた地域に局地的に生育している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 羽片が披針形で基部から先端へ向かい次第に漸尖し、ほとんど鎌形に曲がらない点と、包膜の中央部が黒褐色に色づく点を、2大特徴としてヤブソテツと区別できる。 | | |
| 分 布 | 国内では本州(宮城県以南)、四国、九州に分布している。本県では山地の樹林下で、北から東向き斜面のやや湿性の林床に生育している。県内各地に分散して生育しており、東かがわ市、三木町、小豆島町、高松市、綾川町、普通寺市、琴平町、まんのう町などで確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 県内では個体数は少ないながらも点在して生育しており、今回の調査でも既存産地で生育を確認できた。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発による生育地の消失、森林伐採や自然遷移による生育環境の変化による衰退が考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆: 高家 和彦 | | |

| ツクシイワヘゴ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) |
|-----------------------------------|--|----------|------------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| <i>Dryopteris commixta</i> (オンダ科) | | | |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は県内において、数カ所で限定的に確認された。 | | |
| 種 の 特 徴 | 根茎は塊状、葉は80cm前後に達し、葉身は単羽状。葉柄下部には披針形で黒褐色の鱗片を密生し、羽片は浅～深裂する。イワヘゴに似ているが、包膜がほとんどないかまたごく小さいのが観察される。羽片の数は20対以下などで区別される。暖帯の山地に生育する樹林のやや湿った林床にごくまれに生育する。 | | |
| 分 布 | 国内では本州、四国、九州に分布する。本県では、今回の調査により、高松市、綾川町、まんのう町、三豊市での分布が確認されたが、過去には、琴平町でも生育が確認されている。香川県西部に産地が集まっている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査では、高松市や三豊市において新たな産地が加わり、数カ所で確認できたが、株数は何れの産地も少数であった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地の琴平山は国の天然記念物に指定されており、大規模な森林開発から護られているが、自然遷移による生育環境の変化で衰退した恐れがあり、綿密な調査が必要である。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆: 高家 和彦 | | |

| ナチクジャク | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) |
|--|---|----------|------------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| <i>Dryopteris decipiens</i> var. <i>decipiens</i> (オンダ科) | | | |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は県内において産地が少なく、数箇所局地的に生育しているのが確認されているが、個体数も少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉は長さ60cm前後に達し、根茎は斜上する。葉柄下部には光沢ある黒褐色で披針形、全縁の鱗片をやや密にもつ。葉身は単羽状で羽片は浅く切れこんだ裂片をもつ。ソーラスは羽片中に散在するか中肋寄りに両側に一列にならぶ。包膜は円腎形で全縁。暖帯の山地に生育する樹林の林床や山麓近くの崖地にまれに生育する。 | | |
| 分 布 | 国内では本州(千葉県以西)、四国、九州、屋久島に分布する。本県では、今回の調査により、高松市、綾川町、まんのう町での分布が確認されたが、過去には、琴平町でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 県内でもともと個体数が少ない種であったが、今回の調査結果では、個体数が著しく減少しており、既存産地の琴平町では確認できなかった。現状で推移すれば、近い将来絶滅の恐れが大きい。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発による生育地の消失や、自然遷移の影響による衰退の恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆: 高家 和彦 | | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| オオクジャクシダ <i>Dryopteris dickinsii</i> (オンダ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|---|---|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は県内の産地が少なく、限られた地域に局地的に生育している。個体数はごく少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | イワヘゴに似るが、葉柄下部の鱗片は淡褐色で全縁、葉の表面は脈がくぼみ、ソーラスは辺寄りにつく。葉は長さ80cm前後に達し、羽床は浅～中裂する。 | | |
| 分 布 | 国内では北海道(奥尻島)、本州、四国、九州に分布する。本県では、今回の調査により、高松市、綾川町、まんのう町での分布が確認された。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の樹林下で、溪流の近くなどやや湿った場所に生育する。産地も個体数も限定的なものであり、今回の調査では、3箇所の産地で少数個体を確認することができたが、生育を確認できなかった産地もあった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や道路建設による生育地の消失、自然遷移による生育環境の変化による衰退が考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆: 高家 和彦 |

| ヌカイタチシダ <i>Dryopteris gymnosora</i> var. <i>gymnosora</i> (オンダ科) | | 香川県カテゴリー | 情報不足 (DD) |
|--|--|-----------|-----------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | 坂出市白峰における採集の記録があるが、その後再確認されておらず、採集年代も不詳であることから情報不足と評価した。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉は長さ70cm前後に達し、根茎は斜上。葉柄下部には黒褐色で披針形、全縁の鱗片をもつ。葉身は2～3回羽状。ソーラスは最下羽片の基部を中心につき、葉身上部にはほとんどつかない。包膜を欠く。暖帯の山地に生育する。湿度の高い樹林の林床に生育したり、岩などに着生している。 | | |
| 分 布 | 国内では本州(埼玉県以西)、四国、九州、琉球列島(屋久島・奄美大島)に分布する。本県では坂出市における記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査では、確認できなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 52 | 執筆: 高家 和彦 | |

| キヨズミオオクジャク | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|-------------------|--|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内の産地が少なく、限られた産地に局地的に生育しており、個体数は少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | イワヘゴとオオクジャクシダの中間的な形質を有している。葉は長さ1m前後に達し、根茎は直立する。葉柄の鱗片は黒褐色で、辺に突起がほとんど無い。下部羽片はあまり短くならず、葉の表面で脈に沿ってへこむ。ソーラスは羽片中に散在するが中肋をややはずれて位置する。 | | |
| 分 布 | 国内では、本州(関東地方以西)、四国、九州に分布する。本県では、今回の調査により、三豊市での分布を確認したが、過去には、まんのう町でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査では、三豊市の讃岐山脈の山中にてかろうじて2株生育しているのを確認できたが、小株である。今後の環境の変化について注目したい。詳細な調査をすれば自生地が増えるかもしれない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林伐採や砂防ダム建設などの河川開発による環境の悪化による絶滅が心配される。 | | |
| 特 記 事 項 | 新たに県内の生育が確認された。 | | |
| 文 献 | 85 | 執筆: 高家 和彦 | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ミヤマイトチシダ <i>Dryopteris sabae</i> (オンダ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は県内において産地が少なく、2箇所で局地的に生育しているのが確認されているだけで、個体数はごく少なかった。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉は長さ60cm前後に達し、根茎は斜上、葉柄は茶褐色をしており葉柄および葉軸には茶～茶褐色で卵形～広披針形の鱗片をもつ。葉身はほぼ長卵形で2～3回羽状。ソーラスは葉身のほぼ半分から上のほうにつき、ソーラスのつく小羽片はやや小さくなる。ソーラスは中肋寄りに位置し全縁の包膜をもつ。 | | |
| 分 布 | 国内では、北海道、本州、四国、九州(福岡県・長崎県対馬)、屋久島に分布する日本固有種である。本県では、今回の調査により、高松市、観音寺市での分布を確認したが、過去には、綾川町での生育も確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 何れも讃岐山脈の山中での生育であり、高松市の自生地では数株が確認できたが、観音寺市の自生地では再度訪れた時には確認できなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発による生育環境の変化、あるいは自然遷移の影響による衰退が考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：高家和彦 | | |

| ナガサキシダ <i>Dryopteris sieboldii</i> (オンダ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は県内において産地が少なく、数箇所で局地的に生育しているのが確認されている。個体数はごく少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉は長さ70cm前後に達し、根茎は斜上、葉柄下部にはやや淡い茶色で披針形、全縁の鱗片をもつ。葉身は単羽状ではっきりした頂羽片をもつ。ソーラスをもつ羽片はソーラスをつけない羽片に比べてやや狭くなる。山地の谷間に生育している樹林下で、やや湿り気のある林床にまれに生育する。 | | |
| 分 布 | 国内では、本州、(関東地方以西)、四国、九州に分布する。本県では、今回の調査により、綾川町での分布を確認したが、過去には、三木町、高松市、まんのう町、三豊市でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査で綾川町の自生地では生育を確認できたが、個体数は2株であった。既存産地である高松市やまんのう町の生育地では、林床が荒れるなど、環境の悪化で生育を確認することができず、絶滅したと思われる。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発による生育地の消失、自然遷移による生育環境の変化、心ない趣味者の採取などが考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：高家和彦 | | |

| タニヘゴ <i>Dryopteris tokyoensis</i> (オンダ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は香川県内では、ただ1箇所、綾川町で自生が確認されている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 夏緑性。根茎はほぼ直立し、葉はほぼ1mに達する。葉柄下部には淡茶色で長卵形、全縁の鱗片をやや密に持つ。葉身は単羽状、羽片は浅～深裂し、切れ込み具合には変化がある。葉身下部は羽片がだんだん短くなる。ソーラスは中肋に接するように位置し、包膜は全縁。 | | |
| 分 布 | 国内では、北海道、本州、四国、九州に分布する。四国では極稀な種である。本県での今回の調査で、綾川町での分布を確認した。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査では、僅かな狭い湿地に数株確認できたが、毎年株数は減少している。私有地であり、その場所は間伐した枝木などの置き場所になっており、環境の悪化による絶滅が危惧される。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林伐採及び湿地の乾燥化による環境の悪化が進み絶滅が考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | 新たに県内の生育が確認された。 | | |
| 文 献 | 執筆者：高家和彦 | | |

※選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ツルデンダ <i>Polystichum craspedosorum</i> (オンダ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は県内において産地が少なく、南部山地で局地的に生育しているのが確認されているだけの希少種である。 | | |
| 種 の 特 徴 | 根茎は塊状、葉はロゼット状に叢生、単羽状複葉、葉身は細長く長さ20cm前後、中軸先端は延びて無性芽をつける。葉柄は短く5cm前後、鱗片は披針形、黄褐色、やや堅い膜質、羽片は狭い長楕形で、ソーラスは羽片上方の辺縁近くに一列にならぶ。包膜は大きく互いに接す。 | | |
| 分 布 | 国内では、北海道、本州、四国、九州に分布する。本県では、今回の調査により、三木町での分布を確認したが、過去には、高松市とまんのう町でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 南部山地の和泉層群の樹林下で陰湿な岩上や斜面地に群生している。今回の調査では、新たな産地が見つかったが、自生地の範囲が狭く、個体数の増加はあまり望めない状況にある。既存産地では生育が確認できず絶滅したと考えられる箇所もある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発による生育環境の消失、心ない趣味者の採取などが考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆：高家和彦 |

| サカゲイノデ <i>Polystichum retrosopaleaceum</i> (オンダ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は県内において産地が少なく、局地的に生育しているのが確認されている。個体数はごく少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉は大型、長さ1m前後になり、鮮緑色、葉柄下部の大形の鱗片は卵形、長さ1.5cmばかり、さらに尾状にのびる。中軸の鱗片は広卵形、長さ3～5mm、膜質、軸に圧着して下向きにつく。小羽片は卵状長楕円形。鈍頭、辺縁には鋸歯がまばらにつく。胞子のうは中間性。山地の樹林下のやや陰湿な場所に生育する。 | | |
| 分 布 | 国内では、北海道、本州、四国、九州(大分県)に分布する。本県では、今回の調査により、まんのう町の分布を確認したが、過去には、丸亀市、琴平町でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 1987年に丸亀市綾歌町で確認された産地は、広大なリゾート開発で消滅した。今回の調査では、まんのう町の山中において、一株、新たに自生しているのが確認できた。しかし、既存産地の琴平町とまんのう町の産地では、生育を確認できなかった。生育環境の変化などで絶滅している恐れがある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や土地造成により生育地が消失し、自然遷移で生育環境が変化して衰退することが考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆：高家和彦 |

| アオネカズラ <i>Goniophlebium niponicum</i> (ウラボシ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|---|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 産地は限定しており、明らかに個体数は減少。園芸採取の危険性が強まったことからNTと判定した。 | | |
| 種 の 特 徴 | 根茎が青白い意味の和名である。真夏には枯れる冬緑性であり、木々の落葉期には青々としているので目立つ。葉身は25cmから、大きいものは40cmに達する。葉面には微毛が特に裏面に密生し、ビロードの手触りである。 | | |
| 分 布 | 国内では、本州(関東地方以西)、四国、九州に分布している。本県では、今回の調査により、さぬき市、坂出市、善通寺市、まんのう町での分布を確認できたが、過去には、土庄町でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査で、新たにさぬき市を加え、4ヶ所での生育地が確認できたが、個体数はいずれも少ない。特に、善通寺市の自生地では、個体数はかなり減少していた。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 善通寺市の自生地にあつては、20年前までは、高さ数十メートルの屏風岩のここかしこに大きな群落となつて下垂していた。現在は乾燥化が進み、ほとんどの群落が崩落しており、わずかに屏風岩の裾の雑木の茂みに残っているだけである。他の産地も同様で、森林開発、自然遷移、園芸の面白さの故の採取により減少が著しい。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 18 | 執筆：菊間泰汎 | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ヒメノキシノブ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--------------------------------|--|-----------|----------------|
| <i>Lepisorus onoei</i> (ウラボシ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 本種は南部山地でただ1箇所、局地的に生育しているのが確認された。 | | |
| 種 の 特 徴 | ノキシノブに似るが、根茎は細くて径1~1.5mm、黒褐色で披針形の鱗片をもつ。葉はまばらにつき、線形、長さ3~10cm、鈍頭または鋭頭。ソーラスは円形で中間性~辺縁よりにつく。 | | |
| 分 布 | 国内では、北海道(渡島)、本州、四国、九州、琉球列島(徳之島以北)に分布する。本県では、今回の調査により、高松市南部山地の1箇所分布を確認した。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 過去に記録された生育地と同じかどうかは不明だが、今回樹木に着生しているのを確認できた。本種が着生している樹木の枝がかなり枯れており、今後の環境の変化にも注目したい。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林伐採や岩石採掘などの森林開発による生育地の消失、自然遷移による生育環境の変化で衰退することが考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 18 | 執筆者: 高家和彦 | |

| コウラボシ (イシガキウラボシを含む) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|------------------------------------|---|-----------|----------------|
| <i>Lepisorus uchiyamae</i> (ウラボシ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 本種は県内において局地的に生育しているのが確認されている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 通常海岸崖地に生育する常緑性。葉柄は葉身の半長~同長。葉質は厚く、表面は深緑色でやや光沢があり、先端は円頭から鋭頭。一方、イシガキウラボシ(<i>L. yamaokae</i>)は通常海岸に近い人里の石垣や岩上に生育する夏緑性。葉柄は葉身よりずっと短い。葉質はやや薄く、表面はくすんだ緑色で光沢はない。 | | |
| 分 布 | 国内では本州(和歌山県と山口県)、四国(太平洋岸)、九州、琉球列島(奄美大島・沖縄諸島)に分布する。本県では、今回の調査により、三木町、高松市での分布を確認したが、過去には、さぬき市でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | さぬき市寒川町門入の旧門入池沿い道路わきの岩上の生育地はダム建設により絶滅したと思われる。今回の調査では、三木町の産地1箇所での生育を確認できた(イシガキウラボシ型)。高松市の産地は、再度訪れたとき、確認することができなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林伐採や岩石採取などの環境の変化による絶滅の恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | 執筆者: 高家和彦 | |

| ミヤマノキシノブ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|---|-----------|----------------|
| <i>Lepisorus ussuriensis</i> var. <i>distans</i> (ウラボシ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は県内において産地が少なく、数箇所局地的に生育しているのが確認されている。個体数はごく少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 常緑性。根茎は細く、鱗片はきわめて小さく、広卵形~三角状卵形。長さ0.5mm。脱落しやすいので根茎の先端近くにだけ残る。葉柄と中肋の下部は黒褐色。葉は堅い紙質。 | | |
| 分 布 | 国内では、北海道、本州、四国、九州、屋久島に分布する。本県では、今回の調査により、まんのう町での分布が確認されたが、過去には、小豆島町、観音寺市でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査は、まんのう町の山中にて僅かに生育しているのが確認できた。しかし、周辺では倒木の着生が多く、絶滅していく可能性が高い。今後、環境の変化について継続調査をする必要がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林の伐採や岩石採取などの森林開発による生育地の消失、スギやヒノキなどの人工造林による生育環境の変化で衰退することが考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | 執筆者: 高家和彦 | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ヤノネシダ <i>Leptochilus buergerianus</i> (ウラボシ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|---|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 本種は県内において産地が少なく、数箇所での局地的に生育しているのが確認されている。個体数は少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 常緑性。葉の長さは20cm以下、葉身下部が幅広く、基部は切形に近くなる。 | | |
| 分 布 | 国内では、本州(千葉以西)、四国、九州に分布する。本県では、今回の調査により、高松市、綾川町、まんのう町での分布が確認された。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 溪流沿いの湿度の高い樹林下を好む。今回の調査では、数カ所で生育を確認した。根茎は長く這うので群生しているが、その個体数が減少している産地もあった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林伐採、河川開発などで、乾燥化が進み、環境の悪化で個体数が減少し、絶滅が考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | 自然遷移で個体数が減少している産地が増えている。 | | |
| 文 献 | | | 執筆者：高家和彦 |

| サジラン <i>Loxogramme duclouxii</i> (ウラボシ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) |
|---|--|----------|------------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内において産地が少なく、南部山地の狭い範囲で局地的に生育しているのが確認されている。個体数はごく少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉は狭い倒披針形、長さ25cm前後に達する。根茎はやや長くは、根茎上には鱗片はほとんどない。葉柄下部は黒褐色をしており、葉柄基部には卵状披針形で黒味を帯びた褐色の鱗片をもつ。胞子葉群は一般的に葉身の半分から上のほう中肋に近くつき、互いに深く重なり合う。 | | |
| 分 布 | 国内では、本州(福島県以西)、四国、九州に分布している。本県では、今回の調査により、高松市、まんのう町での分布を確認できた。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 樹林下の溪流沿いの岩上や樹幹に着生する。今回の調査で個体数は少ないながらも、山間部の数箇所にて生育を確認できた。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林の伐採や岩石採掘などの森林開発による生育地の消失、自然遷移による生育環境の変化で衰退することが考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 18 | 執筆者：菊間泰汎 | |

| イワヤナギシダ <i>Loxogramme salicifolia</i> (ウラボシ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) |
|--|---|----------|------------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は県内において産地が少なく、数箇所での局地的に生育しているのが確認されている。個体数は極めて少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | サジランに似ているが、根茎が細く鱗片は赤褐色でうすく、葉柄は黒褐色にはならず、葉は細くて狭披針形から線形、まれに倒披針形、長さ20cm前後に達する。胞子のう群はより狭い角で中肋と交わり、あまり深くかさなり合わない。 | | |
| 分 布 | 国内では、本州(千葉以西)、四国、九州、琉球列島(沖縄島以北)に分布する。本県では、今回の調査により、東かがわ市、小豆島町での分布が確認したが、過去には、綾川町での生育も確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査では、東かがわ市と小豆島町において生育を確認することができたが、他の産地においては確認できなかった。今後綿密な調査が必要である。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林の伐採や岩石採掘などの森林開発、道路建設による生育地の消失、自然遷移による生育環境の変化で衰退することが考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者：高家和彦 |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| カラクサシダ | | 香川県カテゴリ | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|---------|----------------|
| <i>Pleurosoriopsis makinoi</i> (ウラボシ科) | | 環境省カテゴリ | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 本種は県内では極めて少なく、南部山地の和泉層群地帯で僅かに生育が確認されている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 根茎は長くはい、茶褐色の毛をもつ。葉は長さ5cm前後に達し、葉身は2回羽状、葉の両面に毛をもち、裂片は鈍頭。ソーラスは小羽片全面につき包膜をもたない。本種は湿度の高い場所を好み、樹蔭や溪流沿いの湿った岩上や樹幹上のコケの間に生ずる。 | | |
| 分 布 | 国内では、北海道、本州、四国、九州、屋久島で分布する。本県では、今回の調査により、東かがわ市、まんのう町、観音寺市での分布を確認した。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査では、10あまりの生育地を確認することができた。しかし、どの産地でも個体数はごく僅かで、生育環境の微妙な変化の影響が危惧される種である。近年、自生地環境に森林伐採や温暖化の影響と思われる乾燥化などの変化が生じており、今後の動向に注意を要する。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発による生育地の減少や森林の伐採などによる乾燥化、周辺樹木の生長にともなう自然遷移が危惧される。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆: 高家和彦 |

| オシャグジデンド | | 香川県カテゴリ | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|-----------------------------------|--|----------|----------------|
| <i>Polypodium fauriei</i> (ウラボシ科) | | 環境省カテゴリ | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は南部山地の一部のただ2箇所ですべて生育しているのが確認された。個体数はごく少なかったと思われる。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉は長さ20cm前後に達し、根茎は径約4mm、ややほう。根茎の鱗片は薄く、淡茶色でほぼ卵形～広披針形。葉身の下部の羽片はやや短くなる。葉は乾燥すると表面に巻き上がる。葉裏の葉軸や中肋上には長い毛をもつ。ソーラスは中肋と辺とのほぼ中間に一列に位置する。 | | |
| 分 布 | 国内では、南千島、北海道、本州、四国、九州に分布している。本県では、高松市、まんのう町での分布を確認できた。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 前回の調査では絶滅の可能性があるとされていたが、今回の調査で2ヶ所で確認できた。ただ、高松市山間部では倒木に1株であり、また、まんのう町の生育地では数年前までは数本の樹木に着生していたが、枯死したり伐採されたりして現在残っているのは1本だけになっており、今後の環境の変化に注目したい。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 高松市山間部の倒木上の個体は2年ほどで消滅。今回の調査でそこからそう離れていない朽ちた倒木上に、新たに1株を再発見した。ところが半年後に立ち寄ると、周りの樹木は伐採され、個体の生育している朽ちた倒木は1.5m長に環切りにされており、個体は生きてはいないものの、直射日光があたり、消滅直前の感があった。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 39 | 執筆: 菊間泰汎 | |

| イワオモダカ | | 香川県カテゴリ | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---------------------------------|--|---------|----------------|
| <i>Pyrrosia hastata</i> (ウラボシ科) | | 環境省カテゴリ | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 本種は県内では小豆島の一部で生育が確認されている。1960年頃には現地の売店で山採りの本種が販売されていたことから当時は個体数も多かったと思われる。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉は通常長さ15cm前後に達する。根茎は短くはい、葉と葉は接近して出る。根茎の鱗片はほぼ広披針形で黒褐色、辺は色が淡くなって、まばらに辺毛をもつ。葉身はほこ形で基部は心臓形。葉の裏には星状毛をもつ。ソーラスは葉の裏に一面につく。 | | |
| 分 布 | 国内では、北海道、本州、四国、九州に分布する。本県では、既存情報として、小豆島で生育が確認されているだけである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 1960年頃には山採り品が現地の売店で販売されていたが、1980年頃には稀となっていた。今回の調査でも生育を確認できなかった。絶滅している可能性が高い。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 本種は葉形が面白いので古くから園芸用に採取されて激減した。他に森林開発による生育地の消失、自然遷移による生育環境の変化で衰退することが考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆: 高家和彦 |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| タカノハウラボシ <i>Selliguea engleri</i> (ウラボシ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--|--|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は県内の産地が少なく、少数の産地に局地的に生育している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉は長さ50cm前後に達し、根茎は長くはい、鱗片を密生する。葉身は単葉で幅は平行的に細長く全縁。ソーラスは丸く、葉軸と辺との中間よりやや内側に位置する。 | | |
| 分 布 | 国内では、本州(伊豆諸島硫黄島・伊豆半島以西)、四国、九州、屋久島に分布する。本県では、今回の調査により、坂出市、多度津町での分布を確認したが、過去には、三木町、まんのう町での生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査では、坂出市、多度津町の2箇所での生育を確認できたが、生育地は狭く限定的で、個体数も少ない。一方既存情報のある三木町、まんのう町の産地では生育を確認できなかった。生育状況を把握するため、綿密な調査をする必要がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 岩石採掘等の森林開発や河川開発による生育地の消失、自然遷移による生育環境の変化による衰退が考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：高家和彦 | | |

| イブキ <i>Juniperus chinensis</i> var. <i>chinensis</i> (ヒノキ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|--|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 海岸の岩場という限られた生育環境に生育するが、生育地の森林開発や園芸採取などによって少なくなる可能性がある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 常緑高木。鱗片状と針状の葉を持つ。いずれの葉も十字対生。雌雄異株。まれに同株。花は鱗片葉の小枝の先端につく。球果は肉質で黒紫色に熟し、白いロウをかぶる。 | | |
| 分 布 | 岩手県以南の本州、四国、九州に分布する。県内では島嶼部の海岸の岩場などに稀にみられる。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 乾燥した海岸の岩場などに生育する。現地調査では、東かがわ市と小豆島町の海岸部で生育が確認された。過去の記録では高松市、普通寺市、旧豊浜町、多度津町、旧豊中町、土庄町でも生育記録がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地である海岸部の森林開発や人工造林、庭木としての園芸採取によって減少する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：末広喜代一 | | |

| ジュンサイ <i>Brasenia schreberi</i> (ジュンサイ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|---|---|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 中・山間部のやや貧栄養のため池に生育するが、ため池の改変工事や水質の富栄養化などによって減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 多年生の浮葉植物。葉は楕円形で全縁。葉柄は盾状につく。若芽は粘液状の物質におおわれヌルヌルする。花の色は暗赤色だが小さく目立たない。 | | |
| 分 布 | 全国的には北海道から九州まで分布する。香川県ではおもに丘陵部のため池に稀に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 中・山間部のやや貧栄養のため池に生育する。現地調査によって坂出市、さぬき市、東かがわ市、まんのう町のため池で生育が確認された。個体数の多い所もある。過去の記録では、旧綾歌町、旧財田町、多度津町、綾川町、三木町、小豆島町でも生育記録があるが、絶滅した所もある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池の管理放棄や改変、水質の富栄養化、ジュンサイハムシ等による食害などによって産地・個体数が急激に減少している。そのため、前回評価の準絶滅危惧(NT)から、今回の評価は絶滅危惧II類(VU)とした。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：末広喜代一 | | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| オニバス <i>Euryale ferox</i> (スイレン科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑧* 近年平野部のため池の富栄養化の進行や外来動物による食害などによって、産地・個体数共に著しく減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 大型の1年生浮葉植物。植物全体に鋭いとげがある。生長した大型の浮葉は楕状でとげが多いが、初期浮葉は切れ込みのあるスイレン葉でとげはない。閉鎖花と開放花をつけ、開放花は紫色で半開き状態で咲く。晩秋に大型のとげの多い果実をつける。 | | |
| 分 布 | 宮城県以南に分布し、県内では平野部のため池に生育しており、県西部に多く、県東部では少ない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 過去35年間に70ヶ所以上のため池で生育したが、最近10ヶ所程度でしか生育していない。生育環境の悪化で著しく減少していることから、絶滅危惧カテゴリーが、1ランク上に評価された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地の極端な富栄養化の進行が最も大きな原因と考えられるが、外来動物による食害、除草剤の流入等の農薬汚染、ため池の改変・埋立工事等も原因と考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | 香川県希少野生生物の保護に関する条例による指定希少野生生物。 | | |
| 文 献 | | 執筆者：久米 修 | |

| コウホネ (サイコクヒメコウホネを含む) <i>Nuphar japonica</i> (スイレン科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|---|--|-----------|-------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* ため池の改変あるいは管理放棄、水質の悪化などによって近年減少しており、絶滅の恐れがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | ため池などに生育する多年生の抽水植物。葉柄痕が目立つ太い地下茎の先の方から葉が出る。沈水葉は細長く薄い膜質で、葉縁が波打つ。抽水葉と浮葉は長卵形で基部は矢尻状。黄色の花びらに見えるのは、がく片で5枚。サイコクヒメコウホネはコウホネより全体に小型。 | | |
| 分 布 | 北海道西南部から本州・四国・九州まで分布する。サイコクヒメコウホネ(<i>Nuphar saikokuensis</i>)は本州中部以南・四国・九州に分布する。香川県では、おもに丘陵部のため池に生育する。以前はコウホネ1種と考えられていたが、サイコクヒメコウホネが新種記載された。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 湖沼、ため池、河川、水路などに生育する。県内での生育地は、ほとんどが丘陵部の浅いため池。現地調査によって、観音寺市、丸亀市、高松市、三木町、綾川町、さぬき市、東かがわ市、直島町、まんのう町で生育が確認された。県内では、コウホネよりもサイコクヒメコウホネのほうが多い。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池の改変あるいは管理放棄による富栄養化、水質の悪化、園芸採取によって、さらに減少し絶滅する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 19, 37 | 執筆者：末広喜代一 | |

| ヒツジグサ <i>Nymphaea tetragona</i> var. <i>tetragona</i> (スイレン科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* やや貧栄養な丘陵部のため池をおもな生育地とするが、生活排水の流入などによる富栄養化、不注意な改変工事、および園芸用の採取などによって近年減少し、絶滅の恐れがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 多年生の浮葉性水草。太短い根茎から長い葉柄を持つ葉が根生する。浮葉は楕円形で基部は深く切れ込む。花弁は白色で多数。おしべも多数。開花は2〜3日続き、1日目にめしべが成熟、2日目におしべが成熟して花粉を放出する。 | | |
| 分 布 | 全国的には北海道・本州・四国・九州に分布する。香川県ではおもに丘陵部のため池に稀に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 丘陵部のやや貧栄養なため池などに生育する。現地調査によって、三豊市、さぬき市、まんのう町で生育が確認された。過去の記録では直島町でも生育が確認されている。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地であるため池の生活排水の流入などによる富栄養化、不注意な改変工事、園芸用の採取、外来スイレンとの競合などによって、産地・個体数が著しく減少している。 | | |
| 特 記 事 項 | 前回評価の絶滅危惧Ⅱ類(VU)から、今回の評価では絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)とした。 | | |
| 文 献 | | 執筆者：末広喜代一 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| キビトリシズカ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--------------------------------------|--|----------|--------------|
| <i>Chloranthus fortunei</i> (センリョウ科) | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 生育地域が限られており、ある特定の環境下での生育が可能な種である。 | | |
| 種 の 特 徴 | 多年草。茎は高さ30～50cm。葉は2cm前後の葉柄で茎の上部に4枚がやや輪生状に対生に着き、上面つやなく鋸歯は浅い。3月下旬～4月にかけて、茎の頂に1本の穂状花序を付け、多数の花を密集して付ける。1cm位の長く白い3本の花糸が目立つ。 | | |
| 分 布 | 全国的には、香川県、岡山県、九州北部に分布する。県内では、小豆島町、土庄町、さぬき市、高松市、坂出市、丸亀市、三豊市に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 小豆島を含む平野部の丘陵、山塊の林内で自生が確認されている。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や道路(林道)の改修工事により、生育地が減少している。また、自然遷移により生育環境が変容し生育が困難になっており、観賞用に採集される恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者: 秋山 敬典 | | |

| フトウカズラ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|------------------------------|--|----------|--------------|
| <i>Piper kadsura</i> (コシヨウ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 海岸に近い樹林という限られた生育環境でしか生育せず、生育確認地点数も、きわめて少ないため、生育地の森林開発や道路建設によって絶滅する危険性がある。 | | |
| 種 の 特 徴 | つる性の常緑木本。枝は緑色で、枝の節から根を下ろし、岩や木をはいのぼる。葉は互生し、卵形で先はとがり、全縁で厚く、裏面には毛がある。5本の葉脈が目立つ。雌雄異株。春に開花し、花穂は細く下垂する。果実は赤橙色。 | | |
| 分 布 | 全国的には関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。県内では海岸に近い数カ所の山林に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 暖地性の植物で海岸に近い林の中に生育する。現地調査では、善通寺市、三豊市、坂出市、高松市、小豆島町で生育が確認された。個体数は多いところもある。過去には、さぬき市、土庄町での生育記録もある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地の森林開発や道路建設によって絶滅する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者: 末広喜代一 | | |

| オオバウマノスズクサ | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|---|-----------|------------|
| <i>Aristolochia kaempferi</i> var. <i>kaempferi</i> (ウマノスズクサ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 県内では、限られた地域にのみ生育している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 長さ2～3mになるつる性の木本植物。葉はやや革質で互生し、葉身は広卵形から円状卵形、又はほこ形に3裂する。5～6月に黄緑色の筒形の花が葉腋につく。茎部は黄色から紫黒色をしている。 | | |
| 分 布 | 関東以西に分布しており、県内の産地は、小豆島で確認されているのみである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 林地や林縁部に生育するが、生育地が限定されており、個体数が少ない。以前は、葉形の違いでほこ形に3裂するものをホソバウマノスズクサとしていたが、花の形態は同一である事が判明し、小豆島のものは全て本種に訂正された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 土石の採掘などの森林開発による生育地の消失、自然遷移による生育環境の変化により減少する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 42 | 執筆者: 久米 修 | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| フタバアオイ <i>Asarum caulescens</i> (ウマノスズクサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 生育地が県内において局限されている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 茎は長く地をはい節から根を出す。葉は1年生。葉の先に長い柄のある2枚を対生。両面と縁に毛がある。花は5月ごろ、2葉の間に1個下向きにつける。花は暗赤色。花被は離生。下半は筒状となり、上半は3列でそり返る。花柱6本は合生。 | | |
| 分 布 | 全国的には、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では旧琴南町、旧塩江町での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 1980年以前に旧琴南町で1箇所記録されているが、2018年の現地調査では確認できず、環境の変化により絶滅したものと思われる。旧塩江町については不明。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 圃場整備等の影響を受けて産地の生育環境が変化し、衰退する危険性が大きい。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 16 | 執筆者：林 鈴以 | |

| クロフネサイシン <i>Asarum dimidiatum</i> (ウマノスズクサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は、県内の山地高所の一部に限られた地域に生育している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 宿根性の多年生草本。茎の先に2枚の葉をつけ、葉身は円心形で先は尖る。4月頃葉柄の間から短い花柄を出し1個の花をつける。花は偏球形をした萼筒で先がくびれている。ウスバサイシンと似ているが、萼裂片が暗紫色をしているところからクロフネサイシンと呼ばれる。 | | |
| 分 布 | 四国・九州(中部)に分布する。県内では、旧白鳥町、旧寒川町、塩江町、琴南町、仲南町など県南部山地や、小豆島の山地で確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 阿讃山脈の山稜部付近およびそれに準ずる標高を有する山地の落葉樹林の林床に生育。生育地が限定されているため、近年産地の消滅、既産地で個体数が減少している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 岩石採掘等森林開発による生育地の消滅。園芸目的の業者や好事家の採取行為が、生育数の減少と生育地消滅の原因になっている。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 16, 27, 80, 91 | 執筆者：佐藤 明 | |

| クロモジ <i>Lindera umbellata</i> var. <i>umbellata</i> (クスノキ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 本県ではこれまで限られた生育地の情報しかなく、現地調査でも生育が確認されていない。もともと本県では個体数は少ないものと考えられるが、分布上重要である。県内に多いケクロモジと区別されず、森林開発等によって失われる危険性が高い。 | | |
| 種 の 特 徴 | 落葉低木。葉は互生。葉のふちに鋸歯はなく、無毛。枝を折ると良い香りがする。雌雄異株。果実は秋に黒く熟する。県内に多いケクロモジ(<i>Lindera serica</i>)は、葉が大きく表面に短毛を密生すること、葉脈が裏面に隆起することで、本種とは区別される。 | | |
| 分 布 | 全国的には、東北地方南部以南の太平洋側、瀬戸内海側、四国、九州北部に分布する。本県では小豆島と讃岐山脈等に生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 落葉広葉樹林など、やや明るい山林内に生育する。現地調査では、過去に記録のあった生育地での絶滅が報告されている。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | もともと個体数が少ない上に、県内に多いケクロモジと区別されず、生育地の森林開発、人工造林および自然遷移によって絶滅する危険性が高い。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 16 | 執筆者：末広喜代一 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ムサシアブミ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|---------------------------------|---|----------|--------------|
| <i>Arisaema ringens</i> (サトイモ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内では限られた地域にしか生育しないが、園芸採取、生育地の改変によって減少する危険性がある。 | | |
| 種 の 特 徴 | やや湿った林床下に生育し、海岸近くの林で見られることの多い多年草。葉は2枚で、3枚の小葉をもつ。仏炎苞は暗紫色で隆起する白条があり、縁は耳状に張り出し、全体として鑑(あぶみ)状になる。昔、武蔵国で作られた鑑の形に似ているので、ムサシアブミの名がついたといわれる。 | | |
| 分 布 | やや湿った林の林床に生育し、特に海岸近くの林で見られることが多い。県内では、島嶼部のほか、沿岸部でも生育しているのが確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | やや湿った林の林床に生育し、特に海岸近くの林で見られることが多い。過去には島嶼部での記録しかなかったが、現地調査で香川県本土部でも生育しているのが確認された。個体数は少ない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 人家に近い立地環境でも生育していることが確認されたことから、生育地の森林開発、海岸開発、園芸採取などの危険性が大きくあった。 | | |
| 特 記 事 項 | 前回評価の準絶滅危惧(NT)から、今回の評価では絶滅危惧II類(VU)とした。 | | |
| 文 献 | | | 執筆者: 末広喜代一 |

| ユキモチソウ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|------------------------------------|---|----------|--------------|
| <i>Arisaema sikokianum</i> (サトイモ科) | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑧* 園芸採取のほか、生育地の森林開発、道路建設などによって近年減少し、絶滅の恐れがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山地の林縁部に生育する多年草。葉は2枚で、3~5枚の小葉を鳥足状につける。仏炎苞は紫褐色で、口縁部は白色。萼部はほぼ直立し、先は尾状にのびる。付属体は白色、棍棒状で、先端は球状にふくらむことからユキモチソウの名がついたといわれる。 | | |
| 分 布 | 本州の一部および四国に分布する。県内ではおもに山間部に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の林縁部に生育する。現地調査では、高松市、普通寺市、まんのう町、琴平町、土庄町、小豆島町で生育が確認された。過去の記録ではさぬき市、三木町でも生育が確認されている。以前は山間部で普通に見られたが、人目に付くところでは全く見られなくなった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 園芸採取の危険性が最も大きいと考えられるが、生育地の森林開発、道路建設などの危険性も考えられる。個体数が少ないため、果実をつける個体はほとんど見られない。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者: 末広喜代一 |

| ナンゴクウラシマソウ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|---|---|----------|----------------|
| <i>Arisaema thunbergii</i> subsp. <i>thunbergii</i> (サトイモ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 既存情報として、県内の限られた地域に局地的に生育していることが知られている。 | | |
| 種 の 特 徴 | ウラシマソウに類似しているが、全体やや繊細で、小葉が線状披針形で幅1~4cmと狭く、花序の附属体の下部の膨れた部分に小じわが多いことで区別できる。葉は1個。花期は3~5月、仏炎苞は暗紫色、肉穂は長さ30cmほどで、先は次第に細くなり下垂する。 | | |
| 分 布 | 兵庫県以西に分布しており、県内では小豆島、高松市、まんのう町、三豊市、観音寺市などで確認されている。従来小豆島など瀬戸内海沿いに分布していると見られていたが、調査の進展により内陸部にも生育している事がわかった。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の落葉広葉樹林の林床や明るい林縁部で、他種と競合の少ない安定した林床に生育している。群生することが無く、個体数が少ないことから、徐々に減少している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 園芸用の採取、針葉樹の植林や林内歩道の設置などの森林開発、樹木の生長に伴う上層空間の閉鎖による衰退の危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者: 久米 修 |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| マルバオモダカ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|----------|----------------|
| <i>Caldesia parnassiifolia</i> (オモダカ科) | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種はため池および周辺の湿地など限られた環境に生育しており、山地および個体数も少なく、局地的に生育している。ここではウキマルバオモダカ型ものを含む。 | | |
| 種 の 特 徴 | 根元から柄をのぼし、線形の沈水葉から浮葉、長楕円形の浮葉、卵心形の浮葉をへて、円心形の浮葉および抽水葉をつける。花柄が3個ずつ輪生する円錐花序となり、各枝先に3弁の白い花をつける。繁殖方法には、種子と花茎につける殖芽の2通りがある。 | | |
| 分 布 | 本州・四国・九州、中国、インド、オーストラリア、マダガスカルに分布。県内の産地は少なく、丘陵部から山地部にかけて点状に散見される。主に中讃および西讃地域で確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 生育環境の減少で、産地、個体数ともに限定されている。今回の調査では数カ所で確認したが生育数は減少している。絶滅した産地も有り、個体数は減少している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池の浚渫や改修による生育地の消失、減反など農業事情の変化で、ため池の管理行為が放棄されたり、水質の富栄養化で衰退している。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17 | 執筆者：佐藤 明 | |

| アギナシ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|------------------------------------|--|----------|----------------|
| <i>Sagittaria aginashi</i> (オモダカ科) | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑧* 本種は香川県の中山間地区の水湿地で見られるが、湿地などの生育環境の変容が原因で生育地も減少、近年個体数が著しく減少。評価を2004年版の絶滅危惧Ⅱ類から、絶滅危惧Ⅰ類に変更した。 | | |
| 種 の 特 徴 | 水湿地に生育する多年草。根元から叢生する抽水葉は、長い柄の先に細長い矢尻形をした葉をつける。近似種のオモダカとは、瘦果の集合した球形の果実がオモダカのイガグリ状に対し、アギナシは鱗片状。葉柄基部の小さな球茎で区別できる。くさび形をした若い葉の基部を、アゴの古語アギが無いと見てアギナシと言う。 | | |
| 分 布 | 北海道・本州・四国・九州、朝鮮に分布。県内では平野部から山際まで点在して分布するが、生育地の既存情報は少ない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 本種は里山と言われる山間のため池や湿地、周辺の湿地等の陽光地、半陽光地に生育。ため池や湿地等の改変のため生育地が減少するとともに、生育環境の変容で生育数が減少している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池の改修や湿地の埋立、農地改良による乾田化、圃場整備に伴う排水路の改修により生育地が消失。自然遷移による生育環境の変化で衰退している。ため池などの改修の際、湿地や浅水域を残すことが必要である。 | | |
| 特 記 事 項 | 2004版以後減少が著しく、評価を変更した。 | | |
| 文 献 | 17, 68 | 執筆者：佐藤 明 | |

| スブタ (マルミスブタを含む) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|------------------------------------|--|----------|----------------|
| <i>Blyxa echinosperma</i> (トチカガミ科) | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 山際の水質の良いため池など限られた生育環境にしか生育していない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 茎は極めて短く、葉は根生する沈水植物。葉は線形で縁に細鋸歯がある。花期は7～10月、花弁は3枚で白色。果実は線形筒状。種子は紡錘形で両端に尾状突起がある。種子に突起の無いものをマルミスブタ (<i>Blyxa aubertii</i>) として区別するが、県内のものは多少なりとも突起があることからスブタに統合した。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しており、県内では島嶼部を除き広く分布しているが、産地は局限して点在している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山中や山ぎわにある良好な水質の小規模なため池に生育している。沈水植物であることから、透明度の高い浅い水深部のあるため池環境が必要である。今回の調査では、既知産地からの生育報告はなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池の人工護岸化による生育環境の悪化や浚渫による生育立地の消失、農業の流入や水質汚濁による衰退、ため池の管理放棄で水面が開鎖されると日光不足となり消滅する。 | | |
| 特 記 事 項 | スブタとマルミスブタは、種子の突起の有無だけで区別する事から、ここでは両種を統合した。 | | |
| 文 献 | 43, 66 | 執筆者：久米 修 | |

※選 定 理 由: ① 模式産地、② 分布境界、③ 全国極限、④ 県固有種、⑤ 県内極限、⑥ 交雑移行、⑦ 限定生育・生息環境、⑧ 近年減少、⑨ 絶滅

| ヤナギスブタ <i>Blyxa japonica</i> (トチカガミ科) | | 香川県カテゴリ | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリ | — |
| 選 定 理 由 | ⑦※ 本種は、水田やため池等の浅水域に生育する。県内では生育地は限定され、生育環境の変容や水質の悪化で生育地も減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 水湿地に生育する一年生の沈水植物。環境が合えば大きな群落を作る。植物体はよく分枝し、多数の葉をつける。緑白色の葉は互生で無柄、葉身は線形で葉先に向かい細くなる。葉縁に細鋸歯がある。7月～9月花柄を水面上に出し、白色線形の3弁の花を咲かせる。花は1cmに満たず、小さく目立たない。 | | |
| 分 布 | 本州・四国・九州・琉球、朝鮮、中国、台湾、に分布する。丘陵部から山地にかけて散見される。県東部及び中部で生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 県内の産地は少なく、前回調査で確認されたが絶滅した産地、生育数が減少した産地もあり全体的に生育数が減少している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池の改修、圃場整備による乾田化で生育地が消失。ため池の管理放棄に伴う生育環境の変化で生育数も衰退している。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17, 66, 68 | 執筆者: 佐藤 明 | |

| ヤマトウミヒルモ <i>Halophila nipponica</i> (トチカガミ科) | | 香川県カテゴリ | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリ | — |
| 選 定 理 由 | ⑧※ 砂泥質の浅い海底に生育しているが、生育環境の改変により、近年著しく個体数が減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 雌雄異株又は同株の海産草本で、茎は匍匐してまばらに分枝する。葉は薄膜透明質の鱗片の腋から2枚出る。15～22mmの柄があり、狭長楕円形から楕円状卵形で円頭、長さ15～25mm、幅6～15mm、3脈がある。雌花は葉腋につき、2個の苞に包まれる。 | | |
| 分 布 | 石川県から神奈川県以西に分布している。県内の分布は、生育環境が特殊なため確実な調査が行われていないが、高松市、土庄町、宇多津町、丸亀市、多度津町などで打ち上げられた切れ藪が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 干潮時にも水上に出ない様な場所で、湧水の滲出がある砂泥質の浅い海底に生育している。今回の調査では、既知産地からの生育報告はなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地が浅い海底であることから、海の埋立による土地造成や海底の掘削行為、海流の変化により生育地が消失し、海水の汚濁や草体への汚濁物の付着で衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | 従来ウミヒルモと称されてきたが、分類学的検討でヤマトウミヒルモに名称変更された。 | | |
| 文 献 | | 執筆者: 久米 修 | |

| トチカガミ <i>Hydrocharis dubia</i> (トチカガミ科) | | 香川県カテゴリ | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|--|------------|----------------|
| | | 環境省カテゴリ | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑧※ 以前は県内で普通に見られたが、おもな生育地であるため池の改変、水質の悪化などによって、近年になって急速に減少し、絶滅の恐れがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | やや富栄養のため池などに生育する多年生の浮葉性水草。水中茎が横に伸び、各節から根と葉が展開する。葉は円心形で裏の中央に気胞がある。夏から秋に開花する。花弁は3枚で白色。雌雄同株で雄花と雌花がある。水中葉の先端が殖芽となり、水底に沈んで越冬する。 | | |
| 分 布 | 全国的には本州、四国、九州に分布する。県内では平野部のため池などに稀に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | やや富栄養のため池や湖沼、用水路に生育する。現地調査では、東かがわ市の1箇所しか生育が確認されなかった。過去の記録では、高松市、観音寺市などでの生育の記録がある。現地調査では、高松市と観音寺市の4箇所で絶滅したとの報告があった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地であるため池や河川の改変、水質の悪化などによって、さらに減少し絶滅する恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17 | 執筆者: 末広喜代一 | |

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ムサシモ | | 香川県カテゴリ | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|-------------------------------------|---|---------|----------------|
| <i>Najas ancistrocarpa</i> (トチカガミ科) | | 環境省カテゴリ | 絶滅危惧ⅠB類 (EN) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 比較的水質の良いため池に生育しており、自生地では群生することもあるが、産地は限定したものである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 沈水植物。葉は糸状で長さ1~2cm、幅0.1~0.2mm、縁に細かい鋸歯があり、葉は反り返る。葉鞘は切形。花期は7~9月。種子は湾曲して弧状となるのが特徴で、曲がった状態で長さ1.5~2mm、表面に縦長の不明瞭な模様がある。 | | |
| 分 布 | 本州と四国に分布し、県内に広く点在しているが、数箇所のため池に知られているのみである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 比較的水質の安定したため池に生育しており、大群落になることがあるが、産地も個体数も希少な種である。今回の調査では、既知産地で確認されなかった事例が増えている。今回新たに確認された観音寺市の産地は、改修工事が実施されたため池で、休眠種子が発芽復活したものと推定される。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池の改修による生育環境の変化や水質汚濁による衰退が考えられるが、消滅の原因が特定できない産地もある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者: 久米 修 |

| サガミトリゲモ | | 香川県カテゴリ | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---------------------------------|--|---------|----------------|
| <i>Najas chinensis</i> (トチカガミ科) | | 環境省カテゴリ | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑧* 水田や用水路、ため池に生育しているが、生育環境の改変により、産地と個体数が近年著しく減少した。 | | |
| 種 の 特 徴 | 沈水植物。葉は線形で縁に細かい鋸歯がある。葉鞘は切形から円形。花期は7~9月、雌雄同株。種子は長楕円形で、表面に四~六角形の大きな網目模様があるのが特徴である。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しており、県内では島嶼部を含め、平野部から山地部まで広く分布している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 既存の標本や文献資料も多く、注意すれば珍しいものではなかった。しかし近年の生育情報は少なく、著しく減少している。今回の調査では、既知産地で確認されなかったことから、絶滅危惧カテゴリが、一ランク上に評価された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池の改修による生育環境の変化や農地改良による湿田の乾田化、水田除草剤の散布による枯死、水質汚濁により光合成が阻害されて衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | 別名ヒロハトリゲモ。 | | |
| 文 献 | | | 執筆者: 久米 修 |

| イトトリゲモ | | 香川県カテゴリ | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|----------------------------------|--|---------|----------------|
| <i>Najas gracillima</i> (トチカガミ科) | | 環境省カテゴリ | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 山ぎわのため池や湿田などの限られた環境に生育しており、産地ならびに個体数とも限定したものである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 繊細な沈水植物。葉は糸状で縁に細かい鋸歯があり、葉鞘は切形。花期は6~9月、葯は1室。種子は長楕円形で、表面に縦長の網目模様がある。葉が3~5輪生状につき事と種子が各節に1~2個つのが特徴。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では山ぎわのため池に多いが、平野部の標本も残されている。産地は少ないが県内に広く分布している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 貧栄養の水質のため池や湿田などに生育しており、湿田わきの湧水のある排水路などにも生育している。元々産地も個体数も少ない種であったが、近年の生育情報は少なく、著しく減少している。今回の調査では、かろうじて生育が確認された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池の改修による生育環境の変化や農地改良による湿田の乾田化、除草剤の散布による枯死、水質汚濁により光合成が阻害されて衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者: 久米 修 |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| イバラモ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|------------------------------|--|----------|----------------|
| <i>Najas marina</i> (トチカガミ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 水質の良いため池に生育しているが、産地ならびに個体数とも限定したものである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 沈水植物。葉は対生して線形、葉縁に刺状の大きな鋸歯がある。花期は7～9月、雌雄異株。葯は4室。雌花に花被はなく、1個の雌しべからなる。種子は長さ4～6mm、幅2～3mm。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内の産地は極めて少なく、さぬき市大川町南川と三木町池戸、高松市西植田町の3箇所のため池に知られているだけである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 生育地が限定されており、三木町五分の一池と高松市西植田町のため池では消滅した。さぬき市大川町南川のため池では、2000年に確認されたのが最後で、今回の調査では確認されなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池の改修による生育環境の変化や水質汚濁により光合成が阻害されて衰退することが考えられるが、消滅の原因が特定できない。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：久米 修 | | |

| トリゲモ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|-----------------------------|---|----------|-------------|
| <i>Najas minor</i> (トチカガミ科) | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑧* ため池に生育しているが、水質悪化や生育環境の改変により、近年著しく個体数が減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | オオトリゲモに類似した沈水植物。全体より小形で、葯が1室であることで区別できる。葉は線形で、多数の鋸歯がある。葉鞘の先は切形で縁に小刺がある。花期は7～10月、雌雄同株。種子は長さ3～3.5mmで横長の網目模様がある。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しており、県内では島嶼部を含め平野部から山地部まで広く分布している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 日当たりのよいため池に生育しており、水田や公園の庭池でも確認されている。ため池ではよく見かける水草で、標本や文献資料も多い。しかし近年の生育情報は少なく、今回の調査では、報告例はあるものの、葯室に基づく確実な報告は少ない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池の改修による生育環境の変化や水質汚濁により光合成が阻害されて衰退する。外来動物による食害、除草剤の流入による枯死が起きている。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：久米 修 | | |

| ミズオオバコ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|------------------------------------|---|----------|-------------|
| <i>Ottelia alismoides</i> (トチカガミ科) | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑧* 生育地である、ため池や用水路の改変、管理放棄、水質汚濁などによって、近年減少しつつある。 | | |
| 種 の 特 徴 | ため池、用水路などに生育する1年生の沈水植物。オオバコによく似た根出葉をつける。葉の大きさは生育条件によって大きく変化する。水上に花をつける。花弁は3枚で、白色から淡紅色。 | | |
| 分 布 | 本州、四国、九州、沖縄に分布する。県内では平野部から丘陵部のため池などに広く分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | ため池や農業用水路などに生育する。現地調査では、まんのう町、綾川町、直島町、高松市、さぬき市、東かがわ市で生育が確認された。過去の記録では、三豊市、三木町、土庄町、小豆島町で生育の記録がある。絶滅したところもある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地である、ため池や用水路の改変、管理放棄、水質汚濁などによって、産地・個体数が急激に減少している。 | | |
| 特 記 事 項 | 前回評価の準絶滅危惧 (NT) から、今回の評価では絶滅危惧Ⅱ類 (VU) とした。 | | |
| 文 献 | 執筆者：末広喜代一 | | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| セキショウモ <i>Vallisneria natans</i> var. <i>natans</i> (トチカガミ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧※ 用水路や河川、ため池に生育しているが、生育環境の改変により、近年著しく個体数が減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 浅水域に生育する沈水植物で、走出枝を次々に出して増え、先端の芽で越冬する。葉は根生してリボン状線形、先端部近くの葉縁では鋸歯が目立つ。ミクリ属の沈水葉と間違われ易いが、葉縁の鋸歯を見れば区別できる。花期は8～10月、雄花の雄しべは1個。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布し、県内では丘陵部から平野部にかけて広く分布しており、山沿いのため池でも確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 丘陵部から平野部にかけての砂礫質の用水路や河川、ため池に生育する。流速の早い河川域では、富栄養化した水域にも生育している。今回の調査では、既知のため池では確認されなかったが、高松市の市街地の河川で確認された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 河川やため池の改修工事による生育地の消失に加え、水質汚濁による衰退や除草剤の流出による枯死、外来動物による食害がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者：久米 修 |

| シバナ <i>Triglochin asiatica</i> (シバナ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑦⑧※ 海岸の塩湿地という限られた環境にのみ生育可能な植物で、海辺の改変、埋め立てによる土地造成によって、近年減少し、絶滅の危険性がある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 海岸の塩湿地に生育する多年草。地下茎は太く横にはい、葉はすべて根生葉。下部は葉鞘となり、花茎の下部か内側の葉を抱く。6～10月頃、高さ15～40cm位の花茎の上部に小さく緑色の花を多数穂状につける。 | | |
| 分 布 | 全国的には、北海道から九州まで分布する。県内では、現在は確認が出来ていない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 河口や干潟の塩湿地に生育するが、現地調査では確認することが出来なかった。前回の調査でも確認されていない。過去の記録では、高松市、丸亀市、多度津町で生育していたという記録があるが、絶滅している可能性が高い。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 海辺の堤防・道路の改修、埋め立てによる土地造成によって生育地が消滅しており、絶滅している可能性が高い。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17 | 執筆者：末広喜代一 | |

| イトモ <i>Potamogeton bertholdii</i> (ヒルムシロ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---|---|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑥⑦※ ため池や用水路に生育しているが、生育環境が限られており、生育地が限定されている。また、ヒルムシロ属の他種と交雑することで雑種化している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 小形の沈水植物。葉は線形、托葉は両縁が重なり合い筒状にならない。花期は6～8月、花は4心皮。果実は長さ2～2.5mm、幅1.5mm。類似の雑種があるが、雑種は結実しない。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布し、東日本に多い。県内に広く分布しており、平野部から山地部の半日陰のため池や河川、用水路に生育し、群生することもある。標本や文献資料が多いが、点状に散らばっている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | かつては平野部でも確認されているが近年は減少し、丘陵部や山地部に残存している。古い文献では他の狭葉性ヒルムシロ類との混同が見られる。調査の進展により県内に広く生育し、個体数も多いことが判明し、絶滅危惧カテゴリーが、一ランク下に評価された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池や河川の改修により生育地が消滅したり、用水路底部のコンクリート化で生育できなくなっている。水質の富栄養化と汚濁により、光合成が阻害されて衰退している。ヒルムシロ属の他種との交雑で雑種化が起こっている。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者：久米 修 |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| コバノヒルムシロ <i>Potamogeton cristatus</i> (ヒルムシロ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 生育環境が水質の良い浅い水域に限られており、産地ならびに個体数とも限定したものである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 小形の繊細な浮葉植物。沈水葉は線形、浮葉は長楕円形で枚数は少ない。花期は6～9月。花は長さ9～13mmの花穂に間隔を空けず密につく。ホソバミズヒキモに酷似しているが、果実に残る花柱の残存突起が長く、背稜に鶏冠状の著しい突起があることで区別できる。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では海岸部から山中まで広く分布している。産地は極めて稀で、点状に散らばっている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 水質が良くて日当たりのよい、ヒシ等の浮葉植物が繁茂していない小規模な浅いため池に生育する。既知の産地が少なく特定されており、どの産地でも個体数は少ない。今回の調査では、確認されなかった産地がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池の改修工事による掘削や浚渫で生育地が消失したり、水質汚濁による衰退が起きている。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：久米 修 | | |

| ヒルムシロ <i>Potamogeton distinctus</i> (ヒルムシロ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---|---|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 生育環境の改変で近年著しく個体数が減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 水中茎が3mになる沈水植物。沈水葉は長さ5～16cm、幅1～2.5cm。浮葉は狭長楕円形で長さ4～11cm、幅1.5～4cm。花期は5～10月、花は1～3心皮。バナナの房状の殖芽を形成して越冬する。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では島嶼部を含め平野部から山地部まで広く分布している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | よく知られた水草で、文献や標本も多く残されているが、ため池や用水路、河川域での消失が著しい。河川等の流水中では富栄養化した所でも生育している。今回の調査では、絶滅や個体数が減少した産地が報告された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池や河川の改修により生育地が消滅したり、用水路底部のコンクリート化で生育できなくなっている。また水質の富栄養化や汚濁により、沈水時の光合成が阻害されて衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：久米 修 | | |

| フトヒルムシロ <i>Potamogeton fryeri</i> (ヒルムシロ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---|--|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 県内全域にわたり分布するが、ため池の管理放棄による環境変化、水質悪化で近年生育数が減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 酸性の水域に生育する多年生の浮葉植物。沈水葉は無柄に近く、線形から倒披針形、先端は鋭頭又はやや鈍頭。長さ6～25cm、幅5～30mm。浮葉は長楕円形から広楕円形。長さ5～13cm、幅2.5～5cm、鈍頭又はやや鋭頭、葉縁はやや波打つ。しばしば赤味を帯びる。 | | |
| 分 布 | 本州・四国・九州、朝鮮、千島に分布する。県内全域の、主として山間地のため池に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 県内全域のため池に生育するが、ため池の減少、環境の変化により、生育数も減少傾向である。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地のため池改修、管理放棄による環境の変化、水質の悪化などで、近年生育地が減少すると共に、生育数も減少している。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17, 62, 68, 78, 90 | 執筆者：佐藤 明 | |

*選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| センニンモ <i>Potamogeton maackianus</i> (ヒルムシロ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---|--|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧※ 水質の良いため池に生育しているが、水質悪化や生育環境の改変により、近年著しく個体数が減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 常緑性の沈水植物で水中茎は1mになる。葉は線形で無柄、基部は托葉と合着して長さ2～6mmの葉鞘となる特徴がある。葉縁に鋸歯があり、先端は凸状になる。花はめつたに見られない。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では島嶼部を含め広く分布している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 丘陵部から山地部の水質のよいため池に生育し、生育地では群生することも多い。文献や標本が多く残されているが、減少が著しい。今回の調査では、絶滅や個体数が減少した産地が報告された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池の改修により生育地が消滅したり、水質の富栄養化で光合成が阻害されて衰退している。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者: 久米 修 |

| オヒルムシロ <i>Potamogeton natans</i> (ヒルムシロ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤※ 県内のごく限られた地域に局地的に生育していることが知られているだけである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 水中茎が3mになる浮葉植物。沈水葉は針状で長さ12～30cm、幅0.5～2mmであることが他のヒルムシロ類との区別点である。浮葉は長楕円形で長さ5～12cm、幅2～5cm。花期は5～8月、花は4心皮。葉腋の側枝が殖芽になる。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内における近年の既知産地は、綾川町とまんのう町の3箇所のため池であるが、現存しているのは、まんのう町の2箇所だけである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山際にある日当たりのよい貧栄養から腐植栄養の水質で、ヒシがあまり繁茂しておらず、ジュンサイやヒツジグサの生育するため池に生育する。今回の調査では、まんのう町2箇所の産地で個体数の減少傾向が観察されている。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地のため池の土手が老朽化しており、ため池の改修による生育環境の変化が危惧される。また水質汚濁による衰退が懸念される。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者: 久米 修 |

| ヤナギモ <i>Potamogeton oxyphyllus</i> (ヒルムシロ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|---|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑥⑧※ ため池や河川、用水路に少なからず生育していたが、近年急激に個体数の減少が見られる。また、ヒルムシロ属の他種と交雑することで雑種化している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 常緑性の沈水植物。葉は線形で長さ5～12cm、幅2～5mm、全縁で5脈以上ある。形態変異が大きい。花期は5～9月、花は4心皮。流水中では結実することが少ない。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では平野部から山地部にかけて広く散らばって分布している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 泥質土壌のため池や河川、用水路に生育している。文献や標本が多く残されているが、減少が著しい。今回の調査では、絶滅や個体数が減少した産地が報告された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池や河川の改修により生育地が消滅したり、水質の富栄養化や汚濁で衰退している。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者: 久米 修 |

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ツツイトモ <i>Potamogeton pusillus</i> (ヒルムシロ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅 (EX) |
|---|--|-----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑨* 海岸近くの河川や水路に生育していたが、1930年以来生育が確認されておらず、絶滅したと思われる。 | | |
| 種 の 特 徴 | イトモ類似の沈水植物。葉は線形で先端鋭頭、無柄。托葉が2側で合成して筒状となることから、この名がある。花は開花が進むと上下2段に分かれてつく。秋に形成される殖芽はごく細く、長さ1.5～2cm。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布し、県内の既存情報は、1929年と1930年に三木茂が採集した詫間の標本が残されているのみである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 三木の採集した標本は、生育環境と旧地名から推定して三豊市詫間町の旧詫間塩田に流入する用水路周辺か高瀬川河口部周辺と思われる。以後他所での生育情報がなく、50年以上にわたり生育が確認されていないことから絶滅種と評価された。今回の調査では確認されていない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 製塩業の廃止と共に塩田跡地は埋め立てられ、土地造成の対象となった。また河川河口部も、河川管理の必要性から浚渫や河床整理が実施され、生育地が消失した。加えて水質汚濁など水質の悪化により衰退した。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 37, 74 | 執筆者: 久米 修 | |

| ササバモ <i>Potamogeton wrightii</i> (ヒルムシロ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|--|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑥⑧* ため池や河川、用水路に少なからず生育していたが、近年急激な個体数の減少が見られる。また、ヒルムシロと交雑して雑種化している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 水中茎が3mになる浮葉植物。沈水葉と浮葉はほぼ同形で、長楕円状線形、長さ6～15cm、幅1～3cm。葉の先が鋭頭で芒状に突出する特徴がある。花は4心皮、花期は7～9月。地下茎の先端に殖芽をつくり越冬する。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布し、県内に広く分布しているが、産地数は少なく、点状に散らばっている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 平野部から丘陵部にかけて、砂礫質土壌のため池や河川、用水路に生育し、群生することがある。近年減少が著しく、産地も個体数も稀である。今回の調査では、高松市の市街地水路で多数確認されたが、他の水路やため池で絶滅報告がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池や河川の改修により生育地が消滅したり、水質汚濁による衰退、外来動物による食害が生じている。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | 執筆者: 久米 修 | |

| イトクズモ <i>Zannichellia palustris</i> (ヒルムシロ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|---|--|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 2004年版では絶滅とされていたが、2017年5月に再発見され、評価を絶滅危惧I類に変更した。 | | |
| 種 の 特 徴 | 汽水域に生育する繊細な一年生、又は越年生の沈水植物。葉は線形で1脈があり先端は鋭頭。長さ2.5～7cm、幅0.3～0.8mm、対生もしくは輪生状、無柄。花は単性花。雄花と雌花が葉腋に並んでつく。果実は小柄と背面に鋸歯のある三日月状。全長4～7.5mm。 | | |
| 分 布 | 本州・四国・九州・琉球、朝鮮に分布する。県内では海岸部の汽水域に生育する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 海水と真水の入り混ざる汽水域で、水位が浅い砂泥質の沼や湿地、水路などに生育する。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 汽水域などの海岸部の埋め立て、護岸工事、水路の改修等海辺の改変で生育適地の減少。水質環境の悪化による生育数の減少。 | | |
| 特 記 事 項 | 2017年に再発見され、絶滅から絶滅危惧I類に評価を変更した。 | | |
| 文 献 | 19, 37, 41, 73 | 執筆者: 佐藤 明 | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| カワツルモ <i>Ruppia maritima</i> (カワツルモ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑦⑧* 海岸近くの汽水域に生育しているが、産地ならびに個体数とも限定されており、生育地の埋立などの開発行為により近年減少が著しい。 | | |
| 種 の 特 徴 | 汽水性の沈水植物。葉は線状で、葉縁に鋸歯があり、先端は鋭頭。花穂は葉腋から伸びた細い花茎の先につく。受粉後花茎が伸びて長さ2～11cmになる。果実は卵球形で長さ2～2.5mm、先が嘴状に突出する。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布し、県内の塩田のあった海岸部や島嶼部に分布していたが、標本や文献資料として確認されている産地は少ない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | かつて塩田にはかなり生育していたと思われるが、廃止と共に跡地が埋め立てられて消滅した。土庄町豊島の調整池にも大群落があったが土地造成で消滅した。今回の調査では、東かがわ市松原で生育が確認されたのみである。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地の埋立による土地造成や道路建設、河川改修や浚渫などの海岸部の開発と共に、水質汚濁により光合成が阻害されて衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者：久米 修 |

| ヒメソクシンラン <i>Aletris makiataroi</i> (キンコウカ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅 (EX) |
| 選 定 理 由 | ①③④ ⑤* 香川県を模式産地とする県固有種で、ごく限られた地域に局地的に生育している。 | | |
| 種 の 特 徴 | ソクシンランに酷似しているが、より小さく高さ5～15cm。葉は線形で2～3枚つき、長さ5～10cm、幅2～3mm。花期は5月、花は黄白色、長さ3～4mm、幅2mm。根元にグラジオラスを小型にしたような長さ1～3mmの球茎があるのが特徴。花後6月には休眠し、翌年3月に新芽を出す。 | | |
| 分 布 | 山地部にある車道縁の山すそに位置する日当たりのよい露岩地で、常時滲出水で湿っており、岩の割れ目に溜まったわずかな土壌に根を下ろしている。観音寺市栗井町のごく限られた地域に1箇所だけ知られており、他所では発見されていない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 元々生育地が幅数メートルと局地的であり、個体数もわずかであった。20年ほど前から生育環境が悪化して、現在はほぼ絶滅状態である。今回の調査では、確認されていない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 衰退の主因は、自生地において苔類が繁茂して地面を被覆してしまい、発芽が抑制された事による。他に、森林開発や道路拡張により自生地が消失する事や道路縁の草刈行為が止められると被圧が起こり衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17, 58 | 執筆者：久米 修 | |

| ホンゴウソウ <i>Sciaphila nana</i> (ホンゴウソウ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|--|---|----------|-------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 腐生植物であることから、生育には安定した森林環境が必要で、限定された生育環境に局地的に生育する。 | | |
| 種 の 特 徴 | 緑葉のない腐生植物。茎は高さ3～8cm、太さ0.3～0.4mmと細く、分枝する。葉は鱗片状、花期は7～10月、花は総状花序で上部に雄花、下部に雌花がつく。果実は集まって球状の集合果となる。 | | |
| 分 布 | 関東以西に分布しており、県内では既存資料が少なく、高松市西植田町と丸亀市広島で確認されているだけである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 植物体が微小な事と生育環境が特殊な事から、ごく希に少数個体が確認される。今回の調査では、新産地の報告があったが、既知産地で確認されなかったことから、絶滅危惧カテゴリーが、一ランク上に評価された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や道路建設により生育地が消失する。本種は安定した森林環境に生育し、微妙な森林環境の変化で衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者：久米 修 |

※選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ウエマツソウ <i>Sciaphila secundiflora</i> (ホンゴウソウ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|---|--|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 腐生植物であることから、生育には安定した森林環境が必要で、限定された生育環境に局地的に生育する。 | | |
| 種 の 特 徴 | 緑葉のない腐生植物。茎はホンゴウソウより少し太く0.8mm。花期は7～9月、花は総状花序で上部に雄花、下部に雌花がつく。花柱は腹面下部から出て、果実より短い。果実は倒卵形。 | | |
| 分 布 | 中部地方以西に分布しており、県内では既存資料が少なく、綾川町粉所東で確認されているだけである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 植物体が微小な事と生育環境が特殊な事から、ごく希に少数個体が確認される。今回の調査では、既知産地で確認されなかったことから、絶滅危惧カテゴリーが、一ランク上に評価された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や道路建設により生育地が消失する。本種は安定した森林環境に生育し、微妙な森林環境の変化で衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：久米 修 | | |

| ヒメナベワリ <i>Oroomia japonica</i> (ビャクブ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|---|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 県内のごく限られた地域に局地的に生育していることが知られている。 | | |
| 種 の 特 徴 | ナベワリに酷似しているが、花被片は4個、長楕円形でほぼ皆同形、多少反曲し、縁が外側に巻き込み、花糸に微細突起があることが特徴である。葉は扁平で長楕円状卵形、長さ6～15cm、幅3～8cm。花期は4～5月、花は黄緑色。 | | |
| 分 布 | 中国地方、四国、九州に分布しており、県内では小豆島の中央山地の嶮岨山一帯を中心に確認されている。小豆島以外では発見されていない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 従来から、生育地の生育範囲が極狭く、個体数が少なかった。今回の調査では、衰退傾向は見られなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育環境が落葉広葉樹林であり、森林伐採による針葉樹の植林や林内歩道の設置などの森林開発に加え、樹木の生長に伴う上層空間の閉鎖による衰退の危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：久米 修 | | |

| ホソバシュロソウ <i>Veratrum maackii</i> var. <i>maackioides</i> (シュロソウ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|--|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 県内のごく限られた地域に局地的に生育しており、個体数は極めて少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 茎は50～100cm。基部はシュロのような繊維に包まれる。葉は線状披針形で長さ20～40cm、幅1～2.5cm。花期は7～9月。茎の先に花序を出し、径1cm位の暗紫色の花を多数つける。 | | |
| 分 布 | 関東以西に分布しており、県内では丸亀市の平野部にある丘陵地で確認されているだけである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 丸亀市綾歌町の1箇所ですら知られるのみで、今回の調査では確認されなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 碎石場などの森林開発や土地造成により自生地が消失する。木本類の生長や高茎草本類の繁茂により被圧され衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17 | 執筆者：久米 修 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| アマナ <i>Amana edulis</i> (ユリ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|---|---|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 以前は島嶼部を含む平野部から山間部まで、広く分布していたが、近年は産地・個体数共に激減している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 日当たりの良い丘陵地や原野に生える多年生草本。鱗茎は1.5～2cmの広卵形、扁平な葉が2枚で長さ13～25cm位、幅4～6mm。3～4月に10cm前後の花茎を伸ばし、1個の白っぽい花を付ける。夏には地上部は枯れる。 | | |
| 分 布 | 全国的には、福島県以南、石川県以西の本州、四国、九州、奄美大島に分布する。県内では、高松市、三豊市に分布する。過去の記録では、土庄町でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 日当たりの良い丘陵地に点在して生育し、個体数も少ない | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 岩石の採掘や道路建設等による生育環境の減少、自然遷移による生育環境の変容。業者・趣味者の採集による人為的被害。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆：秋山 敬典 |

| ヒロハノアマナ <i>Amana erythronioides</i> (ユリ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅 (EX) |
|---|---|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑩* 日当たりの良い草地や雑木林の林床など、限られた生育環境にのみ生育が可能であるが、生育地の改変によって絶滅する可能性がある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 日当たりの良い草地や雑木林の林床などに生育する小型の多年草。葉は幅広く、中央に白いすじがあり、花茎には3個の苞がある。地中深くには卵形の鱗茎がある。 | | |
| 分 布 | 全国的には、福島県以西の本州および香川県に分布するといわれるが、前回および今回の調査で県内では確認されていない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 1969年に善通寺市で採集された標本が残っているが、前回および今回の調査で確認されておらず、絶滅しているものと考えられる。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 圃場整備など農地の改修等によって生育地が消滅したり、農業使用による汚染、大型草本の侵入等により、生育環境が悪化、また観賞用に採取されて減少し、絶滅したのと考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | 2004年版では絶滅危惧 I 類としたが、50年以上確認されていないことから、絶滅と判定した。 | | |
| 文 献 | 17 | 執筆：末広喜代一 | |

| アワコバイモ <i>Fritillaria muraiana</i> (ユリ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--|---|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑧* トサコバイモに比べて分布範囲は広く、かつては大きな群生地もあったが、産地も個体数も減少が著しい。 | | |
| 種 の 特 徴 | 鱗茎は2個の鱗片からなる。下部の葉は対生、稀に互生する。葉の先は巻きひげ状にならない。花は常に1個。花は広鐘形、花被片内側の中部下寄り(下1/3～2/5)から上に向かう腺があり、花被片は中部下寄り外側に角ばって張り出す。網目状の斑紋が濃く、ミノコバイモに似ているが、葯は紫褐色。 | | |
| 分 布 | 県外では、徳島県、高知県、愛媛県に分布する。県内では、まんのう町、高松市で生育が確認されているほか、三木町での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 讃岐山脈中央部の県境に近い深山の落葉樹林で、半日陰から明るい林床に少数個体が点在して生育している。園芸採取等により絶滅に近い産地もあり、注視が必要である。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や道路建設により自生地が消失し、針葉樹の人工植栽や自然遷移、踏みつけにより衰退する。また減少要因として、山野草趣味による園芸目的の採取が大きな割合を占めている。 | | |
| 特 記 事 項 | 園芸用採取圧が著しく増大しており、個体数が急激に減少している。 | | |
| 文 献 | 17 | 執筆：三浦 勝美 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| トサコバイモ <i>Fritillaria shikokiana</i> (ユリ科) | | 香川県カテゴリ | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|---|--|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリ | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑤* 県内では讃岐山脈のごく限られた地域にのみ生育しており、生育地の改変により絶滅する危険性がある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 4月上旬に明るい落葉広葉樹林下で小さな筒型の花を下向きに開花する小型の多年草。5月下旬には結実し、地上部は枯死してしまう。地下では、球形の小さな鱗茎の状態、夏から冬を過ごす。葯の色は淡紫色。他県ではアワコバイモとトサコバイモの自然雑種が見つかっており、トクシマコバイモと呼ばれる。 | | |
| 分 布 | 四国西部から九州中部にかけて分布しており、県内では、讃岐山脈のごく一部に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 生育地が限られているために個体数は少ない。森林開発や遊歩道の整備などによって、以前は大幅に生育地が減少したことがあったが、指定希少野生生物に指定されてからは、開発による直接的な影響は少なくなった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 園芸採取の他、生育地の自然遷移、人の立ち入りによる踏みつけのほか、森林開発、人工造林、道路建設が危険性の要因として考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | 「香川県希少野生生物の保護に関する条例」によって指定希少野生生物に指定されている。 | | |
| 文 献 | 59 | 執筆者：末広喜代一 | |

| ヒメユリ <i>Lilium concolor</i> var. <i>partheneion</i> (ユリ科) | | 香川県カテゴリ | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|--|--|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリ | 絶滅危惧IB類 (EN) |
| 選 定 理 由 | ⑧* かつては比較的良好に見られたといわれるが、急激に減少している。園芸採取、生育地の自然遷移、森林開発、草地開発などによって、さらに減少し絶滅する恐れがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山地に生育する多年草。小型のユリで、地下に小さく白色卵形の鱗茎がある。茎は高さ30～60cmで、葉柄のない線形の葉が多数つく。6月下旬から7月上旬に小型で朱赤色の星形の花を上向きにつく。花被片の内側に斑点がある。 | | |
| 分 布 | 東北地方南部以南の本州、四国、九州に分布する。県内ではごく限られた地域にしか分布しない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の明るい林縁や草地に生育する。現地調査では丸亀市での生育が報告されている。過去の情報では、高松市、坂出市、小豆島町等での生育情報がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 園芸採取、生育地の自然遷移、森林開発、草地開発などによって絶滅する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17 | 執筆者：末広喜代一 | |

| ササユリ <i>Lilium japonicum</i> (ユリ科) | | 香川県カテゴリ | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|---------------------------------------|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリ | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 限られた生育環境にのみ見られ、その為一部の環境にのみ生育が可能な種である。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高さ50～150cmになる多年草。葉は茎の中ほどより上部に互生し、長さ5～13cm位の披針形。花は5～6月頃、茎の頭頂部にロート型の淡いピンク色の1～8花を横向きに付ける。花被片の先はやや反り返り、葉はササの葉に似る。 | | |
| 分 布 | 全国的には、中国地方以西の本州、四国、九州に分布する。県内では、坂出市、丸亀市の島嶼部に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 島嶼部において、細々と生育している。尚、坂出市小与島のササユリが香川県天然記念物に指定されているが、現状については不明である。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発、道路整備などによる、生育環境の減少、自然遷移による生育環境の変容。業者・趣味者による採集による、人為的減少が主な危険要因である。 | | |
| 特 記 事 項 | 過去にバイオ技術によって増殖し、移植する活動があった。 | | |
| 文 献 | 17 | 執筆者：秋山 敬典 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| チャボホトトギス | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|-----------------------------|---|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| <i>Tricyrtis nana</i> (ユリ科) | | | |
| 選 定 理 由 | ⑦* 山地の林床に生育しており、ある程度まとまった個体数になることもあるが、限られた環境に生育している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 草丈2～6cmと小さく、茎に硬い毛を散生する。葉は倒披針形、上面無毛で紫斑があり、下面に毛を散生する。上部のものは少し茎を抱く。花期は8～9月、花は茎の頂と葉腋に1～2個つく。花被は上向きに斜開する。外花被片は倒披針形で黄色。 | | |
| 分 布 | 東海地方以西に分布しており、県内では確実な標本や写真などの証拠資料の少ない種で、高松市塩江町において確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の半日陰の樹林下で、他種と競合の少ない安定した林床に生育しており、確実な生育情報が少ない。今回の調査では、既知産地の個体数に変化は無い事が確認された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や道路建設による生育地の消失や、樹木の生長に伴う上層空間の閉鎖による衰退、園芸目的の採取の恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者: 久米 修 | | |

| ヒナラン | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|----------------------------------|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧I B類 (EN) |
| <i>Amitostigma gracile</i> (ラン科) | | | |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内各地に局地的に分布していたが、生育環境の変化や趣味者などによる採取によって激減しており絶滅の危険性が大きい。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山地の樹林に囲まれた、日当たりの良いやや乾いた岩上に生育する。葉は長楕円形又は広披針形で茎の下部に1個つき、基部は茎を抱く。花茎は約10cm位で淡紫色の小花を10～15個つける。 | | |
| 分 布 | 本州(中部地方以西)・四国・九州、朝鮮、鬱陵島、中国に分布。県内各地の岩場に分布していたが、現在はごくまれである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 分布地と個体数は激減しており、以前からの分布地はほぼ絶滅状態である。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 自然遷移による生育環境の変化が最大の原因である。業者や趣味者の採取が一番絶滅にかかわっている。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17 執筆者: 五所野尾優 | | |

| シラン | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|---|---|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| <i>Bletilla striata</i> var. <i>striata</i> (ラン科) | | | |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内の限られた生育地しか知られておらず、園芸採取、生育地の自然遷移、森林開発によって絶滅する恐れがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 日当たりの良い斜面に生育する多年草。地下に扁平な鱗茎ができる。葉は披針形で、先はとがる。厚い革質で毛がなく、顕著な縦じわがある。長い茎に数個のやや大型の紫色の花を咲かせる。もっとも大きい花びらの内側には5本のひだがある。 | | |
| 分 布 | 本州・四国・九州・沖縄に分布。県内では、ごく稀に分布する。現地調査では、丸亀市、東かがわ市、さぬき市での生育が報告されている。過去の記録では、高松市、坂出市、旧財田町、土庄町、小豆島町での生育記録がある。絶滅したところもある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 日当たりの良い湿り気のある斜面に生育する。しばしば園芸植物として栽培される。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 園芸採取、生育地の自然遷移、森林開発によって絶滅する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者: 末広喜代一 | | |

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| マメツタラン | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--|--|-----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| <i>Bulbophyllum drymoglossum</i> (ラン科) | | | |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内に局地的に分布しており、生育環境の変化などにより絶滅の可能性がある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山地の古木の樹幹や岩石の上に着生している。根茎は樹上などに着生しながら匍匐し、1cm位の葉をまばらにつける。葉の基部は無柄で基部から糸状の花茎を出し、1花をつける。 | | |
| 分 布 | 本州(茨城県以西)・四国・九州・琉球、朝鮮(南部)に分布。小豆島及び県南部の阿讃山脈ぞいに確認されているが、近年減少が著しい。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 環境の変化などによって減少しており、余り見かけられなくなった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 産地が少ないため、森林開発や自然遷移などの影響で、近年減少が著しい。園芸目的の採取が重なれば絶滅の危険性もある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17 | 執筆者：五所野尾優 | |

| ムギラン | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--|--|-----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| <i>Bulbophyllum inconspicuum</i> (ラン科) | | | |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内に局地的に分布しており、個体数も少ない。採取などの影響で絶滅の可能性がある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山地にある岩場の岩石上や森林内の古木の樹幹に着生する。根茎はまばらに偽球茎を付け、その先端に長さ1～2cmの葉を1枚つけている。花茎の先端に黄白色の花を1個つける。 | | |
| 分 布 | 本州(関東地方以西)・四国・九州、中国、東南アジアに分布。県内では小豆島及び県南部の阿讃山脈などに局地的に分布しているが、近年減少が著しい。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 森林開発などの影響もあるが、採取によって減少しており、絶滅に近い状況である。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や自然遷移による衰退もあるが、分布が限られており、個体数も少なく、園芸目的の採取によって絶滅の可能性が大である。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17 | 執筆者：五所野尾優 | |

| エビネ | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---|---|-----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| <i>Calanthe discolor</i> var. <i>discolor</i> (ラン科) | | | |
| 選 定 理 由 | ⑧* 園芸採取のほか、生育地の森林開発、道路建設などによって近年減少している。産地・個体数ともに多いが、ラン科植物の採集圧が増加していることからNTとして残した。 | | |
| 種 の 特 徴 | 雑木林の林床などに生育する多年草。葉は2、3枚根生し、無毛で、縦じわが多く、先はとがる。花茎に10個前後の花をつける。花被片は暗褐色で、唇弁は帯紅色または白色。花の色には個体変異が多い。 | | |
| 分 布 | 北海道西南部から琉球まで分布する。県内では、丘陵部から山地部にかけて広く分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 雑木林の林床に生育する。現地調査では県内のほとんどの市町で生育が確認された。個体数が多いところもある。園芸植物として良く栽培される。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 園芸採取のほか、生育地の森林開発、道路建設などによって、さらに減少する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | 執筆者：末広喜代一 | |

※選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ナツエビネ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| <i>Calanthe puberula</i> var. <i>reflexa</i> (ラン科) | | | |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内では、ごく限られた地域で生育しているだけで、園芸採取や生育地の森林開発などによって絶滅する恐れがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | やや湿った落葉樹林下に生育する多年草。葉は3～5枚根生し、無毛で、縦じわが多く、先はとがる。夏に花茎の先に、10～20個の淡紅紫色の花を総状に咲かせる。側がく片は花時にはそりかえり、唇弁は下垂する。 | | |
| 分 布 | 本州・四国・九州に分布する。県内では讃岐山脈の限られた地域で生育する。園芸植物として栽培される。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | やや湿った落葉樹林の林床に生育する。現地調査では、高松市、三豊市、まんのう町、綾川町で生育が確認された。個体数は少ない。過去の記録では、旧大野原町でも生育が確認されている。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 園芸採取、生育地の森林開発などによって絶滅の危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17 | 執筆者：末広喜代一 | |

| キエビネ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|-------------------------------|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧ⅠB類 (EN) |
| <i>Calanthe striata</i> (ラン科) | | | |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内では、ごく限られた地域での過去の記録があるだけで、園芸採取、生育地の森林開発などによって絶滅する恐れがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 林床に生育する多年草。葉は2、3枚根生し、無毛で縦じわが多く、先はとがる。春に花茎に10個前後の花をつける。エビネに似ているが、全体に大型で花の色は黄色。花にやや香りがある。 | | |
| 分 布 | 本州の一部、四国、九州に分布する。県内では過去に讃岐山脈と小豆島での分布記録がある。園芸植物として栽培される。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の樹林の林床に生育する。現地調査では明らかに栽培由来と思われる個体の生育があったが、自生は確認することができなかった。過去に2箇所での生育記録がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地の情報がないため、県内での具体的な危険性については不明だが、園芸採取、生育地の森林開発などが考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17 | 執筆者：末広喜代一 | |

| サルメンエビネ | | 香川県カテゴリー | 情報不足 (DD) |
|-----------------------------------|--|-----------|-------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| <i>Calanthe tricarinata</i> (ラン科) | | | |
| 選 定 理 由 | 過去に生育しているのを見たことがあるという情報があるが、詳しくは不明。過去の生育記録もなく、現地調査でも生育が確認されなかった。 | | |
| 種 の 特 徴 | ブナ帯の落葉樹林の林床に生育する多年草。葉は3～4枚で無毛。花被片は黄緑色。唇弁は紫褐色から朱紅褐色で、しわが寄っているのをサル顔に見立てて、サルメンエビネの名がある。 | | |
| 分 布 | 北海道、本州、四国、九州に分布する。県内の分布については不明。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | ブナ帯の落葉樹林の林床に生育するといわれるが、過去の生育記録もなく、現地調査でも生育が確認されなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | もし生育しているならば、園芸採取などの危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | 執筆者：末広喜代一 | |

*選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ギンラン | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--|--|----------|--------------|
| <i>Cephalanthera erecta</i> var. <i>erecta</i> (ラン科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 現地調査では数カ所ではしか生育が確認されず、個体数も少なかった。園芸採取、生育地付近の道路工事、自然遷移などによって、近年減少し絶滅の恐れがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山の本陰に生育する多年草。茎は直立し、葉は互生。葉の先はとがり、無毛で、基部は茎をだく。春に白い数個の花をつける。花は半開で開出せず、やや円形。唇弁の基部が短い距となる。 | | |
| 分 布 | 北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では丘陵部から山地部にかけて分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山の本陰や林縁部に生育する。現地調査では、高松市、丸亀市、坂出市、まんのう町での生育が確認されている。過去の記録では、旧大野原町、三豊市、旧綾上町、東かがわ市、小豆島町、土庄町などでの生育記録がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 園芸採取の他、生育地に接する道路や河川の工事、生育地の自然遷移などによって、さらに個体数が減少し、絶滅する恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆：末広喜代一 | | |

| キンラン | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|------------------------------------|---|----------|--------------|
| <i>Cephalanthera falcata</i> (ラン科) | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑧* 管理放棄や自然遷移による生育環境の変容や、趣味者による採集によって、近年、産地・個体数共に減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 明るい林床に生育する多年生草本。茎は直立し30～80cm位。葉は互生し6～10枚程付け、長楕円形で茎を抱く。4月中旬頃から5月に、茎の頭頂部に3～12個位の黄色の総状花序花を上向きに付ける。 | | |
| 分 布 | 全国的には、本州、四国、九州に分布する。県内では、小豆島町、土庄町、高松市、坂出市、丸亀市、まんのう町、三豊市に分布する。過去の記録では、旧財田町、旧仲南町でも、生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 丘陵地から山地に点在しているが、産地・個体数共に減少している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や管理放棄、又自然遷移による生育環境の変容及び減少。趣味者の採集による人為的要因が大きい。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆：秋山 敬典 | | |

| ササバギンラン | | 香川県カテゴリー | 絶滅 (EX) |
|---|---|----------|---------|
| <i>Cephalanthera longibracteata</i> (ラン科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑨* 小豆島の植物(1963年)に記載があり、2004年版では絶滅危惧 I 類としたが、その後確認されておらず絶滅とした。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山地及び丘陵地のやや明るい樹林内で腐葉土の堆積した場所に生育する。茎は30～50cmで直立する。葉は卵状披針形で6～8個つけ、基部では茎を抱く。苞は線形で花序より長いことでギンランと区別できる。 | | |
| 分 布 | 本州・四国・九州、朝鮮に分布。県内では小豆島での記録があるのみである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 1963年の文献に記載があるだけで、分布の確認報告はなく、聞き取り調査でも生育を確認できなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や自然遷移の影響を受けやすく、また個体数が少ないため採取などにより絶滅したと思われる。 | | |
| 特 記 事 項 | 2004年版で絶滅危惧 I 類としたが、50年間記録がなく評価を絶滅に変更した。 | | |
| 文 献 | 50 執筆：五所野尾優 | | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| クゲヌマラン | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---------------------------------------|---|------------|----------------|
| <i>Cephalanthera longifolia</i> (ラン科) | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑤* 本州の太平洋側海岸のクロマツ林に分布するが、本県では小豆島のみ局限されており、またマツ林の減少により絶滅する可能性が高い。 | | |
| 種 の 特 徴 | 海岸のクロマツ林下に自生する。茎は高さ10～30cmで直立する。狭長楕円形の葉を3～6枚付け、基部は茎を抱く。本種は距がないか、ほとんど発達していない点でギンランと区別する。 | | |
| 分 布 | 本州(愛知県・神奈川県鶴沼・宮城県)に分布する。県内では極めて局所的であり、小豆島でのみ確認されているが、現状は不明である。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 小豆島での記録はあるが、海岸開発で生育地が消失、絶滅の可能性が高い。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 海岸部の森林開発や自然遷移などによる環境変化の影響が大きく、絶滅の可能性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 37 | 執筆者: 五所野尾優 | |

| ヒメノヤガラ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|-----------|----------------|
| <i>Chamaegastrodia sikokiana</i> (ラン科) | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 腐生植物であることから、生育には安定した森林環境が必要で、限定された生育環境に局地的に生育する。 | | |
| 種 の 特 徴 | 無葉の多年草。全体無毛。地下茎は横に這い、節に小形の鱗片がある。花茎は高さ5～15cm。花期は7～8月。花は5～10個開き、黄褐色。子房は花軸にそってほぼ直立する。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しており、県内では小豆島と三木町で確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 特殊な生育環境と植物体が小形で地味な事から、既存資料が少なく、確認事例は極希である。個体数は極少ない。今回の調査で、新たに県内に生育している事が確認された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林伐採などの森林開発と共に、自然遷移に伴う微妙な森林環境の変化で衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | 今回新たに県内の生育が確認された。 | | |
| 文 献 | | 執筆者: 久米 修 | |

| トケンラン | | 香川県カテゴリー | 情報不足 (DD) |
|------------------------------------|--|------------|-------------|
| <i>Cremastra unguiculata</i> (ラン科) | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | 文献上の記録はあるが標本が残されておらず、確認場所と年代が不詳であり、情報不足とした。 | | |
| 種 の 特 徴 | 深山の樹林でやや湿った半日陰のブナ帯の林床に生える。球形の偽球茎が地下茎で連なっている。葉は薄く長楕円形をしており、2枚である。花茎は30～40cmで細く、径約3cmの花をまばらに10個くらいつける。 | | |
| 分 布 | 北海道・本州、四国・九州、韓国(済州島)・中国に分布する。県内では、旧塩江町での生育記録があるとされるが、標本はない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 現地調査では、生育が確認されなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17 | 執筆者: 五所野尾優 | |

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| マヤラン <i>Cymbidium macrorhizon</i> (ラン科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内に局地的に分布しており、確認個体数も少ない。生育環境も変化しており確認が難しい。 | | |
| 種 の 特 徴 | 常緑広葉樹林内の腐葉土が多く堆積している中に生育している。根茎は多肉質で長くて白色である。茎は長さ10～30cmで直立する。夏季茎頂に3～6個の白花をまばらにつける。腐生ランであるため葉はつけない。 | | |
| 分 布 | 本州(関東地方以西)・四国・九州に分布。確認地が少なく、県内に点在して分布している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 限られた場所に生育しており、腐生ランで葉をつけないため、花期以外には見つけにくい。個体数も少なく絶滅する可能性が大きい。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 分布が限られており、森林開発や自然遷移の影響を受けやすく絶滅の可能性が大である。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 37 | 執筆者：五所野尾優 | |

| クマガイソウ <i>Cypripedium japonicum</i> var. <i>japonicum</i> (ラン科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑧* 以前には県内でも群生地が話題になったことがあるが、園芸用に盗掘され、群生するような生育地は見られなくなった。そのほか、生育地の自然遷移などによって減少し、絶滅の恐れがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山地の樹林下に生育する多年草。地下茎が横にはいり、群生することがある。葉は扇形で、放射状に多数の脈がある。大型の花をひとつだけ横向きにつける。花被片は淡黄緑色で、袋状の大型の唇弁をもつ。 | | |
| 分 布 | 北海道西南部、本州、四国、九州に分布する。県内では讃岐山脈に近い山間部などにまれに分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の樹林下に生育する。現地調査では1箇所しか生育が確認されなかった。個体数は少ない。そのほか、過去に数カ所での生育記録があるが、現状は不明。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 園芸採取の危険性が非常に大きい。そのほか、生育地での自然遷移、森林開発によって、さらに減少し絶滅する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17 | 執筆者：末広喜代一 | |

| セッコク <i>Dendrobium moniliforme</i> (ラン科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|--|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 過去に生育していたと言われているところでも生育が確認されず、近年減少したものと考えられる。園芸採取などによって、さらに減少し絶滅の恐れがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 着生の常緑多年草。茎は叢生し、肉質で節がある。葉は革質で、披針形。花は古い茎に数個つき、白色またはわずかに淡紅色をおびる。芳香がある。 | | |
| 分 布 | 岩手県以南の本州、四国、九州、沖縄に分布する。県内では、これまで数カ所で確認されているだけである。園芸植物として、古くから栽培されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 岩上や樹上に着生する。現地調査では、1箇所を確認されただけである。個体数は少ない。過去にも、2、3ヶ所での生育記録があるだけである。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 園芸採取のほか、生育地の自然遷移による減少が、危険性の要因として考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17 | 執筆者：末広喜代一 | |

※選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| カキラン <i>Epipactis thunbergii</i> (ラン科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--|---|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 前回は準絶滅危惧 (NT)だったが、近年産地・個体数共に急激に減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 日当たりの良い湿地及び、その周辺の丈の低い草地に生育する多年草。茎は直立し30～70cm位伸び、中程に6～9枚位の茎を抱く葉を付ける。5～7月頃、茎の頭頂部に7～10個の黄褐色の花を付ける。 | | |
| 分 布 | 全国的には、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では、小豆島町、東かがわ市、さぬき市、高松市、丸亀市、まんのう町、三豊市、観音寺市に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 数ヶ所に点在し、1箇所を除き、各数株～10株位が生育するのみである。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 湿地・ため池の改修工事などによる生育環境の改変、自然遷移による生育環境の変容による自然減少もあるが、園芸用採集が主要因である。 | | |
| 特 記 事 項 | 園芸用採集圧が著しく増大しており、個体数が急激に減少している事が変更理由である。 | | |
| 文 献 | | | 執筆者：秋山 敬典 |

| タシロラン <i>Epipogium roseum</i> (ラン科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|---|---|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内では限られた生育場所にしか見られず、環境変化の影響を受けやすく、絶滅の可能性がある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 緑葉のない菌従属栄養植物。開花時の高さ20～50cm。花は白色で長さ8～10mm。萼片と花弁はほぼ同長同形で長さ約2cm。唇弁は広卵形で全縁、赤紫色の斑点が入る。距は長さ約4mm。地下にイモ状の塊茎があり、5～7月に花茎をのぼす。 | | |
| 分 布 | 全国的には、群馬県以南の本州、四国、九州、琉球に分布する。県内では琴平町、三豊市での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 道路脇や水路脇の常緑樹の腐葉土がふかふかしている場所に生育している。年によっては大群落になっている。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 分布が限られており、生育地の自然遷移による衰退が懸念される。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 37, 61 | 執筆者：林 鈴以 | |

| マツラン <i>Gastrochilus matsuran</i> (ラン科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) |
|---|---|----------|------------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 樹上に着生するという特殊な生育環境であり、産地ならびに個体数とも限定したものである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 常緑の着生植物。葉は密に互生し線状長楕円形、肉厚く多少湾曲する。表面に紫色の斑点があり、裏面が紫色を帯びることがある。花期は5～6月。長さ8～10mmの花序を作り、2～4個の花をつける。花は淡黄緑色で細紫点がある。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しており、県内では文献情報として観音寺市の記録だけがある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | マツやモミなどの老木の樹上に着生する特殊な生育環境のため、発見される機会が少ないこと、群生することがないため産地も個体数もごく少ない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 着生木の伐採、松くい虫被害など病虫害による着生木の枯死により生育環境が消失したり、園芸用に採取される恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 56 | 執筆者：久米 修 | |

※選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| クロヤツシロラン <i>Gastrodia pubilabiata</i> (ラン科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--|---|------------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 生育地が限られており、そのため生育できる環境も限られている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 花茎は高さ約3cm。紫色を帯びた褐色の花を9～10月に1～8個つける。萼片と側花弁が合着し、先で少し分かれ平開する。唇弁の色はより濃く、表面に黄白色の毛が密生し、基部に1対の球体がある。結実後花柄が伸び、長さ40cmに達することもある。よく似たアキザキヤツシロランの萼片は合着して筒状。 | | |
| 分 布 | 県外では、関東地方以西の本州、四国、九州に分布する。県内では、多度津町、綾川町で生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 主に竹林、杉林など腐葉が多く堆積した所に生える葉緑素を持たない腐生ラン。2014年(平成26年)に綾川町の竹林で発見された当初は近縁種のアキザキヤツシロランと考えられていたが、翌年本種であると確認された。産地が局地的で極めて少なく、果期以外は発見しづらいため、更なる調査が必要である。 | | |
| 絶滅危険性の要因 | 森林開発や土地造成による生育地の消失や、竹林等の伐採、自然遷移による環境変化によって消失する恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | 新たに県内の生育が確認された。 | | |
| 文 献 | 42, 70 | 執筆者: 三浦 勝美 | |

| アキザキヤツシロラン <i>Gastrodia verrucosa</i> (ラン科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|--|--|------------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内に局地的に分布し、個体数や確認場所が少ないため、生育確認が難しい状況にある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 常緑樹林や竹林内の腐葉が多く堆積した所に生育する。太短い地下茎から高さ3～10cmの花茎を出す。腐生ランであり、葉は鱗片状に退化している。花は10月に開き2～7個。花筒は鐘状筒形で暗紫褐色。果柄は花後伸びて30cmに達する。 | | |
| 分 布 | 本州(福井県、千葉県以西)・四国・九州・琉球・小笠原、マレーシアに分布。県内は確認地が少なく、旧財田町など県内に点在して分布している。綿密な調査により、他地域での発見もあると思う。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 生育が不安定で、限られた場所に生育しており、個体数も少ない。 | | |
| 絶滅危険性の要因 | 分布地が限られており、森林開発や土地造成及び自然遷移の影響で絶滅の可能性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 37 | 執筆者: 五所野尾優 | |

| アケボノシュスラン <i>Goodyera foliosa</i> var. <i>laevis</i> (ラン科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|---|--|------------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内に局地的に分布しており、個体数も少なく絶滅の可能性が大である。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山地の樹林下で、ややうす暗い腐葉土の堆積した林床に生育する。茎は横にはい、上部は斜上して約10cm位である。葉は楕円形で4～5個互生し、表面に模様はない。花は薄紅紫色で3～7個つける。 | | |
| 分 布 | 北海道・本州・四国・九州・屋久島・種子島、朝鮮(済州島・鬱陵島)に分布。県内では旧寒川町、旧綾歌町、旧琴南町など、点在して生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 産地と個体数が少なく、採取の影響を受けやすいため減少して、ほとんど見られなくなっている。 | | |
| 絶滅危険性の要因 | 森林開発や自然遷移及び採取などのため、絶滅する可能性がきわめて大である。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 37 | 執筆者: 五所野尾優 | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ミズトンボ <i>Habenaria sagittifera</i> (ラン科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|---|------------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内に局地的に分布しており、個体数も極めて少ない。環境変化の影響を受けており絶滅しつつある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 丘陵地の日当たりの良い湿地で、他の湿地生の植物とまじって生育している。茎は高さ40～50cm位で三角柱状をしており線形の葉を数枚つける。花期は7～9月で緑白色の花を総状に10個位つける。 | | |
| 分 布 | 北海道(函館)・本州・四国・九州に分布。県内では既存情報は少なく、善通寺市や旧高瀬町、さぬき市などに点在して生育していたが、ほぼ絶滅状態である。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 過去に分布していたほとんどの地域で絶滅しており、前回確認した旧高瀬町はイノシシに荒らされて絶滅していた。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発及び湿地の開発、園芸採取、自然遷移による大型雑草の侵入があり、絶滅する可能性が極めて大である。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17, 76 | 執筆者: 五所野尾優 | |

| ムカゴソウ <i>Herminium lanceum</i> (ラン科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|------------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧ⅠB類 (EN) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内では局地的に分布しており、環境変化の影響を受けやすく絶滅の可能性が極めて大である。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山地のやや湿った日当たりの良い草地に生育する。地下には楕円形の塊根を持ち、茎には線形の葉を数枚つけて20～40cmの高さである。花は淡緑色で穂状に多数つける。唇弁は長く垂れて距がない。 | | |
| 分 布 | 北海道(渡島)・本州・四国・九州・琉球、朝鮮、台湾、中国、満州に分布。県内での分布がごく限られており、小豆島や旧塩江町で確認されていたが、現状は不明である。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 人工造林や自然遷移による環境変化により減少しており、今回の調査では確認できなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や人工造林の影響、自然遷移で生育環境が失われつつあり、絶滅の可能性が極めて大きい。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17 | 執筆者: 五所野尾優 | |

| ムヨウラン <i>Lecanorchis japonica</i> var. <i>japonica</i> (ラン科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 菌従属栄養性の無葉菌であることから、生育には安定した森林環境が必要で、限定された生育環境に局地的に生育する。 | | |
| 種 の 特 徴 | 地下茎は硬くて伸び、茎は高さ40cm程度で、数個の葉鞘があるが緑葉はない。花期は6～7月、花は白～淡褐色。花被片は長さ約2cm、倒披針形ではほぼ同形。唇弁基部は蕊柱を包み、中裂片は円く内面に密に毛がある。蕊柱先端に切れ込みがない。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しており、県内では東かがわ市、高松市、琴平町などで確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 安定した森林環境の林床に生育しており、無葉性で花が目立たないことから確認事例が少なく、個体数も数個体の事例が多い。今回の調査では、新産地が1例報告された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林伐採や人工造林などの急激な環境変化で衰退し、自然遷移により従属している菌類が失われると絶滅する。 | | |
| 特 記 事 項 | 新たに県内に生育していたことが判明した。 | | |
| 文 献 | 37 | 執筆者: 久米 修 | |

*選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| セイタカズムシソウ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|-----------|--|---|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選定理由 | | ⑤* 2007年、高松市において新たに生育が確認された。県内の産地は局所的であるところから絶滅危惧Ⅰ類と評価された。 | |
| 種の特徴 | | 深山の林内に生える多年草。偽球は卵球形。葉は2枚、卵形～卵状長楕円形、鈍頭、長さ6～12cm、巾2.5～6cm、基部は鞘状の柄となる。花茎は高さ10～40cm、苞は卵状三角形、長さ1～1.5mm。6～8月、淡緑色又は帯紫色の花を付ける。萼片は線状披針形、鈍頭。花弁は糸状で萼片と同長。唇弁は倒卵形。 | |
| 分布 | | 北海道・本州・四国・九州、朝鮮、満州、アムールに分布する。県内では高松市の山間部に分布する。 | |
| 県内での生育状況 | | 2007年6月生育が確認された。2011年6月同所を調査したが、生育の確認は出来ていない。 | |
| 絶滅危険性の要因 | | 本種は県内において生育地が限定されている。生育地の森林開発、人工造林などによる環境の変化。自然遷移による生育地の変化。ラン科植物の乱獲などで生育が脅かされ、個体数の減少が著しい。 | |
| 特記事項 | | 2007年6月新たに生育が確認され、絶滅危惧Ⅰ類に評価した。 | |
| 文献 | | 37, 69 | 執筆者：佐藤 明 |

| ジガバチソウ | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|----------|--|---|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選定理由 | | ⑧* 森林開発や自然遷移の影響で近年減少が著しい。 | |
| 種の特徴 | | 丘陵または山地のやや明るい林内や崖地に生育する。群生せず点在することが多い。球形の偽球茎を持ち、2枚の広卵形の葉をつける。葉脈は横に走る。花茎は10～20cmで直立し、淡緑色又は紫褐色の花を約10個位つける。唇弁の先は長くとがる。 | |
| 分布 | | 北海道・本州・四国・九州、朝鮮に分布。県内の丘陵や山地に広く点在して分布していたが、近年減少が著しい。 | |
| 県内での生育状況 | | 自然遷移や開発の影響、採取により以前にくらべて近年激減している。 | |
| 絶滅危険性の要因 | | 広く分布しているとはいえ、森林開発や自然遷移による環境変化、採取の影響によって絶滅の可能性がある。 | |
| 特記事項 | | | |
| 文献 | | 17 | 執筆者：五所野尾優 |

| クモキリソウ | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|----------|--|---|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選定理由 | | ⑧* 森林開発や自然遷移の影響で近年減少が著しい。 | |
| 種の特徴 | | 丘陵または山地のやや明るい林内に生育する。茎は卵球状の偽球茎で葉を2枚つける。花茎は10～20cmで稜がある。花は淡緑色が紫褐色で5～10個つく。唇弁は強く反曲する。 | |
| 分布 | | 北海道・本州・四国・九州、朝鮮に分布。県内の丘陵や山地に広く点在して分布していたが、近年減少が著しい。 | |
| 県内での生育状況 | | 自然遷移や開発の影響により以前に比べて激減している。 | |
| 絶滅危険性の要因 | | 広く分布しているとはいえ、森林開発や自然遷移による環境変化、採取の影響によって絶滅の可能性がある。 | |
| 特記事項 | | | |
| 文献 | | 17 | 執筆者：五所野尾優 |

※選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| フウラン <i>Neofinetia falcata</i> (ラン科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|--|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑧* 園芸採取、生育地の森林開発などによって、近年減少しつつあり、絶滅の恐れがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 樹上に着生する常緑で小型の多年草。茎は短く、かさなった革質の葉鞘におおわれる。花は下部の葉腋からのぼした花茎に数個つく。花の色は白く、長い距をもち、芳香がある。 | | |
| 分 布 | 関東以西の本州、四国、九州に分布する。県内では、これまで数箇所ではしか分布が確認されていない。古くから園芸植物として栽培される。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 樹林内の樹上に着生して生育する。現地調査では、観音寺市、多度津町、高松市で生育が確認された。過去には、さぬき市などでの生育記録がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 園芸採取、生育地の森林開発などによって、さらに減少し、絶滅する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17 | 執筆者：末広喜代一 | |

| ヒメフタバラン <i>Neottia japonica</i> (ラン科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 県内で新たに確認されたが、生育地が限定されている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 茎は軟弱な四角形で高さ5～30cm。長さ幅ともに1～2cmの三角状卵型の葉を茎の中ほどに対生状につける。3～5月に暗紫色を帯びた花を2～5個つける。唇弁は6～8mmで楔状に2深裂し裂片は3～5mm、中央にT字状の隆起がある。萼片、側花弁ともに約3mm。花色や葉の模様の変異が多い。 | | |
| 分 布 | 県外では本州(宮城県、山形県以南)、四国、九州、琉球に分布する。県内では、まんのう町の1箇所だけで生育が確認された。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 針葉樹林下の陽が差し込まない山道沿いの1か所に生育していた。土砂や木片、落下した針葉樹の葉が少量堆積した湿気のある柔らかい地面に生えていた。小さな株は埋没しているものもある。30株以上点在していたが、花をつけている株は少なく5分の1くらいであった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 登山道脇に生育しており、踏みつけられる可能性が高い。また生育地点の斜面側は小規模な崩落が見られ、進行すれば埋没流失の可能性もある。花期には園芸目的の採取も考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | 新たに県内の生育が確認された。 | | |
| 文 献 | | 執筆者：中村香代子 | |

| コケイラン <i>Oreorchis patens</i> (ラン科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|--|-----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 森林開発や自然遷移の影響で近年減少が著しい。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山地谷筋の水辺近くなど、空中湿度のあるやや湿った林内に生育する。卵形の偽球茎に披針形の葉を1～2枚つける。花茎は高さが30～50cmで黄褐色の花を多数つける。唇弁は白色で斑点があり、基部に2本の隆起腺がある。 | | |
| 分 布 | 北海道・本州・四国・九州、朝鮮、南千島、樺太、カムチャッカ、ウスリー、中国に分布。県内の山地樹林下に広く点在して分布していたが、近年減少が目立っている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 自然遷移などの環境変化及び採取によって減少している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や自然遷移による環境変化と採取によって絶滅の可能性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17 | 執筆者：五所野尾優 | |

※選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| サギソウ <i>Pecteilis radiata</i> (ラン科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|--|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 本県では生育地である湿地そのものが少ない上に、自然遷移によって本種が生育できる湿地の面積が減少している。さらに園芸採取によって、近年減少し、絶滅の恐れがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 日当たりの良い湿地に生育する小型の多年草。前年の走出枝の先端にできた球茎から地上茎を出す。花の色は白色で、シラサギを思わせる形をしている。距は長く、唇弁の側縁が深く細裂する。 | | |
| 分 布 | 本州、四国、九州に分布する。県内では数カ所で分布する。しばしば、園芸目的に栽培される。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 日当たりの良い湿地に生育する。遷移の進行によって、まわりの植物の草丈が高くなると生育できない。現地調査では、三豊市、丸亀市、坂出市、まんのう町で確認された。いずれの生育地でも個体数は減少している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 園芸採取、ため池や湿地の改変、生育地の自然遷移などによって、さらに減少し絶滅の恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17 | 執筆者：末広喜代一 | |

| イヌマムカゴ <i>Platanthera iinumae</i> (ラン科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|---|--|-----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧ⅠB類 (EN) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内では局所的に分布しており、個体数も少ない。生育地の環境変化により絶滅の可能性がある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山地の林内の木陰で、腐葉土の堆積している湿った場所に生育する。茎は高さ20cm位で、中程に長楕円形の葉を2～3個つける。上部には数個の鱗片葉をつけ、黄緑色の小花を多数咲かせる。唇弁は白色で舌状である。 | | |
| 分 布 | 北海道(渡島)・本州・四国・九州に分布。県内の既存情報は少なく、県南部の阿讃山脈沿いに旧塩江町や旧満濃町、旧琴南町などでの報告はあるが、今回は確認できなかった。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 発見される機会が少なく、分布地及び個体数ともに少ない。さらなる分布調査が必要である。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発による生育地の消滅、針葉樹の人工造林や自然遷移の影響により衰退して絶滅する可能性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17 | 執筆者：五所野尾優 | |

| ツレサギソウ <i>Platanthera japonica</i> (ラン科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅 (EX) |
|--|--|----------|---------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤⑨* 県内では極く限られた地域で知られているだけである。新たに古い標本が発見されたが、他に生育記録が無く、絶滅したものと推定される。 | | |
| 種 の 特 徴 | 明るい林床や林縁に生育する多年草。根は太いひも状で数本長く横に伸び、内1本に新芽を作る。茎は高さ40～60cm、葉は2～5枚、長楕円形で長さ10～20cm。花期は5～6月、花は白色。中萼片は楕円形、側萼片は開出して鈍頭、唇片は長さ13～15mm、距は下垂して長さ3～4cmになる。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しているが、県内ではさぬき市の古い標本が残されているだけである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 1967年に旧長尾町前山で採集された標本が残っているだけで、以後確認事例がない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 産地と個体数が限られていることから、絶滅要因は明確ではない。自然遷移による生育環境の変化や園芸採集が考えられる。1967年に採集されて以降50年以上確認されていないことから、絶滅と評価された。 | | |
| 特 記 事 項 | 新たに県内に生育していたことが判明した。 | | |
| 文 献 | 76 | 執筆者：久米 修 | |

※選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ヤマサギソウ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|-----------------|---|--|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| | | <i>Platanthera mandarinorum</i> subsp. <i>mandarinorum</i> var. <i>oreades</i> (ラン科) | |
| 選 定 理 由 | ⑤* 林縁部などの山際に生育しており、県内では極く限られた地域で少数個体が知られているだけである。 | | |
| 種 の 特 徴 | やや湿った明るい山際に生える多年草。茎は高さ20～40cm、葉は線状長楕円形～狭長楕円形、斜上して僅かに茎を抱く。花期は5～7月、花は淡緑色。中萼片は広卵形、側萼片は狭長楕円形で反曲し、距は子房とほぼ同長。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内ではさぬき市、小豆島、三豊市等の里山周辺部で確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | かつては小豆島の古い記録と、1966年に旧高瀬町二宮で採集された標本が知られるだけであったが、2006年に小豆島町で、2008年にさぬき市大川町で確認された。産地・個体数とも極少ない。今回の調査では、確認されなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 産地と個体数が少なく、自然遷移による生育環境の変化、園芸採集で衰退する。開発などの土地造成により生育地が消失する。 | | |
| 特 記 事 項 | 新たに県内に生育していたことが判明した。 | | |
| 文 献 | 17 | 執筆者：久米 修 | |

| オオヤマサギソウ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|-----------------|---|--|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| | | <i>Platanthera sachalinensis</i> (ラン科) | |
| 選 定 理 由 | ⑤* 讃岐山脈山頂部の極く限られた地域で少数個体が知られているだけである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 林内の陰地に生える多年草。茎は高さ40～60cmで僅かな稜がある。葉は1～3枚、長楕円形で長さ9～23cm。花期は7～8月、花は緑白色。中萼片は卵形鈍頭、側萼片は半切卵形鈍頭で、基部片側が張り出し開出する。距は細く湾曲して下垂し、長さ15～20mm。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では讃岐山脈山頂部の数か所に極少数個体が生育している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 高松市とまんのう町で確認されているが、個体数はごくわずかである。まんのう町では、花が大形の変種オオバナオオヤマサギソウの報告がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 産地と個体数が少なく、自然遷移による生育環境の変化、園芸採集で衰退する。生育地が高所に限られており、地球温暖化の影響が懸念される。 | | |
| 特 記 事 項 | 新たに県内の生育が確認された。 | | |
| 文 献 | 37 | 執筆者：久米 修 | |

| コバントンボソウ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|-----------------|---|--|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| | | <i>Platanthera tripuloides</i> subsp. <i>nipponica</i> (ラン科) | |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内に局所的に分布しており、湿地の改変などにより生育環境が壊されており、しかも個体数が少ないため絶滅の危険性がきわめて高い。 | | |
| 種 の 特 徴 | 日当たりの良い山のすその湿地やため池周辺などにできた湿った場所に生育する。肥厚している根から高さ20～40cmの茎を直立する。広線形の葉を1個つけ、基部は茎を抱く。花は淡黄緑色で7～10個つける。唇弁は舌状で距は長く12～18cmである。 | | |
| 分 布 | 北海道・本州・四国・九州に分布。県内の既存情報は坂出市、旧綾歌町、旧満濃町、旧仲南町、観音寺市、さぬき市などに残されており、ごく小さい湿地に点在する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 道路建設やため池の改変によって生育場所が失われるなどで個体数の減少が著しく、絶滅の可能性が大である。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 分布が限られ生育地の面積が小さいため、森林開発や道路建設、ため池の改修や湿地の改変、自然遷移の影響を受けやすく、絶滅の可能性が大である。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17 | 執筆者：五所野尾優 | |

*選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| トキソウ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|-------------------------------|--|-----------|----------------|
| <i>Pogonia japonica</i> (ラン科) | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑦⑧* 限られた環境にしか生育出来ず、生育地・個体数共に年々減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 日当たりの良い湿地に生える多年草。根茎は横に這う。茎は高さ10～20cm位に直立し、途中で葉柄の無い葉を1枚付ける。5～6月頃、茎の頂部に1個の淡桃色の花をやや斜め上向きに付ける。 | | |
| 分 布 | 全国的には、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では、さぬき市、坂出市、丸亀市、まんのう町に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 生育環境の減少に伴い生育地・個体数共に減少している。各生育地では、10株以内がほとんどで危機的状況である。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発、ため池・湿地の改変、道路建設による生育環境の減少、自然遷移による生育環境の変容、業者・趣味者による採集圧が、主要因である。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17 | 執筆者：秋山 敬典 | |

| ヤマトキソウ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|----------------------------|--|-----------|----------------|
| <i>Pogonia minor</i> (ラン科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内に局地的に分布しており、個体数も少ない。生育環境が変化しているため、絶滅の可能性がある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山地や丘陵の日当たりの良い湿地や湿った池の土手などの草地に生える。茎は10～20cmで直立し、中央部に葉を1個つける。葉質はやや厚く長楕円形。茎頂に1個の花をつける。花は淡紅色で上向きに咲きほとんど開かない。 | | |
| 分 布 | 北海道・本州・四国・九州、朝鮮、台湾に分布。県内では小豆島や県南部の阿讃山脈沿いの山麓の湿地に点在して分布していたが、ほぼ絶滅に近い状態である。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | ため池や湿地周辺の改変によって、生育場所が少なくなり絶滅の可能性がある。さらに採取の影響も見られる。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や道路建設、ため池及び湿地の改変などにより生育地が失われており、さらに園芸目的の採取や自然遷移による大型草本の侵入もあり、絶滅の可能性が大である。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17 | 執筆者：五所野尾優 | |

| ウチョウラン | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|--|--|-----------|----------------|
| <i>Ponerorchis graminifolia</i> var. <i>graminifolia</i> (ラン科) | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑥* 現地調査では生育が確認されず、過去に島嶼部など数ヶ所では確認されていない。園芸採取のほか、生育地の自然遷移、森林開発によって、すでに絶滅している可能性もある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山地の湿った岩壁などに生育する小型の多年草。茎は球状に肥大した塊根より出て、斜上する。葉は広線形で先はとがり、茎に2、3枚つける。夏に紅紫色の花を数個、一方に傾いてつける。 | | |
| 分 布 | 関東以西の本州、四国、九州に分布する。県内では、ごく限られた地域での過去の分布記録がある。園芸植物として栽培されることもある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の湿った岩壁の割れ目などに生育するといわれるが、県内の生育地も、そのような所であるのかどうかは不明。現地調査では生育が確認されなかったが、過去に島嶼部など数ヶ所での生育記録がある。すでに絶滅している可能性がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 園芸採取のほか、生育地の自然遷移、森林開発が危険性の要因として考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17, 22 | 執筆者：末広喜代一 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| クモラン <i>Taeniophyllum glandulosum</i> (ラン科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 限られた生育場所にしか見られず、生育場所、個体数ともに極めて少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 短い茎から放射状にでる扁平な根が幾重にも重なりあって樹皮に張り付く。長さ4～7mmの花序を1～5本出し、花を1～3個つける。花色は淡緑白色で筒状、長さ2mm、萼片と側花弁は途中まで合着する。花は1日でおれる。大株になると根は塊状になる。 | | |
| 分 布 | 全国的には、福島県以南の本州、四国、九州、琉球に分布する。県内では、まんのう町に生育していることが、新たに確認された。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山間部の空中湿度の高い山腹側に面した樹幹に着生して生育している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発、自然遷移による乾燥、栽培は困難であるにもかかわらず園芸採集の可能性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | 新たに県内の生育が確認された。 | | |
| 文 献 | 37 | 執筆者：林 鈴以 | |

| カヤラン <i>Thrixspermum japonicum</i> (ラン科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県南部の限られた地域にのみ点在しており、個体数も少なく森林開発や採取などによって減少が著しい。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山地の谷川沿いなど、空中湿度のある場所にある常緑樹の樹幹や岩上に着生している。茎は3～10cmで下垂し、下部からは気根が出ている。葉は線状長楕円形で2列に並び10～20枚くらいつける。花茎は細く、淡黄色の花を数個つける。 | | |
| 分 布 | 本州(岩手県以南)・四国・九州に分布。県内では丘陵部から県南部の阿讃山脈周辺の山地に点在して分布している。大木の茂る社叢でも記録されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 生育地及び個体数が少なく、絶滅の可能性が大である。今回まんのう町内数カ所で分布を確認した。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林伐採などの森林開発や園芸目的の採取による影響がきわめて大きく、個体数が著しく減少している。また着生木が枯死したり台風で倒伏したりする事例も見られる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17 | 執筆者：五所野尾優 | |

| ヒツボクロ <i>Tipularia japonica</i> var. <i>japonica</i> (ラン科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|--|---|-----------|-------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内に局地的に分布しているが、生育場所及び個体数ともに少なく、確認されることがまれである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山地の深山で、アカマツ林や落葉広葉樹林などのやや明るい林内で、腐葉土の堆積している場所に生育する。地下に2～3個連なった偽球茎があり、長い葉柄を持った卵状楕円形の葉を1個つける。花茎は20～30cmで直立し、黄緑色の花を5～10個まばらにつける。 | | |
| 分 布 | 本州・四国・九州、朝鮮に分布。県内では既存情報が少なく、三木町、旧塩江町、まんのう町など、阿讃山脈沿いの山地高所で、数は少ないが確認することが出来た。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 個体数が少ないため、個体の減少が即絶滅につながる恐れがある。発見される機会が少なく、綿密な調査が必要である。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や道路建設による自生地の消滅、アカマツの枯死後の自然遷移の影響で衰退する恐れがある。花は貧弱であるが、葉裏が濃紫色で美しく、園芸用に採取される危険性が高い。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 37 | 執筆者：五所野尾優 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| キバナノショウキラン <i>Yuania amagiensis</i> (ラン科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--|---|------------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧 I B類 (EN) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内のごく限られた地域でのみ確認されており、個体数も少なく絶滅の可能性がある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山地落葉樹林内の腐葉土の堆積した場所に生育するが、ササの中に生えることもある。地下茎は多数分枝して塊状である。茎はショウキランより高く、20～50cmで黄褐色。腐生ランで葉はない。花は約2cmで黄褐色である。唇弁に黄色の毛が密生する。 | | |
| 分 布 | 本州(関東地方西南部)・四国・九州(南部)に分布。県内の既存情報は少なく、県南部の阿讃山脈上部で、旧塩江町や旧琴南町などで局所的に数箇所確認されているが、今回確認できなかった。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 地域が限られており個体数も多くない。腐生ランであることから環境変化の影響を受けやすく、絶滅の可能性もある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や林道建設による生育地の消滅、自然遷移の影響により衰退して絶滅する可能性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 37 | 執筆者: 五所野尾優 | |

| コキンバイザサ(キンバイザサを含む) <i>Hypoxis aurea</i> (キンバイザサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) |
|--|---|-----------|------------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤⑧* 県内のごく限られた地域で、日当たりのよい湿度の高い開けた草地に局地的に生育している。近年著しく減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | キンバイザサに類似しているがより小型で、葉の幅が狭く、果実は蒴となり、種子の表面に密に突起があることで区別できる。葉は根生し、線形で軟毛を散生する。根元に古い葉の繊維が残っている。花期は4～5月、5～10cmの花茎を出し、1～2花をつける。花被片は黄色。 | | |
| 分 布 | 和歌山県以西に分布しており、県内では既存情報が少なく、高松市で確認されているだけである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査では、既知産地で確認されなかったことから、絶滅危惧カテゴリーが、1ランク上に評価された。かつて、高松市栗林公園でキンバイザサが確認された記録がある事から、本種に含めて掲載した。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発による生育地の消失、園芸採取による乱獲、生育地周辺の植生遷移による被圧で衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | キンバイザサ(<i>Curculigo orchioides</i>)を含む。 | | |
| 文 献 | 37 | 執筆者: 久米 修 | |

| ノハナショウブ <i>Iris ensata</i> var. <i>spontanea</i> (アヤメ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--|--|------------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 湿地という限定された環境にのみ生育が可能な種で、一部の特定された生育場所にしか見られない。土地造成や湿地の自然遷移により生育地が失われ、園芸目的の採集もあり、減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉は剣状で長さ30～60cm、幅5～12mm、太い中脈が目立つ。6～7月、高さ40～80cmの花茎が立ち、頂部に数個の苞があり、その中から数個の花を次々に開く。花は赤紫色で径約10cm。外花被片は長さ約7cmで、中央部に淡黄色の細い斑紋がある。観賞用に栽培されるノハナショウブの原種。 | | |
| 分 布 | 県外では、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では、まんのう町、丸亀市で生育が確認されているほか、直島町、さぬき市、土庄町での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山野の草原や湿原に群生する多年草。産地と個体数ともに少なかったが、1980(昭和55)年頃から減少し始めた。既存情報は多くはないが、島嶼部を含め丘陵部から山地部にかけて県内に広く点在して分布している。今回の調査では、数箇所の産地で確認することができたが、減少傾向にある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や道路建設、湿地の埋立など、土地造成による生育地の消失。また、自然遷移による生育環境の悪化、さらに園芸目的の採取が減少に拍車をかけている。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17 | 執筆者: 三浦 勝美 | |

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ユウスゲ <i>Hemerocallis citrina</i> var. <i>vespertina</i> (ススキノキ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---|---|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 園芸採取, 生育地の自然遷移, 管理放棄などによって, 近年減少しつつある。 | | |
| 種 の 特 徴 | キスゲとも呼ばれる。山地のやや乾いた草原やため池の土手などに生育する多年草。葉は線形。花の形はユリに似て, レモン色で夕方に咲き, 翌日の午前中に閉じる。 | | |
| 分 布 | 本州・四国・九州に分布する。県内では海岸部に近い山地やため池の土手, 島嶼部などに分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | やや乾いた山地の草原やため池の土手などに生育する。現地調査では, 観音寺市, 三豊市, 普通寺市, 丸亀市, 坂出市, 高松市, まんのう町, 綾川町での生育が確認された。過去には島嶼部での生育記録もある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 園芸採取, 生育地の自然遷移, 管理放棄などによって, さらに減少する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆: 末広喜代一 |

| ステゴビル <i>Allium inutile</i> (ヒガンバナ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|---|---|-----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 生育場所が限られており, 過去の記録でも個体数は少ないため, 森林開発, 土地造成, 自然遷移によって絶滅する危険性がある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 草地や林縁にまれに生える多年草。地下に球形の鱗茎を作る。晩秋に長さ30cm内外の扁平な根出葉をのぼす。冬を越し, 夏に枯れ, その後に花茎が出る。秋に数個の花が散形状につく。花は白色か淡紫色。ネギ特有の臭気はない。 | | |
| 分 布 | 全国的には, 宮城県から広島県の本州, および香川県にまれに分布する。香川県では島嶼部でまれに産する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 草地や林縁にまれに生育する。過去に高松市の島嶼部での生育記録がある。今回は調査に行くことができなかったため, 生育を確認できていない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地の森林開発, 土地造成, 自然遷移により, 生育環境が悪化することによって個体数がさらに減少し, 絶滅する恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17 | 執筆: 末広喜代一 | |

| カンカケイニラ <i>Allium togashii</i> (ヒガンバナ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) |
|--|--|-----------|------------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧 I B 類 (EN) |
| 選 定 理 由 | ①③④ 香川県を模式産地とする県固有種で, 限られた地域で局地的に生育が確認されているが, 特産種として乱獲され, 生育地の野生動物による攪乱などにより, 絶滅の恐れがある。 ⑤* | | |
| 種 の 特 徴 | 地下の鱗茎は披針状長楕円形で長さ2~2.5cm, 古い葉鞘の基部がシュロ状に残って包む。葉は線形, 扁平で厚肉質, 長さ10~20cm, 幅1~2mm。花は8~9月, 花茎は高さ14~18cm, 花被片は白~淡紅色。 | | |
| 分 布 | 香川県の固有種で, 全国的にも香川県の小豆島にのみ分布する。小豆島の中央山地の嶮岨山一帯で寒霞渓を中心に確認されており, 島外では発見されていない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 日当たりの良い乾燥した集塊岩の急崖地で, 岩の窪地に溜まったわずかな土壌に生育している。かつて花時には, 一帯の急崖地が白く染まると言われるほどであったと言うが, 現在は激減し, 数カ所で生育しているだけである。最近では開花個体が見られなくなった。周辺樹木による庇陰によって絶滅した生育地もある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 減少の第一原因は特産種として乱獲された事にある。わずかに残された産地においても, 周辺樹木の生長に伴う被圧により衰退し, 絶滅する恐れがある。最近では, イノシシによる生育地の攪乱の影響も大きい。 | | |
| 特 記 事 項 | 「香川県希少野生生物の保護に関する条例」によって指定希少野生生物に指定されている。 | | |
| 文 献 | 8, 17 | 執筆: 末広喜代一 | |

※選 定 理 由: ①模式産地, ②分布境界, ③全国極限, ④県固有種, ⑤県内極限, ⑥交雑移行, ⑦限定生育・生息環境, ⑧近年減少, ⑨絶滅

| キジカクシ <i>Asparagus schoberioides</i> (キジカクシ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 県内の極限られた地域に極限して、少数個体が生育している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 草地に生える多年草。クサスギカズラに類似しているが、茎は直立して50～100cm、根は紡錘状にふくれない。葉状枝は3～7個束生する。花柄は長さ1～2mmで、花のすぐ下に関節がある。果実は赤く熟す。 | | |
| 分 布 | 東海地方以西に分布しており、県内では善通寺市から三豊市にまたがる山地だけで確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 限られた山地の草地や林縁部に生育しており、個体数は極めて少ない。生育地の変化はほとんどないが、今回の調査では確認されなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や道路建設による生育地の消失、高茎草本や木本類の被圧により衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17 | 執筆者：久米 修 | |

| ケイビラン <i>Comospermum yedoense</i> (キジカクシ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---|---|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 山地の日当たりの良い乾燥した崖地に生育しているが、開発や園芸採取により、近年減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉はそう生して無毛、背腹方向に重なって平面に並び一方に強く曲がった鎌状線形。花期は8月。花は暗紫色、高さ10～40cmの円錐花序に総状に密につく。 | | |
| 分 布 | 紀伊半島以西に分布しており、県内では瀬戸内海側の讃岐岩質安山岩の分布する地域に点在している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 小豆島においては珍しいものではないが、それ以外の地域では近年著しく減少しており、消滅した産地もある。今回の調査では、既知産地に特に変化はなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 岩石の採掘などの森林開発による生育地の消失、園芸用の採取、周辺樹木の生長による被圧で衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | 執筆者：久米 修 | |

| アワギボウシ <i>Hosta kikutii</i> var. <i>densinervia</i> (キジカクシ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---|--|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ②⑤* 讃岐山脈沿いのごく限られた場所に生育しており、分布境界の北限に当たると推定される。 | | |
| 種 の 特 徴 | 従来ウナズキギボウシとされてきたものが、分類学上の見直しで細分され、葉脈の形態から県内のはアワギボウシに属すると思われる。葉は狭卵形で基部は円心形、裏面の脈は平滑である。花茎は基部で曲がり花序が垂れさがる。苞はつぼみの時花序をかかえ嚙状になる。花は淡紫色又は白色。 | | |
| 分 布 | 四国東部に広範囲に分布しているが、県内では高松市塩江町やまんのう町など、県南部県境付近のごく一部で点状に確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 谷沿いの湿った岩場に生えているが、時に老木の幹に着生することもある。県内では生育に適した立地環境が少なく、産地も個体数も稀であった。生育環境の変化で衰退傾向にあり、今回の調査ではまんのう町で報告された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発による生育地の消失、針葉樹の人工植栽、自然遷移による被圧により衰退し、園芸目的の採取で個体数が減少する。 | | |
| 特 記 事 項 | 分類学上の見直しでウナズキギボウシから変更された。 | | |
| 文 献 | 5, 37 | 執筆者：久米 修 | |

※選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ミズギボウシ <i>Hosta longissima</i> (キジカクシ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--|---|-----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 2004年版では準絶滅危惧種としていたが、県内に局地的に分布しており、しかも個体数が少ないため絶滅の可能性があり、評価を絶滅危惧II類に変更した。 | | |
| 種 の 特 徴 | 常に少量の水が流れているような、山間又は山すその湿地に生育している。葉の表面は光沢があり、直立又は斜めに立ち、線状倒披針形で、葉身は柄に沿って流れる。花はまばらにつき、細い筒状で、花被の内側の脈は濃く着色する。 | | |
| 分 布 | 本州(愛知県以西)・四国・九州に分布する。県内では中北部の山中にある湿地及び県南部の山麓で確認したが、産地はきわめて少ない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 周囲から草や木の侵入があり、生育地が狭まっていることや、採取の影響で減少しており、わずかに残っている。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 分布が限定されており、森林開発や農地改修、湿地の埋め立て、自然遷移による絶滅の可能性が大である。又個体数が少ないため採取による絶滅もある。 | | |
| 特 記 事 項 | 2004年版の準絶滅危惧種から、絶滅危惧II類に評価を変えた。 | | |
| 文 献 | 17 | 執筆者：五所野尾優 | |

| ミズアオイ <i>Monochoria korsakowii</i> (ミズアオイ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|--|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 河川や水田など限られた環境に生育しており、産地が少なく局地的に生育している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉は根生し、高さ30～70(～100)cmになる一年草。円心形の抽水葉と、葉の高さを超えて花茎が立つことが特徴。水面の幼葉は線形～長楕円形で、コナギと区別できない。花期は7～10月。花序は総状で、花は直径2.5～3cmの1日花。花被片は6個で鮮やかな青紫色。園芸用にも植えられる。 | | |
| 分 布 | 県外では、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では、高松市、さぬき市での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 水田や河川、用水路など浅い停水性の水域に生育し、溜池の浅水域などでも生育する。1986年(昭和61年)10月までさぬき市で群生地があったが、河川改修と台風による流失で絶滅したのが確認されている。今回の調査では1箇所での生育が確認されたが植栽によるもので、自生は絶滅した可能性がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 河川改修や水路改修による生育地の消失、除草剤による枯死、自然遷移による生育環境の変化で消失する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17, 71 | 執筆者：三浦 勝美 | |

| ハナミョウガ <i>Alpinia japonica</i> (ショウガ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|---|---|-----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 暖地の山林という限られた生育場所にしか見られず、生育地である森林の開発や、自然遷移の進行、園芸採取によって絶滅の恐れがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 暖地の山中の林下に生育する多年草。茎葉がミョウガに似て、5～6月に穂状の赤いすじのある白花をつける。果実は赤く熟す。 | | |
| 分 布 | 全国的には、関東以西の本州から、九州・奄美に分布する。香川県では、ごく限られた地域で生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の現地調査による報告はなかったが、過去の調査では、高松市の他、さぬき市でも生育が確認されている。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 観賞用に園芸採取されたり、生育地の自然遷移、森林開発によって減少し、絶滅する恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17, 79 | 執筆者：末広喜代一 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④全国固有種、⑤県固有種、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ミクリ <i>Sparganium erectum</i> (ガマ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|---|---|---|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑦* | ため池や流水のある河川、湧水地などの限られた環境に生育している。ある程度まとまった個体数になることもあるが、産地は限定したものである。 | |
| 種 の 特 徴 | 高さ2m近くになる大形の抽水植物。葉は線形で質柔らかく、断面は三角形。花期は6～9月。茎の上部が花序となり、枝分かたれて、枝の下側に雌性頭花、上側に雄性頭花をつけるが、上部の枝は雄性頭花のみとなる。果時の頭花幅は2～3cm、果実は紡錘形。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では島嶼部を含め広く分布しているが、産地は点在している。古い文献では、他のミクリ類と混同している可能性がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 平野部から丘陵部のため池や平野部の流れの緩い河川で、泥質土壌の水深の浅い場所に生育している。従来から生育地が限定され、個体数は少なかった。今回の調査では、既知産地で確認されなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 河川や湧水地、ため池改修による人工護岸化や浚渫工事、埋立行為により浅水部の生育立地が消失する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者：久米 修 |

| ヤマトミクリ <i>Sparganium fallax</i> (ガマ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|---|---|---|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑦* | 山ぎわのため池や湧水地などの限られた環境に生育しており、産地は限定したものである。 | |
| 種 の 特 徴 | 高さ120cmになる抽水植物。葉は線形で質柔らかく、断面は三角形。花期は5～9月、花序は分枝しない。下側に雌性頭花がつき、柄の全部又は一部が主軸と合着する腋上性となるのが特徴。上側には雄性頭花がつく。果時の頭花幅は15～20mm。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しており、県内には点在して分布している。まんのう町周辺での確認事例が多い。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山ぎわの小規模な水質の良いため池で、泥質土壌の水深の浅い場所に生育している。ある程度まとまった個体数になることもあるが、概して個体数が少ない。今回の調査では、新規産地もあるが絶滅した産地が報告された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池改修により生育地が消失し、水質汚濁で衰退する恐れがある。ため池の管理放棄により、生育地の水没や乾燥化による草地化、周辺木竹の生長に伴う被圧で衰退する恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者：久米 修 |

| ナガエミクリ <i>Sparganium japonicum</i> (ガマ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--|--|---|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑧* | 本種は県内で相当数の生育地が確認されているが、前回確認の生育地で絶滅した場所もあり、近年生育数の減少も著しい。 | |
| 種 の 特 徴 | 多年生の抽水植物。葉は線形、幅(5～)8～14mm、抽水葉の背稜が顕著で断面は三角状、沈水葉は薄く背稜が目立たない。花期は6～9月、花序は分枝しない。雌性頭花は3～7個、時に下方頭花に花柄を持ち、主軸と合着しない(腋生)。果時は径1.5～2cm。上部の雄性頭花は4～9個。 | | |
| 分 布 | 本州・四国・九州、朝鮮、ウスリーに分布する。平野部から山際まで県内全域に点在する。主としてため池で見られるが、流水性の用水路でも確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 県内全域のため池の水辺や、ため池回りの湿地に多く生育し、時に用水路などの流水域に生育する。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池や用水路の改修による生育地の消失。農業事情の変化に伴う、ため池や用水路の管理が放棄され、樹木など背の高い植物が繁茂、水質の汚濁、富栄養化など、生育地の環境が変化し生育数の減少が見られる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 19, 29, 37, 68 | | 執筆者：佐藤 明 |

※選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ヒメミクリ <i>Sparganium subglobosum</i> (ガマ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|---|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内において生育地が限られ、生育環境の変化に伴い生育数が減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 多年生の抽水～湿性植物。葉の幅2～6(～10)mm。鈍頭、先端が薄紅色を帯びることがある。花序は分枝しないか、下部苞腋から1～2分枝する。果実は長さ4～5mm、幅2～3(4)mmの倒卵形。他のミクリ類の果実が紡錘形のため、花序の分枝パターンと、果実の形が同定の決め手となる。 | | |
| 分 布 | 北海道・本州・四国・九州・琉球、朝鮮、中国北部、ウズリーに分布する。東讃西部から西讃の山間部ため池や、ため池周りの湿地に生育する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | ため池や湿地などに、点在して生育しているが、既存の生育地も少なく生育数は減少している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 改修や開発、ため池や湿地等の減少、管理放棄による生育環境の変化により、生育地が減少し、生育数の減少が著しい。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 19, 29, 37 | 執筆: 佐藤 明 | |

| コガマ <i>Typha orientalis</i> (ガマ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---|---|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 河川やため池の改変などによって、近年減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | ため池などに生育する多年生の抽水植物。葉はガマよりは細い。花序は頂生して、円柱状の花穂となり、上部に雄花群、下部に雌花群をつける。ガマと同じように雄花群は雌花群と接する。花粉は単粒で4つが合着するガマと区別される。 | | |
| 分 布 | 本州、四国、九州に分布する。香川県ではため池や放棄水田に散発的に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | ため池などの浅い岸近くに生育する。現地調査では、三豊市、まんのう町、東かがわ市、三木町、さぬき市で生育が確認された。過去の記録では、高松市、丸亀市、坂出市、綾川町での生育記録がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | もともと少ないが、河川やため池の改変などによって、近年減少している。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆: 末広喜代一 |

| ヒロハノイヌノヒゲ <i>Eriocaulon alpestre</i> (ホシクサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|--|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 落水後のため池の裸地や水田などの限られた環境に生育しており、産地ならびに個体数とも限定したものである。 | | |
| 種 の 特 徴 | ニッポンイヌノヒゲに類似するが、総苞片は卵状長楕円形で長さ2mm、頭花よりやや短い。葉は根生して開出、基部で幅5～8mm。花期は9～10月。頭花は半球形で幅5mm、淡汚褐色。花苞やがくの背面は無毛。種子は長楕円形で無毛。 | | |
| 分 布 | 県産ホシクサ類の中でも稀な種で、丘陵部から山地部のため池で記録があり、産地は点在している。古い文献では他のホシクサ類と混同している可能性がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | これまで、旧大内町と観音寺市栗井町の記録があったが、再確認されていなかったことから情報不足とされていた。今回の調査で、土庄町豊島で新たに生育が確認されたことで、評価が見直された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池の人工護岸化や浚渫工事による生育地の消失、管理放棄による草地化や周辺樹木等の生長に伴う被圧で衰退する。水田では、農地改良による湿田の乾田化や除草剤が消失の原因となる。 | | |
| 特 記 事 項 | 別名ヒロハノイヌノヒゲ | | |
| 文 献 | | | 執筆: 久米 修 |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| クオイヌヒゲ <i>Eriocaulon atrum</i> (ホシクサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 落水後のため池などの限られた環境に生育しており、産地ならびに個体数とも限定したものである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉は根生し、基部で幅2～4mm。花茎は高さ5～15cm。花期は7～9月、頭花は半球形で幅4mm。総苞片は卵状長楕円形、上部は藍黒色を帯びる。苞とがくは黒色。種子は広楕円形で微細な鉤状毛がある。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では東かがわ市の山ぎわのため池1箇所だけで確認されている。当該地のものは、花床が無毛であるが雌花の花弁に明瞭な毛あることから本種とされた。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | これまで、本種とツクシクロイヌヒゲ及びサイコククロイヌヒゲとの分類学的関係が明確でなく、保留していたが、今回の調査で東かがわ市川東のため池から本種とみなされるものが採集された。他所では確認されておらず、個体数はごく少ない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池の人工護岸化や浚渫工事による生育地の消失、管理放棄による草地化や周辺樹木等の生長に伴う被圧で衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | 新たに県内の生育が確認された。 | | |
| 文 献 | 42 | 執筆者：久米 修 | |

| オオホシクサ <i>Eriocaulon buergerianum</i> (ホシクサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|--|---|----------|-------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 落水後のため池の裸地や水田に生育するが、冬期に落水しない溜め池が増加し、産地と個体数が急激に減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉は根生して長さ7～20cm。花茎は高さ10～40cm。花期は8～10月、頭花は半球形で幅5mm、灰白色。総苞片は広倒卵形で花より短い。がく片と花弁の上端に白色棍棒毛がある。葯は黒色。種子は長楕円形で表面に細鉤状毛がある。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しており、西日本に多い。県内の丘陵部から山地部にあるため池に広く分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 産地数も個体数も比較的多かったが、近年の溜め池の管理手法の変化で減少傾向が著しい。今回の調査では、確認されなかった既知産地が多いことから、絶滅危惧カテゴリーが、1ランク上に評価された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池改修による人工護岸化や浚渫工事により生育地が消失する。ため池の管理手法の変化や管理放棄により、生育地の水没や乾燥化による草地化が起こったり、周辺樹木等の生長に伴う被圧で衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | 執筆者：久米 修 | |

| ホシクサ <i>Eriocaulon cinereum</i> (ホシクサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 落水後のため池の裸地や水田など限られた環境に生育しており、産地ならびに個体数とも限定したものである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉は根生して長さ2～8cm。花茎は高さ5～15cm、基部に1.5～3cmの鞘がある。花期は8～9月、頭花は卵球形で幅4mm、淡灰白色。総苞片は楕円形で目立たない。雌花のがく片は2個離生する。雄花に花弁があり葯は白色、雌花に花弁はない。種子は長楕円形で無毛。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しており、県内では山沿いの水田や日当たりのよいため池の水際に生育する。県内の分布に特に偏りは無く、広く散在している。東かがわ市と綾川町の記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | かつては水田に珍しい存在ではなかったと言うが、急激に減少し1980年代には既に稀な植物であった。今回の調査では、東かがわ市で新しい産地の報告がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 農地改良による湿田の乾田化や除草剤による枯死が主因である。ため池改修による人工護岸化や浚渫工事による生育地の消失、水田やため池の管理放棄による草地化もあげられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | 執筆者：久米 修 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| イトイヌノヒゲ <i>Eriocaulon decemflorum</i> (ホシクサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 山地の湧水草地という限られた環境に生育しており、産地ならびに個体数とも限定したものである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉は根生して長さ1.5～10cm。花茎は細く高さ5～30cm、基部に1～4cmの鞘がある。花期は8～9月、頭花は半円形で幅3～7mm、総苞片は卵状披針形で花よりやや長い。花は全部2数性、花苞と花弁の上部の縁と背に白長毛があり、葯は黒色。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内の山地部に広く点在している。生育立地である湧水湿地が少なく、小面積であることから産地は限定されている。さぬき市、丸亀市、まんのう町で確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の日当たりのよい湧水湿地に生育しており、イトイヌノヒゲと混生していることが多い。従来から生育地が少数で個体数も少なかった。今回の調査では、既知産地で個体数が減少しており、絶滅した場所も報告された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 湿地部の埋立で生育地が消失し、周辺部の植物の生長に伴う被圧と湿地の乾燥化で衰退する。周辺部に生育するオオミズゴケの採取のため、踏まれる踏圧の被害も見られる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者: 久米 修 |

| ヤマトホシクサ <i>Eriocaulon japonicum</i> (ホシクサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 落水後のため池などの限られた環境に生育しており、産地ならびに個体数とも限定したものである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉は根生して長さ6～12cm。花茎は高さ12～16cm。頭花は半球形で幅5mm、帯黒色。総苞片は外部のものは披針形で長さ4～6mm、花よりわずかに長い。花苞は上部だけ黒褐色を帯び、がくと花弁は無毛。種子は長楕円形で無毛。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しているが、多形で、分類学的な課題が多く残っている。県内には本種と同定されるものが生育しており、東かがわ市とまんのう町で標本が得られている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 丘陵部から山地部の日当たりのよいため池の水際に生育している。溜池の水際という不安定な生育環境に生育していることから、継続性も個体数も不安定である。今回の調査では、既知産地で確認されなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池改修による人工護岸化や浚渫工事により生育地が消失する。ため池の管理手法の変化や管理放棄により、生育地の水没や乾燥化による草地化が起こったり、周辺樹木等の生長に伴う被圧で衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 83 | 執筆者: 久米 修 | |

| ツクシクロイヌノヒゲ <i>Eriocaulon kiusianum</i> (ホシクサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|---|--|----------|-------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 落水後のため池などの限られた環境に生育しており、産地ならびに個体数とも限定したものである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉は根生して長さ2～15cm。花茎は高さ5～15cm。花期は7～9月、頭花は半球形で幅4mm、帯黒色。総苞片は卵状長楕円形、頭花より少し短く、上部は藍黒色を帯びる。種子は長楕円形で、表面に細鉤状毛がある。 | | |
| 分 布 | 本州西南部以西に分布しており、県内では丘陵部から山地部のため池に広く分布しており、産地は散在している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 溜池の水際という不安定な生育環境に生育しており、産地も個体数も少ない。今回の調査では、既知産地で個体数が減少した場所が報告された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池改修による人工護岸化や浚渫工事により生育地が消失する。ため池の管理手法の変化や管理放棄により、生育地の水没や乾燥化による草地化が起こったり、周辺樹木等の生長に伴う被圧で衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | 分類学的検討で、サイコクロイヌノヒゲが本種に統合された。 | | |
| 文 献 | | | 執筆者: 久米 修 |

*選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| イヌノヒゲ <i>Eriocaulon miquelianum</i> var. <i>miquelianum</i> (ホシクサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--|---|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦⑧※ 山地の湧水湿地やため池の湿地部という限られた環境に生育しており、産地は限定している。生育環境の変化で個体数が著しく減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉は根生して長さ6～25cm。花茎は高さ10～35cm。花期は8～9月。頭花は半球形で幅5～7mm、淡灰白色。総苞片は先が尖り長さ5～8mm、花の2～3倍長。葯は黒色。雌花の苞の上部に白色棍棒状毛がある。種子は長楕円形で細鉤状毛がある。分類学的検討で、シロイヌノヒゲが本種に統合された。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では丘陵部から山地部に広く点在しているが、生育立地の湿地が少なく小面積であることから産地は限定している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 従来から生育地が少数に限定されており、個体数も多くなかったが、生育地の消失や生育環境の変化で著しく減少している。今回の調査では、個体数の減少や絶滅した産地が報告された。シロイヌノヒゲとの統合で、産地と個体数が増加した結果、絶滅危惧のカテゴリーが1ランク下に評価された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 湿地部の埋立や掘削で生育地が消失し、周辺にある植物の生長に伴う被圧で衰退する。周辺部のオオミズゴケを採取するために踏まれる踏圧の被害も見られる。 | | |
| 特 記 事 項 | シロイヌノヒゲが本種に統合された。 | | |
| 文 献 | | | 執筆者: 久米 修 |

| クロホシクサ <i>Eriocaulon parvum</i> (ホシクサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|--|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦※ 落水後のため池などの限られた環境に生育しており、産地ならびに個体数とも限定したものである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉は根生して長さ3～10cm。花茎は高さ5～20cm、基部に2～4cmの鞘がある。頭花は球形で幅4mm、藍黒色。総苞片は倒卵形で花より短い。花弁は3個離生。葯は黒色、雌花は藍黒色。花苞とがく片は上部に白色棍棒毛がある。種子は長楕円形で表面に乳頭状突起がある。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しており、県内では丘陵部のため池に点在している。東かがわ市とまんのう町から標本が得られている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 県産ホシクサ類の中でも稀な種で、日当たりのよい砂質～泥質土壌のため池の水際で、落水後に一時的に裸出するような立地に生育する。不安定な生育環境に生育していることから、継続性も個体数も不安定である。今回の調査では、確認されなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池改修による人工護岸化や浚渫工事により生育地が消失する。ため池の管理手法の変化や管理放棄により、生育地の水没や乾燥化による草地化が起こったり、周辺樹木等の生長に伴う被圧で衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17 | 執筆者: 久米 修 | |

| ドロイ <i>Juncus gracillimus</i> (イグサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|---|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦※ 海岸近くの塩性湿地や後背湿地など、他種が生育できない特異な環境に生育する。ある程度まとまった個体数になることもあるが、産地は限定したものである。 | | |
| 種 の 特 徴 | クサイに類似しているが、花被片は鈍頭で果実より短く約2mm、葯は花糸とほぼ同長であることで区別できる。根茎は硬くて横走り、節間は短い。茎は高さ40～70cm。葉は細く線形で茎よりも短く幅約1mm。花期は5～7月。花被片の背部は暗紫褐色で両側が赤褐色を帯びる。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では土庄町沖島にある塩性池の周囲で生育しているのが確認されている。他に記録はない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 海岸近くの湿地や塩田跡地に生育していた可能性はあるが、現在まで報告されていない。既知産地ではある程度まとまった個体数が確認されていたが、今回調査を実施できていない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 海岸近くの湿地や塩田跡地が土地造成工事で埋め立てられ、生育地が消滅する恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 37 | 執筆者: 久米 修 | |

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| コウキヤガラ <i>Balboschoenus koshevnikovii</i> (カヤツリグサ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---|---|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 湿地の減少や河川河口部の改修により、産地と個体数が減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 湿地などの半湿地に生育する多年草。稈は、地下茎の節に単生し、断面は三角形、高さ20～100cm。葉は稈の下部に2～5枚つく。花期は5～9月。苞は1～3、1つは花序より長くなり剣状になる。花序は頂生、柄が短く小穂が密集して見える。小穂は卵状楕円形。柱頭は2岐。果実はレンズ状。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では湿地や河川河口部、後背地に点在していた。小豆島町や丸亀市等で確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | かつては湿地の除草困難な厄介な雑草であったが、農地の乾田化で湿地が減少し、除草剤の普及と共に、産地と個体数が著しく減少した。今回の調査では、確認されていない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 農地改良による湿地の乾田化や河川改修により生育地が消失した。加えて除草剤の普及が衰退を促進した。湿地が放棄され、高茎草本の侵入と乾燥化で、生育環境が失われた。 | | |
| 特 記 事 項 | 近年減少が著しいことから新規掲載された。 | | |
| 文 献 | | | 執筆者：久米 修 |

| クロカワズスゲ <i>Carex arenicola</i> (カヤツリグサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) |
|--|--|----------|------------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 生育環境が湧水湿地等に限定され、県内のごく限られた地域に生育しているの知られているだけである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 走出枝を出して小さな株が1方向に連なってつく。稈は高さ10～30cm。基部の鞘は淡褐色で長い繊維状に細裂する。葉は稈より短く、幅約2mm。花期は5～6月。小穂は褐色を帯び、稈の頂部に密集、苞に葉身はない。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では文献情報として直島の海岸砂地で確認されたものだけである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 生育環境が日当たりのよい湿気のある砂質の草原であり、生育立地そのものが少ない。今回の調査では、文献産地を調査したが、確認されなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 湿地や海岸砂地の埋立や掘削など、土地の改変行為により生育地が消失する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 54 | 執筆者：久米 修 | |

| ベンケイヤワラスゲ <i>Carex benkei</i> (カヤツリグサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) |
|---|--|----------|------------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 山地の林縁や河川・ため池周辺などの湿った草地に生育し、産地が少なく局地的で個体数も少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 湿地や湿った草地などの生える多年草。ヤワラスゲに似るが、基部の鞘が濃赤色に着色しない。芒を除く雌鱗片は果胞と同長で、芒は長く突出、果胞の口部は凹形。 | | |
| 分 布 | 紀伊半島以西・九州・対馬の沿海地に分布する。県内では高松市播磨谷で採集された古い標本の他、島嶼部の小豆島で確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 1935年採集の高松市産地周辺では現在確認できず、新しく見つかった小豆島の生育地でも確認できなくなっている。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 産地が限定され、ため池改修などによる環境の改変で生育地が消失、生育数の減少が著しい。 | | |
| 特 記 事 項 | 新たに県内に生育していたことが判明した。 | | |
| 文 献 | 37, 75 | 執筆者：佐藤 明 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| オニスゲ <i>Carex dikinsii</i> (カヤツリグサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種はため池や湿地など限られた環境に生育しており、産地が少なく局地的に生育している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 水湿地に生育する多年草。匍枝を伸ばし群生する。基部の鞘は淡色。葉の幅4～8mm。有花茎高さ20～50cm。頂小穂は雄性、短い柄が有りわら色、長さ2～3cm。側小穂は2～3個が近接し、雌性、長さ1.5～2cm、幅1.5cm。果胞は大型で長さ8～10mm。雌鱗片は淡緑色、果胞より著しく短い。 | | |
| 分 布 | 北海道・本州・四国・九州に分布する。県内は東讃西部から中讃の山際ため池や湿地に、点在して分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 既存情報は少なく、産地はまれである。近年産地が減少すると共に、生育数も減少している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池の改修や湿地の改変による生育地の消失、耕作地の減少に伴うため池の管理放棄、自然遷移による環境変化で衰退が著しい。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 37 | 執筆者：佐藤 明 | |

| ゲンカイモエギスゲ <i>Carex genkaiensis</i> (カヤツリグサ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---|--|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧ⅠB類 (EN) |
| 選 定 理 由 | ⑤* 県内の島嶼という限られた地域に、局地的に生育していることが知られているだけである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉はやや硬く鞘は褐色で幅2～6mm。稈は高さ30～45cm。花期は4～5月、頂小穂は雄性で、側小穂は雌性。果胞は多数の脈と細毛がある。瘦果は3稜の中央が浅くくびれ、頂部は平盤状。古い文献ではタイワンスゲとして誤認されていた。 | | |
| 分 布 | 近畿地方以西に分布しており、県内では小豆島だけで確認されており、島内に広く点在している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | やや乾燥した半日陰の林床に密に叢生して生育する。現在のところ小豆島以外で発見されていない。島内の分布は広く個体数もまとまっている。今回の調査では、既知産地の立地環境が変化していないことから、調査を実施していない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 土石の採掘や林地の掘削など森林の開発行為で、生育地が消失する恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | 執筆者：久米 修 | |

| オオムギスゲ <i>Carex laticeps</i> (カヤツリグサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|---|--|----------|-------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 県内の島嶼という限られた地域に、局地的に生育していることが知られているだけである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 疎生し匍枝を出す。全体に白毛がある。基部の鞘は緑白色で幅3～5mm。稈は高さ30～60cm。花期は4～5月、頂小穂は雄性、側小穂は雌性ときに先端部が雄性。雌鱗片は先が芒状に長く尖る。果胞は有毛、先が細長い嘴となる。瘦果は3稜の中央に深い凹部があり、頂部は湾曲した嘴になる。 | | |
| 分 布 | 東海地方以西に分布しており、県内では小豆島だけで確認されており、島内に少数個体が点在している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 半日陰の林縁や路傍に疎らに生育する。現在のところ小豆島以外で発見されていない。島内に点在しており、個体数は少ない。今回の調査では、既知産地で確認されなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 土石の採掘や林地の掘削など森林の開発行為で、生育地が消失する恐れがある。生育地の植物が繁茂すると被圧で衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | 今回の調査で確認されていないことから新規掲載された。 | | |
| 文 献 | 17 | 執筆者：久米 修 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| カタスゲ <i>Carex macrandrolepis</i> (カヤツリグサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内のごく限られた地域に局地的に生育しており、産地も個体数もごく限られている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 細い匍匐枝を多数出し、全体が硬い。稈は細く平滑、長さ15～35cm。葉は鮮緑色で稈と同長以上、ざらつく。基部の鞘は濃紫褐色、繊維状に細裂する。花期は4～5月、頂小穂は雄性、側小穂は雌性。果胞は光沢があり、嘴が長い。瘦果頂部に付属体がない。 | | |
| 分 布 | 東海地方以西に分布しており、県内では小豆島と高松市だけに知られている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 日当たりのよい乾いた林縁や草地に生えている。これまで小豆島だけに知られていたが、今回の調査では、高松市平野部の河川堤体上で新たに確認された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 河川の堤体工事で生育地が消失する恐れがある。生育地の植物が繁茂すると被圧されて衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者：久米 修 |

| オタルスゲ <i>Carex otaruensis</i> var. <i>otaruensis</i> (カヤツリグサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|--|---|----------|-------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦⑧* 山地の半日陰の湿地という限られた環境に生育している。産地ならびに個体数とも限定したもので、近年著しく減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 密に叢生し、稈は高さ50～80cmで著しくざらつく。葉は稈と同長以上、葉縁はざらつく。基部の鞘は赤褐色。花期は5～6月。頂小穂は雄性、側小穂は雌性で下垂する。果胞は卵状長楕円形、平滑で無脈、熟しても膨らまず瘦果を密に包む。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では山地の半日陰の湿地に点在して分布しており、丸亀市綾歌町、まんのう町、三豊市財田町などで確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 確認されている湿地は少なく、個体数も限られたものである。今回の調査では、自然遷移により、産地も個体数も減少していることから、絶滅危惧カテゴリーが1ランク上に評価された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や湿地の埋立で生育地が消失し、植生遷移による湿地の樹林化や周辺樹木の生長に伴う被圧で衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | 産地と個体数が急激に減少しており、絶滅危惧カテゴリーが1ランク上に評価された。 | | |
| 文 献 | | | 執筆者：久米 修 |

| オオクグ <i>Carex rugulosa</i> (カヤツリグサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|--|--|----------|-------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑤⑦* 島嶼部の後背湿地という特殊な生育立地で、限られた地域に局地的に生育し、産地も個体数もごく限られている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 根茎は長く横に這い疎らに生える。基部の鞘は無葉身で赤色。葉はやや粉緑色。稈は40～70cm。花期は5～6月。上部の2～4個の小穂は雄性で濃褐色、下方の小穂は雌性。雌鱗片は褐色。果胞はコルク質で無毛、先は短く太い嘴状。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では丸亀市牛島の後背湿地に生育している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 離島沿海地の後背湿地に、ヨシやアイアシと共に群生している。生育地は1箇所では知られているだけであるが、個体数が多い。最近新たに県内で生育が確認されたもので、類似の環境に生育するシオクグと混同されてきた可能性がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 後背湿地の埋立や道路建設により、生育地が消失する。混生しているヨシなどの繁茂により被圧されて衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | 新たに県内の生育が確認された。 | | |
| 文 献 | 63 | 執筆者：久米 修 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ジングウスゲ <i>Carex sacrosancta</i> (カヤツリグサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|---|--|-----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内のごく限られた地域に局地的に生育しており、産地も個体数もごく限られている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 根茎は短く叢生する。基部の鞘は葉身があり褐色、繊維状に細裂する。稈は長さ20～40cm。葉は硬く、濃緑色で稈よりも短い。花期は9～10月。小穂は単性、まれに1節に2～3個つき、全て雌雄性。果胞の先は急に細くなり長い喙状。柱頭は2岐して果胞より短い。 | | |
| 分 布 | 伊豆半島以西に分布しており、県内ではまんのう町で採集された文献情報がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 林床や林縁に生育するが、1981年に旧仲南町塩入で採集された文献情報がある。今回の調査では、確認されていない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育環境が林内であり、樹木の生育繁茂により被圧され衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | 文献情報で、新たに県内に生育していたことが判明した。 | | |
| 文 献 | 54 | 執筆者: 久米 修 | |

| シオクグ <i>Carex scabrifolia</i> (カヤツリグサ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---|---|-----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 河口部や海岸部の塩湿地に生育しているが、生育環境の改変により、近年著しく個体数が減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 長い匍匐枝で群生することが多い。稈は高さ45～60cm。葉は稈より長く幅2～3mm。基部の鞘は赤紫色。花期は5～7月。小穂は上方の2～4個が雄性で、側小穂は雌性。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では島嶼部を含めた海岸部に広く点在している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 海岸や河口の砂地や後背地の湿った立地に生育しており、海水に浸る様な場所にも見られる。急激な絶滅の恐れは少ないが、生育環境が特殊であり、徐々に減少している。今回の調査では、既知産地の大きな変化は報告されなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 河口部の改修や浸漬、海岸部の埋立や改変行為で生育地が消失し、ヨシなどが繁茂すると被圧されて衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | 執筆者: 久米 修 | |

| ニイガタガヤツリ <i>Cyperus niigatensis</i> (カヤツリグサ科) | | 香川県カテゴリー | 情報不足 (DD) |
|---|--|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧 I A類 (CR) |
| 選 定 理 由 | ⑦* ため池や川原という特殊な環境に生育しており、産地ならびに個体数ともごく限られたものである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 日当たりの良いため池や川原に生育する一年草。密に叢生して株になる。葉は柔らかく淡緑色。稈は10～20cm。花期は8～11月。小穂の鱗片は2列、卵円形で鈍頭、中肋は突出しない。瘦果は倒卵形、縁稜は膨れた狭い翼状。 | | |
| 分 布 | 新潟県以南に分布しており、県内では文献情報として三木町男井間池と高松市香川町新池の報告がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 平野部にある大形のため池で、落水後出現する草地で確認されている。新たに県内に生育していたことが判明したが、その後確認されていない。ニイガタガヤツリそのものの実態が不確実な事に加え、類似のウキミガヤツリが記載された。県内に標本が残されておらず、文献情報だけである事から情報不足と判定された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池改修による浸漬工事で生育地が消失する。ため池の管理手法の変化や管理放棄により、生育地の水没や乾燥化による草地化で衰退する。一部では、太陽光発電施設の設置により落水されなくなり、出現しなくなった。 | | |
| 特 記 事 項 | 文献情報で、新たに県内に生育していたことが判明した。 | | |
| 文 献 | 53 | 執筆者: 久米 修 | |

*選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ミスガヤツリ <i>Cyperus serotinus</i> (カヤツリグサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 日当たりのよい湿地という限られた環境に生育しているが、群生することがなく、産地ならびに個体数とも限定したものである。 | | |
| 種 の 特 徴 | オニガヤツリと誤認されやすいが、果実はレンズ形で柱頭が2個であることで区別できる。細長い地下走出枝を出して先に小塊茎をつくる。稈は単生し、高さ50～100cm。葉身は稈より短く、幅は5～8mm。花期は8～10月。小穂は無光沢の紅褐色から淡色。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では、丘陵部から山地部の日当たりのよいため池や河畔、用水路などの湿地に生育している。群生することがなく、生育環境が小面積で特殊な立地のため、確認情報は少ない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 直島町や綾川町、まんのう町等の報告がある。今回の調査では、既知産地で絶滅が報告され、綾川町で雑種化したものが確認された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 湿地の埋立、水路改修などの開発行為で生育地が消失する。生育地周辺の樹木や草本の生長による自然遷移により被圧されると衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者：久米 修 |

| ミスミイ <i>Eleocharis acutangula</i> (カヤツリグサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧ⅠB類 (EN) |
| 選 定 理 由 | ⑤* 県内のごく限られた地域に、局地的に生育していることが知られているだけである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 地下茎が横走して節から稈を叢生する抽水植物。稈は高さ40～70cm、幅2.5～4mm、鋭い三稜形で中実。花期は8～10月。穂は稈の先につき、円柱形で長さ1.5～3cm、幅3～4mm、先が尖る。果実に残る花柱が三角形をしている。 | | |
| 分 布 | 関東地方以西に分布しており、県内では満濃町炭所西江畑で知られているだけである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 農道脇の小規模なため池一箇所だけで生育が確認されており、個体数も少数であった。今回の調査では、既知産地で生育が確認されなかった。絶滅の原因は不明である。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池改修による人工護岸化や浚渫、埋立により生育地が消失する。ため池の土堤が老朽化しており、崩壊による流失乾燥化や崩落による埋設の恐れがある。ため池の土堤周辺の草刈などの管理が放棄されると陽光不足となり衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者：久米 修 |

| ビロードテンツキ <i>Fimbristylis sericea</i> (カヤツリグサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 海浜の砂地という極限の環境に生育しており、産地と個体数共に限定したものである。近年産地と個体数の減少が著しい。 | | |
| 種 の 特 徴 | 根茎は太く、枯れた葉鞘に覆われる。全体にビロード状の白毛に覆われる。基部の鞘は黒褐色。葉は肉厚で、基部に多数つく。花期は8～10月。稈は高さ10～30cm、硬くて太い。花序は目立たないか短い柄を持ち、3～10個の小穂をつける。小穂は狭卵形、灰褐色。 | | |
| 分 布 | 茨城県以西に分布しており、県内では土庄町や丸亀市、観音寺市等の海浜砂地で確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 海辺の改変により、産地と個体数が減少していた。今回の調査では、新産地が報告されたが、既知産地で絶滅した場所が確認され、絶滅危惧のカテゴリーが1ランク上に評価された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 防潮堤の設置や海岸部の埋立などの開発行為で生育地が消失する。高茎草本の繁茂により被圧されると衰退する。海浜清掃により除草されている。 | | |
| 特 記 事 項 | 開発行為や自然遷移により、著しく減少していることから、絶滅危惧カテゴリーが1ランク上に評価された。 | | |
| 文 献 | | | 執筆者：久米 修 |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| クヨタマガヤツリ <i>Fuirena ciliaris</i> (カヤツリグサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 山地やため池の湿地と言う特殊な生育環境で、産地ならびに個体数とも限定したものである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 疎に叢生し、稈は三角形で高さ10～40cm、葉および花の鱗片と共に毛がある。葉は稈上生、線形で扁平、長さ5～15cm、幅3～7mm。花期は9～10月。小穂は長楕円状卵形、3～10個集まって球状花序をつくる。鱗片は黒緑色。 | | |
| 分 布 | 千葉県以西に分布しており、県内では文献情報として、高松市香川町新池とまんのう町満濃池で確認されているだけである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 生育環境が落水後のため池という不安定な立地であり、産地も個体数も少なく、近年の確認事例はない。今回の調査では、確認されなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 湿地の埋立やため池改修により生育地が消失する。ため池の管理が放棄されると、生育地の水没や乾燥化による草地化で衰退する。一部では、太陽光発電施設の設置により落水されなくなり、生育地が出現しなくなった。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 53 | 執筆者：久米 修 | |

| ヒンジガヤツリ <i>Lipocarpha microcephala</i> (カヤツリグサ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---|---|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 県内全域に生育しており、減農薬などにより生育数は少ないが復活傾向も見られ、評価を絶滅危惧Ⅱ類から、準絶滅危惧種に変更。 | | |
| 種 の 特 徴 | 湿気のある所に生育する多年草。根生葉は幅1～2mmの線形。多数の茎を出し、茎の先に線形の長い苞を2個出し、苞の間に3個の小穂を密着した頭状につける。和名は、3個の小穂の形が「品」の字ように見えるところから名付けられている。 | | |
| 分 布 | 本州・四国・九州・琉球、台湾、南朝鮮、中国、印度、マレーシア、オーストラリアに分布する。県内全域の平野部から、丘陵部の水田地帯に広く分布している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回調査で生育数は多くないが、県内全域に点在し生育が確認された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 農薬散布を調整するようになり、生育数の回復も見られる。ため池の改修や水田の乾燥化、耕作放棄など生育環境の変化も有り、相対的に個体数は減少している。 | | |
| 特 記 事 項 | 2004年版では絶滅危惧Ⅱ類としたが、個体数は多くないが広く分布しており、評価を準絶滅危惧種とした。 | | |
| 文 献 | 17 | 執筆者：佐藤 明 | |

| ネビキグサ <i>Machaerina rubiginosa</i> (カヤツリグサ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---|--|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 本種は、島嶼部や東讃地域に生育しているが、近年減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | ため池や湿地に生育する多年生の抽水～湿性植物。長い地下茎が匍匐する。桿は直立し、高さ60～120cmで断面は偏平な円柱形、径3～8mm。花期は6～9月。桿の上部に3～6個の分花序がつく。小穂は赤褐色の楕円形で長さ5～6mm。 | | |
| 分 布 | 本州(東海道以西)・九州・琉球に分布する。県内では直島などの島嶼部と、東かがわ市で確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 2004年版の調査時には直島で普通に生育していたが、今回の調査で、道路工事や土地造成により絶滅した生育地もあり、全体に減少傾向である。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地であるため池や湿地の改修、埋め立て、土地造成による生育地の消失、自然遷移による生育環境の変化で生育数も減少し衰退している。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 37 | 執筆者：佐藤 明 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ハタバカンガレイ <i>Schoenoplectus gemmifer</i> (カヤツリグサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑤⑦* 本種は2010年新規に生育が確認された。生育地は限定されている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 湧水のある河川や水路などに生育する多年生の沈水、又は抽水植物。流水では流れになびく沈水形をとる。多数の桿が束生、桿の断面は三角形、長さ40～100cm。柱頭が2岐で有ることがカンガレイとは識別できる。水中では小穂のつく部位にしばしば無性芽が形成されることも特徴。 | | |
| 分 布 | 本州・四国・九州、朝鮮に分布。県内ではまんのう町内の流水路に生育する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 湧水下部の流水路に生育する。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 河川改変等による生育環境の変化、生育地の自然遷移による環境変化で消失、現在生育確認が出来ていない。 | | |
| 特 記 事 項 | 2010年、新規に生育が確認された。 | | |
| 文 献 | 19,30,31,37 | 執筆者: 佐藤 明 | |

| ヒメカンガレイ <i>Schoenoplectus mucronatus</i> var. <i>mucronatus</i> (カヤツリグサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|---|---|-----------|-------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は生育地が限定され、近年自然遷移で絶滅した場所もあり、生育数も減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | ため池の浅水域、湿地などに生育する多年生の抽水～湿性植物。桿は叢生し、カンガレイよりやや小型、花序あたりの小穂は1～10個(5個以下の場合が多い)と少なく、刺針はほぼ同長で、下向きにざらつく突起がある。 | | |
| 分 布 | 本州・四国・九州、中国、中央アジア、ヨーロッパに分布。三木町と、中讃から西讃の山間のため池、湿地に生育する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山間地のため池浅水域や湿地に生育する、生育環境の変化で生育数は減少している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地が限定され、ため池の改変、湿地の改変による生育環境の消失、管理放棄による自然遷移によって生育環境が悪化している。 | | |
| 特 記 事 項 | 2004年新種記載され、県内では個体数の減少が著しく絶滅危惧Ⅱ類として新たに評価した。 | | |
| 文 献 | 19,37,67 | 執筆者: 佐藤 明 | |

| シズイ <i>Schoenoplectus nipponicus</i> (カヤツリグサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|--|--|-----------|-------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は生育地が限定され、ため池の改変、自然遷移による生育環境の悪化で生育数が減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 貧栄養のため池の浅水域、湿地などに生育する多年生の抽水植物。細い地下茎が有り、節から桿が直立する。桿は緑白色、断面は三角形、高さ40～70cm、幅2～5mm。花期は6～9月。2～3本柄が伸び、一部はさらに二叉状に分枝、柄の先に1～3個の小穂がつく。 | | |
| 分 布 | 北海道・本州・四国・九州、ウスリー地方、中国(?)に分布。県内では坂出市、まんのう町の山間ため池、周辺の湿地に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山間地のため池浅水域、湿地に生育しているが、生育環境の変化で、個体数は減少している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池の改変、管理放棄による環境の変化で、生育適地が減少、生育数も減少している。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 37,68 | 執筆者: 佐藤 明 | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| サンカクイ <i>Schoenoplectus triquetus</i> (カヤツリグサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦⑧* 限られた特定の環境に生育し、産地と個体数が限定されている。近年著しく減少した。 | | |
| 種 の 特 徴 | 湿地に生育する多年草。長く横に這う根茎の節から稈が単生する。稈は高さ50～100cm、断面は三稜形。花期は7～10月。花序は側生し、4～10個の小穂がつく。小穂は短い柄を持つものと無いものがある。小穂は卵形、茶褐色。瘦果は倒卵形、横断面はレンズ状。柱頭は2岐。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内ではため池や河川、水路、湿地などの湿地に点在して分布している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 産地と個体数ともに著しく減少している。今回の調査では確認されておらず、既知産地で絶滅した場所が報告され、絶滅危惧のカテゴリーが1ランク上に評価された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 河川やため池の改修、湿地の乾田化により、生育地である湿地が消失する。草刈などの管理を放棄すると、高茎草本に被圧され衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | 著しく減少していることから、絶滅危惧カテゴリーが1ランク上に評価された。 | | |
| 文 献 | | | 執筆者：久米 修 |

| マツカサススキ <i>Scripus mitsukurianus</i> (カヤツリグサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 生育地が日当たりの良い湿地で、産地と個体数が限定されており、近年著しく減少した。 | | |
| 種 の 特 徴 | 湿原に生える多年草。大株となり、稈は直立し高さ1～1.5m、太くて硬い。葉は硬く線形、幅4～8mmで扁平。花期は8～10月、花序は散房形。小穂は楕円形で、10～25個集まって花穂となる。完熟すると濃褐色になる。鱗片は披針形。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しており、県内では観音寺市高屋町等の山沿いの湿地に点在していた。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 従来から既知産地は極稀で、近年確認できる産地はごく少なかった。今回の調査では確認されておらず、絶滅危惧のカテゴリーが2ランク上に評価された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池の改修や湿地の埋立などにより、生育地が消失する。自然遷移により、湿地が乾燥化し、樹木の侵入による被圧で衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | 産地と個体数が著しく減少していることから、絶滅危惧のカテゴリーが二ランク上に評価された。 | | |
| 文 献 | 17 | 執筆者：久米 修 | |

| ケシングガヤ(マネキシングガヤを含む) <i>Scleria rugosa</i> var. <i>rugosa</i> (カヤツリグサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 山地の日当たりのよい湿地に生育しているが、産地ならびに個体数とも限定したものである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 湿地に生える一年草。稈は高さ10～20cmで叢生する。葉は全て稈上生で、葉身は線形。葉鞘は節間より短く、ややゆるく茎を抱く。葉と茎に毛がある。毛の無い変種をマネキシングガヤ(<i>S. rugosa</i> var. <i>onoei</i>)という。花期は7～10月。花序は各稈に2～3個つく。果実は球形で径2mm、灰白色。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しており、県内の山地部に広く点在している。生育立地の湧水湿地が少なく、小面積であることから産地は限定されている。さぬき市、小豆島、丸亀市、まんのう町などで確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 従来から生育地が少数に限定されており個体数も少なかった。生育地の消失や生育環境の変化で近年減少している。今回の調査では、新産地が報告されたが、既知産地で減少した場所が確認された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 湿地の埋立やため池の改修で生育地が消失する。周辺部の植物の生長に伴い、被圧や湿原の乾燥化で衰退する。周辺部にあるオオミズゴケなどの採取目的で踏まれる、踏圧の被害が見られる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者：久米 修 |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ヒメコヌカグサ <i>Agrostis valvata</i> (イネ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑦⑧※ 山地の湿地周辺や谷川沿いの湿った草地などの限られた環境に生育しており、産地ならびに個体数とも限定したものである。自然遷移により近年著しく減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 根茎は短く、稈は多数束生して細くて柔らかい。高さ40～70cmになる。葉は扁平で無毛、長さ7～15cm、幅2～5mm、高さ1～3mmの葉舌がある。花期は6月、円錐花序となり長さ7～15cm。小穂は長さ2.5～3mm、1小花からなり、熟すと包穎を残して散る。小花が包穎と同長より長いのが特徴。 | | |
| 分 布 | 関東以西に分布しており、県内ではまんのう町や三豊市財田町の山中の湿地周辺や谷川沿いの湿った草地で確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 県内では山中の湧水湿地などと生育立地が限定しており、個体数も多くはなかった。今回の調査では、湿地周辺の樹木の生長と共に湿地が乾燥し、被圧によって絶滅した場所が確認された。既知産地の個体数が極少数であることから、絶滅危惧カテゴリーの最上位に評価された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 湿地や谷川周辺の改変により、生育地が消失する。生育地周辺の草本や樹木が生長し、被圧されて衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | 産地と個体数が著しく減少していることから新規に掲載された。 | | |
| 文 献 | | | 執筆者: 久米 修 |

| ヤマアワ <i>Calamagrostis epigeios</i> (イネ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦※ 山地の草地や河岸に生育しているが、産地ならびに個体数とも限定したものである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 長い地下茎を引き、稈は高さ70～130cm。葉はやや硬く両面がざらつき淡緑色、幅5～12mm、3～6mmの葉舌がある。花期は7～9月。花序は卵状披針形、長さ10～25cm、枝は半輪生で著しくざらつき、密に小穂をつける。小穂は白く紫色を帯びる。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では平地から山地にかけての草地に散見される。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 湿度のある開けた草地や林縁部に生育している。これまでは文献情報だけであったが、今回の調査で東かがわ市帰来の休耕地で群生しているのが確認された。当該地は、道路建設予定であり、消失することから絶滅危惧カテゴリーは変更されなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や河川の改変、道路建設により生育地が消失する。休耕地が放置されていると、植生遷移により被圧されて衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 56 | 執筆者: 久米 修 | |

| ヒメノガリヤス <i>Calamagrostis hakonensis</i> (イネ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---|---|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤⑦※ 明るい谷間の林床に生育しており、生育地の急激な環境変化に耐えられない。県内の局限した地域で確認されている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 根茎は細くて短い。稈は細く、多数束生して大株になり、高さ30～70cm。葉は長さ7～30cm、基部でよじれ、表裏が逆になることが多い。葉鞘の口部が耳状に広がり、その背面に毛がある。花期は7～10月、長さ5～15cmの円錐花序となる。芒は短く小穂外に伸び出さない。小果と同長の基毛がある。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では高松市塩江町竜王山とまんのう町中通の山中で確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 従来から讃岐山脈尾根部のブナ林床でまとまった個体数が確認されていたが、今回の調査でまんのう町中通の山中急崖地で少数個体が確認された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林伐採により、生育地の環境が急変すると衰退する。生育地の樹木の生長により、上層林冠が閉鎖すると衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | 産地が局限し、個体数が少ないことから、急激な変化に耐えられないとして新規に掲載された。 | | |
| 文 献 | | | 執筆者: 久米 修 |

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ヒナザサ <i>Coelachne japonica</i> (イネ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 日当たりのよい湿地に生育しているが、産地ならびに個体数とも稀で、限定したものである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 稈は細く横に這って基部で枝分かれする。高さ5～20cm。節に短毛がある。葉は披針形で無毛、長さ1～3cm、幅3～6mm。花期は8～10月。花序は小さい円錐形、単生する小穂をまばらにつける。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しており、県内ではまんのう町で確認されているだけである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 日当たりのよいため池周辺の湿地で、他に高茎草本が生育しない様な立地に生育する。既存情報としては、まんのう町の山際のため池近辺で確認された記録だけで、2011年に絶滅が報告された。今回の調査では確認されていない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 湿地の埋立や掘削、ため池改修により生育地が消失する。周辺の草本や樹木の生長に伴い、湿地の乾燥化や被圧が起こり衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：久米 修 | | |

| イトスズメガヤ <i>Eragrostis brownii</i> (イネ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|---|---|----------|-------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 山地の日当たりのよい湿地に生育しているが、産地ならびに個体数とも少なく、限定したものである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 疎に叢生する多年草。根もとに筒状の新芽を作る特徴がある。稈は少数が直立し、高さ20～60cm、硬く細い。全体に腺が無い。葉は幅1～1.5mm。花期は7～10月、花序の枝は単生。小穂はごくまばらで、明らかに柄があり、枝に圧着しない。 | | |
| 分 布 | 本州西部以南に分布しており、県内では坂田市から丸亀市にまたがる山地で確認された。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の日当たりのよい湧水湿地や裸出地で、他に高茎草本が生育しない様な立地に生育する。今回の調査では、山中の湿り気が多い山道や林縁部で、少数個体が確認された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 歩行者による踏圧、生育地周辺の草本や樹木の生長に伴う被圧により衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | 新たに県内の生育が確認された。 | | |
| 文 献 | 執筆者：久米 修 | | |

| コゴメカゼクサ <i>Eragrostis japonica</i> (イネ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 湿地や農地周辺の草地という限定的な環境に生育しており、個体数がごく少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 一年草。稈は束生し50～120cm。葉は長さ6～20cm、幅2～6mm、葉鞘は無毛、0.5mmの葉舌がある。花期は8～9月。円筒形の円錐花序を出し、多くの小枝をつけ、多数の微細な小穂を密生する。小穂は長さ1.3～2.2mm。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しており、県内では三木町、丸亀市、三豊市三野町等に点在して確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 生育環境の改変により、極めてまれになり、1999年に三木町鹿庭で確認されて以来報告が無い。今回の調査では確認されていない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 圃場整備などで、農道や用水路、畦畔が改修され、生育地が消失した。農薬汚染による枯死、草刈りなどの管理放棄で草地が変容し衰退した。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：久米 修 | | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ウンヌケモドキ <i>Eulalia quadrinervis</i> (イネ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|--|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ㊦* ため池の土堤や農道法面など日当たりのよい草地に生育しているが、産地ならびに個体数とも限定したものである。 | | |
| 種 の 特 徴 | ウンヌケに類似しているが、稈の基部の鞘が赤褐色で無毛に近く、葉にまばらに白毛があることで区別できる。稈は叢生し、高さ60～100cm。葉はやや扁平、長さ20～40cm、幅3～8mm。花期は9～11月。第一包穎の左右に2本ずつの脈があり、先の方で連結する。 | | |
| 分 布 | 東海地方以西に分布し、県内では東かがわ市や高松市、三豊市などに点在する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | ため池の土堤や農道法面など、日当たりのよい草地に生育しており、産地及び個体数ともごく稀で、ウンヌケよりも少ない。今回の調査では、絶滅した産地が報告された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池の改修による土堤の掘削や農道改修により生育地が消失する。定期的な管理行為である草刈が中止されると、混生しているススキや樹木に被圧されて衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者：久米 修 |

| ウンヌケ <i>Eulalia speciosa</i> (イネ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|---------------------------------------|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ㊦* ため池の土堤など日当たりのよい草地に生育しているが、産地ならびに個体数とも限定したものである。 | | |
| 種 の 特 徴 | ウンヌケモドキに類似しているが、稈の基部がふくらみ、鞘の外側に黄褐色の短毛が密生することで区別できる。稈は束生し、高さ80～120cm。花期は9～10月、小穂は長さ5mm。第1包穎は左右に1本ずつ先で連結しない脈があり、背面に長疎毛がある。 | | |
| 分 布 | 東海地方以西に分布し、県内では綾川町やまんのう町、三豊市、観音寺市などのため池土堤に点在している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | ため池の土堤など、日当たりのよい草地に生育している。産地はウンヌケモドキよりも多いが限定的で、個体数は少ない。今回の調査では、減少した産地が報告され、絶滅した産地も確認された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池の改修による土堤の掘削で生育地が消失する。土堤の定期的な管理行為である草刈が中止されると、混生しているススキや樹木に被圧され衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者：久米 修 |

| アカヒゲガヤ <i>Heteropogon contortus</i> (イネ科) | | 香川県カテゴリー | 情報不足 (DD) |
|--|--|----------|---------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧I A類 (CR) |
| 選 定 理 由 | ㊦* 県内の限られた山地に、局地的に生育していることが知られているだけである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 南方系の多年草。稈は叢生し、高さ100cm、やや扁平、下部で直径3.5mm。花期は9～10月、稈の先端に円柱形長さ3.5～5.5cmの総状花序を頂生し、20個ほどの小穂を密につける。花序の先端から中程までの無柄小穂には長い芒を有し、特徴的な形態となる。小穂は有柄小穂と無柄小穂が対をなす。 | | |
| 分 布 | 国内では、沖縄県の沖縄島北部～南部に分布し、熊本県天草に記録がある。県内では、丸亀市の山地1箇所だけで知られている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 近接した山中尾根筋の裸出地2箇所、風化の進んだ凝灰角礫岩の乾燥した貧栄養の裸地に生育しており、300株ほどが確認された。生育地の立地環境から在来品の可能性が大であるが、国内分布上移入外来の疑いが残る事から、情報不足と評価された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 土石採取などの森林開発により自生地が消失する。山中に残された狭小な裸出地に生育している事から、外来草本の繁茂や周辺部の樹木の生長により被圧されると衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | 新たに県内の生育が確認された。 | | |
| 文 献 | | | 執筆者：久米 修 |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ケカモノハシ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--------------------------------------|--|----------|--------------|
| <i>Ischaemum antheperoides</i> (イネ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 海岸砂地という特殊な環境に生育する為が開発行為や自然遷移により、産地・個体数共に急激に減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 海岸砂地に叢生して生える多年草。茎は直立し40～80cm。葉は線状披針形で互生する。花は7～9月頃に茎頂部に半円柱状の穂状花穂を2個付け、互いに接し、1本の穂にみえる。カモノハシに似るが、より太く全体に毛が多い。 | | |
| 分 布 | 全国的には、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では、直島町、土庄町、丸亀市に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査では、3箇所のみで報告で、個体数も少なく、産地・個体数共に、激減している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 海岸砂地の開発行為及び、自然遷移による生育環境の変容。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：秋山 敬典 | | |

| ミノボロ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|---------------------------------|---|----------|--------------|
| <i>Koeleria macrantha</i> (イネ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 生育環境の変化で、近年個体数が著しく減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 多年草。稈は束生し、高さ20～70cm、上部に軟毛を密生する。葉は長さ5～15cm、幅1.5～4mm、縁に疎らに軟毛がある。葉舌は0.5mm、背面上縁に微毛がある。花期は5～7月、長さ5～15cmの銀緑色の円錐花序を出す。小穂は扁平で、包穎の両側は白い。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では山地から丘陵地、平地にかけて広く点在している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の原野や丘陵地、道路やため池の土堤、耕作地周辺の草地に生育していたが、生育環境の改変により減少し、近年の確認報告は少ない。今回の調査では、確認されなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 河川改修による堤の改変や道路改修、圃場整備などの農地環境の改変、土地造成により自生地が消失する。帰化植物の侵入繁茂で被圧され衰退している。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：久米 修 | | |

| スズメノコビエ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--|--|----------|--------------|
| <i>Paspalum scrobiculatum</i> var. <i>orbiculare</i> (イネ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦⑧* 湿気が多い限られた立地に生育しており、産地ならびに個体数とも限定したものである。生育環境の変化により近年著しく減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 稈は束生し、高さ40～80cm。最下の葉鞘と葉に疎毛があることもあるが、ほとんどが無毛。花期は8～10月、花序は3～6本の総からなる。総は疎らに中軸につき、長さ3～6cm、小穂を2～3列に密につける。小穂は楕円形、長さ2～2.5mm。第2小花は褐色に熟す。 | | |
| 分 布 | 東海地方以西に分布しており、県内では山地の湿地周辺やため池の水湿地などに広く点在している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 生育地が不安定な水質地であることから、産地と個体数は稀であった。近年自然遷移により、個体数が急激に減少し、絶滅した産地がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 湿地の改変やため池改修により生育地が消失する。周辺の草本や樹木の生長に伴い、湿地の乾燥化や被圧が起り衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | 産地と個体数が著しく減少していることから新規に掲載された。 | | |
| 文 献 | 執筆者：久米 修 | | |

※選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| アイアシ <i>Phacelurus latifolius</i> (イネ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|---|--|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 海岸の後背湿地や湧水地と言う限定的な生育環境で、産地および個体数が限定している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 根茎は長く這い、稈は束生して高さ80～100cmになる大形の多年草。葉は長さ20～40cm、幅1～1.3cm、中央脈は太くて明瞭、縁はざらつかない。花期は6～10月。花序は平らに並んだ5～10本の総からなる。総は長さ10～25cm、節ごとに有柄の小穂と無柄の小穂が対になってつく。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では、島嶼をはじめ、海岸や河口に点在している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | かつては少なからず産地と個体数が見られたが、近年著しく減少し、大きな群落は無くなった。今回の調査では、新産地が確認されたが個体数は多くない。既知産地に大きな変化は無い。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 海岸の埋立や防波堤の設置、道路建設などの海辺の改変で生育地が消失する。波浪による浸食が見られる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：久米 修 | | |

| セイタカヨシ <i>Phragmites karka</i> (イネ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|--|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 近年生育箇所・個体数共に減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 茎は高さ2～4m位になる。葉は茎より斜上し、ふつう最上部も下垂しない。花は8～10月頃。円錐花序は長さ30～70cm位。ソルヨシのように地表にほふく枝を伸ばさない。 | | |
| 分 布 | 全国的には、本州から沖縄まで分布する。県内では、東かがわ市、さぬき市、高松市、坂出市、普通寺市、三豊市、観音寺市に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 池の堤や河原や河川の水辺、海岸近くの水湿地に生育するが、生育箇所や個体数は減少している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 河川や海辺の改修、堤の改修による環境の改変、道路建設、土地造成による生育箇所の減少及び自然遷移による生育環境の変容。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：秋山 敬典 | | |

| イタチガヤ <i>Pogonatherum crinitum</i> (イネ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) |
|--|--|----------|------------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 日当たりのよい乾燥した崖地やコンクリート壁などに生育しているが、産地ならびに個体数とも限定したものである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 稈は細くやや硬い。密に叢生して高さ10～25cm。節に毛があり、基部は硬い鱗片葉で包まれる。葉は稈上生で狭披針形、長さ3～5cm、幅3～5mm、短い鞘がある。花期は8～11月。花序は帯白色、小穂は黄褐色の長い芒をつける。 | | |
| 分 布 | 和歌山県以西に分布しており、県内では山地から平地まで点在している。既存情報が少なく、産地は小面積である。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の崖地や川岸の岩の隙間、ため池の余水吐や水路のコンクリート壁面など、日当たりのよい乾燥した立地に生育している。近年産地、個体数とも減少しており、絶滅した産地もある。今回の調査では、確認されなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 土石の採掘や河川改修による掘削、ため池や水路改修工事で産地が消失する。生育地が自然現象で崩落したり流失する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：久米 修 | | |

*選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| タンガザサ <i>Sasa elegantissima</i> (イネ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---|--|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 小豆島のごく限られた地域に、局地的に生育しているだけである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 稈は高さ50～80cm、細く単一で分岐しない。稈鞘は開出する長毛があり、節間と節には逆向する細毛がある。葉鞘は無毛。葉は長楕円状披針形、長さ15～22cm、幅3～5cm、下面に軟毛が密生する。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しており、県内では小豆島の寒霞渓山頂部に、局所的に生育しているのが知られているだけである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地頂上台地部の灌木が生育していない林床で、明るい林縁部に沿うように生育している。大きな変化は無いが、生育地が国立公園の園地になっており、遊歩道と展望台では踏みつけにより減少している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 公園区域の一端にあり、歩道工事や作庭工事などの森林開発や、歩行者の侵入踏圧による枯死の恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：久米 修 | | |

| シコクザサ <i>Sasa hayatae</i> var. <i>hirtella</i> (イネ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|--|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ③⑤* 徳島県剣山が基準産地で、四国にのみ生育しており、県内でも限定された地域で生育が確認されている。 | | |
| 種 の 特 徴 | ミヤマクマザサの矮性型の変種で、葉鞘に長毛と細毛を密生することで区別できる。稈は上方で分岐する。稈鞘と節、節間は無毛。葉は下面に軟毛が密生する。 | | |
| 分 布 | 四国に分布しており、県内では高松市塩江町の社叢と三木町の林床に知られているだけである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 常緑広葉樹林の林縁や落葉広葉樹林の林床に生育しており、生育地は小面積である。今回の調査では、個体数に極端な変動は見られない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 境内地の造成や車道の改良工事により生育地が消失する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：久米 修 | | |

| ケスズ <i>Sasa shikokiana</i> (イネ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|---|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 県内のごく限られた地域に局地的に生育しているだけである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 稈は高さ1.5～2m、上方で密に分岐する。稈鞘は長毛があり、逆向する細毛が混生する。節間は逆向する細毛があり、節は上向する長毛が密生する。葉鞘は細毛が密生する。葉は長楕円状披針形、下面に軟毛が密生する。 | | |
| 分 布 | 本州北部から四国にかけて分布しており、県内では三木町奥山に局所的に生育しているのが知られているだけである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 国道脇の林縁部や河川沿いの森林林床で、小面積の範囲に点在して生育している。今回の調査では、個体数に極端な変動は見られない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林伐採のほか、国道を挟んで産地が分断されており、道路改良や河川改修工事で産地が消失する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：久米 修 | | |

*選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ウシクサ <i>Schizachyrium brevifolium</i> (イネ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 日当たりの良い湿った草地に生えており、限られた生育環境にしか見られない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高さ10～40cmの小形の一年草。葉は長さ1.5～4cm、幅3～6mm、両端は半円形。花期は8～10月。花序は総になり、総は長さ1～3cm、葉の元または短い枝の先に単生する。有柄で無性の第1小穂と無柄で有性の第2小穂が対になってつく。護穎の頂部に芒がある。 | | |
| 分 布 | 関東以西に分布しており、県内では丘陵地から平地にかけて広く点在している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | ため池の堤や農道、湿った草地など比較的攪乱された立地に生育しており、群生する事があるが生育状況は不安定である。今回の調査では、山中の湿地で生育しているのが幸うじて確認された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 土石の採掘などの森林開発、湿地の改変、土地造成で生育地が消失する。周辺の草本や樹木の生長に伴い、被圧されて衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者：久米 修 |

| ヒゲシバ <i>Sporobolus japonicus</i> (イネ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 山地の日当たりのよい湿地に生育しているが、産地ならびに個体数とも限定したものである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高さ5～25cmの小形の一年草。稈は細く、枝が無いが疎らに枝分かれます。葉はやや細い線形、長さ4～10cm、幅2～4mm、まばらに長い剛毛がある。花期は8～10月。花序は線状円錐形、長さ3～7cm。小穂は密につき、暗赤褐色。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しており、県内では1971年に採集された琴平山の標本が残されているだけである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 既存情報としては琴平山の記録のみで、以後他の類似環境で確認されていない。琴平山の産状は不明で、絶滅状態にある。今回の調査では、確認されていない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 湿地の埋立や掘削、ため池改修により生育地が消失する。周辺に生育する草本や樹木の生長に伴い、湿地の乾燥化や被圧が起り衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 17 | 執筆者：久米 修 | |

| ハネガヤ <i>Stipa pekinensis</i> (イネ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|---------------------------------------|---|----------|-------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 海岸山地の開けた明るい急崖地の一部にだけ極限して生育している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高さ80～150cmになる大形の多年草。稈は直立して枝を出さない。葉は長さ30～60cm、幅7～15mm。花期は8～9月。円錐花序は直立し、半輪生状に枝を出す。小穂は円筒形で1小花からなり、長さ1cm。護穎は革質で背が円く、長さ20～25mmの芒がある。 | | |
| 分 布 | 北海道から九州にかけて分布しており、四国では香川県と徳島県で確認されている。県内では、高松市屋島の急崖地だけで知られている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 屋島山頂付近にのみ見られ、山頂直下の急崖地に100株以上が点在している。県内の他の地域では見つかっていない。個体数は多くはないが、生育地が国立公園区域であり、人為的危険度が低いことから絶滅危惧Ⅱ類と評価された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地周辺の草本や樹木の生長に伴い、被圧されると衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | 新たに県内の生育が確認された。 | | |
| 文 献 | 14 | 執筆者：久米 修 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| オニシバ <i>Zoysia macrostachya</i> (イネ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--|---|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 海岸の砂地という特異な環境に生えており、砂地の消失により近年著しく減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 硬くて長い根茎が地中深く這う多年草。根茎の節から直立した稈を砂上に立てる。稈は高さ15～40cm。葉は長さ3～8cm、幅2～5mm、先端は刺状になり、触ると痛い。花期は6～8月。最上部の葉鞘から上半部だけ出した光沢のある花穂をつける。花序は長さ3～4cm。小穂は1小花からなる。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では島嶼部を含めた海岸砂地に点在している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 県内の海岸砂地に点在しており、大きな群落をつくっている場所もある。今回の調査では、産地ならびに個体数の減少が確認され、絶滅危惧のカテゴリーが1ランク上に評価された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 海辺の開発により、自然海岸、特に砂浜の減少で生育地が消失する。波浪による砂地の流失が見られる。自生地へ他種が侵入し、被圧により衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | 減少が著しいことから、絶滅危惧のカテゴリーが1ランク上に評価された。 | | |
| 文 献 | | | 執筆者：久米 修 |

| ナガミノオニシバ <i>Zoysia sinica</i> var. <i>nipponica</i> (イネ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|--|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 近年生育箇所・個体数共に減少傾向にある。 | | |
| 種 の 特 徴 | オニシバに比べて、葉や穂や花序などは細く、葉先は刺状になるがオニシバほど触っても痛くない。葉舌は短毛の列になる花序は明らかな柄によって最上部の葉鞘からわずかに抜け出る。 | | |
| 分 布 | 全国的には、関東以西の本州、四国、九州の海岸部に分布する。県内では、小豆島町、土庄町、東かがわ市、さぬき市、高松市、宇多津町、丸亀市、観音寺市の海岸部に分布する。過去の記録では、直島町でも、生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 県内に点々と河口部及び島嶼部を含む河岸線に生育するが、生育箇所・生育数共に減少している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 河川や堤防の改修工事等による生育環境の変容、海岸堤防や道路の建設に伴う自然海岸の改変、自然遷移による生育環境の変容。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者：秋山 敬典 |

| ヒメエンゴサク <i>Corydalis lineariloba</i> var. <i>capillaris</i> (ケシ科) | | 香川県カテゴリー | 情報不足 (DD) |
|--|---|----------|-----------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 文献情報により県内の特定地域に局地的に生育していることが知られている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 地下に径7～15mmの塊茎がある多年草。ジロボウエンゴサクに類似しているが、茎は通常1本で、花茎のあるものに根出葉はなく、花茎の最下の葉は鱗片状になることで区別できる。小葉は倒卵形から卵状長楕円形、長さ5～8mm。花期は4～5月、花は紅紫色で少ない。 | | |
| 分 布 | 四国と九州に分布しており、県内では文献情報により観音寺市大野原町の記録があるだけで、他所では知られていない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 県内の生育記録として、観音寺市大野原町の文献情報が残されているが、詳細な産地は不明である。今回の調査では、確実な生育情報をえることが出来なかったことから、情報不足と判定された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | スキー場などの森林開発、針葉樹の植林により生育環境が消失する。生育地の高茎草本や樹木の生長にともない、被圧されると衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | 文献情報により新たに県内の生育が確認された。 | | |
| 文 献 | 56 | 執筆者：久米 修 | |

*選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ヤマキケマン <i>Corydalis ophiocarpa</i> (ケシ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|--|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 本種は県内において産地がごく少なく、局地的に確認されている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 茎は斜上し、高さ40～80cm、緑白色を帯びる。葉は卵形～狭卵形で、長さ10～15cm、幅5～8cmの羽状複葉。小葉は卵形の裂片に分裂して欠刻がある。花序は短い柄があり、花は4～9月、総状に咲き、緑黄色で一部は暗紫色を帯びており、長さ8～13mmの筒形、短い距がある。 | | |
| 分 布 | 県外では、関東地方以西の本州と四国に分布する。県内では、過去に小豆島町、土庄町での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山中の半日陰の岩上、しばしば石灰岩上に生える多年草。小豆島での記録はあるが、今回の調査では生育が確認できなかったことから絶滅している可能性があり、更に詳しい調査が必要と考えられる。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | スギ・ヒノキ等の造林による生育環境の変容、管理放棄による二次林および二次草地の変容、自然遷移による環境変化により消失する恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | 産地が局限しており、急激な変化に耐えられない恐れがある。 | | |
| 文 献 | 16 | 執筆者：三浦 勝美 | |

| ルイヨウボタン <i>Caulophyllum robustum</i> (メギ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|--|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 本種は県内において産地がごく少なく、局地的に確認されている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高さ40～70cm。茎葉は2～3回3出複葉であるが葉柄がほとんどなく、第1回小葉柄が長いので、1つの節より3個の複葉が輪生しているように見える。名の類葉牡丹は、この葉の形から。花は花弁が6枚で黄緑色、10個内外が集散状につき、5～7月に咲く。種子は1つの花より2個ずつつき、球形で青く液果状。 | | |
| 分 布 | 県外では、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では、過去にまんのう町での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 主として温帯の落葉広葉樹林の林床に生える。まんのう町(旧琴南町)での記録はあるが、今回の調査では生育が確認できなかったことから、絶滅している可能性があり、更に詳しい調査が必要と考えられる。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | スギ・ヒノキ等の造林による生育環境の変容、管理放棄による二次林および二次草地の変容、自然遷移による環境変化により消失する恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | 産地が局限しており、急激な変化に耐えられない恐れがある。 | | |
| 文 献 | 37 | 執筆者：三浦 勝美 | |

| サイコクイカリソウ <i>Epimedium diphyllum</i> subsp. <i>kitamuranum</i> (メギ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|---|--|-----------|-------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 生育地が限られており、そのため生育できる環境も限られている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 数本の茎が叢生し高さ15～20cm。葉は2出し、更に3出する。小葉は卵状楕円形、先端は基本尖り、基部は心臟形、縁には少数の刺毛がある。4月に総状に10数個の白花をつける。花径は12～15mm。萼片と花弁は各4個あり、同色同大。花弁は倒卵形で先端は丸く、距がない。葉の上面に短毛があるのが特徴。 | | |
| 分 布 | 県外では、徳島県に分布する。県内では、丸亀市、坂出市で生育が確認されているほか、三豊市、高松市、土庄町、小豆島町での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | バイカイカリソウとイカリソウの交雑起源の一型が固定したものと考えられている。小豆島と中・西讃地域の平野部に点在する丘陵地等に稀に生育しているのが確認されている。近年未確認の生育地が多数あるため、詳しい調査が必要と考えられる。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 伐採等による森林開発や道路改修等により生育地が減少している。また、園芸目的に採取される恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 16,82 | 執筆者：三浦 勝美 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| トキワイカリソウ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|---|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| <i>Epimedium sempervirens</i> var. <i>sempervirens</i> (メギ科) | | | |
| 選 定 理 由 | ⑤* | 香川県では小豆島という限られた地域にしか分布しないが、園芸採取や生育地の森林開発、道路建設によって絶滅する恐れがある。 | |
| 種 の 特 徴 | 常緑の多年草。高さ30cmから60cmくらい。根茎はふつう塊状。葉は2回3出複葉で、4～5月頃に総状花序を下向きにつける。花は白色から紅紫色。花弁は長い距があり、花全体が錨のように見える。 | | |
| 分 布 | 全国的には、本州の中部以西の温帯から暖帯に分布し、日本海側に多い。香川県では小豆島に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査では、現地調査による報告はなかった。過去の調査では、小豆島の1箇所での生育報告がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 園芸採取や生育地の森林開発、道路建設によって絶滅する恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 10,16 | 執筆者：末広喜代一 | |

| ルイヨウショウマ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---------------------------------|--|--------------------------------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| <i>Actaea asiatica</i> (キンポウゲ科) | | | |
| 選 定 理 由 | ⑤* | 本種は県内において産地がごく少なく、局地的に確認されている。 | |
| 種 の 特 徴 | 茎は高さ30～100cmでほとんど分枝しない。茎葉は2～3個で2～4回3出複葉。小葉は卵形～広卵形あるいは楕円状卵形で、3浅裂～中裂し、粗い鋸歯がある。花は5～6月、長さ3～10cmの短い総状花序につき、白色。果柄は赤色で、液果は球状、径約6mmで黒熟する。和名はサラシナショウマ属に似た葉から。 | | |
| 分 布 | 県外では、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では、過去にまんのう町での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 温帯林の深山の林内や林縁に生える多年草。まんのう町(旧琴南町)での記録はあるが、更に詳しい調査が必要と考えられる。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 土地開発による森林の減少・変容や、スギ・ヒノキ等の造林による生育環境の変容により、産地・個体数が減少する恐れがある。また、自然遷移による生育環境の変容により、衰退する恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | 産地が局限しており、急激な変化に耐えられない恐れがある。 | | |
| 文 献 | 37 | 執筆者：三浦 勝美 | |

| オオバショウマ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|---|--|--|-------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| <i>Cimicifuga japonica</i> var. <i>macrophylla</i> (キンポウゲ科) | | | |
| 選 定 理 由 | ⑦* | 限られた生育場所にしか見られず、そのために一部の環境でのみ生育が可能な種である。 | |
| 種 の 特 徴 | 茎は高さ120cmに達し、根出葉は1回3出複葉。小葉は卵形～円形または腎形、しばしば形がゆがみ、3～9浅裂～中裂する。花期は8～9月。花序は単純あるいは基部で分枝する穂状で、長さ30cmになる。花は白色で、無柄あるいはほとんど無柄になるのが特徴。名のとおり葉が大きい。 | | |
| 分 布 | 県外では、本州、四国、九州に分布する。県内では、まんのう町で生育が確認されているほか、高松市での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の林縁あるいは林内に生える多年草。讃岐山脈中央部の稜線付近に稀に生育する。産地・個体数ともに極めて少なく、詳しい調査が必要である。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 伐採や開発等による森林の減少や、スギ・ヒノキの植林による環境の変化等により生育地が消滅する恐れがある。また、自然遷移により環境が変容し、衰退する恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 37,45 | 執筆者：三浦 勝美 | |

*選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| サラシナショウマ <i>Cimicifuga simplex</i> var. <i>simplex</i> (キンポウゲ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|---|--|-----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 限られた生育場所にしか自生しておらず、その一部の環境にのみ生育可能なものである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 茎は高さ40～150cm。根出葉は3回3出葉。小葉は狭卵形～広卵形、3中裂～浅裂する。上部の茎葉は2～3回3出複葉、根出葉より短い柄がある。花期は8～10月。花序は単純あるいは基部で分枝する幅の狭い総状で、長さ20～50cm。花は白色で有柄なのが特徴。長さ5～10mm、白色の短毛が密生する。 | | |
| 分 布 | 県外では、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では、まんのう町、高松市で生育が確認されているほか、観音寺市での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の草原や林縁あるいは林内に生える多年草。塩江町など讃岐山脈の上部や谷に稀に生育する。個体数の多い産地もあるが、近年生育が確認できていない産地もあり、引き続き詳しい調査が必要である。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 伐採や開発等による森林の減少や、スギ・ヒノキの植林による環境の変化等により生育地が消滅する恐れがある。また、自然遷移により環境が変容し、衰退する恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 37,45 | 執筆者：三浦 勝美 | |

| シロバナカザグルマ <i>Clematis patens</i> f. <i>leucantha</i> (キンポウゲ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|---|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑤* 本種の生育地は局所に限定され、個体数は少ない。環境の変化、採集による減少で野生絶滅の恐れが増大している。2004年版の調査時確認された生育地で絶滅した場所もある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 落葉性のつる植物。褐色の茎は細長く木質化。対生する羽状複葉の葉は、卵形か狭卵形の3～5の小葉を持ち、長い柄で他のものに絡まる。新しく伸びた枝の先に、直径10cm前後の白い花を1個咲かせる。 | | |
| 分 布 | 本州(中南部)・四国・九州、朝鮮、満州、中国に分布。県内の一部地域にのみ分布。少数の生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 日当たりの良い林縁に生育。長い葉柄で他のものに絡みつき、林縁を覆うように広がる。生育地が極度に限定され、個体数も少ない。今回の調査でも少数を確認した。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 伐採など森林開発により、生育適地がせばめられるとともに、生育地の自然遷移による環境変化、園芸目的の採集が、個体数の減少する原因となっている。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 16 | 執筆者：佐藤 明 | |

| コウヤシロカネソウ <i>Dichocarpum numajirianum</i> (キンポウゲ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|--|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧IB類 (EN) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内では、讃岐山脈の限られた地域でしか、これまで確認されておらず、生育地の開発によって絶滅する恐れがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 繊細で無毛の多年草。短い地下茎がある。葉は3小葉からなり、頂小葉は卵円形、側小葉はさらに3～5小葉に分かれる。花は、4～6月に横向きに開き、花弁は5枚で、黄白色。 | | |
| 分 布 | 全国的には、三重県・奈良県・和歌山県の太平洋側、香川県・徳島県に分布する。香川県では、讃岐山脈の限られた地域にのみ分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 温帯林の林床に生える。今回の調査では、生育が確認されなかった。過去の記録では、讃岐山脈の1箇所からの生育報告がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や道路建設により生育地が消失、森林伐採や針葉樹の人工造林により生育環境の変化が起こり衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 16 | 執筆者：末広喜代一 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| トウゴクサバノオ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| <i>Dichocarpum trachyspermum</i> (キンポウゲ科) | | | |
| 選 定 理 由 | ⑦* 落葉樹林の湿り気のある明るい林床に、局地的に生育している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 多年草。地下茎は無く、茎は無毛で高さ10～20cm、4稜がある。根出葉は3小葉、葉柄の基部は広く厚い。茎葉は中部から上で対生し3小葉、托葉は合生する。花期は4～5月。花は淡黄緑色、横向きに咲く。がく片5、楕円形で長さ5～7mm。花弁は雄ずいの変形したもので黄色。袋果は2、水平に開出し長さ8～9mm。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しており、県内では高松市塩江町からまんのう町にかけての讃岐山脈上部に点在している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 生育環境に限られており、産地および個体数がごく少ない。今回の調査では、新産地が報告されたが、確認されなかった既知産地がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 道路建設やダム建設などの森林開発により生育地が消失する。森林伐採や針葉樹の植林、自然遷移により、生育環境の変化が起こると衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆: 久米 修 | | |

| サイコクサバノオ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--------------------------------------|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| <i>Dichocarpum univalve</i> (キンポウゲ科) | | | |
| 選 定 理 由 | ⑦⑧* 生育地に限られており、そのため生育できる環境も限られている。近年減少が著しい。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高さ10～20cmの繊細な多年草。花は3～5月。花は数個が集散花序につき、がく片は5個で楕円形、白色～緑白色で紫色の帯があり、斜上する。花弁の基部は広楕円形、1片からなり、先端が浅くへこみ、内曲して垂れ下がりがり、黄色、柄は白色。2個の袋果は広がって魚の尾のような形になるのが名の由来。 | | |
| 分 布 | 県外では、近畿地方以西の本州、四国に分布する。県内では、まんのう町、高松市での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 湿気が多いスギ林内などの明るい林床に多く生育し、県内では主として谷筋上部に見られ、讃岐山脈に沿って局地的に少数個体が生育する。近年生育が確認できておらず、絶滅の可能性がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林の開発による生育地の消失、森林伐採や針葉樹の人工造林による生育環境の変化により衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | 自然遷移により、産地・個体数が著しく減少している。 | | |
| 文 献 | 37 執筆: 三浦 勝美 | | |

| ミスミソウ | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|---|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| <i>Hepatica nobilis</i> var. <i>japonica</i> f. <i>japonica</i> (キンポウゲ科) | | | |
| 選 定 理 由 | ⑧* 本種は生育地の開発、園芸採集により近年減少が著しい。スハマソウ(f. <i>variegata</i>)、ケスハマソウ(f. <i>pubescens</i>)を含み、細分していない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 樹林内に生育する常緑の多年草。長い柄を持つ根生葉は叢生する。葉身は3浅裂し基部は心形。花柄の茎頂に白色や紅紫色の花を1個つける。花弁状の萼は、萼数や形状の変化が多い。 | | |
| 分 布 | 本州(中部地方以西)・四国・九州(北部)に分布。小豆島と東讃東部から西讃までの山地から阿讃山脈にかけ分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山間地の明るく湿り気を帯びた樹林林床に生育。小豆島では少なくないが、低山地では採取により個体数が著しく減少している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 土石の採掘などの森林開発による生育地の消失。自然遷移による生育環境の変化で個体数の減少もあるが、園芸目的の採取が個体数減少の原因となっている。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 37 執筆: 佐藤 明 | | |

*選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| オキナグサ <i>Pulsatilla cernua</i> (キンポウゲ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|--|--|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑧* | 以前は県内の何カ所かで生育していたと言われるが、園芸目的の採取や生育地の自然遷移によって少なくなり、現地調査でも確認されず、絶滅の危険性がある。 | |
| 種 の 特 徴 | 日当たりの良い草地に生育する多年草。根は深く伸び、根出葉を束生する。葉は羽状に深く裂け、裏面は白毛があるが、表面はやや無毛。春に釣鐘状の花を下向きに咲く。花の外側は白毛におおわれるが、内側は暗赤紫色。 | | |
| 分 布 | 本州、四国、九州に分布する。県内では、過去の記録があるが、現在生育は確認されていない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 日当たりの良い草地に生育すると言われるが、現地調査では生育が確認されなかった。過去の記録では、高松市などでの生育記録があるが、詳細は不明である。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地である日当たりの良い草地が自然遷移の進行によって少なくなること、園芸目的の採取の危険性が非常に大きい。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 16 | 執筆者：末広喜代一 | |

| ヒキノカサ <i>Ranunculus ternatus</i> var. <i>ternatus</i> (キンポウゲ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|---|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑧* | 日当たりのよい湿地に生育しているが、生育環境の改変により、近年著しく個体数が減少している。 | |
| 種 の 特 徴 | 高さ10～25cm、茎にはわずかに毛がある。根出葉は長柄があり、腎円形又は広卵形で幅1.5～4cm、掌状に3～5裂、毛を散生する。茎葉は短柄があるか又は無柄で1～2回3深裂。花期は4～5月、花弁は黄色で5枚、倒卵形長さ6～7mm。根元から数個の紡錘状に太った根と細い根が出るのが特徴。 | | |
| 分 布 | 関東地方以西に分布しており、県内では、八栗山や紫雲山などの海岸山地や丸亀平野の用水路で採集された古い標本が知られている。最近普通寺市と北町と三豊市高瀬町のため池の土堤に現存していることがわかった。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 湧水湿地や水田の畦、用水路、湿田、ため池や河川の土堤に生育していたと言うが、残されている標本の記録を見ると、元々個体数も産地も少なかったようである。今回の調査で、新たに2箇所のため池の土堤で生育しているのが確認されたが、個体数はごく少ない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地が開発を受けやすい人里近くの立地にあるため、土地造成や圃場整備、用水路やため池の改修工事により生育地が消失する。草刈りなど管理行為が放棄されると、高茎草本に被圧されて衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | 執筆者：久米 修 | |

| イワカラマツ <i>Thalictrum sekimotoanum</i> (キンポウゲ科) | | 香川県カテゴリー | 情報不足 (DD) |
|--|--|--|-------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* | 本種は限られた地域に局地的に生育しており、生育環境の変化の影響を受けやすい。 | |
| 種 の 特 徴 | アキカラマツに似るが、茎、葉柄、小葉の両面、花序、がくの外面、雄蕊、そう果などに微腺毛が密生して粘る。花期は6月でアキカラマツより早い。 | | |
| 分 布 | 全国的には、本州の一部地域(秋田・栃木・山梨・長野県)で分布する。県内では、高松市、坂出市、多度津町、三豊市で生育していることが確認された。過去には、観音寺市、普通寺市での記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の日あたりのよい乾燥した岩場や礫地に生育する。場所によっては、アキカラマツと混生しているところもあり、混同されている場合もある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 岩石採掘や道路建設などの森林開発による生育地の消滅が懸念される。 | | |
| 特 記 事 項 | 県内に生育するものが本種であるか分類学上の疑問があり、DDとした。 | | |
| 文 献 | | 執筆者：林 鈴以 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| タマカラムツ <i>Thalictrum watanabei</i> (キンポウゲ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|---|--|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑤* 本種は県内の産地が一部地域に局限されており、限られた区域に局地的に生育している。個体数はごく少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | ミヤマカラムツに似ているが、全体が小さく無毛で、草丈は20～30cm。根は所々球状または紡錘状に肥大し、地下匍枝を出さない。そう果は3～6個。果体は披針形で長さ3～4mm。基部に1.5～2mmの細い柄があり、花柱は柱頭を含めて長さ1～1.5mmで、先は曲がらない。花期は6～8月。 | | |
| 分 布 | 全国的には、本州の一部(近畿地方)、四国、九州に分布する。県内では高松市での生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地高所の落葉広葉樹林で、半日蔭の登山道沿いにポツポツと小群落が生育している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 林内道路の建設や公園用地としての整備などの森林開発により生育地が消失、生育地の自然崩落、自然遷移により周辺の樹林が生長して日照条件が悪化して衰退することなどが懸念される。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：林 鈴以 | | |

| ツゲ <i>Buxus microphylla</i> subsp. <i>microphylla</i> var. <i>japonica</i> (ツゲ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--|--|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 県内では、島嶼部の限られた地域でしか生育が確認されておらず、庭木としての採取や生育地の森林開発などによって絶滅する恐れがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 常緑低木。葉は対生。倒卵形で先が少しへこみ、鋸歯はない。春に開花、花弁はない。葉に有毒成分を含む。材は堅くて木目が細かいために、櫛や印鑑などの細工物に使われる。庭木にも利用される。 | | |
| 分 布 | 関東地方以西の本州、四国、九州に分布する。香川県では島嶼部の限られた地域でのみ分布が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | やや乾燥した山地に生育し、石灰岩地や蛇紋岩地に多いといわれるが、確認された県内の生育地は谷筋の樹林下で、本来の生育地ではない可能性がある。個体数は多いが、小さな個体しか見られない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 細工物の材料や庭木としての採取のほか、生育地の森林開発などによって、絶滅する恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：末広喜代一 | | |

| ヤマシャクヤク <i>Paeonia japonica</i> (ボタン科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--|---|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑥* 園芸採取や、生育地での森林開発、人工造林、ダム建設などによって近年減少しつつあり、絶滅の恐れがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 落葉樹林の林床に生育する多年草。葉はふつう2回3出複葉で、両面無毛。裏面は白色を帯びる。小葉の先はとがる。根茎は横にはい、太い根を出す。5月ごろに大きい白い花が咲く。裂開した果実に成熟した青黒い種子と、紅色の不稔種子をつける。 | | |
| 分 布 | 全国的には関東以西の本州、四国、九州の冷温帯域に分布する。県内では讃岐山脈沿いに分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | やや明るい落葉樹林の林床に生育する。石灰岩地帯を好むといわれるが、県内ではレキの多い斜面や河床で生育している。現地調査では、観音寺市、まんのう町、高松市、綾川町で生育が確認された。過去の記録では、三木町でも確認されている。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 園芸採取の危険性が最も大きいのが、そのほか、生育地の森林開発、人工造林、ダム建設などによって減少する危険がある。また、遷移の進行によって林床が暗くなることによっても減少する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：末広喜代一 | | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ベニバナヤマシャクヤク <i>Paeonia obovata</i> (ポタン科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|--|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内のごく限られた地域にしか生育が確認されておらず、個体数も少ないため、園芸採取などにより絶滅する恐れがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 落葉広葉樹林の林床に生育する多年草。茎は高さ30～50cm位。葉は中部に3個の有柄葉があり、2回3出複葉。葉の裏は無毛のものど有毛のものがある。4～5月頃、茎の頂に淡紅色の花を1個つける。柱頭はやや長く先は渦状に巻く。 | | |
| 分 布 | 全国的には、北海道から、九州まで分布する。香川県では、讃岐山脈沿いに、ごく稀に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 現地調査では、まんのう町の1箇所ですべて確認された。過去の記録では、旧塩江町で生育の記録がある。いずれも個体数は少ない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 園芸採取のほか、森林伐採や、自然遷移などにより、生育環境が悪化して絶滅する恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 16 | 執筆者：末広喜代一 | |

| コウヤミズキ <i>Corylopsis gotoana</i> var. <i>gotoana</i> (マンサク科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|---|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 文献情報として記録されているだけで、産地ならびに個体数とも限定したものである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高さ2～3mの落葉低木。枝は無毛。葉は広卵形、長さ4～9cm、幅2.5～7cm、若い時には両面に毛がある。下面はやや粉白色を帯び、葉縁に芒状の歯牙があり、先は急鋭頭。花期は4月。花は淡黄色で、葉より先に開く。葯は紅紫色。花序は下垂して5～10花がつく。 | | |
| 分 布 | 中部地方以西に分布しており、県内では綾川町の1箇所に記録されているだけである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 文献情報として綾川町の1箇所で記録されているだけで、他に報告はない。今回の調査では、確認されなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林の伐採による刈払い、園芸用の掘り取り採取、針葉樹の植栽による被圧、周辺樹木の生長による被圧が想定される。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 56 | 執筆者：久米 修 | |

| マンサク <i>Hamamelis japonica</i> var. <i>japonica</i> (マンサク科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|--|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本県ではこれまで限られた生育地でしか確認されておらず、個体数も少ないため、生育地の森林開発、人工造林、自然遷移によって、絶滅する危険性がある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 落葉高木。葉は互生。葉の形は菱形状の円形で基部は左右不相称。波状の粗い鋸歯がある。両面に星状毛が散生する。花は早春に展葉前に枝いっぱい咲く。黄色い線状の花びらを4枚つける。葉は秋に黄葉する。 | | |
| 分 布 | 全国的には本州のおもに関東地方以西の太平洋側、四国、九州に分布する。本県ではこれまで山地の2箇所ですべて確認されていない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地のやや乾燥した斜面や尾根に生育する。庭木や公園樹として植栽される。現地調査による生育報告はなかった。過去の記録では、さぬき市、まんのう町での生育記録がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 県内の非常に限られた山林内でしか生育しておらず、森林開発や人工造林などによって絶滅する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 16 | 執筆者：末広喜代一 | |

*選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| カツラ <i>Cercidiphyllum japonicum</i> (カツラ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|---|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* | 本県では讃岐山脈の暖温帯上部から冷温帯域の非常に限られた生育環境でしか生育の可能性がなく、生育地の森林開発や人工造林によって絶滅する可能性がある。 | |
| 種 の 特 徴 | 落葉高木。長枝につく葉は対生。葉の形は、ほぼ円形だが、基部がハート形で細かい鋸歯が目立つ葉と基部が切形で鋸歯が目立たない葉の2形ある。葉柄は長い。雌雄異株。花弁もがくもない花が春の開葉前に咲く。果実には翼がある。 | | |
| 分 布 | 全国的には北海道、本州、四国、九州に分布する。北海道や東北地方に多く、西日本では山地に分布する。日本固有。本県では、讃岐山脈に近い数ヶ所でしか生育情報がない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 暖温帯上部から冷温帯の山地に生育する。現地調査では、まんのう町、高松市、東かがわ市で生育が確認された。個体数は少ない。過去の記録では、三木町、旧内海町でも生育が確認されている。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地の森林開発や人工造林によって絶滅する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 37 | 執筆者：末広喜代一 | |

| アワモリショウマ <i>Astilbe japonica</i> (ユキノシタ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|---|--|--|-------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* | 谷川や河川の溪岸に局地的に生育しており、産地ならびに個体数とも限定している。 | |
| 種 の 特 徴 | 高さ25～60cmの多年草。葉は2～4回3出、小葉は長楕円形で両端が尖り、厚くて光沢がある。鋭い重鋸歯があり、脈上に疎らに短い剛毛がある。花期は5～6月。花は円錐花序、白色、花軸に腺毛を密生する。花弁は狭匙形で長さ3～4mm。瘦果は2裂して長さ3～4mm。 | | |
| 分 布 | 近畿地方以西に分布しており、県内では高松市塩江町や綾川町、まんのう町の岸辺の裸岩地で確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 生育環境が限定していることから、産地・個体数とも稀である。今回の調査では、新産地が報告されたが、絶滅した既知産地があった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 河川の護岸改修やダム建設、道路建設工事により生育地が消失する。洪水時に冠水するような生育立地では、地上部が流失して衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | 執筆者：久米 修 | |

| ジンジソウ <i>Saxifraga cortusifolia</i> var. <i>cortusifolia</i> (ユキノシタ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|---|---|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* | 山間部の日陰の斜面や岩上という比較的限られた環境にしか生育しないが、園芸採取、ダム建設、森林開発などによって減少し、絶滅する危険性がある。 | |
| 種 の 特 徴 | 山の日陰の斜面や岩上に生育する多年草。葉は長い葉柄があって根生し、7～11に浅・中裂する。全体にまばらに毛がある。秋に白色の花を開花。上3枚の花弁は小さく、基部に黄色または赤色の斑点がある。下2枚は長く斑点はない。 | | |
| 分 布 | 全国的には、関東以西の本州、四国、九州に分布する。県内では讃岐山脈近くの限られた範囲に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山間部の谷沿いの岩場などに生育する。現地調査では、まんのう町、高松市で生育が確認された。過去には土庄町からの報告もある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 園芸採取のほか、生育地の森林開発、ダム建設によって絶滅する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 16 | 執筆者：末広喜代一 | |

*選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ミセバヤ <i>Hylotelephium sieboldii</i> var. <i>sieboldii</i> (ベンケイソウ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧ⅠB類 (EN) |
| 選 定 理 由 | ③⑤* 園芸植物として古くから知られているが、全国的にも限られた地域にしか自生せず、さらに本県でも限られた地域にしか生育しないうえに、園芸採取や生育地の森林開発によって減少しており、絶滅する危険性がある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 岩上にはえる多年草。多肉質の葉は3輪生で柄はなく、倒卵形から扇形で、緑白色、円頭で、基部は広いくさび形、低い波状の鋸歯がある。秋に茎の先にピンク色の集合花を球形につける。 | | |
| 分 布 | 全国的には香川県の限られた地域のほか、群馬県、奈良県にも分布するが、古くから栽培されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 乾燥した集塊岩地域の岩上に生育する。現地調査では、小豆島町の数ヶ所で生育が確認されているが、手の届くような所では、ほとんど見られない。人の手が届かないような高い崖地では個体数の多いところもある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 園芸採取のほか、生育地の森林開発によって絶滅する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | 「香川県希少野生生物の保護に関する条例」によって指定希少野生生物に指定されている。 | | |
| 文 献 | | | 執筆者：末広喜代一 |

| ミツバベンケイソウ (ショウドシマベンケイソウを含む) <i>Hylotelephium verticillatum</i> var. <i>verticillatum</i> (ベンケイソウ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|--|--|-----------|-------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 山中の岩上など、限られた生育場所にしか見られず、そのため特定の環境下でのみ生育が可能である。ここでは、ショウドシマベンケイソウ (<i>Helotelephium verticillatum</i> var. <i>lithophilos</i>) を含み、細分していない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 花茎は長さ20～80cmで直立(稀に斜上)する。葉は柄があり、普通3輪生または対生し、裏面は白緑色。縁にまばらな鋸歯がある。花期は8～9月。花序は複散房状で大型。花弁は広披針形で、淡黄緑色～淡緑色。裂開直前の葯は淡黄色、稀に暗褐色。子房の基部は次第に細まる。 | | |
| 分 布 | 県外では、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では、高松市、小豆島町で生育が確認されているほか、普通寺市、坂出市、土庄町での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 讃岐岩質安山岩の地域に分布し、岩の露出した林中、林縁、溪流沿いの岩上などに生える。以前は小豆島の限られた所でのみ自生が確認されていたが、今回の調査で島内だけでなく西讃・東讃地域の丘陵地帯数箇所でも、新たに生育が確認された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林の開発等により生育地が減少したり、自然遷移により生育環境が変容したりなどで、生育が困難になる危険性がある。また、園芸採取による減少の危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | 調査の進展により、個体数が相当ある事が判明し、園芸採集圧も著しくない。 | | |
| 文 献 | 37,47 | 執筆者：三浦 勝美 | |

| ツメレンゲ <i>Orostachys japonica</i> (ベンケイソウ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|--|-----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑦⑧* 限られた生育場所にしか見られず、そのため特定の環境下でのみ生育が可能である。また、近年減少傾向にある。 | | |
| 種 の 特 徴 | ロゼット状の葉は多肉質。夏葉は披針形で長さ2～6cm、先は針状。冬場は小さく長さ1cm以下、先端部はガラス質で、先は針状。10～11月にロゼットの中心から塔状の花茎が出て、白い花が密集してつく。花は5数性、花弁は披針形で長さ5～6mmになる。裂開前の葯は濃い赤色で目立つ。 | | |
| 分 布 | 県外では、関東地方以西の本州、四国、九州に分布する。県内では、多度津町、まんのう町、高松市、土庄町、小豆島町で生育が確認されているほか、丸亀市、三豊市での生育記録がある。古くから観賞用に栽培されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 日当たりのよい岩上や屋根の上に生える多年草。県内では主に島嶼部の岩上や、海岸近くの寺社、古民家の屋根の上、城の石垣などに多数生育するが、生育地や個体数が減少傾向にある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 自然遷移による生育環境の変容、園芸採集による個体数の減少の危険がある。 | | |
| 特 記 事 項 | 園芸採集圧の増加が危惧されるが、個体数は相当数ある。 | | |
| 文 献 | 16 | 執筆者：三浦 勝美 | |

※選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| カンザシキリンソウ <i>Phedimus</i> sp. (ベンケイソウ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|---|------------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ③⑦⑧* 生育地が日本国内において局限されている種である。県内でも限られた生育場所にしか見られず、そのため特定の環境下でのみ生育が可能である。また、近年減少が著しい。 | | |
| 種 の 特 徴 | かつてヒメキリンソウとして扱われたことがあるが、染色体数の違い、地理的分布の違いから区分されている。母種のキリンソウは茎は直立し、葉は対生する。花期は7月で、花は集散状にやや密につき、花弁は離生し、濃黄色。 | | |
| 分 布 | 県外では、京都府の山陰側に分布する。県内では、小豆島町、普通寺市で生育が確認されているほか、高松市での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 讃岐岩系の岩場に生育している多年草。岩壁の露出した集塊地など県内の限られた場所に点在している。今回の調査では新産地も確認されたが、近年生育が確認できていない既産地もあるため、詳しい調査が必要である。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や土地造成、植生の変容など自然遷移により生育環境が改変し、生育地が減少している。また、園芸採取による減少もある。 | | |
| 特 記 事 項 | 自然遷移により産地・個体数が著しく減少している。 | | |
| 文 献 | 16,26 | 執筆者: 三浦 勝美 | |

| タイトゴメ <i>Sedum japonicum</i> subsp. <i>oryzifolium</i> var. <i>oryzifolium</i> (ベンケイソウ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|--|------------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 限られた場所にしか自生が見られないので、特定の環境下でなければ生育できない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 茎は長く匍匐し、直立または斜上する枝を多数分枝。花枝は長さ5～12cm。葉は互生し枝の上部に密生してつき、ごく短い距があり柄はなく円柱状、辺縁部は平滑で突起はない。花期は5～7月。花序は頂生の集散状で花序の枝は短く、3～10個の濃黄色の花をつける。花は5数性。普通柄はない。裂開直前の葯は濃黄色。 | | |
| 分 布 | 県外では、関東地方以西の本州、四国、九州に分布する。県内では、観音寺市、東かがわ市で生育が確認されているほか、高松市、さぬき市での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 海岸の砂地、岩上などに生える多年草。荘内半島では絶滅したことが確認されており、今回の調査では数箇所しか生育が確認できなかった。また、東かがわ市で確認された個体は、よく似た帰化植物の可能性が高く、更なる調査が必要である。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 海岸の堤防や道路建設・自然海岸の改変等によって生育環境が大きく変わっているので、生育地が消滅しつつある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 16,96 | 執筆者: 三浦 勝美 | |

| セトウチマンネングサ <i>Sedum polytrichoides</i> subsp. <i>yabeaenum</i> var. <i>setouchiense</i> (ベンケイソウ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|---|------------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ③⑤⑦* 全国的にも限られた地域にしか自生せず、さらに本県でも限られた地域、場所にしか生育しない。また、特定の環境下でなければ生育できない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 茎は直立し、普通赤褐色を帯びる。葉は互生して赤褐色を帯び、花茎の上部に集まることなく全体にやや均等に配置し広線形から線状倒披針形、長さ0.6～1.3cm、幅1～2mm。花期は6～7月。花序は集散状。花は5数性、ほぼ柄はない。花弁は離生し黄色で時に先端は赤色を帯びる。裂開直前の葯は橙黄色または橙色。 | | |
| 分 布 | 県外では、本州の瀬戸内海地域に分布する。県内では、土庄町、小豆島町で生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 小豆島の山地の岩上でのみ生育が確認されている。小豆島では産地・個体数は少なくないが、香川県の他地域には知られていない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 自然遷移による生育環境の変容により、減少する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 16,26 | 執筆者: 三浦 勝美 | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| オグラノフサモ <i>Myriophyllum oguraense</i> (アリオトウグサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 透明度の高いアルカリ性の水質のよいため池に生育しており、産地ならびに個体数が限られている。 | | |
| 種 の 特 徴 | フサモに類似した沈水植物。花序の気中葉が緑白色であること、殖芽の形態が長さ2.5～8cmの細長い棒状で手触りが硬いことで区別できる。水中葉は4～5輪生で羽状に細裂し、長さ2～4cm。花期は7～9月、気中葉のある花序を水上に出して、上部に雄花、下部に雌花をつける。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しており、県内では丘陵地のため池を中心に点々と分布している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 比較的自然環境のよい小～中規模なため池に生育しているが、フサモよりは少ない。生育環境がよければ大きな群落になることがあるが、産地に限られる。今回の調査では、新産地が報告されたが、絶滅や減少した既知産地が複数報告された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 水質汚濁や富栄養化により消滅する。ため池改修による人工護岸化が生育環境の悪化を起こしている。ため池の管理放棄により水面が閉鎖されると日光不足となり衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：久米 修 | | |

| タチモ <i>Myriophyllum ussuriense</i> (アリオトウグサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|---|---|----------|-------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑧* 透明度の高い貧栄養の水質のよいため池に生育しているが、近年産地ならびに個体数が著しく減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 水中と陸上で異形葉を出す両生植物で、水中では茎の長さ20～60cm、陸生形は高さ5～15cm。花期は6～9月で雌雄異株、花は気中葉の腋につく。陸生形は冬に殖芽をつくる。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では綾川町から東の地域に生育していることが知られており、これより西の地域では記録がない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 小規模な透明度の高い貧栄養の水質のため池に生育している。東かがわ市では既知産地が比較的多かったが、今回の調査では絶滅や減少した既知産地が複数報告された。水質悪化により産地・個体数が急激に減少していることから、絶滅危惧のカテゴリーが1ランク上に評価された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 水質汚濁や富栄養化により消滅する。ため池改修による人工護岸化が生育環境の悪化を起こしている。ため池の管理放棄により水面が閉鎖されると日光不足となり衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | 産地ならびに個体数が急激に減少しており、絶滅危惧のカテゴリーが1ランク上に評価された。 | | |
| 文 献 | 執筆者：久米 修 | | |

| フサモ <i>Myriophyllum verticillatum</i> (アリオトウグサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|--|---|----------|-------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 比較的水質のよいため池や湧水地に生育しており、産地ならびに個体数とも限定している。 | | |
| 種 の 特 徴 | オグラノフサモに類似している沈水植物。花序の気中葉が緑色で、殖芽の形態が長さ1.5～3cmの根棒状をしていることで区別できる。水中葉は4～5輪生で羽状に細裂し、長さ2～6cm。気中葉は長さ5～15mm。花期は6～9月、長さ4～12cmの花序を水上に出し、上部に雄花、下部に雌花をつける。 | | |
| 分 布 | 北海道から本州、四国に分布しており、県内ではまんのう町から東の地域に広く点在し、高松市一宮町など都市部でも確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 比較的自然環境のよい小～中規模のため池に生育しているが、時に湧水のある堀や水路にも生育している。生育環境がよければ大きな群落になることがあるが、産地に限られる。今回の調査では、新産地が報告されたが、絶滅や減少した既知産地が複数報告された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 水質汚濁や富栄養化により消滅する。ため池改修による人工護岸化が生育環境の悪化を起こしている。ため池の管理放棄により水面が閉鎖されると日光不足となり衰退する。出水や用水路の改修工事で生育地が消失したり、湧水の閉塞で水質が悪化して衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：久米 修 | | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ハマビシ <i>Tribulus terrestris</i> (ハマビシ科) | | 香川県カテゴリ | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|---|---------|----------------|
| | | 環境省カテゴリ | 絶滅危惧ⅠB類 (EN) |
| 選 定 理 由 | ⑦⑧* 海岸沿いの砂地という限定された環境に生育する種であり、近年著しく減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 海岸の砂地に生育する一年草。茎は地表を放射状に1m位延びる。葉は偶数羽状複葉で3～5対の小葉の葉と6～8対の小葉の葉が対生する。花は7～10月頃葉腋に黄色の5枚の花弁の花を付ける。果実はヒシの実に似て固く太い刺がある。 | | |
| 分 布 | 全国的には千葉県及び、福井県以西の本州、四国、九州に分布する。県内では、丸亀市の島嶼部に分布する。過去の記録では、旧詫間町、旧大内町でも、生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 島嶼部の海岸砂地及び、海岸近くの砂地の墓地に点在、生育する。主に生育地が墓地のため、墓地管理の除草により、個体数の減少が著しく、絶滅している箇所がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 海岸堤防や道路整備による、生育地の減少、墓地整備による、環境の変容、除草剤などの農薬汚染が考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | 生育環境の悪化により、産地・個体数共に著しく減少している。 | | |
| 文 献 | | | 執筆者：秋山 敬典 |

| ハマナタマメ <i>Canavalia lineata</i> (マメ科) | | 香川県カテゴリ | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|---------|----------------|
| | | 環境省カテゴリ | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 海岸の砂浜という限られた生育環境に生育するが、県内では、おもに島嶼部にわずかの個体数しか生育が確認されておらず、海辺の改変によってさらに減少し、絶滅する可能性がある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 海岸の砂浜に生育するつる性の多年草。茎は長く伸び、短い逆向きの毛をまばらにつける。葉は3小葉からなり、厚く、表面はやや光沢がある。花は淡桃色。逆さになって開花する。長さ5～10cmの大きな豆果をつける。種子も大きい。 | | |
| 分 布 | 全国的には、関東以西の本州、四国、九州、沖縄の海岸に分布する。本県ではおもに島嶼部の砂浜に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 海岸の砂浜の上部のやや安定したところに生育する。現地調査では、丸亀市、直島町、東かがわ市、さぬき市、土庄町の島嶼部や海岸に生育しているのが確認された。過去の記録では、観音寺市、三豊市、高松市での生育記録がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 海岸、とくに砂浜の開発によって絶滅する危険がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者：末広喜代一 |

| カワラケツメイ <i>Chamaecrista nomame</i> (マメ科) | | 香川県カテゴリ | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|---|--|---------|-------------|
| | | 環境省カテゴリ | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 近年産地・個体数共に著しく減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 原野や道端に生える1年草。茎は30～60cm位で有毛。葉は偶数羽状複葉で裂片は多数。8～10月頃葉腋に1～2個の黄色の小花を付ける。豆果は扁平で、短毛があり長さ3～4cm。 | | |
| 分 布 | 全国的には、本州、四国、九州に分布する。県内では、小豆島町、高松市、善通寺市、まんのう町に分布する。過去の記録では、旧志度町、旧綾上町でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 前回の調査では3箇所での報告があったが、今回の調査では前回の調査地の報告はなく、他の3箇所での報告で、2箇所では数株の分布が確認されている。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 河川・ため池の改変、土地造成、管理放棄や自然遷移による生育環境の変容。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者：秋山 敬典 |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| イヌハギ <i>Lespedeza tomentosa</i> (マメ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|---|------------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑧* 近年個体数が減少してきている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高さ1.5mに達する半低木。全体に黄褐色の軟毛がある。葉は3出複葉で、小葉は長さ3～6cmの長楕円形、先は鈍い。花期は7～9月。花は帯黄白色、長さ8～10mm、長い偽総状花序に多数つく。閉鎖花はやや多数が葉腋に集まってつく。豆果は楕円形で1種子を入れ、長さ4～5mm。閉鎖花の種子はやや小さい。 | | |
| 分 布 | 県外では、本州、四国、九州、沖縄に分布する。県内では、三豊市、丸亀市、まんのう町、さぬき市、東かがわ市で生育が確認されているほか、坂出市、高松市、観音寺市での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 川原や海に近い日当たりのよい砂地に生える。土器川を中心に、県内各地の河川の川原・溜池内外の草地に点在している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 河川や溜池の改修、土地造成等により生育地が消滅する恐れがある。また、管理放棄による二次草原の変容や自然遷移による木本類の侵入、生長などにより生育環境が大きく変わると生育が困難になる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 16 | 執筆者: 三浦 勝美 | |

| アズキナシ <i>Aria alnifolia</i> (バラ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--------------------------------------|--|-----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦⑧* 海岸や島嶼部に局地的に生育しており、産地ならびに個体数とも限定している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高さ10mになる落葉高木。若枝に白色の皮目が散在するが、生長すると不明瞭になる。葉は互生し楕円形、短鋭尖頭、重鋸歯縁、長さ5～9cm。花期は5～6月、花序は散房状。花は白色、花序に疎らにつく。花弁は5、花柱は2。果実は長楕円形、長さ6～10mm、紅く熟す。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では小豆島、小豊島、豊島、瀬居島、本島などの島嶼で確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 県内の内陸部では確認されておらず、島嶼などの海岸近くの山地で確認されている。生育地は松くい虫被害で枯死した松林跡地と推定される。今回の調査では確認されておらず、自然遷移により減少している事が推定されることから、新規に掲載した。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林伐採による刈払い、針葉樹の植林、混生しているウバメガシなどの常緑樹の生長により被圧されると衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | 自然遷移により減少している事が想定されることから、新規に掲載した。 | | |
| 文 献 | 37 | 執筆者: 久米 修 | |

| クサボケ <i>Chaenomeles japonica</i> (バラ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|---|---|------------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 過去に島嶼部の限られた地域に生育していたといわれる。樹高が低く、明るい林や草原を好むため、自然遷移の進行にともなう、明るい雑木林や草原が少なくなることによって、絶滅している可能性が高い。 | | |
| 種 の 特 徴 | 落葉小低木。栽培される中国原産のボケほどは大きくならない。葉は互生。倒卵形で、ふちに鈍い鋸歯がある。茎は地面をほうか、斜上する。とげ状の小枝をつける。5月頃に朱赤色の花が咲く。花卉の基部が細くなり、花卉のあいだが見える。花後、ゆがんだ球形の果実が出来る。 | | |
| 分 布 | 全国的には本州、四国、九州に分布する。本県では過去に島嶼部の限られた地域に分布していたといわれる。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地や丘陵部の明るい雑木林や草原に生育するといわれる。県内の過去の記録も、そのような環境に生育していたと考えられる。現地調査では確認されておらず、現状は不明である。生育環境の状況から考えて、生育地の遷移の進行によって既に絶滅している可能性が高い。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 自然遷移による明るい雑木林や草原の消失、園芸用の採取が考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 16,22 | 執筆者: 末広喜代一 | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| バクチノキ | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|-------------------------------|---|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| Laurocerasus zippeliana (バラ科) | | | |
| 選 定 理 由 | ⑦* 島嶼部のほか、海岸部に近い社寺林内に確認されるのみで、森林開発などによって減少する可能性がある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 常緑高木。花は房状にまとまってつく。花弁が小さく、長くつきでた雄しべが目立つ。秋に開花し、翌春の5月頃に実が熟す。幹は樹皮が剥がれ落ち、まだら状の模様になる。 | | |
| 分 布 | 全国的には関東南部以西の本州、四国、九州、琉球の低山地から山地に自生する。県内では、島嶼部のほか、社寺にもまれに生育している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 海岸に近い斜面に生育する。現地調査では、善通寺市、東かがわ市、さぬき市での生育が確認されている。過去の記録では、旧三野町、高松市、土庄町での生育記録がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地での森林開発、および自然遷移によって減少する可能性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆: 末広喜代一 | | |

| ヒメヘビイチゴ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|-----------------------------|---|-----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| Potentilla centigrana (バラ科) | | | |
| 選 定 理 由 | ⑤⑧* 本種は県内において産地がごく少なく、局地的に確認されている。近年個体数が減少してきている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 茎は蔓になり、長く伸びて地を這い、分枝する。葉は3小葉からなり、互生し、少し開出毛がある。小葉は長さ1~3cmで薄く、倒卵形で鋸歯があり、裏面は粉白色。花は黄色の5弁花で直径約7mm、葉と対してつく。小花柄は細く、長さ1~4cm。萼片と細い副萼片は平開する。 | | |
| 分 布 | 県外では、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では、過去に観音寺市、まんのう町での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の草原や水田の畔など、やや湿った場所や林縁に生える多年草。今回の調査では生育が確認されなかったことから、絶滅の可能性はある。詳細な調査が必要である。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 道路建設等により、生育地が減少したり、自然遷移により生育環境が悪化して減少している危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | 今回の調査で確認されておらず、自然遷移等により減少している事が想定される。 | | |
| 文 献 | 16 | 執筆: 三浦 勝美 | |

| ツチグリ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|---------------------------|---|-----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| Potentilla discolor (バラ科) | | | |
| 選 定 理 由 | ⑦* 乾いた草原という限られた環境にしか生育できず、生育地の自然遷移などによって個体数が減少し、絶滅する恐れがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 日当たりの良い乾いた草原に生育する多年草。根は肥厚する。根は皮をむいて、生のままで食べられるので、土栗という。茎は高さ10~30cm位。葉は3~9小葉の羽状複葉。下面は綿毛を密生する。4~6月頃、黄色い集散花序をつける。 | | |
| 分 布 | 全国的には、本州、四国、九州に分布する。県内では、丘陵部の草地に稀に見られる。生育環境としては、河川の河原、ため池の土手なども重要な生育地と考えられるが、前回の調査でも、今回の調査でもそのような環境での生育は確認されなかった。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 現地調査では、小豆島町の1ヶ所では確認されなかった。過去の調査では、坂出市、高松市、旧飯山町での生育が確認されている。絶滅したところもある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 草原に生育する小型の植物であるため、草刈りなどの管理放棄、生育地の自然遷移によって、他の植物の日陰になって衰退するというのが、最も大きな危険性である。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 16 | 執筆: 末広喜代一 | |

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| シロヤマブキ <i>Rhodotypos scandens</i> (バラ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|---|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧 I B類 (EN) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内の限られた地域に生育するが、園芸採取、生育地の森林開発、自然遷移によって減少し、絶滅する可能性がある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 落葉性の小低木。幹は叢生する。葉は対生。葉の形は卵形で先はとがる。鋭い重鋸歯がある。花は白色で、花弁は4枚。秋に黒い果皮の乾果ができる。ヤマブキの白花品は一見よく似るが、花弁が5枚で、葉が互生する点が違っている。1個体でもよく種子をつける。 | | |
| 分 布 | 全国的には本州の一部の地域に分布する。県内では海岸に近い山林にまれに生育する。よく庭で観賞用に栽培されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 県内では海岸に近い山林に生育する。他県では石灰岩地域に生育しているが、庭でも普通に生育することから、特に土壌条件を選ばないと考えられる。現地調査では、坂出市、高松市で生育が確認された。過去には旧大川町での生育記録がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 園芸採取のほか、生育地の森林開発、自然遷移によって絶滅する危険性が大きい。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：末広喜代一 | | |

| ビロードイチゴ <i>Rubus corchorifolius</i> (バラ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) |
|---|---|----------|------------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 山地の林縁に局地的に生育しており、産地ならびに個体数ともごく少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高さ2mになる落葉低木。茎には丈夫な刺があり、全体に短毛がある。前年枝にビロード状の短毛が残る。葉は卵形～長卵形、長さ3～10cm、短鋭尖頭、多くは分裂しないが時に浅く3裂する。花期は4～5月。子房に密毛があり、果実は球形で赤熟する。 | | |
| 分 布 | 静岡県以西に分布しており、県内ではまんのう町と観音寺市大野原町だけで知られている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 日当たりのよい、山ぎわの林縁や溪流縁に生育している。産地は少数で、生育範囲が点状に狭く、個体数も少ない。今回の調査では、新産地が報告されたが、絶滅した既知産地があった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 土地造成工事、河川の護岸工事、道路改修工事で生育地が消失する。生育地周辺の樹木が生長すると被圧されて衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：久米 修 | | |

| ハルニレ <i>Ulmus davidiana</i> var. <i>japonica</i> (ニレ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) |
|--|--|-----------|------------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 讃岐山脈の限られた地域でしか生育が確認されておらず、生育地の森林開発、人工造林および自然遷移によって絶滅する危険性がある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 落葉高木。葉は互生。春に開花。アキニレより葉が大きい。鋸歯が重鋸歯であること、先端が急に尾状にとがることによってアキニレと区別される。果実には翼があり、種子は翼の真ん中より上にある。樹皮は縦に細かい割れ目がある。 | | |
| 分 布 | 全国的には北海道から九州まで分布するが、北海道や東北地方に多い。本県では讃岐山脈の局地的な生育情報がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 一般に肥沃な沖積平野や山麓などに生育するといわれているが、県内では讃岐山脈沿いの山林に生育する。現地調査では、まんのう町の限られた山林に生育しているとの報告があった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地の森林開発、人工造林および自然遷移が要因として考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 16 | 執筆者：末広喜代一 | |

※選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ケグワ <i>Morus cathayana</i> (クワ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--|---|-----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は県内の限られた場所に生育し、個体数は極めて少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 落葉高木、樹高が10m以上になることもある。若枝は短毛が多い。葉は互生、低い鈍鋸歯縁。葉の両面に短毛、特に裏面に軟短毛密生。葉柄にも軟短毛密生。雌雄異株。雄花序は新葉と共に新枝の下部に2～4。雌花序は新枝の下部に3～4。集合果は円柱形、長さ1～1.5cm、赤色から紫黒色、黒色。 | | |
| 分 布 | 本州(和歌山県、中国地方)・四国・九州、中国中部に分布。島嶼部と、丸亀市にまれに生育する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 樹林内に単木で生育しているが、生育数は数本と極めて少ない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発、道路拡張などによる開発などで絶滅の恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 37 | 執筆者: 佐藤 明 | |

| ヤマトキホコリ <i>Elatostema laetevirens</i> (イラクサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|---|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 湿り気が多い溪流沿いと言う限定された環境に生育し、産地および個体数とも限られたものである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山地の陰湿地に生える多年草。茎はほとんど無毛で長さ25～35cm。葉は無柄、斜長楕円形、鋭頭、両面疎らに短毛がある。花期は8～10月。葉腋に無柄の雌雄混生の花序をつける。総苞の縁に短毛がある。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内ではさぬき市寒川町と高松市塩江町の数箇所確認されているだけである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の林床や溪流沿いなど湿り気が多い立地に生育している。さぬき市で1箇所、高松市塩江町で3箇所確認されているが、個体数はごく少数である。今回の調査では、新しい産地が報告されたが、絶滅した既知産地がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や道路改修工事により生育地が消失する。生育地が乾燥したり、周辺の樹木が生長すると被圧されて衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | 執筆者: 久米 修 | |

| イワガネ <i>Oreocnide frutescens</i> (イラクサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|--|--|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 県内のごく限られた地域に局地的に生育していることが知られているだけである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高さ1～2mになる落葉低木。若枝や葉柄に短毛と粗毛がある。葉は互生し、長楕円形膜質、粗鋸歯があり尾状鋭尖頭。長さ6～12cm、幅2.5～5cm、表面がざらつき、下面は幼時に白綿毛がある。雌雄異株で、花期は3～4月。瘦果をつける。 | | |
| 分 布 | 四国と九州に生育しており、県内では綾川町西分に知られるのみで、これ以外の生育記録はない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 詳細な産地が発表されておらず、初見以降の生育状況も報告されていない。今回の調査では、確認されていない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発により生育地が消滅する。下草刈りによる刈払い、周辺樹木の生育に伴う被圧により衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 16 | 執筆者: 久米 修 | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| コケミス <i>Pilea peploides</i> var. <i>peploides</i> (イラクサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|--|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 小豆島のごく限られた地域に、局地的に生育していることが知られているだけである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 草丈5～10cmで全体無毛。葉は対生して扁円形、長さ5～10mm、ゆるい鋸歯があるか又はない。葉裏に褐色の細点がある。葉腋から無柄の集散花序を出し、雌花の花被は1片だけが大きい。 | | |
| 分 布 | 関東地方以西に分布しており、県内では小豆島に知られるのみで、土庄町小部以外の生育記録はない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の木陰の湿潤な土地を好み、林縁部など開けた立地で、湧水のあるような場所に生育する。生育地の開発行為により、1980年頃の記録を最後に現在まで生育が確認されておらず、絶滅した可能性がある。今回の調査では確認されていない。 | | |
| 絶滅危険性の要因 | もともと局地的に生育していたが、生育地上方の寺院に通じる自動車道の改修工事で、既知の産地が失われた。草丈が低いため、高茎草木の被圧には弱い。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 16 | 執筆者：久米 修 | |

| ブナ <i>Fagus crenata</i> (ブナ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|----------------------------------|--|-----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦⑧* 本県では本種が生育できる冷温帯域そのものが讃岐山脈のそれぞれ孤立した狭い範囲に限られているうえに、わずか2箇所しか生育しておらず、個体数も少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高木性の落葉広葉樹。葉は互生。葉身は卵形で先端がとがる。ふちは波状の鋸歯がある。側脈は7～11対。果実はとげ状のかたい突起におおわれた殻斗につつまれる。果実は堅果で3稜形。樹皮は灰白色でなめらか。地衣類が付着することが多い。 | | |
| 分 布 | 全国的には九州から北海道渡島半島まで分布する。東北地方では平地に分布するが、西日本では山地に分布する。本県では讃岐山脈の2箇所分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 暖かさの指数45℃・月から85℃・月の範囲の冷温帯域に生育する。本県ではおよそ標高790m以上の山地部が生育域となる。本種は冷温帯の自然林を代表する木本植物であるが、本県では、わずか2箇所しか生育しておらず、個体数も少ない。後継稚樹もみられず、このままでは更新が困難な状況である。 | | |
| 絶滅危険性の要因 | 県内の生育地はいずれも県立自然公園内であるが、森林開発、人工造林、人の侵入による林床の踏みつけ、地球温暖化による影響などが危険性の要因として考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 16,45,77 | 執筆者：末広喜代一 | |

| イヌブナ <i>Fagus japonica</i> (ブナ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|-------------------------------------|---|-----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* ブナにくらべると分布地点は多く、個体数の多い所もあるが、森林開発等によって失われる危険性が高い。 | | |
| 種 の 特 徴 | 落葉高木。ブナによく似るが、葉の側脈はブナより多く、10～14対であり、堅果は長い柄をもち垂れ下がることがブナとの違い。 | | |
| 分 布 | 全国的には岩手県以南の本州、四国、熊本県以北の九州に分布するが、東北・中部地方の日本海側の多雪地帯にはほとんど生育していないといわれる。本県では、讃岐山脈および丘陵部上部と小豆島に稀に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | おもに冷温帯域に生育するが、ブナの生育域より標高の低い所に分布する。現地調査では、まんのう町、高松市での生育が確認されている。過去の記録では、さぬき市、三木町、旧山本町、旧内海町での生育記録がある。 | | |
| 絶滅危険性の要因 | 二次林等でも他の樹木と混在して生育するため、森林開発や人工造林などによって消失する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 16,45 | 執筆者：末広喜代一 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ミズナラ <i>Quercus crispula</i> var. <i>crispula</i> (ブナ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|---|--|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤⑥* 本県では、讃岐山脈の限られた生育地でしか生育しておらず、個体数も少ない。現地調査でも1箇所では確認されなかった。また、コナラとの交雑も進んでいるものが多く見られ、純粋のミズナラは絶滅する危険がある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 冷温帯域に生育する落葉高木。葉は互生。葉のふちには粗い鋸歯がある。コナラに比べると葉は大きく、葉柄はごく短く目立たない。堅果もコナラより大きい。 | | |
| 分 布 | 全国的には北海道、本州、四国、九州に分布する。東北日本では低地にも分布するが、西南日本では山地のみに分布する。本県では讃岐山脈の尾根沿いに稀に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | ブナと同じく冷温帯域に生育する。土壌の乾燥したところでも生育でき、二次林内に他の樹木と混生する。現地調査では讃岐山脈で確認されたが個体数は少ない。コナラと交雑している可能性の高い個体が多く、純粋のミズナラは絶滅する危険性がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 本来の生育地はもともと讃岐山脈の限られた狭い範囲であるが、二次林中に他種と混在して生育しており、森林開発、人工造林、および地球温暖化の影響などによって絶滅する危険性が高い。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 16,45 | 執筆者：末広喜代一 | |

| カシワ <i>Quercus dentata</i> (ブナ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--|---|-----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤⑥* 本県ではこれまで知られている生育地が2箇所と限られており、個体数も少なく、森林開発や人工造林などによって絶滅する恐れがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 落葉高木。葉は大きく、ふちは波状の大きな鋸歯がある。葉の裏面は短毛と星状毛が密生する。葉柄はごく短い。堅果は大きく、殻斗は多数の茶色い筋の目立つ線形の鱗片からなる。 | | |
| 分 布 | 北海道、本州、四国、九州に分布する。県内ではこれまで2箇所での分布が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | やせ地や、れき地、海岸に生育するといわれている。これまで県内で知られている生育地のうち、1箇所は海岸近くの山林、1箇所は乾燥した岩場である。現地調査では、1箇所での生育が確認された。この生育地のカシワは植林である可能性が高い。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 現地調査で確認された生育地は比較的平坦な場所であるため、森林開発や人工造林によって開発される危険性がある。また、コナラなど近縁の他種と交雑しやすく、雑種ができやすいため、純粋のカシワがなくなる危険性もある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 6,16 | 執筆者：末広喜代一 | |

| イチイガシ <i>Quercus gilva</i> (ブナ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|--|--|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 暖温帯南部の照葉樹林の構成種として重要な種であり、本県の過去の遺跡からも出土する。しかしながら、本県では現在の生育地が2箇所と限られている上、個体数が少なくまとまった樹林を形成しておらず、自然更新も困難な状況にある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 常緑高木。葉は互生。葉の先端はとがり、上半部に鋭い鋸歯がある。葉の裏面には黄褐色の星状毛を密生する。主脈は裏面に突出する。殻斗にも星状毛を密生する。堅果はその年の秋に熟し、渋みが少ない。樹皮は灰黒褐色で、古くなると不揃いな薄片となって落ちる。 | | |
| 分 布 | 全国的には関東地方南部以西の本州、四国、九州に分布する。九州に多い。本県では2箇所ではしか生育していないが、遺跡から果実が出土する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 暖温帯南部の山地に生育する。ツブラジイよりも土が深く水はけの良い山裾の一等地を好む種であるといわれる。そのような生育地は早くから人間の手によって開発された。本県では2箇所の社寺林内に他の常緑樹と混在して生育している。いずれの生育地も個体数が少ない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 社寺林内に残っているとはいえ、山裾や谷近くに生育地が限られるため、遊歩道の拡張などによって不注意に伐採される危険性がある。また、いずれの生育地も舗装された遊歩道に隣接しており、果実が出来ても発芽更新できる可能性は少ない。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 7,16,79 | 執筆者：末広喜代一 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| サワグルミ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|------------------------------------|---|-----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| <i>Pterocarya rhoifolia</i> (クルミ科) | | | |
| 選 定 理 由 | ⑦* 限られた生育場所にしか見られず、したがって一部の環境にのみ生育が可能な種である。 | | |
| 種 の 特 徴 | 落葉高木。樹高は25m以上になる。葉は奇数羽状複葉で互生。小葉は9~21, 無柄。縁に細かい鋸歯がある。花は5月頃。雄花序は本年度の下部の葉腋から長い尾状の花穂を下垂。雌花序は新枝の先につき下垂。果実は乾質の堅果。 | | |
| 分 布 | 全国的には、北海道・本州・四国・九州に分布する。県内では、まんのう町、高松市に生育していることが確認されている。過去には、三木町での確認記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 讃岐山脈の溪谷、沢べりなどの湿った所に生育している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林伐採、林道設置、その他森林開発や人工造林などによる伐採の危険性があり、生育環境が脅かされている。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 37 | 執筆者: 林 鈴以 | |

| シラヒゲソウ | | 香川県カテゴリー | 絶滅 (EX) |
|---|---|------------|---------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| <i>Pamassia foliosa</i> var. <i>foliosa</i> (ニシキギ科) | | | |
| 選 定 理 由 | ⑦⑨* 限られた場所にしか自生が見られないので、特定の環境下でなければ生育できない。1964(昭和39年)年以降生育が確認されておらず、絶滅したと思われる。 | | |
| 種 の 特 徴 | 根生葉は長柄があり、長さ幅とも2~4cmの心円形で、基部は深い心形。茎葉は数個つき、無柄で茎を抱く。花茎は高さ10~30cm。8~9月。茎頂に直径2~2.5cmの白色花を1個つける。花弁は5個で、縁は糸状に細裂する。おしべ5本、間に3つに裂けた仮おしべがある。名は、花弁を白いひげに例えた。 | | |
| 分 布 | 県外では、本州、四国、九州に分布する。県内では、過去に小豆島町での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の湿地に生える多年草。1964年に寒霞溪で採集されたが、生育環境の改変により、現在は自生が確認されていない。以降他所での生育情報がなく、50年以上にわたり生育が確認されていないことから絶滅種と評価された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林伐採やスギ・ヒノキなどの植林、湿地の開発等によって生育環境が変容して衰退したものと考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | 1964年に採集されて以降50年以上確認されていない事から、絶滅と判定した。 | | |
| 文 献 | 16 | 執筆者: 三浦 勝美 | |

| ウメバチソウ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) |
|---|---|-----------|------------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| <i>Pamassia palustris</i> var. <i>palustris</i> (ニシキギ科) | | | |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は産地も少なく、局地的に限られた環境に生育している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 湿気が多い場所に生育する多年草。東生する根生葉は長い柄の先に、広卵形の葉をつける、基部は心形。茎を抱く茎葉がある。10~40cmの花茎の茎頂にウメの花に似た白い花を上向きに1個つける。和名は、紋章の梅鉢紋に花の形が似ているところから名付けられたからともいう。 | | |
| 分 布 | 日本全土、台湾、千島、樺太、カムチャッカ、アリューシャン、アラスカ、朝鮮、満州、中国北部、シベリア、ヒマラヤ、小アジア、ヨーロッパに分布。県内では小豆島、高松市、まんのう町の丘陵部から山間部にかけて、点在して生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 生育地の消失、生育環境の自然遷移などにより、今回調査では生育が確認されていない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発、ため池や湿地の改変、管理放棄による遷移等で生育環境が消失、絶滅の恐れが拡大している。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 16 | 執筆者: 佐藤 明 | |

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| コミヤマカタバミ <i>Oxalis acetosella</i> var. <i>acetosella</i> (カタバミ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--|--|-----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 讃岐山脈の冷温帯域という限られた温度環境の地域にしか生育できないが、生育地の森林開発、人工造林などが行われると減少し、絶滅する危険性がある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山林の林床に生育する小さな多年草。根茎は細長く分枝し、葉は根茎の先に根生する。ハート形の3枚の小葉を持つ。花は白色で、しばしば赤紫色の脈がまいる。花茎の上に、ただ1個だけつける。 | | |
| 分 布 | 全国的には、北海道、中国地方をのぞく本州、四国、九州に分布する。県内では讃岐山脈の限られた地域に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 亜寒帯の針葉樹林内に生育するといわれているが、本県では冷温帯落葉樹林下に生育する。現地調査では、観音寺市、高松市で生育が確認された。個体数は多いところもあるが、以前よりは減少している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地である讃岐山脈の森林開発、人工造林などが進めば生育地が減少し、絶滅する危険性がある。また、地球温暖化が進めば夏期の高温によって衰退する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 45 | 執筆: 末広喜代一 | |

| マルミノウルシ <i>Euphorbia ebracteolata</i> (トウダイグサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|---|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ②⑤* 2012年県内で生育を確認。三重県藤原岳の生育南限、西限を更新。分布境界域に生育しかつ生育域も限られ絶滅の恐れが大きい。 | | |
| 種 の 特 徴 | 12月に発芽、3月から4月に開花結実。5月末に地上部が枯れる比較的大型の春植物。地下茎は肥厚する。葉は直立茎に互生。茎葉は長楕円形で鈍頭。しばしば側枝を上部の葉腋から出し、茎頂に杯状花序をつける。蒴果の表面にいぼ状突起がなく平滑、時に白い長毛がある。 | | |
| 分 布 | 北海道本州中部以北。及び三重県藤原岳の石灰岩地、香川県の限られた岩場に隔離分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 全国的には山地の開けた草地に生育する。県内では限られた岩場に隔離分布する。生育不良で花をつけない株も多く、株の更新が出来ず生育数が減少している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育域の南限で有り、県外と異なる環境で生育していること。自然遷移による生育環境変化、地球温暖化による環境の変化で、生育に不都合な環境になっていることが個体数減少の要因である。 | | |
| 特 記 事 項 | 2012年に生育が確認され、絶滅危惧I類として新たに評価した。 | | |
| 文 献 | 37,47,65,72 | 執筆: 佐藤 明 | |

| イワタイゲキ <i>Euphorbia jolkinii</i> (トウダイグサ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--|--|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 海岸の岩場と言う極限地に生育しており、産地は限られたものである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 全体無毛で、茎は太く高さ40～80cm。葉は互生するが、多数が密につく。葉長5～8cm、幅6～15mm、鋸歯はない。花期は4～5月、総苞葉が黄色を帯び長さ1～2cm、幅6～15mm、杯状花序の腺体は黄色で扇形。瘦果はいぼ状突起があり径6mm。種子は球形で平滑、長さ3mm。 | | |
| 分 布 | 伊豆半島以西に分布しており、県内では、従来小豆島の2箇所だけに知られていたが、今回の調査で、さぬき市大串半島周辺と坂出市与島に相当数生育していることがわかった。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 海岸の崖地に生育する。乾燥に強く、日当たりのよい裸地を好み、樹林下には生育しない。小面積の範囲に点在して生育し、個体数が少ない。今回の調査で、新産地が確認され、産地・個体数が相当あることから、絶滅危惧のカテゴリーが1ランク下に評価された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 土石の採掘による海辺の改変、波浪による生育地の崩落や海岸砂地の流出により生育地が消失する。自生地に他種が侵入して生長すると、被圧により衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | 新産地の発見で、産地および個体数が増加したことから、絶滅危惧のカテゴリーが1ランク下に評価された。 | | |
| 文 献 | | 執筆: 久米 修 | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ナガバノスミレサイシン | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|---|----------|----------------|
| <i>Viola bissetii</i> var. <i>bissetii</i> (スミレ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 本種は県内において、局地的に生育している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 地下茎はやや太く横たわり、節は密接する。葉はやや厚く三角状披針形、花は遅れて開く。花は大きく淡紫色であるが、本県では花色がうすい。側弁は無毛で距は太くて短い。花期は4～5月。 | | |
| 分 布 | 全国的には、福島県以西の本州、四国に分布する。県内では小豆島町に生育することが確認されている。過去の記録では、東かがわ市でも確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の落葉樹林の半日陰で、やや湿り気のあるところに生育している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林伐採による森林開発、針葉樹の植林、自然遷移の影響で衰退すること、他に園芸採集圧が懸念される。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 11 | 執筆者：林 鈴以 | |

| ヒゴスミレ | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|--|----------|------------|
| <i>Viola chaerophylloides</i> var. <i>sieboldiana</i> (スミレ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 近年商業目的や鑑賞目的の乱獲が増加しており、個体数が著しく減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 花期の草丈は5～10cm。葉が細かく裂け、ほぼ完全に5裂する。花弁のふちが波打つことはなく、すっきりした感じ。花色はふつう白色だが、県内では花弁の裏側に紅紫色の筋が入るものや、紅色の濃いものがある。側弁の基部には毛がある。良い香りがするものが多い。 | | |
| 分 布 | 全国的には、秋田県以南の本州・四国・九州に分布する。県内では、三豊市、まんのう町、高松市に生育していることが確認された。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 県内の山地高所で日当たりのよい草原や乾き気味の落葉樹林下など、春に明るくなる場所に生育している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 国内では数少ない裂葉タイプのスミレ類のため園芸採集圧が著しく、壊滅的な打撃になる可能性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 11,37 | 執筆者：林 鈴以 | |

| エイザンスミレ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|--|----------|----------------|
| <i>Viola eizanensis</i> var. <i>eizanensis</i> (スミレ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤⑧* 本種は県内のごく限られた地域に局地的に生育しており、個体数も極めて少ない。加えて森林開発や自然遷移による生育環境の変化で減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 花期の草丈は5～15cm。葉の裂け方は深く3裂するのが基本で、それがさらに裂けて一見5小葉に見えるものもあるが、ヒゴスミレのように基部から5裂することはない。花後の葉は10～15cmと見違えるほど大きくなる。花色は淡紅紫色。 | | |
| 分 布 | 全国的には、本州・四国・九州に分布する。県内では、高松市・まんのう町に生育しているのが確認された。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の落葉樹や杉林の林縁、細かい土砂が少しずつ崩れるような急斜面に生育している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ヒゴスミレと同じく数少ない裂葉タイプのスミレ類のため園芸採集による減少、加えて森林開発による生育地の消失、自然遷移による周辺植物の繁茂による衰退が懸念される。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 11,37 | 執筆者：林 鈴以 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国限、④県固有種、⑤県内権限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| アケボノスミレ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|----------------------------|--|----------|--------------|
| <i>Viola rossii</i> (スミレ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 近年商業目的や鑑賞目的の採集が増加しており個体数が減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 草丈は5～10cm。葉は花期にはほとんど展開していない。葉は先が細くとがった心形で両面とも微毛がある。花弁は厚く側弁の基部にまばらに毛があり、花色はサーモンピンクの大輪。稀に濃黒紫紅色もある。距は太くぼつりしている。葉が展開する前に花を咲かせるのが最大の特徴。 | | |
| 分 布 | 全国的には、北海道南部・本州・四国・九州に分布する。県内では高松市・まんのう町で生育しているのを確認した。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の斜面や林縁の日当たりのよい落ち葉の多い場所に群生している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地の森林開発や自然遷移による衰退、花が大きくて美しいことによる園芸採集圧が懸念される。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 11 | 執筆者：林 鈴以 | |

| ゲンジスミレ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|---|---|----------|----------------|
| <i>Viola variegata</i> var. <i>nipponica</i> (スミレ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 新たに県内の生育が確認されたが、生育地が限られている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 草丈は5～10cm。花期の葉は2～4cmの卵形～円形で、基部は心形。表面は暗緑色、裏面は紫色になるが、淡緑色のものもある。花は直径1.5～2cmで、ごく淡い紅紫色。側弁基部は有毛。距は細長い円筒形。 | | |
| 分 布 | 全国的には、青森県から岩手県の太平洋側、中部地方から関東地方の内陸部、岡山県、愛媛県の4か所に隔離分布する。県内では丸亀市に生育していることが、新たに確認された。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 日当たりのよい乾き気味の落葉樹林の斜面に生育する。県内では限られた場所に分布している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地の森林開発、人工造林などによって減少する危険がある。また園芸採集圧や自然遷移による生育環境の変容により衰退する恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 12,37 | 執筆者：林 鈴以 | |

| トモエソウ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|--|--|----------|----------------|
| <i>Hypericum ascyron</i> var. <i>ascyron</i> (オトギリソウ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内の産地が少なく、限られた地域に局地的に生育しており、個体数も少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 茎は直立し4稜があり無毛。葉はやや茎を抱き、明点だけがある。花は径約5cm、花弁は子房とほぼ同長で基部は中程まで合生している。花弁がよじれて巴状となる。 | | |
| 分 布 | 全国的には、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では、まんのう町に生育していることを確認した。過去の記録では、高松市での確認報告がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地に谷筋や林縁など開けた空間があり湿気が多い立地に生育するが、新しくできた林道などの脇にも生育している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発による生育地の消滅、園芸目的の採取、森林伐採や自然遷移により生育環境が変化して衰退する危険性が大きい。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | 執筆者：林 鈴以 | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| アゼオトギリ <i>Hypericum oliganthum</i> (オトギリソウ科) | | 香川県カテゴリ | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリ | 絶滅危惧ⅠB類 (EN) |
| 選 定 理 由 | ⑧* かつては田畑の畦などによく見られたが、耕地整理などにより、近年著しく減少し、絶滅の恐れがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 低地の湿り気の多いところに生える多年草。茎は分枝が多く斜上する。葉は対生で、茎を多少抱く。葉面を日に透かすと透明点がちらばり、縁に黒点ならぶ。8月頃に黄色い花がまばらにつく。 | | |
| 分 布 | 全国的には、宮城県以南の本州、四国、九州に分布する。県内では、丘陵部のため池に稀に生育する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 現地調査では、生育が確認されなかった。過去の記録では、旧高瀬町、旧満濃町、丸亀市、旧白鳥町、旧大内町で、生育が確認されている。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 今回の調査では生育が確認されず、生育地である、ため池や水路の改変、管理放棄などによって、激減していると考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | 前回評価の絶滅危惧Ⅱ類(VU)から、今回の評価では絶滅危惧Ⅰ類(VU)とした。 | | |
| 文 献 | 16 | 執筆者：末広喜代一 | |

| トサオトギリ <i>Hypericum tosaense</i> (オトギリソウ科) | | 香川県カテゴリ | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリ | 絶滅危惧ⅠA類 (CR) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内では、これまで、ごく限られた地域でしか確認されておらず、絶滅している可能性が高い。 | | |
| 種 の 特 徴 | 岩混じりの草地に生える多年草。茎は直立し、2稜線があり、その上に通常黒点がある。葉は長だ円形で全面に小黒点があり、ふちは多少裏面に巻き黒点が並ぶ。花は8～9月に開き、がくは広卵形で先は急に鋭突し、花卉のふちは多少波状となる。 | | |
| 分 布 | 全国的には、近畿地方西部から中国地方東部の本州、香川県・高知県に分布する。香川県では、ごく限られた地域でしか分布しない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 日当たりの良い岩混じりの草地に生育するが、現地調査では、小豆島町の1箇所での絶滅の報告があった。過去の記録では、この他、坂出市、旧国分寺町での生育記録がある。いずれの地域でも生育が確認されなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地の森林開発、自然遷移による生育環境の変化により衰退し、絶滅している可能性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 16,23 | 執筆者：末広喜代一 | |

| ミズオトギリ <i>Triadenum japonicum</i> (オトギリソウ科) | | 香川県カテゴリ | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリ | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 生育場所が湿地に限定され、そのような立地が県内に少ないため産地が少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 茎は円柱形で高さ15～100cm、直立しあまり分枝せず、基部は赤紫色を帯びることが多い。葉は対生し全縁。基部は浅心形で半ば抱茎し、無柄。明点のみがあり、秋に美しく紅葉する。花は8～9月、茎頂や上部の葉腋に集散状に1～5個つき、直径約1cmで淡紅色。花卉は5枚。一日花で、午後3～4時に開く。 | | |
| 分 布 | 県外では、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では、綾川町で生育が確認されているほか、観音寺市、善通寺市での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の開けた日当たりの良い湿地や溜池の流入口に形成された湿地部などに生育しており、群生することが多い。産地はごく少なく、限られた範囲に局地的に生育している。今回の調査では、綾川町(旧綾上町)の1箇所でのみ数10個体の生育を確認することができたが生育環境が悪化し、消失の恐れがある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 溜池や湿地の改変・埋立などによる生育地の消失、自然遷移により生育環境が変化して衰退するおそれがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 16 | 執筆者：三浦 勝美 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ヒメキカシグサ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|-------------------------------------|--|----------|----------------|
| <i>Rotala elatinomorpha</i> (ミソハギ科) | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧ⅠA類 (CR) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 水田や稀に落水後のため池に生育しているが、群生することがなく、産地ならびに個体数とも限定している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 水田雑草のキカシグサに類似しているが、高さ4cm、葉は柔らかくて縁に透明の部分がない。花柱がきわめて短く、雄ずい2個であることで区別できる。葉は対生、倒卵状長楕円形、円頭、無柄、長さ3～10mm、幅1.5～4mm。花は葉腋に単生して長さ1.5mm。 | | |
| 分 布 | 本州と四国に分布しており、県内の記録は、東かがわ市五名や普通寺市、三豊市高瀬町などで、あまり多くない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 比較的自然環境の良い、山沿いの水田や丘陵地のため池で、少数個体が確認されている。2001年三豊市高瀬町で確認されて以降報告がない。今回の調査では確認されなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 水田やため池の改修あるいは除草剤の散布による消滅、耕作放棄による荒地化が減少の要因として挙げられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者：久米 修 |

| ミズスギナ | | 香川県カテゴリー | 絶滅 (EX) |
|--------------------------------|---|----------|--------------|
| <i>Rotala hippuris</i> (ミソハギ科) | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧ⅠA類 (CR) |
| 選 定 理 由 | ⑩* 透明度の高い貧栄養の水質の良いため池に生育し、産地が限定している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 茎は柔らかく円形。葉は5～12枚輪生。水中葉は線形で長さ2～3cm、幅0.3～0.4mm、鋸歯はなく先端が2裂してスパナ状になる。気中葉は厚みがあり、長さ5～10mm、幅0.6～1mm、先端は鈍頭から凹頭。花期は9～10月。花は気中葉の葉腋に単生して白色。果実は球形で径1.5～2mm。 | | |
| 分 布 | 関東地方以西に分布しており、県内では、1923年に三木茂が採集した大川郡長尾鍵池(中ノ池)の標本が残されているのみである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 三木の採集した鍵池あるいは中ノ池は、その後の町村合併の影響もあり、現在その所在が不明である。以後他所での生育情報がなく、50年以上にわたり生育が確認されていないことから絶滅種と評価された。今回の調査では確認されていない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池の埋立やため池の改修工事により、生育地が消失する。水質の富栄養化や浮遊物の植物体への付着、ため池の管理放棄で浅水部が閉ざされると衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 74 | 執筆者：久米 修 | |

| ミズマツバ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|--------------------------------|---|----------|-------------|
| <i>Rotala mexicana</i> (ミソハギ科) | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 主として水田に生育しており、産地ならびに個体数とも限定している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高さ3～10cmの水田雑草。葉は2～4枚輪生し、狭披針形から広線形で長さ6～10mm、幅1～2mm、先はやや切形で2凸端となる。花期は8～10月。花は葉腋に単生し、無柄で淡紅色。花弁がなく、雄ずいは2～3個。果実は球形をしている。 | | |
| 分 布 | 中部地方以西に分布しており、県内の水田地帯に広く点々と分布している。時に湿った畑地や用水路、ため池などにも生育している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 生育地ではある程度まとまった個体数が見られるが、定着性はあまりない。今回の調査で、絶滅した既知産地があるものの、新産地および個体数が相当あることで、絶滅危惧のカテゴリーが1ランク下に評価された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 水田の改修工事で生育地が消失する。除草剤の散布による消滅、耕作放棄による荒地化が減少の要因となる。 | | |
| 特 記 事 項 | 産地および個体数が増加したことから、絶滅危惧のカテゴリーが1ランク下に評価された。 | | |
| 文 献 | | | 執筆者：久米 修 |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ヒメビシ <i>Trapa incisa</i> (ミソハギ科) | | 香川県カテゴリー | 情報不足 (DD) |
|-------------------------------------|--|-----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | 文献上の記載はあるが、採集時期、採集地などの基本情報が明記されておらず、情報不足とした。 | | |
| 種 の 特 徴 | ため池、水路、水田などに生育する一年生の浮葉植物。浮葉は長さ1.5～3.5cm、幅1～3cm、やや縦長の菱形、葉身が小型で鋸歯が粗く見える。花期は7～8月。花は多種に比べ小さく、花弁は白から薄紅色、花弁が開かないことが多い。果実のトゲは細く長く4刺。多種の果実に比べ極めて小型である。 | | |
| 分 布 | 全国的には、北海道から九州にかけて分布するが、県内の分布については不明。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 37,56 | 執筆者: 佐藤 明 | |

| アサノハカエデ <i>Acer argutum</i> (ムクロジ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--|--|-----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 讃岐山脈尾根の落葉広葉樹林という限られた場所に、局地的に生育していることが知られている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 雌雄異株の落葉小高木。若枝は葉裏と共に短毛がある。葉は質薄く、5～7中裂、長さ幅共に5～10cm、長鋭尖頭、鋭重鋸歯縁。花期は5～6月、短い総状花序をつけ、淡黄緑色。雌花序の基部に一对の葉がある。雄花序は旧年枝の先に側生し、基部に葉が無い。分果は水平に近く開き、幅2～2.5cm。 | | |
| 分 布 | 本州と四国に分布しており、県内ではまんのう町勝浦の大川山南方尾根筋で、少数確認されているだけである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 讃岐山脈尾根筋の落葉広葉樹林で、2011年に数本生育しているのが確認された。他の場所では見つかっていない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林伐採や針葉樹の植栽、他の樹木に被圧されると消滅する。 | | |
| 特 記 事 項 | 新たに県内の生育が確認された。 | | |
| 文 献 | 33,37 | 執筆者: 久米 修 | |

| ホソエカエデ <i>Acer capillipes</i> (ムクロジ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--|--|-----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 讃岐山脈尾根筋に局地的に生育しており、産地ならびに個体数とも限定している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 雌雄異株の落葉高木。葉は3浅裂して5角形が分裂せずに広卵形。質やや硬く、長さ7～13cm、幅4～12cm。下面脈腋に膜が発達し、細重鋸歯縁、先は尾状に鋭尖する。花期は5～6月、若枝の先に7～10cmの総状花序を頂生する。分果は扁平、翅は斜開して長さ1.5～1.8cm。 | | |
| 分 布 | 福島県以南に分布しており、県内ではまんのう町勝浦の竜王山尾根筋近くで、少数確認されているだけである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 讃岐山脈尾根筋の落葉広葉樹林で数本確認されているだけで、他の場所では見つかっていない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林伐採や針葉樹の植栽により生育環境が変われば消滅する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | 執筆者: 久米 修 | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ミツデカエデ <i>Acer cissifolium</i> (ムクロジ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | |
| 選 定 理 由 | ⑦⑧* 山中谷沿いの限定的な生育場所にしか見られず、個体数が限られており、近年減少が著しい。 | | |
| 種 の 特 徴 | 雌雄異株の落葉高木。若枝や花序に白い短毛がある。葉は3小葉に分かれる。小葉は薄く、長楕円形、葉腋に毛叢があり、粗鋸歯縁、尾状鋭尖頭、長さ5～8cm、幅2～3.5cm。春に総状花序を出し、花は黄色。がく片、花弁、雄ずいは4。分果は長さ2.5～3cm、翅は斜開する。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では少数個体がまんのう町川東で確認されている。他の場所では見つかっていない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山中溪谷沿いの1箇所しか確認されておらず、今回の調査では確認されていない。支障木として伐採された可能性があり、絶滅危惧のカテゴリーが1ランク上に評価された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林伐採や針葉樹の植栽、他の樹木に被圧されると消滅する。 | | |
| 特 記 事 項 | 伐採枯死した可能性があることから、絶滅危惧のカテゴリーが1ランク上に評価された。 | | |
| 文 献 | | | 執筆者：久米 修 |

| メグスリノキ <i>Acer maximowiczianum</i> (ムクロジ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|--|---|----------|-------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本県では、これまで2箇所しか生育が確認されておらず、個体数も少なく絶滅する恐れがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 落葉高木。葉は多くのカエデ科とは異なり、3出複葉。対生。小葉は楕円形で、ふちは波状の不規則な鋸歯がある。葉柄と若い枝には粗い毛が密生する。雌雄異株。名前は葉や樹皮を煎じて洗眼に用いたことによる。煎じたものを飲むと、目の疲労回復や肝機能回復に効果があるといわれている。 | | |
| 分 布 | 全国的には、宮城・山形県以南の本州、四国、九州に分布。日本固有。本県では讃岐山脈に近い2箇所しか確認されていない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の谷間や山腹部に生育する。現地調査では、1箇所での生育の報告があった。個体数は少ない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地の森林開発、人工造林、自然遷移のほか、薬用による採取によって絶滅する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者：末広喜代一 |

| テツカエデ <i>Acer nipponicum</i> (ムクロジ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|--|--|----------|-------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 山地の尾根筋に局地的に生育しており、産地ならびに個体数とも限定している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高さ15mになる落葉高木。葉は心状5角形で、長さ10～15cm、幅12～20cm、5浅裂、裂片は広三角形鋭尖頭、重鋸歯縁。花期は6～7月。若枝の先に総状の円錐花序を作り、淡黄色。両性花と雄花が雑居する株と、雄株とがある。がく片と花弁は5。分果は斜めに開出、長さ3.5～4cm。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しており、県内では高松市塩江町からまんのう町にかけての讃岐山脈上部に点在している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 讃岐山脈尾根筋の落葉広葉樹林に、少数個体が確認されている。今回の調査では、新産地の報告があったが、個体数の減少した既知産地があった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林伐採や針葉樹の植栽により生育環境が変われば消滅する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者：久米 修 |

※選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| トチノキ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|-----------------------------------|---|----------|----------------|
| <i>Aesculus turbinata</i> (ムクロジ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 産地は少なく、南部山地の一部に極めて少数の個体が点状に散見される。 | | |
| 種 の 特 徴 | 落葉高木。葉は大型の掌状複葉で対生し、小葉は5～7個で倒卵状楕円形。花は枝先に円錐状花序が直立し、白色に紫色のぼかしのある花が密につく。果実は果皮が厚く皮目状の突起が密生するが、とげはない。花期は5～6月。 | | |
| 分 布 | 全国的には、札幌市以南の北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では、高松市、まんのう町に生育する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 本来深山の溪流沿いに生育するが、本県では山腹の湿度の高い肥沃な土地に生育している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林伐採による森林開発、スギやヒノキの針葉樹の植林で衰退することが懸念される。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者：林 鈴以 |

| ハマボウ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|-------------------------------|---|-----------|----------------|
| <i>Hibiscus hamabo</i> (アオイ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 海岸のやや安定した砂泥地という特殊な環境条件の立地に生育するが、そのような生育地はもとも少ない上に、海岸の埋め立て等の改変によって減少している。そのため、本県での生育地は非常に少なく、わずかな個体数しか確認されていない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 落葉低木。葉は互生。葉は広卵形で先は少しとがる。ふちには波状の浅い鋸歯がある。フヨウに似た黄色い花が7月頃に咲く。花の中心部は暗赤色で、花弁は5枚。おしべの花糸は合着して筒状となる。朝に開いて夕方にはしぼむ1日花。 | | |
| 分 布 | 神奈川県以南の本州、四国、九州に分布する。沖縄には近縁のオオハマボウが分布する。県内では数箇所の海岸で生育が確認されている。明らかに栽培されているとわかるものがあるので注意が必要である。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 海岸や河口のやや安定した砂泥地に生育する。現地調査では、高松市、坂出市、直島町、東かがわ市の海岸で生育が確認されている。丸亀市では絶滅の報告がある。このほか、土庄町での生育記録がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 海岸の埋め立て等の改変、乾燥化による遷移の進行、園芸用の採取の危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 16 | 執筆者：末広喜代一 | |

| シロイヌナズナ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|-------------------------------------|---|-----------|----------------|
| <i>Arabisopsis thaliana</i> (アブラナ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* もともと県内では少ないと考えられる。過去の記録はあるが、現地調査では帰化由来と考えられる個体しか確認されなかった。生育地と考えられる海岸の砂地、川沿いや荒れ地が改変されたり、自然遷移によって、急激に減少したものと考えられる。 | | |
| 種 の 特 徴 | 遺伝学の研究材料として、世界的によく知られる越年生の草本。根出葉は倒卵形で低い鋸歯がある。茎につく葉はまばらで細い。花は白く、果実は細長い。 | | |
| 分 布 | ユーラシア大陸に広く分布し、日本では北海道から琉球まで分布するが、近年市街地に見られるものはほとんど帰化由来と考えられている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 海岸の砂地、川沿いや荒れ地に生育するといわれている。現地調査で、1箇所からの生育確認の報告があるが、生育地の状況から帰化由来と考えられる。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地と考えられる海岸の砂地、川沿い、荒れ地の改変、自然遷移が危険性の要因と考えられるが、正確なことは不明。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 16 | 執筆者：末広喜代一 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ミズタガラシ <i>Cardamine lyrata</i> (アブラナ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---|---|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 河川や湧水地という限られた生育環境にしか見られないが、水辺環境の改変により近年減少が著しい。 | | |
| 種 の 特 徴 | 多年生の沈水または湿性植物。水辺では高さ30～40cmの直立茎を出して開花結実する。湧水地などでは花後に倒伏した茎が走出枝となり伸長する。直立茎の葉は羽状複葉、長さ1～7cm、頂小葉は広卵形で最も大きい。走出枝の葉は卵円形、沈水形。花期は4～6月、総状花序に8～10mmの白い4弁花を咲かせる。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しており、県内では平地の河川や湧水地に点在しており、高松市や坂出市、三豊市、観音寺市等の標本がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 河川や出水、水路などの清涼な水環境のある場所で、少数個体が限定的に生育していた。生育地の消失や生育環境の改変で、近年激減している。今回の調査では、確認されなかったことから、新規に掲載された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 河川や水路の改変、農地改修、出水改修工事により消失する。湧水の閉塞や汚濁で衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | 産地および個体数が減少していることから、新規に掲載した。 | | |
| 文 献 | 16 | 執筆者：久米 修 | |

| ワサビ <i>Eutrema japonicum</i> (アブラナ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|---|---|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦⑧* 山間部の溪流という限られた生育環境でしか生育せず、薬用採取、生育地の自然遷移などによって減少しつつあり、絶滅する恐れがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 水のきれいな溪流に生育する多年草。根茎は太い円柱形で多くの節がある。柄のある心形の葉を束生する。葉の上面はつやがあり、葉脈が走る部分はくぼむ。縁は波状の鋸歯があり、葉脈の先が棘状となる。春に白い花を多数つける。果実は数珠状にくびれ、ややまがる。根茎は香辛料として利用される。 | | |
| 分 布 | 全国的には、本州、四国、九州に分布する。しばしば、香辛料として栽培される。本県では讃岐山脈沿いの溪流に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山間部の水のきれいな溪流に生育する。現地調査では、観音寺市、三豊市、まんのう町、高松市、綾川町での生育が報告されている。過去の記録では、三木町、さぬき市、東かがわ市で生育が確認されている。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 薬用採取、生育地の自然遷移のほか、生育地の森林開発やダム建設によって絶滅する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：末広喜代一 | | |

| コイヌガラシ <i>Rorippa cantoniensis</i> (アブラナ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|---|---|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑧* 水田や落水後のため池などの限られた生育環境にしか見られないが、生育環境の改変により近年減少が著しい。 | | |
| 種 の 特 徴 | 水田などに生育する小形の一年草。茎は高さ20～35cm、無毛。茎葉は長楕円形で長さ2～4cm、羽状深裂、基部は耳状に茎を抱く。花期は4～5月であるが、落水後のため池に生育するものは、11～12月でも花を咲かせて結実する。花柄はほとんど無く、葉腋につく。花弁は黄色。果実は円柱形。 | | |
| 分 布 | 関東地方以西に分布しており、県内では主にため池に点在して分布し、高松市や観音寺市で確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | かつては平地の水田に生育していたと言うが、現在では落水後のため池や河川の砂泥地に辛うじて残存している。ため池では、群生することもあるが、個体数は不安定である。溜め池の管理手法の変化や除草剤の影響により、産地および個体数が急激に減少していることから、新規に掲載された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 水田では農地改修と共に除草剤の散布で消滅した。ため池では、浚渫工事と共に落水など管理行為の変化で、生育地が消失する。 | | |
| 特 記 事 項 | 産地および個体数が急激に減少していることから、新規に掲載した。 | | |
| 文 献 | 執筆者：久米 修 | | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ミヤマツチトリモチ <i>Balanophora nipponica</i> (ツチトリモチ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|---|--|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑤* 広葉樹の根に寄生する特異な生態で、讃岐山脈上部に1箇所産地が知られている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 深山に生える寄生植物。ツチトリモチに類似しているが、花序は細長く狭卵形～卵状円柱形、長さ3～5cm、幅1.5～2cm、黄赤色～褐色をしている。雌花と倒卵円体だけからなり、雄花は知られていない。花期は7～8月。 | | |
| 分 布 | 本州と四国に分布しており、県内では高松市塩江町上西の竜王山の山中1箇所を確認されているだけである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 2004年に、1本の落葉広葉樹の根に、数個の花がついているのが発見されただけで、以後報告されていない。今回の調査では、確認されていない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林伐採や針葉樹の植林により寄生木が枯死すると、消滅する。落葉広葉樹に寄生しているため、自然遷移や地球温暖化により、宿主が衰弱すると消滅する。 | | |
| 特 記 事 項 | 新たに県内の生育が確認された。 | | |
| 文 献 | 28, 37 | 執筆者: 久米 修 | |

| ツクバネ <i>Buckleya lanceolata</i> (ビャクダン科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---|---|------------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 本県ではごく限られた地域にしか生育が確認されていないが、生育地の人工造林などによって減少する可能性がある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 半寄生性の落葉低木。葉は対生。葉に鋸歯はなく、先端は尾状にこがる。雌雄異株。果実に長い葉状の苞が残り、羽根つきの羽根のように見える。 | | |
| 分 布 | 全国的には、岩手・山形県以南の本州、四国、九州北部に分布する。本県では、讃岐山脈の一部の地域に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 讃岐山脈の一部の地域に分布する。現地調査では、生育確認の情報がなかったが、過去の記録では、旧塩江町、まんのう町での生育確認記録がある。非常に目につきにくい植物であるので、実際にはもっと生育している可能性はある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地の人工造林や自然遷移によって減少する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 16, 45 | 執筆者: 末広喜代一 | |

| ヒノキバヤドリギ <i>Korthalsella japonica</i> (ビャクダン科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---|---|------------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦⑧* 限られた場所にしか自生が見られないので、特定の環境下でなければ生育できない。近年減少傾向にある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高さ5～20cmの常緑低木。ツバキ、モチノキ、ハイノキなど種々の常緑広葉樹に寄生する。茎は緑色で無毛、扁平で、古いものは両側に翼状に広がり、節が多数あり、節から折れやすい。対生する葉は小さな突起状で輪になって節を取り巻く。春から秋に、節ごとに数個の緑色の小さな花をつける。果実は球形で橙黄色に熟す。 | | |
| 分 布 | 県外では、関東地方以西の本州、四国、九州、沖縄、小笠原に分布する。県内では、高松市で生育が確認されているほか、観音寺市での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 県内では高松市の1箇所でのみ生育が確認された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や自然遷移による生育環境の変容により減少する。また、宿主の植物の状況により、衰退する危険がある。 | | |
| 特 記 事 項 | 産地・個体数が少なく、寄主の枯損に影響を受けやすい。 | | |
| 文 献 | 16 | 執筆者: 三浦 勝美 | |

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| マツグミ | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|--|----------|------------|
| <i>Taxillus kaempferi</i> var. <i>kaempferi</i> (オオバヤドリギ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦⑧* 近年、主に寄生主である松の減少と共に減少傾向が著しい。 | | |
| 種 の 特 徴 | 主にマツやモミの木に寄生し常緑。茎は分枝し、枝は細く葉は2～3cm位の倒狭披針形で互生である。7月頃葉腋に小さな濃い紅色の筒型の花を付ける。液果は5mm位で丸く、翌年の春に赤く熟し、種子のまわりには粘液質があり、他物に付着する。 | | |
| 分 布 | 全国的には、関東地方以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。県内では、土庄町、小豆島町、東かがわ市、さぬき市、高松市、坂出市、綾川町、まんのう町、琴平町に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 海岸線から山地の主に松の木に数10株見られる所もあるが、ほとんどの場所で数株ずつ点々と生育している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発での寄主である松の木の伐採と、自然遷移による松の木の立ち枯れによる、寄生木の減少。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者: 秋山 敬典 | | |

| ハマサジ | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|------------------------------------|--|----------|------------|
| <i>Limonium tetragonum</i> (イソマツ科) | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑧* 生育地である河川河口部や海岸線の後背湿地などの改修、土地造成などで、生育地及び個体数共に減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 海岸や汽水域の砂地に生える越年草。長さ10～20cm位の長楕円形でへら状の葉を根生する。花は8～10月頃30～50cm程の花茎を数本伸ばし、中ほどより多数分枝し、円錐状の花序を作り、上部に黄色の小さな花を付ける。 | | |
| 分 布 | 全国的には、本州の三陸海岸以南の太平洋側、四国、九州に分布する。県内では、東かがわ市、さぬき市、高松市、坂出市、宇多津町、丸亀市、観音寺市に分布する。過去の記録では、直島町でも分布が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 島嶼部を含む東讃から西讃まで、主に海岸線の河口部に点々と生育し、個体数が多い産地もあるが、総じて産地・個体数共に減少している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 河川河口部や海岸線の後背湿地などの改修工事、土地造成による生育地の減少。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者: 秋山 敬典 | | |

| ヒメタデ | | 香川県カテゴリー | 絶滅 (EX) |
|-------------------------------------|---|-----------|--------------|
| <i>Persicaria erectominor</i> (タデ科) | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦⑧* 河川や湿地などの水際に生育するが、県内の産地はごく限られたものであり、既に絶滅したものと推定される。 | | |
| 種 の 特 徴 | 水辺に生える一年草。茎の下部は地について発根し、上部は立ち上がって高さ20～40cm。葉は線状で先は鋭尖して鈍頭、長さ3～7.5cm。両面の縁と中肋に粗毛があり、質はやや薄く、乾いても緑色。葉柄はごく短い。花期は5～10月。花は1.5～2cmの花穂に密につく。花被は紅紫色、稀に白緑色。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では小豆島と坂出市瀬居島で採集された標本が残されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 1930年に田代善太郎が小豆島で採集し、1965年に山地綾子が坂出市瀬居島で採集した標本が残されている。以前から産地および個体数はごく稀であったものと思われる。今回の調査では確認されておらず、50年以上確認されていないことから、絶滅と評価された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 河川や水路、湿地の改変工事により生育地が消失した。混生しているヨシなどの高茎草本の繁茂により衰退した。 | | |
| 特 記 事 項 | 新たに県内に生育していたことが判明した。 | | |
| 文 献 | 4, 76 | 執筆者: 久米 修 | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| サイコクヌカボ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--|--|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| <i>Persicaria foliosa</i> var. <i>nikaii</i> (タデ科) | | | |
| 選 定 理 由 | ⑧* ため池などの水際に生育しており、生育環境の悪化にともない近年減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 水辺に生える一年草。茎の下部は地について発根し、上部は立ち上がって高さ40～60cm。葉は狭披針形で質やや厚く、短い柄があり、乾いて赤褐色になる。花期は9～10月。花は枝の先の5～6cmの穂にまばらにつく。ヌカボタデに類似しているが、果実がレンズ形をしている。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しており、県内の丘陵地から山際にあるため池を中心に、広く点在している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | ため池や河川の水際に生育し、群生することもある。正確な情報は少ない。今回の調査では、減少した既知産地が複数報告され、著しく減少しているとして、絶滅危惧のカテゴリーが1ランク上に評価された。 | | |
| 絶滅危険性の要 因 | 河川改修やため池改修工事により生育地が消失する。ため池の管理放棄や混生する高茎草本の被圧により衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | 急激に減少していることから、絶滅危惧のカテゴリーが1ランク上に評価された。 | | |
| 文 献 | | | 執筆者：久米 修 |

| ナガバノウナギツカミ | | 香川県カテゴリー | 情報不足 (DD) |
|--|--|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| <i>Persicaria hastatosagittata</i> (タデ科) | | | |
| 選 定 理 由 | ⑦* ため池などの水際に生育しており、県内の産地および個体数はごく限られたものである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 水辺に生える一年草。茎の下部は地について発根し、上部は立ち上がって高さ30～80cm、稜角があり、逆刺がある。葉は披針形で薄い洋紙質、基部は矛形、縁に刺毛がある。花期は5～10月。花は2～3岐した枝の先に穂状に円錐花序となる。梗に短毛と腺毛がある。花被は紅色。果実は球形。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しており、県内では観音寺市粟井町で採集されたことがあり、他に綾川町の報告がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 1966年に真木弥太郎が観音寺市粟井町で採集した標本がある。その後綾川町で報告されたが、標本は残っていない。今回の調査では、確認されなかった。他に確実な生育情報がないことから、情報不足と判定された。 | | |
| 絶滅危険性の要 因 | 河川改変、ため池改変、湿地改変などの工事により生育地が消失する。混生している高茎草本が繁茂すると、被圧されて衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | 最近の確認情報が無いことから、新規に掲載した。 | | |
| 文 献 | 16 | 執筆者：久米 修 | |

| サデクサ | | 香川県カテゴリー | 情報不足 (DD) |
|-----------------------------------|---|----------|-----------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| <i>Persicaria maackiana</i> (タデ科) | | | |
| 選 定 理 由 | ⑦* 河川などの水辺周辺と言う限られた生育環境で、一度だけ採集されたものである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 水辺に生える一年草。茎はよく分枝して角ばり、逆刺が多い。茎の下部は地について発根し、上部は立ち上がって高さ40～100cm。葉は披針状矛形、長さ3～8cm、先は鋭く尖り、両面に星状毛を密生する。花期は8～10月。花は枝の先に頭状に集まり、花柄に腺毛がある。花被は紅色。果実は3稜形。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しており、県内では高松市亀田南町で採集されたことがあるだけである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 1982年三谷進が高松市亀田南町で採集した標本があるだけで、以後確認されていない。今回の調査では、確認されなかった。他に確実な生育情報がないことから、情報不足と判定された。 | | |
| 絶滅危険性の要 因 | 河川改変、ため池改変、農地改修などの工事により生育地が消失する。混生している高茎草本が繁茂すると、被圧されて衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 55 | 執筆者：久米 修 | |

※選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥文種移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ヌカボタデ <i>Persicaria taquetii</i> (タデ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---|---|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑧* ため池などの水際に生育しており、生育環境の悪化にともない近年減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 水辺に生える一年草。茎の下部は地について発根し、上部は立ち上がって高さ20～40cm。葉は狭披針形で質薄く、ほとんど無柄、乾いて緑色。花期は9～11月。花は枝の先に穂状にまばらにつく。サイコヌカボに類似しているが、果実が3稜形をしている。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しており、県内の丘陵地から山際にあるため池を中心に広く点在している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 主にため池の水際に生育し、群生することがある。サイコヌカボよりは、産地および個体数が多い。今回の調査では、個体数の減少や絶滅した既知産地が報告された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 河川改修やため池改修工事により生育地が消失する。ため池が管理放棄され貯水されなくなると、一時的には増殖するが、高茎草本の侵入や周辺樹木の生長により、被圧されて衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：久米 修 | | |

| コギシギシ <i>Rumex dentatus</i> subsp. <i>klotzschianus</i> (タデ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|---|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑧* 農耕地などの生育環境の変化で、近年減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高さ30～50cmの多年草。下部の葉は長柄があり、長楕円状披針形で鈍頭、縁は波状になり、長さ6～11cm、両面無毛。花期は5～8月、円錐花序となる。果実を取り巻く花被は卵形、長さ4mm、縁に1～1.8mmの刺があり、中肋は瘤状にふくらむ。 | | |
| 分 布 | 関東地方以西に分布しており、県内では耕作地を中心に広域に点在している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 農耕地や畦、休耕地、農道などに生育している。調査の進展により、県内に広く生育しており、個体数も多いことが判明したことで、絶滅危惧II類のカテゴリーが、1ランク下に評価された。今回の調査では、新産地が多数報告された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 農地改修による生育地の消失、除草剤使用による枯死がある。耕作放棄されると一時的に群生する場合があるが、高茎草本の侵入により被圧され衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：久米 修 | | |

| イシモチソウ <i>Drosera peltata</i> var. <i>nipponica</i> (モウセンゴケ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|---|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 生育地の自然遷移、湿地やため池の改変などによって、近年減少しつつある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 湿地に生育する多年生の食虫植物。根出葉は始めはあるが、花期にはなくなる。茎葉はまばらに互生する。葉は三日月型で表面と側面に長い粘りけのある腺毛をつける。地下に球形の根茎がある。5月から6月に総状花序が出る。花弁は白色。 | | |
| 分 布 | 関東以西の本州、四国、九州に分布する。県内では散発的に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 日当たり良い湿地、浅い貧栄養なため池などに生育する。現地調査では、丸亀市、まんのう町での生育確認報告があった。また、高松市、まんのう町で絶滅の報告があった。過去の記録では、坂出市、土庄町での生育記録もある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地の自然遷移、湿地やため池の改変などによって減少する可能性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：末広喜代一 | | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| トウカイコモウセンゴケ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--|---|-----------|--------------|
| <i>Drosera tokaiensis</i> subsp. <i>tokaiensis</i> (モウセンゴケ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 限られた場所にしか自生が見られないので、特定の環境下でなければ生育できない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 葉は根生してロゼット状になり、長い多細胞性の消化腺毛がある。葉は赤味を帯び、葉柄はより明瞭で、葉柄状の基部を除いた葉表面に長腺毛がある。6～9月、高さ5～15cmの花茎が出て、先はわらび巻き状となる。花は淡紅色、総状だが片側につく。萼片は狭卵形～卵形で、托葉は深く4裂する。 | | |
| 分 布 | 県外では、北陸地方・東海地方から中国地方までの本州、四国に分布する。県内では、まんのう町、丸亀市、綾川町で生育が確認されているほか、観音寺市、三豊市、小豆島町での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 酸性で貧栄養の湿地に生える多年草。主に西讃・中讃地域の山間部にある溜池の流入口・堤防下・窪地等で確認されている。個体数の多い産地もあるが、綾川町では絶滅した産地もあり、注視が必要である。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林の開発や岩石の採掘、溜池の改修・開発、湿地の開発のほか、道路工事や土地造成による生育環境の消滅、あるいは自然遷移による生育環境の悪化の危険がある。また、園芸採取や、人による踏みつけなどで消滅する恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 37 | 執筆者：三浦 勝美 | |

| ミミナグサ | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---|---|-----------|------------|
| <i>Cerastium fontanum</i> subsp. <i>vulgare</i> var. <i>angustifolium</i> (ナデシコ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* かつては普通の雑草であったが、近年顕著に減少した。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高さ15～30cm。茎は短毛があり、上部には腺毛もあり、普通暗紫色を帯びる。下部の花柄は萼片より長いのが特徴。花期は5～6月。花序は頂生し、まばらに花をつける。花弁は白色。よく似た帰化植物のオランダミミナグサは、茎が暗紫色を帯びず、花柄が萼片と同長かやや短く、花は密集してつく。 | | |
| 分 布 | 県外では、日本全土に分布する。県内では、観音寺市、まんのう町、綾川町、高松市、さぬき市、東かがわ市、小豆島町で生育が確認されているほか、三豊市、坂出市、三木町での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 道端や畑などに生える越年草あるいは時に多年草。県内の平地から山際まで普通に見られたが、近年平地ではほとんどみられなくなり、讃岐山脈を中心に山裾の道端や畑地等に、かろうじて生育している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 道路建設や土地造成による生育地の攪乱や消失、管理放棄による二次草地の変容や自然遷移による衰退があるが、帰化種のオランダミミナグサとの置き代わりが主因である。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 16 | 執筆者：三浦 勝美 | |

| ハマフシグロ (ヒメケフシグロ) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|---|---|----------|----------------|
| <i>Silene aprica</i> var. <i>oldhamiana</i> (ナデシコ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 海辺の砂地という特殊な環境に生育しており、産地および個体数は限定している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 海浜に生育する高さ20～50cmの多年草。全体に密に灰色の細毛が密生する。葉は披針形で鋭頭、長さ2～8cm。花序は2分枝集散状、苞は草質、小梗は長さ5～30mm。花柱は3個、花弁は帯淡紅色。種子は径0.5mm、縁辺に小突起がある。 | | |
| 分 布 | 中国地方以南に分布しており、県内では瀬戸内海の海岸砂地に点在している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 海辺の開発で、生育地である砂浜が減少しており、個体数は少ない。今回の調査では、既知産地の大きな変化は確認されていない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 海辺の改変工事により、生育地の砂浜が消失している。海浜レジャーによる侵入で踏み荒らされたり、清掃行為で除草されて衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | 別名ヒメケフシグロ | | |
| 文 献 | | 執筆者：久米 修 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ナンバンハコベ <i>Silene baccifera</i> var. <i>japonica</i> (ナデシコ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---|---|-----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 近年個体数が減少してきている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 茎はつる状でよく分枝し、長さ1m以上伸びる。葉は長さ2～5cmの卵形。花期は7～10月。花は横向きまたは下向きに咲き、半球形の萼が目立ち5裂する。花弁は白色で隙間が空き、途中で急に曲がって反り返り、基部は2裂する。さく果はほぼ球形で、肉質の液果状になり、裂開しない。熟すと黒くなる。 | | |
| 分 布 | 県外では、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では、まんのう町で生育が確認されているほか、観音寺市、小豆島町での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 路傍の草むらや低山の林縁に生える多年草。今回の調査では山間部の2箇所でのみ少数個体の生育が確認された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 圃場整備及び排水路等の改修による生育地の消失や、管理放棄による二次草原の変容、自然遷移による生育環境の悪化の危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | 個体数が多くはなく、管理放棄など生育環境の悪化により産地・個体数が減少している。 | | |
| 文 献 | 16 | 執筆者：三浦 勝美 | |

| ウシオツメクサ <i>Spergularia marina</i> (ナデシコ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) |
|--|--|-----------|------------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 県内の海岸部に広く分布していたが、近年個体数の減少が著しい。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高さ10～20cm。茎の上部や萼に腺毛がある。葉は対生、長さ1～3cmの線形で基部に白い膜質の托葉があり合着する。花は上部の葉腋に1個ずつ花弁は1～2mm、白色～紅色だが白色が多い。おしべは5個。花柱は3個。種子は褐色、しばしば円柱状突起があり周辺に翼はないかあるいは幅0.5mmになる翼がある。 | | |
| 分 布 | 県外では、北海道、本州、九州北部に分布する。県内では、高松市、坂出市での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | かつてはまれなものでなかったため正確な記録は残っていない。島嶼部を含めた海岸の砂泥質の塩田や塩性湿地に生育していた。近年ほとんど確認されておらず、確認できる個体は帰化種がほとんどであるため、詳細な調査が必要である。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 河川河口部の改修、海辺の改修や埋立、塩田跡地の埋立などの土地造成による生育環境の消失、類似帰化植物の侵入繁殖による置き換わりがある。 | | |
| 特 記 事 項 | シオツメクサとも呼ばれる。群生する赤花は帰化品で、白花の在来品は近年確認されていない。 | | |
| 文 献 | 16 | 執筆者：三浦 勝美 | |

| オオヤマハコベ <i>Stellaria monosperma</i> var. <i>japonica</i> (ナデシコ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) |
|---|---|----------|------------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 深山の日当たりのよい林床に生育しており、産地ならびに個体数とも限定している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 茎は細く軟毛が散生しており、草丈は60cm以上になる。葉は長楕円状披針形で鋭尖頭、短い柄があり、長さ7～12cm、下面中肋にそって毛を散生する他は無毛。花期は8～9月。花弁はがく片より短くて2深裂する。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しており、県内では観音寺市大野原町の讃岐山脈上部県境付近で採集されたことがあるだけで、他に記録はない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | もともと個体数が少なく稀なもので、旧大野原町曼陀峠産の標本が得られているが、詳細な生育場所は不明である。今回の調査では確認されていない。なお一部には、この標本の信憑性に疑問を持つ意見があるが、既存情報を広く選定すると言う当初の趣旨から今回も採用した。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 道路の新設や改良工事による森林開発で自生地が消失する。高茎草本の侵入や上層を占める樹木の生長により、被圧されると衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 16 | 執筆者：久米 修 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ミヤマハコベ <i>Stellaria sessiliflora</i> (ナデシコ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---|--|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 深山の日当たりのよい林床に点在して生育しており、個体数はもともと少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 木陰に生える多年草。茎は叢生して斜上し、長さ10～35cm、片側に軟毛がある。葉は広卵形、鋭尖頭、長さ1～4cm。花期は4～5月。花弁は白色、深く2裂する。ハコベとはがく片が鋭頭で花弁より短いことで、サワハコベとは葉面に多細胞の伏毛がないことで区別できる。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では讃岐山脈の深山が分布の中心であるが、海岸近くに位置する八栗山などにも生育している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の林縁や林孔など半日陰の林床で、他種との競合の少ない立地に生育している。産地によっては、比較的個体数が見られる場合がある。今回の調査では、既知産地に際立った変化は確認されなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林の伐採や人工造林により生育環境が急変すると衰退する。高茎草本の侵入や上層を占める樹木の生長により、被圧されると衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：久米 修 | | |

| イソホウキギ <i>Bassia scoparia</i> var. <i>scoparia</i> (ヒユ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---|---|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 海岸や河口の砂泥地に生育するが、河川の改変や海辺の改変によって、近年減少しつつある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 海辺の砂泥地に生育する1年草。茎は下部から多く分枝し、高さは0.5～1m位。葉は互生。細く厚ぼったく、3脈が目立つ。8～10月頃、無柄の花を葉腋につける。果時のがくは上から見て星形。種子は倒卵形でしわがある。 | | |
| 分 布 | 全国的には、東海地方以西の本州、四国、九州に分布する。県内では、島嶼部を含めた海浜に広く分布する。ユーラシア大陸に広く分布し、中国原産のものが、ホウキギとして栽培される。また、赤く紅葉する系統が、コキアの名で公園などに植栽される。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 現地調査では、丸亀市、東かがわ市、さぬき市の海岸で生育が確認された。過去の記録では、観音寺市、坂出市、直島町、高松市、小豆島町、土庄町で、生育が確認されている。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 河川の河口付近の改変や海辺の改変によって、生育地である自然の砂浜が減少しつつある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：末広喜代一 | | |

| イワアカザ <i>Chenopodium gracilispicum</i> (ヒユ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) |
|---|---|----------|------------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧 I A類 (CR) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 海に面した崩壊しやすい急崖地に生育しており、産地および個体数とも限定している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高さ30～100cmの一年草。全体がマルバアカザに似ているが、葉質が薄く、花はまばらにつき、種子に光沢がないことで区別できる。葉は長柄があり、菱状卵形、鋭頭から鋭尖頭、鋸歯はない。花期は8～10月、円錐花序になる。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しており、県内では小豆島と志々島に知られているだけである。生育環境が近寄り難い急崖地であることから、未発見の産地がある可能性がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 小面積の範囲に点在して生育しており、個体数が少ない。今回の調査では、既知産地に際立った変化は確認されなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 土石の採掘などによる海岸部の開発や道路建設により生育地が消失する。波浪や風雨により生育地が崩落する。高茎草本や樹木の侵入による被圧で衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：久米 修 | | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| アッケシソウ <i>Salicornia europaea</i> (ヒユ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|---|------------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* かつては海岸部の塩田周辺に広く分布していたが、塩田の廃止と跡地の土地造成により急激に減少した。残された塩田跡の生育地も乾燥化と脱塩が進み、生育環境が悪化している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 多肉質で無毛の1年草。葉も枝も対生する。葉は多肉質の鱗片状となり外見上は葉と茎の区別がつかない。秋に紅葉する。花は上部の節に3つずつつき、中央の花はやや大きい。晩秋にスポンジ状のがくに包まれた胞果が熟する。種子は成熟後、胞果として脱落し、すみやかに発芽する。 | | |
| 分 布 | 全国的には、北海道・宮城県、四国の瀬戸内地方に分布する。最近の研究では、瀬戸内地方のアッケシソウは北海道のものとは別系統であると考えられている。本県では、海岸部の塩田に広く分布していたが、現在は坂出市、三豊市の限られた生育地でしか残っていない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 海岸の入り江に成立する塩湿地という特殊な環境に生育し、生育に海水を必要とする。本県では塩田があることによりそのような環境が維持されてきたが、塩田の廃止により生育環境が急激に減少した。残された塩田跡地などで幸じて生育している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 塩田の廃止と、それともなう跡地の土地造成により生育環境が急激に減少した。残された数少ない塩田跡地でも乾燥化と脱塩が進み、本種の生育環境としては不都合な環境となった。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 13, 20, 25 | 執筆者: 末広喜代一 | |

| マツナ <i>Suaeda glauca</i> (ヒユ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|-----------------------------------|--|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 海岸の砂地に生育するが、海岸の改変によって生育地が減少しつつある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 海岸や塩水湖畔の砂地に生える1年草。茎は直立し、多くの枝を分け、松葉状の葉を密生する。葉は無毛、無柄。 | | |
| 分 布 | 全国的には宮城県以南の本州、四国、九州に分布する。県内では四国本土、島嶼部の海岸に生育する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 海岸の砂地に生育する。砂浜でも直接波の当たらないやや上部に生育する。現地調査では、三豊市、多度津町、丸亀市、高松市、さぬき市の海岸や河口で生育が確認された。過去の記録では、坂出市、直島町、土庄町、小豆島町での生育確認記録がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 海岸の砂浜の開発によって砂浜が狭められると、生育が出来なくなる。また、砂浜が安定しすぎ、一般の植物が侵入すると競争に負ける。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者: 末広喜代一 | | |

| ハママツナ <i>Suaeda maritima</i> var. <i>maritima</i> (ヒユ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|---|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 以前は塩田に広く分布していたが、塩田跡の埋め立て等によって激減した。現在の生育地も河口域の開発により減少する危険性がある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 海辺の砂地に生える1年草。葉は肉質で密に互生する。マツナほど長くない。若い葉は緑白色であるが、のちに赤紫色となる。 | | |
| 分 布 | 全国的には、宮城県以南の本州から琉球まで分布する。県内では、海岸や河口の砂泥地に稀に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 海岸の砂泥地に生育する。マツナとちがって、海岸でもやや湿地状のところに生育する。以前は塩田周辺に広く分布していたが、塩田跡の埋め立てとともに激減した。現地調査では、三豊市、丸亀市、宇多津町、高松市、さぬき市、東かがわ市で生育が確認された。過去には、観音寺市、坂出市、直島町の生育確認記録がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 河口域の開発によって河口干潟が減少すると消滅する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者: 末広喜代一 | | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ギンバイソウ <i>Deinantha bifida</i> (アジサイ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|---|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 深山の湿潤な林床に生育しており、産地ならびに個体数とも限定している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高さ40～70cmの多年草。葉長10～20cm、幅6～15cm、先は普通2裂する。花期は7～8月。花は茎の先に散房状につく。花序は初め苞につつまれて球状をしている。花序のまわりに2～3個のがくで構成された中性花をつける。両性花の花弁は5個。花色は淡紫色から帯紅白色である。 | | |
| 分 布 | 関東以西に分布しており、県内では高松市塩江町の讃岐山脈の一部と綾川町の一部だけに生育している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | かつて自生地では林床一面を覆うほどの大群落となり、花時には見事な景観をなしていたが、20年ほど前から急激に個体数が減少し、最近では稀になってしまった。今回の調査では、既知産地で個体数の減少が確認された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 林内歩道の整備後急激な減少が起こっており、園芸用の採取掘取りが減少の最大要因である。降雨による土石の流下で生育地が埋没している。森林伐採や針葉樹の植栽により生育環境の急変が起こると衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者: 久米 修 |

| ヤハズアジサイ <i>Hydrangea sikokiana</i> (アジサイ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|---|--|-----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は県内の産地が少なく、限られた地域に局地的に生育している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 落葉低木。高さはときに3mに達することもある。枝は円形、中央には細い髓があり、長さ1mm以下のややかたい白色の毛を密につける。葉柄は長く、葉身は広卵形または長楕円形で先は多くはふたまたにさける。花は白色で装飾花は少ない。 | | |
| 分 布 | 全国的には、本州の一部(紀伊半島)、四国、九州に分布する。県内では、高松市に生育していることが確認された。過去の記録では、まんのう町でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 讃岐山脈の谷筋に沿った樹林内の湿度の高い日陰で生育している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や自然崩落による生育地の消失、森林伐採による乾燥化で衰退することが懸念される。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 37 | 執筆者: 林 鈴以 | |

| キツリフネ <i>Impatiens noli-tangere</i> (ツリフネソウ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--|---|-----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 新たに県内の生育が確認されたが、産地・個体数が局限している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高さ40～80cmで全体無毛。葉は互生し、柄があり、長楕円形で長さ4～8cm、先端は鈍形で粗い鋸歯がある。花は淡黄色で長さ3～4cm、細い花柄でつり下げる。花弁は3個、下方の2個は合着して唇弁となり、内面に赤褐色の斑紋がある。 | | |
| 分 布 | 全国的には、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では、さぬき市、まんのう町に生育することが、新たに確認された。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の溪流沿いや、林道沿いの湿った日陰に生育している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 道路開発により生育地が消失し、自然遷移により生育環境の変化により衰退することが懸念される。花の形がユニークなため園芸採集の危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 35, 37 | 執筆者: 林 鈴以 | |

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| トキワガキ <i>Diospyros morrisiana</i> (カキノキ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---|--|------------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内では、限られた地域でしか見られず、生育地の森林開発、人工造林および盗掘によって絶滅する恐れがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 暖地に生える常緑の小高木。葉は長楕円形で、長さ5～10cm、幅2～3.5cm。6月頃に葉腋に淡黄色の花を単生する。がくは緑色で4裂。雌雄異株。果実は球形で径1.5～2cm。 | | |
| 分 布 | 全国的には、伊豆半島以西の本州、四国、九州、琉球に分布する。四国では、高知県・徳島県の沿岸部に広く分布するが、県内では、東讃のごく限られた地域でしか生育が確認されていない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 現地調査による生育確認の報告はなかった。過去の記録では、旧引田町での生育確認記録がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 樹林内に点在して生育し、生育地の森林開発、人工造林および盗掘によって絶滅する恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 1, 15, 24 | 執筆者: 末広喜代一 | |

| モロコシソウ <i>Lysimachia sikokiana</i> (サクラソウ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅 (EX) |
|---|---|-----------|---------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑩* 県内山地の1箇所だけで採集された古い標本が残っているが、50年以上確認されていないことから、既に絶滅したものと推定される。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高さ30～80cm、茎に稜角があり、全草に微毛を散生する。乾くと一種の香りがある。葉は互生、長さ5～10cm、幅2～4.5cm、卵形から広披針形、質がやや薄い。花期は7～8月。花は葉腋につき、苞はなく、花冠は黄色で5裂、下向きに開き、径1～1.2cm。果実は球形で径6mm。 | | |
| 分 布 | 関東以西に分布しており、県内では1953年に琴平山で採集された標本が残されていただけで、他に記録がない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 1953年に標本が採集されて以降、50年以上確認されていないことから、今回絶滅と評価された。なお一部には、この標本の信憑性に疑問を持つ意見があるが、既存情報を広く選定すると言う当初の趣旨から今回も採用した。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 絶滅の要因として、自生地の開発行為による攪乱、周辺植物の生長に伴う生育空間のうっ閉が考えられるが、はっきりとしない。 | | |
| 特 記 事 項 | 50年以上確認されていないことから絶滅と判定された。 | | |
| 文 献 | 15 | 執筆者: 久米 修 | |

| クサレダマ <i>Lysimachia vulgaris</i> (サクラソウ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|---|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 本種は県内で局地的に生育確認されており、個体数も少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 湿地に生育する多年草。地下茎を伸ばして増え、地下茎から40～80cmの直立する地上茎を出す。葉は3～4個輪生又は対生、披針形～狭長楕円形で無柄。長さ4～12cm、巾1～4cm、先は鋭く尖る。茎の先の円錐形花序に黄色の花を多数つける。花冠は狭卵形で5裂する。5本の雄しべは基部で合着する。 | | |
| 分 布 | 北海道・本州・四国・九州、朝鮮、中国、満州、樺太、南千島、シベリアに分布、県内では坂出市で確認された。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 1981年坂出市で確認されたが、他の場所で生育は確認されていない。1993年頃には既産地で絶滅状態となり、その後生育は確認されていない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発、湿地の埋め立てによる生育地の消失、自然遷移による生育環境の変化で衰退したと考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 37 | 執筆者: 佐藤 明 | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| シコクカッコソウ <i>Primula kisoana</i> var. <i>shikokiana</i> (サクラソウ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 讃岐山脈のごく限られた地域にしか生育せず、現地調査でもわずかな地点でしか生育が確認されなかった。園芸採取の危険性が高く、そのほか、生育地の森林開発、人工造林によって減少し、絶滅するおそれがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山林下に生育する多年草。葉は根生し、長い柄があり、厚く、広円形。表面にしわがあり、縁は掌状に不規則に裂ける。全体に毛が多い。花茎に5～15個の花が輪状に1～3段になってつける。花は紅紫色。ガク片が長いこと、花喉部が黄色であることで、カッコソウと区別される。 | | |
| 分 布 | 国内では、四国にのみ分布する。近縁のカッコソウは関東地方北部にまれに見られる。県内では、讃岐山脈沿いの限られた地域にのみ分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の谷沿いの水はけのよい斜面などに生育する。現地調査では、讃岐山脈の山間部で、生育が確認された。個体数が多いところもある。過去の記録も、この地域に限られるが、上層木による庇陰や盗掘によって絶滅したところも多い。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 園芸採取のほか、生育地の森林開発、人工造林、自然遷移によって絶滅する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | 「香川県希少野生生物の保護に関する条例」によって指定希少野生生物に指定されている。 | | |
| 文 献 | 15, 64 | 執筆者：末広喜代一 | |

| ナツツバキ <i>Stewartia pseudocamellia</i> (ツバキ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---|---|-----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本県での生育は讃岐山脈に限られている。現地調査では2箇所しか確認されず、個体数は少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 落葉高木。葉は互生。ツバキに似た白い花が6～7月頃に咲く。古くなった樹皮が薄片状に剥がれ落ち、幹がマダラ模様になる。 | | |
| 分 布 | 全国的には福島県・新潟県以南の本州、四国、九州に分布する。本県では讃岐山脈でしか確認されなかった。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 西日本では丘陵部から山地部の暖温帯上部から冷温帯下部にかけて生育する。現地調査では、まんのう町でしか確認されなかったが、過去の記録では、旧塩江町でも生育が確認されている。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地での森林開発、人工造林、道路建設、地球温暖化による影響によって減少する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 16 | 執筆者：末広喜代一 | |

| ハクウンボク <i>Styrax obassia</i> (エゴノキ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 讃岐山脈上部のごく限られた地域の落葉広葉樹林に、局所的に生育している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高さ15mになる落葉高木。若枝は緑色で褐色の星状毛があり、古くなると暗紫褐色となり縦に皮が割れて剥げ落ちる。幹は淡黒色。葉は質薄く、倒卵形、先は短く尾状に尖る。表面は緑色、裏面は星状毛が密生して灰白色をしている。花期は5～6月、総状花序にぶら下がった下向き白い花を多数つける。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では大滝山から竜王山にかけての讃岐山脈上部尾根筋近くに知られているだけである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 産地が局限しており、単木的に散見される状態であった。近年減少して確認されていない。今回の調査で確認されなかったことにより、絶滅危惧のカテゴリーが1ランク上に評価された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 人工植栽された針葉樹の育成作業や歩道管理による伐採、植栽木や周辺樹木の生長に伴う被圧により減少した。 | | |
| 特 記 事 項 | 今回の調査で確認されず、絶滅危惧のカテゴリーが1ランク上に評価された。 | | |
| 文 献 | 15 | 執筆者：久米 修 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ウメガサソウ <i>Chimaphila japonica</i> (ツツジ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧1類 (CR+EN) |
|---|--|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 近年個体数が大幅に減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | やや乾燥した丘陵や山地の林内に生える。茎は高さ5～10cm位。葉は長さ2.5～3cm、全体に尖った鋸歯があり、茎の節に輪生状に2～3個ずつつける。6～7月頃、4～8cmの花序の先に直径1cm内外の白い花を1個まれに2個つけ後に上を向く。萼片は4～6mm。さく果はやや扁球形で径6～7mm。 | | |
| 分 布 | 県外では、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では、高松市、まんのう町で生育を確認したほか、小豆島町、旧大野原町、旧長尾町、琴平町での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | すべてを確認できていないが、個体数が減少している。高松市では、採取によると思われる大幅減少の情報がある。まんのう町では、2017年に10株以上を確認できていたが、2019年は1株しか確認できなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 園芸目的による採取、自然遷移による生育環境の変化、道路工事等による土砂の掘削、動物による食害などで危険性が高い。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 15 | 執筆者：中村香代子 | |

| マルバノイチヤクソウ <i>Pyrola nephrophylla</i> (ツツジ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧1類 (CR+EN) |
|---|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 山地上部の落葉広葉樹林の林床に局所的に生育しており、近年著しく減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 根茎は細長く、横走して長い匍枝をつける。葉は2～5個、扁円形で円頭、基部は截形～微心形、長さ1～2.5cm、幅1.5～3.5cm。花茎は高さ10～20cm。花は4～7個つき、白色、径10～12mm。苞は披針形。かく裂片は三角形で鋭頭。花柱は抽出する。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では小豆島、高松市塩江町、まんのう町、観音寺市大野原町の山地上部で確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 近年の確認事例は少なく、小豆島とまんのう町で生育確認があるが、個体数は少なかった。今回の調査では、確認されなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林伐採や針葉樹の植栽で、森林環境が変化すると消滅する。高茎草本の侵入や上層木が繁茂すると、被圧されて衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | 執筆者：久米 修 | |

| ツリガネツツジ <i>Rhododendron benhallii</i> (ツツジ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧1類 (CR+EN) |
|---|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* ごく限られた地域に局地的に生育していることが知られている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高さ1～2mの落葉低木。若枝に微毛がある。葉は長さ2.5～5cm、倒卵形～楕円形で鈍頭、質やや薄い。花期は5月、枝の先に3～7個散状につく。花柄は1～2cmで長い腺毛がある。花冠は筒状で長さ15～17mm、斜め下向きに咲き淡黄色、5裂した先の背裏に紫の斑点がある。 | | |
| 分 布 | 本州静岡県以西と四国に分布しており、県内ではまんのう町の讃岐山脈上部で確認されているだけである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | まんのう町の県境尾根筋の落葉広葉樹林で、数株確認されている。今回の調査では、個体数が半分以下に減少していると報告された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林伐採や刈払いで消滅する。針葉樹の植栽あるいは周辺樹木の繁茂で被圧されると衰退する。地球温暖化により、常緑広葉樹が侵入すると被圧されて衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | 別名ウスギヨウラク | | |
| 文 献 | | 執筆者：久米 修 | |

※選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ホンシャクナゲ (ツクシシャクナゲを含む) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|---|------------|------------|
| <i>Rhododendron japonheptamerum</i> var. <i>hondoense</i> (ツツジ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 園芸採取, 森林開発, 人工造林によって減少している。ツクシシャクナゲ (var. <i>japonheptamerum</i>) を含む。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山地に生育する常緑低木。枝は良く分枝し, 葉は枝先にまとまってつく。葉は全縁で厚く, 表面は無毛だが, 裏面は毛が密生する。紅紫色から白色の花をつける。ツクシシャクナゲでは葉の裏面に枝状毛が密生するが, ホンシャクナゲでは枝状毛がほとんどなく, 平たいロゼット状毛のみが生える。 | | |
| 分 布 | 全国的には中部地方以西の本州, 四国に分布する。県内では讃岐山脈に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 讃岐山脈沿いの山林内の斜面に生育する。現地調査では, まんのう町, 高松市で生育が確認された。過去の記録もこの地域に限られる。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地の森林開発, 人工造林, 園芸採取によって減少する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 15 | 執筆者: 末広喜代一 | |

| レンゲツツジ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) |
|--|--|------------|------------------|
| <i>Rhododendron molle</i> subsp. <i>japonicum</i> (ツツジ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 生育地が県内において局限されている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 幹は叢生し, 高さ2.5mまでになる。葉は互生。枝先に数個集まってつく。葉身は倒披針形。質は薄く, 縁は全縁で波打つ。5~6月, 葉の展開と同時に開花する。枝先に朱橙色の花が2~8個集まってつく。花冠は直径5~8cmの漏斗形, 5中裂し, 上側の裂片には橙赤色の斑点がある。おしべは5個。 | | |
| 分 布 | 県外では, 本州, 四国, 九州に分布する。県内では, 土庄町での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 丘陵から亜高山下部の草原や林縁に生える落葉高木。県内では小豆島の1箇所のみ自生している。島の山頂部の灌木を混生した草原に生育しているが個体数は少なく, 絶滅の危機に瀕している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発やスギ・ヒノキなどの造林等により生育地が減少している。また, 観賞価値が大きいため採取される恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 15 | 執筆者: 三浦 勝美 | |

| ナガバジュズネノキ | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--------------------------------------|--|-----------|------------|
| <i>Damnacanthus giganteus</i> (アカネ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 山中の湿潤な林床に低木として生育しており, 産地ならびに個体数とも限定している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高さ1mほどの常緑低木。根は数珠状に膨らむ。茎は灰白色, 2分枝する。若枝に短毛があるが, 後脱落して無毛になる。葉は対生して長楕円状披針形, 長鋭尖頭, 長さ7~13cm, 幅2~4cm, 全縁, 無毛。花期は4~5月。花は葉腋に2個ずつつき, 花冠は白色。果実は球形, 径4mm, 紅熟する。 | | |
| 分 布 | 愛知県以西に分布しており, 県内では三木町と高松市塩江町で1箇所ずつ確認される。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山中谷筋の落葉広葉樹林床で数株確認されており, 個体数はごく少ない。今回の調査では, 既知産地に大きな変化はなく, 三木町で新産地が報告された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 道路建設工事で生育地が消失し, 森林伐採で刈払われると消滅する。常緑広葉樹の侵入による被圧で衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | 執筆者: 久米 修 | |

※選定理由: ①模式産地, ②分布境界, ③全国極限, ④県固有種, ⑤県内極限, ⑥交雑移行, ⑦限定生育・生息環境, ⑧近年減少, ⑨絶滅

| クルマバアカネ <i>Rubia cordifolia</i> var. <i>lancifolia</i> (アカネ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 限られた生育場所にしか見られず、特定の環境下でのみ生育できる。 | | |
| 種 の 特 徴 | 茎は蔓状で、4稜があり、稜上には下向きの刺が生える。主軸の葉は6～8枚、側枝には4枚の葉が輪生する。葉はやや厚くて小さく、卵状長楕円形または卵形で先は急に狭まって短く尖り、基部は円形、時に浅く心形。葉の表面には短剛毛が散生する。9～10月、葉腋に集散花序を出し多数の黄緑色の花をまばらにつける。 | | |
| 分 布 | 県外では、本州の和歌山県西部と中国地方、四国の瀬戸内海沿岸、九州北部に分布する。県内では、小豆島町で生育が確認されているほか、高松市での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 小豆島の海近くの低山地の草地・林縁にまれに自生するが、一部を除き個体数は少ない。また、近年島外での生育が確認できていない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 海辺の道路の改修や埋立て、掘削など土地の改変によって生育地が消滅する恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 15 | 執筆者：三浦 勝美 | |

| リンドウ <i>Gentiana scabra</i> var. <i>buergeri</i> (リンドウ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|---|-----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 生育地である草地が、森林開発、ため池の改変、管理放棄などによって、近年減少しつつある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山地や草地に生育する多年草。葉は対生し、柄はない、3脈が目立ち、先はとがる。花は秋に茎頂および上部の葉腋にかたまって付く。紫色で内面に茶褐色の斑点がある。葉が細いものは、ホソバリンドウ (f. <i>stenophylla</i>) と呼ばれ、湿地に生育する。 | | |
| 分 布 | 全国的には、本州から九州および奄美諸島に分布する。県内では、おもに中・山間部の農耕地周辺に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 森林の林縁部、ため池の土手、田畑の周辺の草地などに生育する。ホソバリンドウは湿地に生育する。現地調査では、まんのう町、綾川町、坂出市、丸亀市、高松市、東かがわ市、さぬき市、小豆島町で生育が確認された。過去の記録では、旧大野原町、三豊市、土庄町での生育記録がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地である山林の林縁部、草地が、森林開発、ため池の改変、草地の管理放棄などによって少なくなり、さらに減少する恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | 執筆者：末広喜代一 | |

| アサマリンドウ <i>Gentiana sikokiana</i> (リンドウ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---|--|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 県南部山地の高所に沿って局地的に生育していたが、近年個体数の減少が顕著である。 | | |
| 種 の 特 徴 | 茎は高さ10～25cm。葉は数個が対生し、卵形または長楕円形で長さ3～8cm。先はとがり、波状のしわがあり、少し光沢がある。花は青紫色で長さ4～5cm。茎頂および上部の葉腋に数個つく。萼筒は長さ1cmほど、裂片は卵形で平開する。 | | |
| 分 布 | 全国的には、紀伊半島南部、中国地方、四国、九州に分布する。県内では、高松市、まんのう町で生育が確認された。過去の記録では、旧財田町、綾川町、三木町でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 讃岐山脈高所のやや明るい半陰地に細々と点在して生育している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 土石の採掘や林内道路の建設などの森林開発による生育地の消失、針葉樹の人工造林や自然遷移による生育環境の変化により衰退するが、減少の主因は花が美しいことによる採取行為である。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | 執筆者：林 鈴以 | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| センブリ <i>Swertia japonica</i> var. <i>japonica</i> (リンドウ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|--|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 以前は山野の日当たりの良い草地で見られたが、薬用採集、生育環境の変容により、近年減少傾向にある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山野の日当たりの良い背丈の低い草地に生え、高さ10～20cm位になる越年草。葉は対生し長さ1.5～3.5cm位の線形。9～10月頃白い頭花を数個付ける。根は黄色く全草苦みがあり、昔から薬草として、利用されている。 | | |
| 分 布 | 全国的には、北海道から九州まで分布する。県内では、土庄町、小豆島町、東かがわ市、さぬき市、高松市、坂出市、丸亀市、綾川町、まんのう町、多度津町、三豊市、観音寺市に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 県内の丘陵部から山地部にかけて、広く分布するが、生育地が狭く、生育数も少ない所がほとんどである。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や人工造林による道路建設などによる生育環境の変容や消滅、自然遷移による衰退と薬用採集が主な要因である。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：秋山 敬典 | | |

| ムラサキセンブリ <i>Swertia pseudochinensis</i> (リンドウ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|--|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑦⑧* 限られた地域に少数個体が局地的に生育している。絶滅した既知産地が多く、産地・個体数が著しく減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | センブリに似ているが、茎は太く暗紫色をおび、高さ30～70cmになる。花期は10～11月。花は淡紫色で濃紫色のすじがある。花冠は長さ1～1.5cmで5深裂する。 | | |
| 分 布 | 全国的には、関東地方以西の本州、四国、九州に分布する。県内では、小豆島町、さぬき市、高松市、三豊市で生育が確認されている。過去の記録では、坂出市でも生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 島嶼部を含め、主として山地の日あたりのよい乾燥した草地や明るい林内に生育する。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 土石の採掘などの森林開発による生育地の消失、針葉樹の人工造林や自然遷移による生育環境の変化で衰退することが懸念される。薬局方からは除かれているが薬草としての採取、花の観賞価値が高いため園芸用採取の恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：林 鈴以 | | |

| イヌセンブリ <i>Swertia tosaensis</i> (リンドウ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|--|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑧* 県内に広く散見されていたが、絶滅した既知産地が多く、近年産地及び個体数が著しく減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 茎はしばしば基部から分枝し高さ5～30cm。茎葉は倒披針形、長さ2～5cmで先は鈍い。花期は10～11月。花は白色で淡紫色の条がある。基部に2個の密腺溝があり、そのまわりに長い毛がある。全草に苦味がないので薬用にはされない。 | | |
| 分 布 | 全国的には、本州、四国、九州に分布する。県内では、まんのう町、さぬき市で生育が確認されている。過去の記録では、三豊市、旧綾南町、東かがわ市での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 日当たりのよい山裾の湿地、ため池のふちや水田の畦、用水路わきなど日当たりのよい湿った環境に生育している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池の改修や湿地の埋立、圃場整備に伴う排水路の改修により生育地が消失し、草刈などの管理放棄や自然遷移により衰退する危険性にさらされている。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：林 鈴以 | | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| アイナエ <i>Mitrasacme pygmaea</i> (マチン科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は、県内において産地も少なく局地的に生育、個体数も少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 日当たりが良く、湿り気の多い裸地状の草地に生育する1年草。茎葉は直立、高さ5～15mm。基部に数対の葉を対生する。葉は楕円から長卵形、長さ3～15mm、巾2～6mm。8～9月頃、まばらに分枝した茎頂に白い小さな花をつける。 | | |
| 分 布 | 本州・四国・九州・琉球、朝鮮、台湾、中国、印度支那、印度、マレーシア、ミクロネシア、オーストラリア、カレドニアに分布。1991年高松市、2005年さぬき市で生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 県内の分布は少なく、管理されたため池の堰堤などに点在している。高松市の産地の生育は確認できていない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 土地造成、ため池の管理放棄などで生育地が消失、自然遷移による生育環境の変化で衰退が著しい。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 15 | 執筆者：佐藤 明 | |

| フナバラソウ <i>Vincetoxicum atratum</i> (キョウチクトウ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑧* 近年、産地・個体数共に著しく減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 日当たりの良い丘陵地の草地に生育する多年草。茎は直立し枝分かれせず50～90cm位になり、葉は短い柄があり対生し、5～13cmの広楕円形、葉裏は軟毛が密生する。5～6月頃、上部の葉腋に黒紫色の花を束に付ける。 | | |
| 分 布 | 全国的には、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では、小豆島町、高松市、坂出市、丸亀市、善通寺市、三豊市に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 島嶼部から平野部の丘陵地に点在するが、近年、産地・個体数共に減少している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発、管理放棄や自然遷移による生育環境の変容及び趣味者による採集圧による個体数の減少。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | 執筆者：秋山敬典 | |

| スズサイコ <i>Vincetoxicum pycnostelma</i> (キョウチクトウ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|--|--|----------|-------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑧* 本種は日当たりの良い草地に少なからず生育していたが、生育に適した草地の減少とともに、近年個体数が著しく減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | つぼみの形が鈴の形に似ているところが名の由来になっている多年草。堅くて細い茎は40～100cm。対生する葉はやや厚い線状披針形をしている。茎の先や上部の葉腋から花茎を出し、集散状花序に黄褐色の花を咲かせる。花は夕方に開き、翌朝日が当たるとともに閉じる。細長い披針形の袋果に冠毛のある種子が入っている。 | | |
| 分 布 | 北海道・本州・四国・九州、朝鮮、満州、中国に分布。島嶼部を含めた平野部から山裾まで、ため池の土堤、河川の堤、耕地の畦、山裾の草地など、県内全域にわたり広く点在生育する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | かつては珍しい種でなかったが、耕作地の縮小と共に草刈りなどの管理が放棄され、生育環境の変容で生育適地が縮小、個体数が減少している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池や河川の改修、耕地整理による生育地の消失。農業事情の変化により、ため池や畦、耕地周辺の草刈りなどの管理が放棄され、個体数が減少している。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 15 | 執筆者：佐藤 明 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| スナビキソウ <i>Heliotropium japonicum</i> (ムラサキ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|---|---|------------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 近年個体数が著しく減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 長い地下茎のある多年草。茎は高さ25～30cm, 密に圧毛がある。葉は互生し、緑色の長楕円状倒卵形で柄がなく、長さ2.5～2cm, 鈍頭または円頭。やや厚くて両面に圧毛がある。萼は5中裂。花は5～8月に開き、白色で径約8mm, 筒部は長さ6～7mm。果実はコルク質。 | | |
| 分 布 | 県外では、北海道、本州、九州北部に分布する。県内では、観音寺市、三豊市で生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 県西部の海浜の砂地に群生する。今回の調査で2箇所の生育地が確認されたが、海岸開発や自然遷移等、生育環境の悪化で、個体数が大幅に減少、絶滅の恐れがある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 砂の移動等、自然海浜の改変、ゴミなどによる汚れ、人の踏みつけ等々によって、生育環境が悪化している。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 15, 96 | 執筆者: 三浦 勝美 | |

| マメダオシ <i>Ouscuta australis</i> (ヒルガオ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|---|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧IA類 (CR) |
| 選 定 理 由 | ⑧* 寄生植物のため限られた宿主にしか見られず、近年増加した外来類似種の影響で、個体数の減少が顕著である。 | | |
| 種 の 特 徴 | 主にマメ科植物に寄生する一年生のつる植物。茎は細く黄色、薄膜質の退化した鱗片葉がある。花期は7～10月。がくは扁三角形で薄膜質、花冠の1/2～1/3。花冠は約2mm, 筒部に裂片と同長の2裂する鱗片がある。雄ずいは花冠裂片と同長。果実期に花冠裂片は反曲せず直立～斜開する。 | | |
| 分 布 | 日本全土に分布しており、県内では古い記録があった。ところが1960年頃に侵入してきたアメリカネナシカズラが急激に拡散し、マメダオシとの記録上の混乱が起こり、一度マメダオシが県産目録から除外された。最近文献情報として、現在のまんのう町で採集されたマメダオシの標本が明らかになった。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 1982年に旧仲南町で高橋正道が採集した標本が残されている(TUS)ことが、文献情報でわかった。他に確実な記録はなく、これまで確認してきた県産標本にマメダオシは見られない。今回の調査では、確認されていない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 1960年頃に香川県に侵入してきた外来種アメリカネナシカズラとの宿主をめぐる競争で、排除されている。 | | |
| 特 記 事 項 | 新たに香川県に生育していることがわかった。 | | |
| 文 献 | 3 | 執筆者: 久米 修 | |

| ハマネナシカズラ <i>Cuscuta chinensis</i> (ヒルガオ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|--|--|------------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 限られた生育場所にしか見られず、特定の環境下でのみ生育できる。 | | |
| 種 の 特 徴 | つる性の寄生植物。緑葉はなく、茎は細く糸状で他植物に絡みつき、白色～淡緑黄白色。花は無柄または短柄があり、花冠は長さ約4mm, 先は5裂する。花柱は2個。萼筒に著しい10肋が隆起するために星形に見え、花冠が壺形で果実をほとんど包むことでマメダオシや帰化植物のアメリカネナシカズラと区別できる。 | | |
| 分 布 | 県外では、中部地方以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。県内では、観音寺市で生育が確認されているほか、多度津町、丸亀市、小豆島町での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 海岸に生えるハマゴウなどに寄生する一年草。生育環境の改変などにより、現在は県西部の1箇所でのみ自生が確認されているが、個体数は極めて少なく、更なる調査が必要である。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 海辺の開発などによって生育場所が消える恐れがある。また、帰化植物の侵入繁茂による置き換わりや人の踏みつけ等によって生育環境が悪化している。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 2, 15, 96 | 執筆者: 三浦 勝美 | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ヤマホオズキ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|-----------------|--|---|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧ⅠB類 (EN) |
| 選 定 理 由 | | ⑦⑧* 深山の谷間に生育しており、産地ならびに個体数が限られている。生育環境の変化で近年減少している。 | |
| 種 の 特 徴 | | 高さ30～60cmの多年草。茎は分枝してやや軟弱。葉は質薄く長さ6～15cm、幅3～5cm。花期は8～9月。花は葉腋にぶら下がって開き、がくは3～4mmで先に3角形の歯がある。果時に長さ12～15mmとなり、淡緑色で膜質。ホオズキ形となるが角ばらず、10肋が翼状に隆起する。 | |
| 分 布 | | 関東地方以西に分布しており、県内では南部山地に点在しているが、個体数は少ない。 | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | | 深山の安定した林床や谷筋に単生しており、個体数が少なく、従来から稀な種であった。今回の調査では、新産地が報告されたが、絶滅した既知産地があり、産地および個体数が著しく減少していることから、絶滅危惧のカテゴリーが1ランク上に評価された。 | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | | 森林伐採などの急激な環境変化で消滅する。降雨による自生地の崩壊や流失で自生地が消失する。常緑広葉樹が侵入すると被圧され衰退する。 | |
| 特 記 事 項 | | 著しく減少していることから、絶滅危惧のカテゴリーが1ランク上に評価された。 | |
| 文 献 | | 執筆者：久米 修 | |

| イガホオズキ | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|-----------------|--|---|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | | ⑦* 深山の谷間に生育しており、産地ならびに個体数が限られている。 | |
| 種 の 特 徴 | | 高さ50～70cmの多年草。葉は膜質で薄い。花期は6～9月、がくは花時に長軟毛があり、果時にはその毛が刺状の突起となる。漿果は球形で、同長のがくに包まれて白く熟す。 | |
| 分 布 | | 北海道以南に分布しており、県内では主として讃岐山脈沿いの山地に広く点在している。 | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | | 安定した林床に単生しており、個体数が少なく、従来から稀な種であった。今回の調査では、新産地が複数報告された。差し迫った危険性はあまりないが、ヤマホオズキとの整合性で選定した。 | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | | 森林伐採などの急激な環境変化で消滅する。道路建設工事で自生地が消失する。上層木が繁茂すると被圧されて衰退する。 | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | 執筆者：久米 修 | |

| ショウドシマレンギョウ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|-----------------|--|--|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧ⅠB類 (EN) |
| 選 定 理 由 | | ①③④ 全国的にも小豆島の限られた地域にしか分布しない固有種で貴重である。生育地の森林開発、人工造林、園芸採取などによって現在の生育地で絶滅すると、野生状態では、地球上から完全に消滅してしまうことになる。 ⑤* によって現在の生育地で絶滅すると、野生状態では、地球上から完全に消滅してしまうことになる。 | |
| 種 の 特 徴 | | 落葉性の小低木。葉は対生で、よく庭木として栽培されるシマレンギョウよりは幅が広い。ほぼ全縁で、鋸歯は目立たない。花期はヤマトレンギョウよりすこし遅く、4月末から5月上旬。葉とともに開き、花の色は、すこし緑色を帯びたうすい黄色。異型花柱性。 | |
| 分 布 | | 小豆島の限られた地域にのみ分布する香川県固有種。近縁のヤマトレンギョウは中国地方に分布する。 | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | | 小豆島の日当たりのよい乾燥した集塊岩地域に生育する。このような生育環境は小豆島でも比較的限られている。現地調査では、土庄町、小豆島町で生育が確認されたが、強度の庇陰のため絶滅したところもある。 | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | | 生育地の森林開発、人工造林、自然遷移、および園芸採取によって減少すると、絶滅の恐れがある。 | |
| 特 記 事 項 | | 「香川県希少野生生物の保護に関する条例」によって指定希少野生生物に指定されている。 | |
| 文 献 | | 9, 87 執筆者：末広喜代一 | |

*選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| イワギリソウ <i>Opithandra primuloides</i> (イワタバコ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|--|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 日陰の岩場という限られた生育環境でしか生育せず、現地調査でも数ヶ所ではしか生育が確認されなかった。個体数も少ないため、園芸採取、生育地の森林開発によって絶滅する恐れがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 日陰の岩壁に着生する多年草。葉は根生し、長い柄がある。全体に軟毛が多く、キリの葉を思わせる。5～6月に数本の花茎を伸ばし、集散花序に多くの紅紫色の唇形花をつける。 | | |
| 分 布 | 全国的には、近畿地方以西の本州、四国、九州に分布する。県内では、小豆島の他、本土部でもごく稀に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の日陰の岩壁に生育する。現地調査では、三豊市、多度津町、小豆島町で生育が確認された。過去の記録では、旧琴南町、土庄町での生育確認記録がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 園芸採取、生育地の森林開発によって絶滅する恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 15 | 執筆者：末広喜代一 | |

| マルバノサウトウガラシ <i>Deinostema adenocaulum</i> (オオバコ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|--|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 湿地やため池の水辺に生育しており、産地および個体数が限られている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 湿地に生える一年草。茎は軟弱で高さ10～18cm。葉は柄がなく卵円形、長さ5～8mm、幅3～6mm。花期は7～9月。花は長さ1～2cmの柄の先に1個つく。花冠は2唇形で淡紫色、下唇は大きく、中裂片は2裂する。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しており、県内では土庄町豊島で確認されているだけである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 1993年に土庄町豊島の小規模なため池で採集されただけで、他の記録はない。その後同産地では確認されていない。今回の調査では、確認されなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池の改変工事で生育地が消失する。管理行為が放棄されると、落水されなくなり、生育地が出現しなくなる。廃棄されると、他の高茎草本の侵入が起こり、被圧や乾燥化が起こり衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 37 | 執筆者：久米 修 | |

| アブノメ <i>Dopatrium juncum</i> (オオバコ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|---|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 近年、個体数が急激に減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 水田などの湿地に生える一年草。茎は丸く柔らかく、基部より枝分かかれし、高さ10～30cm位になる。葉は下部の物は、長さ1～2.5cm位、幅3～5mm位で上に行くにつれて小さくなる。8～10月頃、上部の葉腋に淡紫色の花を1個ずつ付け、果実は丸く2.5～3mm。 | | |
| 分 布 | 全国的には、福島県以南の本州、四国、九州、沖縄に分布する。県内では、高松市で確認された。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 2015年に1箇所の水田で10株確認されたが、翌年から稲作がされなくなり、水田跡地が乾田化し、以後確認出来ない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地である河川の改修、水田の改修による生育環境の変容及び耕作放棄による水田環境の悪化。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | 執筆者：秋山 敬典 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| キクガラクサ | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|---|------------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| <i>Ellisiophyllum pinnatum</i> var. <i>reptans</i> (オオバコ科) | | | |
| 選 定 理 由 | ⑧* 県内の山地に広く分布しているが、近年個体数が減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 多年草。細長い地下茎を伸ばし、節ごとに根と1枚の葉をつける。葉は長い柄があり、広卵形で羽状に深く裂ける。葉腋から細長い花柄を出し、先に1花をつける。小苞はない。花は5～6月。花冠は白色。名は、葉が菊の葉に似ていて唐草模様を思わせることから。 | | |
| 分 布 | 県外では、本州の青森・栃木・長野・三重の各県と近畿地方・中国地方、四国に分布する。県内では、観音寺市、まんのう町、高松市で生育が確認されているほか、三木町、さぬき市での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の樹林下で、谷筋などのやや湿り気のある半日陰の林縁に生える多年草。讃岐山脈に沿って観音寺市からさぬき市にかけて分布し、個体数も少なくない。差し迫った危険性は少ないが、環境省版レッドデータブック掲載種であることから準絶滅危惧(NT)と評価した。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 岩石採掘や道路建設などの森林開発により生育地が減少し、自然遷移による生育環境の変化で衰退する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 15, 45 | 執筆者: 三浦 勝美 | |

| シソクサ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) |
|---|---|-----------|------------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| <i>Limnophila chinensis</i> subsp. <i>aromatica</i> (オオバコ科) | | | |
| 選 定 理 由 | ⑦* 不安定な半湿地に生育しており、産地および個体数が限られている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高さ15～25cmの一年草。茎は丸く柔らかい。葉は無柄で柔らかく、狭長楕円形、長さ1.5～3cm、幅3～7mm、対生ときに3輪生する。花期は9～10月。花は上部の葉腋につき、花冠は長さ1cm、微黄白色。雄ずいはい4本、うち2本は短い。全体にシソの香りがある。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しており、県内では東かがわ市与田山で確認されているだけである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 1992年に旧白鳥町与田山の小規模なため池で採集されただけで、他の記録はない。その後同産地では確認されていない。今回の調査では、確認されなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 農地改良による湿地の乾田化や、ため池の改修工事により生育地が消失する。ため池の水管理の変化により、生育地が水没したままになってしまった。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 37 | 執筆者: 久米 修 | |

| キクモ | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|--|-----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| <i>Limnophila sessiliflora</i> (オオバコ科) | | | |
| 選 定 理 由 | ⑧* 本種はため池を中心に、用水路に広く分布しているが、ため池の管理放棄等による生育環境が変化、近年生育地、生育数が減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 1年生の沈水～抽水～湿性植物。地下茎の節から茎が立つ。長さは水中では60cm程、陸生では20cm程。葉は4～10輪生。沈水葉は細い糸状の裂片(巾0.2～1mm)に裂け、気中葉の裂片は幅広く、3～7mm。水中と気中では異形葉となる。花期は8～10月。無柄の紅紫色の花を葉腋につける。 | | |
| 分 布 | 本州・四国・九州・琉球、朝鮮、中国、印度に分布。県内全域の山際のため池や水路、湿地。比較的水質の良い場所に広く生育している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | ため池の改修、管理放棄などによる生育環境の変化、水質汚濁等により、近年絶滅、生育地の減少で生育数が減少している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 島嶼部も含め、県内全域のため池を中心に生育している。近年ため池の改修、水質汚濁、管理放棄などで生育環境が変化し生育数が減少、全体的に衰退傾向である。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 15, 44, 46, 68, 92 | 執筆者: 佐藤 明 | |

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ウンラン <i>Linaria japonica</i> (オオバコ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|---|---|------------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* もともと少なかったが、現地調査でも1箇所でしたか確認されず、個体数も少なかった。海辺の改変によってさらに減少し、絶滅の恐れがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 海岸の砂浜に生育する多年草。茎は分岐して斜上または匍匐する。葉は無毛、肉質で緑白色、対生または輪生、上方では互生となる。夏から秋に黄白色の唇形花を咲かせる。花喉部は黄橙色。上下の花びらはとじて、昆虫が訪花しないかぎり開かない。 | | |
| 分 布 | 北海道、千葉以北の太平洋沿岸、日本海沿岸、瀬戸内海沿岸に分布。県内では限られた海岸にしか分布しない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 県内のごく限られた海岸の砂浜に生育する。現地調査では1箇所での生育が確認されたが、多くは栽培移植個体で、開花しても結実しない。過去にそれ以外に1箇所での生育の記録があるが、現状は不明。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 海岸の砂浜に生育するため、海辺の改変や砂浜への立ち入りなどによって、さらに減少し絶滅する危険がある。 | | |
| 特 記 事 項 | 「香川県希少野生生物の保護に関する条例」によって指定希少野生生物に指定されている。 | | |
| 文 献 | 15, 96 | 執筆者: 末広喜代一 | |

| スズメハコベ <i>Microcarpaea minima</i> (オオバコ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|--|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 水田の畦や半日陰の土地に生育しており、産地および個体数が限られている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 湿地に生える軟弱な一年草。茎は多数分枝して這い、長さ5～10cm。葉は長さ3～5mm、幅1mmと微小。花期は7～10月。花は葉腋につき、がくは筒状で長さ2.5～3mm。花冠は甚だ小さく5裂して開出し、筒部は短い。雄ずいは2本。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しており、県内では平地に広く生育していたものと思われるが、あまり記録が残っていない。高松市栗林町の標本が残っているだけである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 水田の畦や湿地、休耕田、半日陰の湿った土地などに生育していたと思われる。1972年に栗林公園の庭で採集された標本が残されているだけで、他に記録が無い。絶滅状態であり、今回の調査では確認されなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 土地造成工事、農地改良による乾田化や畦のコンクリート化により生育地が消失する。除草剤の散布や除草作業で消滅したと思われる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 15 | 執筆者: 久米 修 | |

| イヌノフグリ <i>Veronica polita</i> subsp. <i>lilacina</i> (オオバコ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|---|---|------------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑥⑧* 近年、交雑可能な種や亜種が侵入し、交雑により在来種が減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 道端や石垣の隙間に生える越年草。茎は下部より分岐し、長さ10～20cm位になり毛が散生する。下部の葉は対生、上部は互生する。花は3～4月頃茎の上部の葉腋ごとに、3～4mmの淡紅白色の1花を付ける。蒴果には毛が多い。 | | |
| 分 布 | 全国的には、本州、四国、九州、沖縄に分布する。県内では、小豆島町、東かがわ市、高松市、坂出市、丸亀市、多度津町、琴平町、観音寺市に分布する。過去の記録では、旧詫間町での生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 主に島嶼部に点在して残っており、個体数も少ない。陸地部の物は、交雑種と思われる個体数が多く占めている。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 身近な道端や石垣などに生える種なので、道路整備・土地造成・農薬汚染の影響を受けやすく、侵入種との交雑による影響が大きい。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | 執筆者: 秋山 敬典 | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| カワヂシャ <i>Veronica undulata</i> (オオバコ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---|---|-----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑥⑧* 近縁帰化種との交雑などにより、近年減少傾向にある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 茎は高さ10～100cm。無毛で柔らかい。葉は対生し茎をやや包み縁にはやや尖る鋸歯がある。5～6月、葉腋に5～15cmの細い花序を出し直径3～4mmの小さな花を多数つける。花冠は白から白紫色で淡紫色の脈がある。さく果の長さと同幅はほぼ同長。帰化植物のオオカワヂシャは花冠が淡紫色でより濃い色の脈がある。 | | |
| 分 布 | 県外では、本州、四国、九州、沖縄に分布する。県内では、観音寺市、まんのう町、丸亀市、綾川町、多度津町、高松市、坂出市、東かがわ市、さぬき市、土庄町、小豆島町で生育が確認されているほか、三豊市、琴平町、善通寺市、三木町での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 川岸、溝の縁や田に生える。島嶼部を含む県内の平野部の河川や溜池に広く分布しているが、河川工事などで絶滅した生育地もある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 河川改変による生育地の減少や、農薬汚染、管理放棄による生育環境の悪化、オオカワヂシャとの帰化交雑などによる置き換わりで衰退する恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | 河川工事や帰化植物との交雑で、産地・個体数が減少している。 | | |
| 文 献 | 15 | 執筆者：三浦 勝美 | |

| キセワタ <i>Leonurus macranthus</i> (シソ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅 (EX) |
|--|--|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑩* 最近県内で採集された標本が見つかったが、採集後50年以上確認されていないことから、絶滅したものと推定される。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山際の草地に生える多年草。茎は方形で高さ60～100cm、下向きの粗毛がある。葉は洋紙質で長さ5～9cm、幅3～7cm、欠刻状粗鋸歯がある。花期は8～9月。花は数個ずつ上部の葉腋につく。かくは長さ15mm、5裂、裂片は細長く刺状になる。花冠は2唇形、長さ25～30mm、外側に密に白毛がある。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では現在のさぬき市前山と高松市塩江町上西内場で採集された標本がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 高橋良平らが1964年に旧塩江町上西内場で、1967年に旧長尾町前山太郎兵衛で採集した標本が残されている。以前から産地および個体数はごく稀であったと思われる。今回の調査では確認されておらず、50年以上確認されていないことから、絶滅と評価された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 絶滅の要因として、自生地の開発行為による攪乱、周辺植物の生長に伴う生育空間のうっ閉が考えられるが、はっきりとしない。 | | |
| 特 記 事 項 | 新たに県内に生育していたことが判明した。 | | |
| 文 献 | 76 | 執筆者：久米 修 | |

| マネキグサ <i>Loxocalyx ambiguus</i> var. <i>ambiguus</i> (シソ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅 (EX) |
|---|---|-----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑩* さぬき市で生育が確認されていたが、1968年以降、生育が確認されておらず、絶滅したと思われる。 | | |
| 種 の 特 徴 | 茎は直立し、四角で高さ40～70cm、中部で分枝する。葉は疎らについて薄く、葉柄があり、粗い鋸歯がある。花期は8～9月。花は葉腋に1～3個ずつつき、暗紅紫色。下唇は3裂して開出し、裂片の縁は帯白色。萼は5脈があり、上側で短い5歯があり、下側の2歯は中部以上まで合着している。 | | |
| 分 布 | 県外では、本州の栃木県以西の太平洋側、四国、九州中北部に分布する。県内では、過去にさぬき市での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の樹林下で、道路縁などの林縁部の半日陰に生育する。産地も個体数も少なく、丘陵部から山地部にかけて少数個体が散見されていた。1968年さぬき市で確認されて以降他所での生育情報がなく、50年以上にわたり生育が確認されていないことから絶滅種と評価された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発による生育地の消失、周辺植物の生長に伴う被圧で衰退したと考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | 1968年に採集されて以降50年以上確認されていない。 | | |
| 文 献 | 15 | 執筆者：三浦 勝美 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| シロネ <i>Lycopus lucidus</i> (シソ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|-------------------------------------|--|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦⑧* 本種は限られて環境で生育している。近年、主な生育地であるため池周辺の湿地が減少すると共に、自然遷移による生育環境の悪化で減少が著しく、評価を絶滅危惧Ⅱ類から絶滅危惧Ⅰ類に変更した。 | | |
| 種 の 特 徴 | 太い地下茎を持つ多年草。太く四角い茎は分枝せず直立。高さ80～120cm。対生する葉は多数で広披針形から狭長楕円形、長さ8～15cm、巾15～40cm、先は鋭く尖り、縁に鋸歯がある。花期は8～10月、花冠は鐘型で白色、葉腋に集まって咲く。萼は5中裂し鋭く刺状に尖る。地下茎が白いところからシロネ。 | | |
| 分 布 | 日本全土、東亜、北アメリカに分布。県内では高松市、三木町、さぬき市、直島町の東讃地区で生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 主としてため池周辺の湿地に生育するが、湿り気が多い草地でも確認されている。産地も少なく、各産地とも個体数は多くない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 産地が限定され、主な生育地であるため池周辺の管理放棄による環境変化、自然遷移による環境悪化で、生育地、生育数の減少が著しい。 | | |
| 特 記 事 項 | 2004年版以後、個体数の減少が著しく、絶滅危惧Ⅱ類から絶滅危惧Ⅰ類に評価を変更した。 | | |
| 文 献 | 15, 44, 92 | 執筆者: 佐藤 明 | |

| ホソバヤマジソ <i>Mosla chinensis</i> (シソ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑤⑦* 県内のごく限られた山地で、日当たりの良い裸岩地のごく狭い範囲に少数個体が生育している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高さ10～30cmの一年草。茎は鈍い4稜があり、帯紫色、下向きの細毛がある。葉は広線形～披針形、長さ1.5～3cm、幅2～6mm、不明瞭な低鋸歯がある。花期は8～9月、1～3cmの花序に密に花をつける。花冠は長さ4mm。がくは長さ花時3mm、果時7～8mm、短毛がある。 | | |
| 分 布 | 本州西部以西に分布しており、県内では多度津町の1箇所まで知られているだけである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地尾根筋近くの花崗岩が剥き出しになった岩場の小さな隙間に、1群だけ少数個体が見つかっている。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 土石の採掘などの森林開発で生育地が消失する。生育地周辺の樹木の生長や、裸地に他の草木が侵入すると、被圧されて衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | 新たに県内の生育が確認された。 | | |
| 文 献 | | 執筆者: 久米 修 | |

| ヤマジソ (シロバナヤマジソを含む) <i>Mosla japonica</i> var. <i>japonica</i> (シソ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|------------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑤⑦* 県内において、生育地が極限されており、限られた生育環境にしか見られず、その為一部の環境にのみ生育可能な種である。シロバナヤマジソ(var. <i>thymolifera</i>)を含む。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高さ5～30cm近くなり、全体に開出した毛が多く、香気がありチモールを含む。葉は卵形から狭卵形で短い柄がある。やや密な花穂を作り、苞は広卵形。がくは花時毛がある。 | | |
| 分 布 | 全国的には、北海道、本州、四国、九州、沖縄と、全国に生育する。県内では、小豆島、高松市、坂出市、多度津町に分布する。過去の記録では、旧財田町でも、生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 島嶼部から海岸近くの山地や丘陵地の尾根や裸岩地などの、日当たりの良いやや乾燥気味の裸地状の立地に狭い範囲に点在する。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 開発や岩石の採掘等の土地開発による生育地の減少及び自然遷移による生育環境の変容。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | 執筆者: 秋山 敬典 | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ミズネコノオ <i>Pogostemon stellatus</i> (シソ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|--|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 日当たりの良い湿地という限られた場所に生育, 県内の限られた場所で確認され, 生育数も少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 湿地に生える軟弱な1年草。高さ15~50cm。葉は通常4~6輪生する。茎の途中で分枝し, 8~10月頃, 茎頂及び枝先に直立した花穂を付ける。萼は5裂し密に毛がある。白色から薄紅色の花を密に付ける。雄しべは花外につき出し, 花糸にまばらに毛がある。 | | |
| 分 布 | 本州・四国・九州, 朝鮮・中国・台湾・東南アジア・印度・オーストラリアに分布。県内では普通寺市で記録されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 1974年普通寺市で採取されたが, 埋め立てで生育地が消失, 以後県内で生育の確認はできていない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池の改変, 湿地の埋め立てなどによる生育地の消滅。生育地周辺の環境変化による被圧で衰退, 消滅する危険性が大きい。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 15 | 執筆者: 佐藤 明 | |

| ミストラノオ <i>Pogostemon yatabeanus</i> (シソ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅 (EX) |
|--|--|-----------|-------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑨* 1923年三木茂の採集した標本がある。その後確認されておらず絶滅したと思われる | | |
| 種 の 特 徴 | 湿地に生える多年草。茎は柔らかく, 横に這う地下茎から立ち上がる。高さ30~50cm。葉は3~4輪生する。8~10月, 茎頂に花穂を1個立て, 密に花を付ける。萼は5裂, ほぼ同長の苞と共に軟毛がある。花糸に密に長毛がある。 | | |
| 分 布 | 本州~九州, 朝鮮に分布する。県内の既存情報としては, 1923年現三木町井戸で採集した標本が残されているだけである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 標本記録以後他所での生育情報は無い。以後50年以上生育が確認出来ていないことから絶滅と評価された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 記録が古く, 絶滅の原因は不詳であるが, 生育地の埋め立てで消失したか, 周辺の植物が生育し被圧, 衰退したと思われる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 37, 74 | 執筆者: 佐藤 明 | |

| ミゾコウジュ <i>Salvia plebeia</i> (シソ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---------------------------------------|--|------------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑧* 近年個体数が減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 根出葉はロゼット状で花時には枯れる。茎は高さ30~70cm, 四角形で直立し下向きの細毛がある。茎葉は対生し, 長楕円形で, 表面は脈がへこみ, 細かいしわが目立つ。花は5~6月, 花穂ははじめ短いが, 後に長く伸びて10cmほどになる。淡紫色の唇形花を多数つけ, 雄しべの葯隔の上下の長さが同じなのが特徴。 | | |
| 分 布 | 県外では, 本州, 四国, 九州, 沖縄に分布する。県内では, 丸亀市, 綾川町, 坂出市, 高松市で生育が確認されているほか, 観音寺市, 普通寺市, まんのう町での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 湿った草地や泥地に生える越年草。主に土器川, 綾川, 春日川などの河川の中流から下流域にかけてや, 県中央部を中心に, ため池等に一部を除き少数個体ずつ点在している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 河川やため池の改変, 道路工事等による生育地の減少や, 自然遷移による生育環境の悪化により衰退する恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | 産地・個体数が相当あるが, 開発行為や自然遷移で減少している。 | | |
| 文 献 | 15 | 執筆者: 三浦 勝美 | |

※選定理由: ①模式産地, ②分布境界, ③全国極限, ④県固有種, ⑤県内極限, ⑥交雑移行, ⑦限定生育・生息環境, ⑧近年減少, ⑨絶滅

| ハルノタムラソウ <i>Salvia ranzariana</i> (シソ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅 (EX) |
|--|---|-----------|---------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑨* 本種は、1969年小豆島で採取された標本が残されているが、その後確認されておらず、50年規定により絶滅と評価した。 | | |
| 種 の 特 徴 | 谷間の湿った木陰や、コケの生えた岩に生える小型の多年草。4～6月、高さ5～35cmの花茎状の茎頂に花穂を付け、基部に1～2回羽状複葉の葉をロゼット状に広げて付ける。葉柄基部に開出毛がある。萼は2唇型、時に紫色を帯びる。外面は粗毛が散生、内面中央部に輪状の白毛がある。花冠はほぼ白色。 | | |
| 分 布 | 本州(紀伊半島)、九州に分布。県内では過去に旧内海町で生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 1969年、小豆島寒霞溪採集の標本が残されているが、その後再確認されていない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発などによる生育地の消失。自然遷移による生育環境の変化によって絶滅したと考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | 1969年、小豆島寒霞溪採集の標本以後再確認されていないため絶滅とした。 | | |
| 文 献 | 15 | 執筆者: 佐藤 明 | |

| ハナタツナミソウ <i>Scutellaria iyoensis</i> (シソ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) |
|---|---|-----------|------------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内で本種の産地は少ない。限られた地域の局所に生育、個体数も少なく近年減少が著しい。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山の木陰に生える多年草。茎は直立し高さ15～40cm。上向きに細毛がある。葉は狭卵形～広披針形、通常両面に腺点があり、上面中肋に細毛がある。6月頃頂生の花穂に一方に偏った花を付ける。花冠は直立し青紫色。果時に萼は7mm内外となり、短毛及び腺点がある。 | | |
| 分 布 | 本州(中国地方)、四国に分布。県内は讃岐山脈に点在して分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地樹林の半日陰の林床に生育。県内の産地、個体数は限定されており、今回の調査では、少数の生育が高松市で確認できた。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発のための林道開削による生育地の消失。人工造林や自然遷移により生育環境が変化し衰退する恐れが大きい | | |
| 特 記 事 項 | 2004年版以後、個体数の減少が著しく、絶滅危惧 II 類から絶滅危惧 I 類に評価を変更した。 | | |
| 文 献 | 15, 45 | 執筆者: 佐藤 明 | |

| ヤマタツナミソウ <i>Scutellaria pekinensis</i> var. <i>transitra</i> (シソ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) |
|---|---|-----------|------------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 1982年8月、報告のあった現地では確認が出来ず、2004年版で記載しなかった。2017年5月生育の確認ができた。生育地が限られ、個体数も少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山の木陰に生える多年草。茎は高さ10～35cm、上向きの白毛が多く、細長い地下茎を出す。葉は1～2cmの葉柄が有り、卵状三角形、両面に粗毛が有り、縁に鋸歯がある。5～6月、花序に青紫色の花をまばらに付け、開出する腺毛がある。花冠は基部で約60度に曲がり斜上する。 | | |
| 分 布 | 北海道・本州・四国・九州、朝鮮に分布。県内では屋島、小豆島で確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山間の林床に生育。1966年6月、屋島の採集標本があり、1990年産地不明の記録、2017年5月、小豆島町で記録されている。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 産地が限られ、森林開発による産地の消滅、自然遷移による生育環境の変化で衰退している。 | | |
| 特 記 事 項 | 2004年版は記録が確認出来ず未記載。2017年確認できた事で新規に絶滅危惧 I 類と評価した。 | | |
| 文 献 | 37, 76 | 執筆者: 佐藤 明 | |

※選 定 理 由: ① 模式産地、② 分布境界、③ 全国権限、④ 県固有種、⑤ 県内権限、⑥ 交雑移行、⑦ 限定生育・生息環境、⑧ 近年減少、⑨ 絶滅

| ミヤマナミキ (ケミヤマナミキを含む) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|---|-----------|------------|
| <i>Scutellaria shikokiana</i> var. <i>shikokiana</i> (シソ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 阿讃山脈の限られた環境に生育し、近年減少傾向である。ケミヤマナミキ (var. <i>pubicaulis</i>) を含む。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山地の林床に生える多年草。細長い地下茎が有り、茎は直立、高さ5～15cm、節より枝を出し、上部に開出する腺毛が散生する。葉は1.5～2.5cmの柄が有り、広卵状三角形で薄い、先は尖り数個の深い鋸歯がある。7～8月、まばらに花を付け、花冠は基部より緩く斜上、白色でわずかに薄紅色を帯びる。 | | |
| 分 布 | 本州(関東以西)・四国・九州に分布。県内は、旧琴南町、仲南町の讃岐山脈沿いに点在して確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 谷筋などの明るい林床に生育している。産地は少なく確認は少ないが、今回の調査でも大きな群落が確認できている。近年減少しているが危険性は少ない。変種のケミヤマナミキが環境省版レッドデータブック掲載種である関連から、準絶滅危惧種 (NT) と評価した。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育環境の変化に弱く、森林伐採や針葉樹の人工造林、自然遷移で衰退。森林開発で生育地が消失する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 76 | 執筆者: 佐藤 明 | |

| ナミキソウ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) |
|--------------------------------------|--|-----------|------------------|
| <i>Scutellaria strigillosa</i> (シソ科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 県内の海岸砂浜に群生していたが、近年生育地、個体数ともに急激に減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 海岸砂地に生える多年草。茎は分枝し稜に上向きの毛がある。高さ10～40cm、地下に細長い走出枝を出す。葉は長楕円形、先が丸く短い柄があり、やや厚く毛がある。縁に低い鈍鋸歯がある。6～9月上部の葉腋に青紫色の花を1個つける。花冠は基部で折り曲がりほぼ直角に直立する。 | | |
| 分 布 | 北海道・本州・四国・九州、朝鮮、満州、千島、樺太に分布。県内は島嶼部を含め、海岸砂地に点在して生育。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | かつては河川河口部や海岸の砂地に群生地も有ったが、近年自生地の消失と共に急激に減少した。今回の調査では確認できず、今後予断を許さない状況である。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 海辺や河川河口部の改変、埋め立てにより生育地の消失。砂地の富栄養化で他種が繁茂、生育環境の変化による被圧で消滅。豊島の産地は海流の変化で生育地が流失した。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 15, 96 | 執筆者: 佐藤 明 | |

| ゴマクサ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) |
|--|---|-----------|------------------|
| <i>Centranthera cochinchinensis</i> var. <i>lutea</i> (ハマウツボ科) | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 山地の日当たりのよい湿った草地に生育しており、産地ならびに個体数とも限られている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高さ20～40cm、全体に硬く短剛毛がありざらつく。葉は広線形～線状披針形、長さ2～5cm、幅3～7mm、下部のものは対生するが、上部花部のものは互生する。花期は8～9月。花は上部の苞葉の腋に単生し、花冠は黄色で長さ1.5～2cm、鐘形で先は浅く5裂する。雄ずいは4本。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しており、県内では平地や海岸の低山地に点在して記録されている。生育環境が小面積で特殊な立地のため、確認情報は少ない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 20年ほど前までは多少の生育記録があるが、近年の確認情報は少ない。生育地は小面積で、個体数は少ない。今回の調査では、辛うじて生育が確認された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林の土地造成工事で生育地が消失する。草地の乾燥化、周辺樹木の生長や高茎草本の侵入で被圧されると衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | 執筆者: 久米 修 | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ハマウツボ <i>Orobanche coerulescens</i> (ハマウツボ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|--|------------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 限られた場所にしか自生が見られないので、特定の環境下でなければ生育できない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 全体に白い軟毛が生えるが腺毛はない。茎は黄褐色で太く、直立して高さ10～25cm、鱗片状に退化した黄褐色の葉がつく。5～7月、茎の上部に淡紫色の花を密につける。花冠は長さ約2cm。苞は披針形～三角状卵形で先が尖り、長さ7～15mm。 | | |
| 分 布 | 県外では、日本全土に分布する。県内では、観音寺市、小豆島町で生育が確認されているほか、三豊市での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 海岸や河原の砂地に生え、ヨモギ属、特にカラヨモギの根に寄生する一年草。今回の調査では、3箇所です少数個体のみ確認できた。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 海岸堤防や道路の改修等により生育地が減少している。また、人の侵入による踏みつけなどにより生育環境が悪化している。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 15, 96 | 執筆者: 三浦 勝美 | |

| シオガマギク <i>Pedicularis resupinata</i> (ハマウツボ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 讃岐山脈の上部県境付近の落葉広葉樹林床に局地的に生育しており、個体数は少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高さ30～60cm、茎は無毛又は軟かい短毛がある。葉は互生、時に対生、三角状広披針形～狭卵形、長さ5～8cm、幅1.5～3cm、鋭頭。苞は葉状で小形。花期は8～10月。花冠は紅紫色で長さ2cm、下唇は斜上し、上唇の先は短い嘴となる。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では観音寺市の讃岐山脈上部県境付近の落葉広葉樹林床で知られているだけで、他に記録が無い。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 観音寺市の雲辺寺山尾根筋近くで採集された標本が残されているが、他に記録が無い。もともと個体数が少なく稀なものであった。最近の生育報告がなく、今回の調査では確認されなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 林内歩道の設置工事で生育地が消失した。周辺樹木の生長や高茎草本の侵入により、被圧されると衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 15 | 執筆者: 久米 修 | |

| ヒキヨモギ <i>Siphonostegia chinensis</i> (ハマウツボ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|--|------------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 近年減少傾向にあるが、生育環境の調査が進み前回の調査より多くの報告が上がっている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 低山の日当たりの良い草地や岩場に半寄生する1年草。茎は直立し高さ30～60cm、細毛が密生する。花は黄色で8～9月頃枝先の葉腋ごとに1つの花を付ける。 | | |
| 分 布 | 全国的には、北海道から沖縄まで全国に分布する。県内では、小豆島町、さぬき市、高松市、坂出市、綾川町、善通寺市、多度津町、まんのう町、三豊市、観音寺市に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 生育地が点在して産地・個体数共に少なく、半寄生する1年草なので、年によって増減が、著しい。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発やダム建設による岩石の採掘等の土地開発による生育地の減少及び、自然遷移による生育環境の変容。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | 執筆者: 秋山 敬典 | |

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| オオヒキヨモギ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|-------------------------------------|--|----------|--------------|
| <i>Siphonostegia laeta</i> (ハマウツボ科) | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑧* 産地・個体数共に少ない種である。 | | |
| 種 の 特 徴 | 丘陵地から山地の明るい草地に生える半寄生の1年草。茎はよく分枝し高さ30～70cmになり、やや斜上し腺毛が生える。葉は対生。8～9月頃、上部の葉腋ごとに、灰色がかった黄色の花を1個付ける。 | | |
| 分 布 | 全国的には、関東地方南部、中部地方南部、近畿・中国地方、瀬戸内海沿岸に分布する。県内では、小豆島町、土庄町、直島町、さぬき市、高松市、まんのう町に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 主に島嶼部などの沿岸部に点在し、産地・個体数共に減少している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や道路建設に伴う生育環境の改変、自然遷移による生育環境の変容。 | | |
| 特 記 事 項 | 評価対象種を取り違えていたもので、産地・個体数共に少ない。 | | |
| 文 献 | | | 執筆: 秋山 敬典 |

| ノタヌキモ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|----------------------------------|---|----------|----------------|
| <i>Utricularia aurea</i> (タヌキモ科) | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑧* 水質悪化や生育環境の改変により、近年著しく個体数が減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 茎の長さ1.5mに達する浮遊植物。葉は基部から3本の枝に分かれ、さらに立体的に分枝する。葉全体の長さ3～8cm、多数の捕虫囊をつける。花期は7～10月、花冠は淡黄色で下面部は隆起して赤褐色の紋様がある。果実は径5mm、花柱が残存して伸びて角状となる。種子で繁殖し、冬には枯れる。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布している。県内に広く点在して分布しており、土庄町豊島や直島町など島嶼部でも確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 透明度の高い中栄養の水質のため池に生育しているが、水質悪化や溜池環境の変化で産地および個体数が急激に減少している。今回の調査では、新産地が報告されたが、絶滅したり個体数が減少した既知産地が複数あることから、絶滅危惧のカテゴリーが1ランク上に評価された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池の人工護岸化による生育環境の悪化、水質汚濁や富栄養化が進行すると消滅する。ため池が管理放棄され、水面が閉塞されると陽光不足となり衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | 減少が著しいことから、絶滅危惧のカテゴリーが1ランク上に評価された。 | | |
| 文 献 | | | 執筆: 久米 修 |

| イヌタヌキモ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--------------------------------------|--|----------|--------------|
| <i>Utricularia australis</i> (タヌキモ科) | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑧* 水質悪化や生育環境の改変により、近年著しく個体数が減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 長さ1mに達する浮遊植物。茎は細く柔らかい。葉は長さ1.5～4.5cm、基部で2分枝し、さらに平面的に又状に数回分枝する。花期は7～9月、花茎は中実。花冠は黄色、距は下唇より短く鈍頭。果実は球形で径4mm、結実しない集団もある。萌芽は長楕円形で長さ4～10mm、幅3～7mmと細長くて小さい。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では島嶼部を含め広く点在している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 産地は相当数知られているが、近年減少している。今回の調査では、新産地がかなりの数報告されたが、絶滅したり個体数が減少した既知産地が複数あることから、絶滅危惧のカテゴリーが1ランク上に評価された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池の人工護岸化による生育環境の悪化、水質汚濁や富栄養化が進行すると消滅する。ため池が管理放棄され、水面が閉塞されると陽光不足となり衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | 減少が著しいことから、絶滅危惧のカテゴリーが1ランク上に評価された。 | | |
| 文 献 | | | 執筆: 久米 修 |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ミミカキグサ <i>Utricularia bifida</i> (タヌキモ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|---|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* ため池や湿地に生育しているが、近年生育地と個体数が減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 日当たりの良い湿地に生える多年草。湿地の泥上に横に這う地中軸から、長さ6～8mmの線形の地上葉を出す。8～9月頃5～10cm位の花軸に、数個の黄色の花を付け、花後は耳かきのように見える。 | | |
| 分 布 | 全国的には、本州から沖縄まで全国に分布する。県内では、東かがわ市、さぬき市、高松市、坂出市、丸亀市、まんのう町に分布する。過去の記録では、土庄町、旧内海町でも、生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 島嶼部を含む県内の低山地の日当たりの良い湿地や湧水のしみ出す岩場、ため池の水辺などに生育し、植物体が微小なため花期以外には発見される機会が少ないが、近年生育地の減少が著しい。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発、ため池・湿地の改変、ダム建設による生育環境の減少・変容及び自然遷移による生育環境の変容。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：秋山 敬典 | | |

| ホザキノミミカキグサ <i>Utricularia caerulea</i> (タヌキモ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--|--|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 限定された生育地の湿地が狭小化し、少なくなり、産地・個体数共に減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 湿地の泥上に生える多年草の食虫植物。よくミミカキグサと混生する。夏から秋にかけて10～25cm位の直立した花茎を伸ばし、上部に穂状の花序を付け、数個の紫色の花を付ける。蒴果はミミカキグサに似て耳かき状である。 | | |
| 分 布 | 全国的には、北海道、本州、四国、九州、屋久島に分布する。県内では、小豆島町、土庄町、直島町、さぬき市、高松市、坂出市、丸亀市、まんのう町に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 島嶼部や丘陵地の湧水湿地や泥湿地が小面積に点在して分布し、個体数も多くはない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発、湿地やため池の改修工事による環境の改変、減少及び、自然遷移による生育環境の変容。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：秋山 敬典 | | |

| ヒメタヌキモ <i>Utricularia minor</i> (タヌキモ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) |
|---|---|----------|------------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 山際のため池の湿地部などに生育しており、産地ならびに個体数ともにごく限られたものである。 | | |
| 種 の 特 徴 | 長さ5～30cm、根はなく水中を浮遊するが、湿地では水底に固着する。葉は疎で互生し、長さ0.5～1.5cm、細裂片が2又状に分枝する。捕虫囊は草体に比べ大きく目立つ。花期は8～9月、花冠は淡黄色で、裂開しない場合が多い。秋に茎頂に直径7mmほどの渦巻状殖芽をつくる。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では、まんのう町と三豊市財田町で確認されているだけである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 産地数が限定されている上に個体数も極少数である。今回の調査では、既知産地のひとつで辛うじて生育しているのが確認された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池の人工護岸化による生育環境の悪化、野生動物による生育地の攪乱、水質汚濁で消滅する。ため池が管理放棄され、水面が閉塞されると陽光不足となり衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：久米 修 | | |

※選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ムラサキミミカキグサ <i>Utricularia uliginosa</i> (タヌキモ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 限られた生育環境にしか見られず、そのため一部の環境にのみ生育可能な種。 | | |
| 種 の 特 徴 | 日当たりの良い湿地の泥土にのみ生える多年草の食虫植物。地中浅く糸状の地下茎を伸ばし、まばらに捕虫囊を付け、3～6mmの小さなへら状の葉を地上に出す。8～9月頃5～15mmの花茎を伸ばし、数個の淡紫色の花を付ける。 | | |
| 分 布 | 全国的には、北海道～屋久島に分布する。県内では、まんのう町、過去の記録では、小豆島町でも、生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 1箇所の報告があり、年により、発生個体数の変動が激しい。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池や湿地の改修による生育環境の改変・減少。自然遷移による生育環境の変容。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆: 秋山 敬典 |

| ハグロソウ <i>Peristrophe japonica</i> var. <i>subrotunda</i> (キツネノマゴ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は県内において産地および個体数が極めて少なく、局地的に生育しているのが確認されている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 茎はまばらに分枝して、高さ20～50cm、鈍い稜がある。葉は暗緑色で対生し、全縁。9～10月、枝先または上部の葉腋に花枝を出し、その先に2個の葉状の広卵形の苞に包まれた無柄の花を1～2個つける。花冠は淡紅紫色で細い筒があり、振れて上下逆転し、見かけ上の上唇は浅く3裂、反曲し、下唇は楕円形で幅が広い。 | | |
| 分 布 | 県外では、関東地方以西の本州、四国、九州に分布する。県内では、三木町、高松市での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 水田や畑の畦、山際の道べりなどで、やや湿性の草地や木陰に生育する多年草。かつては少数個体が広く点在して分布していたようであるが、生育地の減少や環境の悪化で個体数が激減した。最近の調査では三木町で1箇所、少数個体が確認できたが、予断を許さない状況である。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 圃場整備にともなう畦や用排水路などの改修による生育地の消失、耕地や道路の草刈などの管理放棄や自然遷移により、生育環境が変化して衰退する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 15 | 執筆: 三浦 勝美 | |

| サワギキョウ <i>Lobelia sessilifolia</i> (キキョウ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 本種は生育環境が湿地に限られているため県内の産地が少なく、近年個体数が減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山間湿地に生育する多年草。高さ50～100cm。茎の上部に総状花序をつける。葉は無柄で互生、低い鋸歯のある披針形、上部で小型化し苞葉に変わる。花序には短い花柄を持つ濃紫色の花を多数つける。花冠は2唇形、下唇は3中裂する。 | | |
| 分 布 | 日本全土、朝鮮、台湾、満州、千島、樺太、シベリヤ東部に分布。県内の産地は少なく、山地の開けた谷部に形成された湿地や、山際のため池周辺の湿地など、湿度の高い明るい山間地に転々と分布している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 産地によっては群生することもあるが、生育地の面積はある程度広い立地が必要なようで、元々産地は少なかった。近年環境の変容により生育適地が減少するとともに個体数が著しく減少している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発やため池の改修、湿地の埋め立てなどにより生育地が消失。花が美しいことによる園芸採取、自然遷移による植物の繁茂により生育環境が悪化し、近年生育数が著しく減少している。 | | |
| 特 記 事 項 | 近年減少が著しく、評価を絶滅危惧Ⅱ類から絶滅危惧Ⅰ類に変更した。 | | |
| 文 献 | 15, 60, 68 | 執筆: 佐藤 明 | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| キキョウ <i>Platycodon grandiflorus</i> (キキョウ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---|--|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧ⅠB類 (EN) |
| 選 定 理 由 | ⑧* 園芸採取, 生育地である草地の自然遷移, 管理放棄, ため池の改変などによって, 近年減少しつつある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 日当たりの良い草地に生育する多年草。太い根茎が地中深くはいる。葉は狭卵形で先はとがり, 無柄。縁に鋭鋸歯がある。花は青紫色。 | | |
| 分 布 | 北海道から奄美大島まで分布する。県内では丘陵部から山地部にかけて分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 日当たりの良い草地に生育する。現地調査では, 三豊市, まんのう町, 普通寺市, 綾川町, 坂出市, 直島町, 高松市, 東かがわ市, さぬき市, 小豆島町で生育が確認された。絶滅したところもある。過去の記録では, 観音寺市, 三木町でも生育が記録されている。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 園芸採取のほか, 生育地である草地の自然遷移, 管理放棄, ため池の改変などによって, さらに減少する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者: 末広喜代一 | | |

| ヒメシロアサザ <i>Nymphoides coreana</i> (ミツガシワ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑤* 県内のごく限られた地域に局地的に生育している。 | | |
| 種 の 特 徴 | ガガブタに類似した浮葉植物で, ガガブタ同様に葉柄状の細長い茎が伸び, 水面近くの節から1~2枚の浮葉を出す。葉は小形で長さ2~6cm, 幅2~4cm, 葉の表面に茶褐色の斑状模様が目立つ。花期は7~9月。花は白色, 径8mm, 花弁の内側に毛がなく縁だけにある。よく結実する。 | | |
| 分 布 | 本州以南の主に太平洋側に分布している。県内では土庄町豊島で確認されているだけである。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 1986年に最初に見つかった放棄湿地は形状に変化はないが, 水質が滞留により悪化し, その後絶滅状態になり, 今回の調査でも確認されなかった。2003年に確認された近隣の沼池では, 今回の調査では大きな変化が見られず, 群生しているのが確認された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 水田としての管理が放棄され, 水が滞留したことにより, 水質汚濁が生じて衰退した。土地造成で沼池が埋立られると, 生育地が消失する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者: 久米 修 | | |

| ガガブタ <i>Nymphoides indica</i> (ミツガシワ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|--|--|------------|-------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑧* かつては県内のため池に普通に生育していたが, ため池の改変や水質の悪化によって少なくなった。 | | |
| 種 の 特 徴 | 多年生の浮葉性水草。葉はほぼ円形で, 基部は深く切れ込む。花の色は白色で, 内側に白い毛が密生する。異型花柱性で, 短花柱花と長花柱花の2つの花型がある。異なった花型の間でしか結実しない。秋に根が変形してバナナの房状になった殖芽を形成する。 | | |
| 分 布 | 本州から九州にかけて分布する。県内では, 平野部から丘陵部にかけてのため池に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 平野部から丘陵部にかけてのやや富栄養化したため池に生育する。現地調査では, 県内各地のため池で生育が確認されたが, 同じく, 県内各地のため池での絶滅の報告もあった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | ため池の改変や水質の悪化等によって産地・個体数が著しく減少している。 | | |
| 特 記 事 項 | 前回評価の準絶滅危惧 (NT) から, 今回の評価では絶滅危惧Ⅱ類 (VU) とした。 | | |
| 文 献 | 57 | 執筆者: 末広喜代一 | |

※選定理由: ①模式産地, ②分布境界, ③全国極限, ④県固有種, ⑤県内極限, ⑥交雑移行, ⑦限定生育・生息環境, ⑧近年減少, ⑨絶滅

| アサザ <i>Nymphoides peltata</i> (ミツガシワ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|---|------------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑧* 県内では1ヶ所のため池でしか自生が確認されていない。水質悪化によって個体数の減少や消滅の危険性がある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 多年生の浮葉性水草。ため池の底の地中に地下茎をのばす。葉はほぼ円形で、基部は深く切れ込む。葉のふちは波状となり、低い鋸歯がある。葉の裏は紫色がかる。花の色は黄色で、直径3～4cm。花冠上部は5つに分かれ、縁に毛がある。花は異型花柱性で、短花柱花・長花柱花・等花柱花の3つのタイプの花型がある。 | | |
| 分 布 | 全国的には北海道、本州、四国、九州に分布する。本県では1箇所でのみ自生が確認されている。個体数は多い。以前は他のため池でも生育していたとの報告があるが、近年のため池の改変や水質悪化によって消失したものと考えられる。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 湖沼、ため池、水路などに生育する。県内では1箇所のため池でしか自生が確認されていないが、栽培品の投棄等により自生地以外でも生育が確認されている。現在の自生地では個体数は多いが、水質改善は余り進んでいないように見える。短花柱花の個体しか見られず、栄養繁殖によってのみ個体数を増やしていると考えられる。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 水質の悪化によって個体数の減少や消滅の危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | 「香川県希少野生生物の保護に関する条例」によって指定希少野生生物に指定されている。 | | |
| 文 献 | 32, 89 | 執筆者: 末広喜代一 | |

| ホソバナヤマハコ <i>Anaphalis margaritacea</i> subsp. <i>margaritacea</i> var. <i>angustifolia</i> (キク科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は県内において産地及び個体数が少なく、局地的に生育しているのが確認されている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 草丈30cm内外で、葉は互生して線形。葉の表面は深緑色であるが、裏面は白色。茎はほとんど枝分かれしない。球状の白い花が上部に群がってつく。花期は8～9月。 | | |
| 分 布 | 全国的には、福井県・愛知県以西の本州、四国、九州に分布する。県内では、過去に旧塩江町などで生育を確認している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 塩江町や旧琴南町の高所で点在しているのを確認されているが、産地も個体数も限定されて少数であり、近年、生育確認の情報が少ない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林伐採などの森林開発や針葉樹の人工造林、自然遷移による生育環境の変化で衰退し、園芸目的の採取が懸念される。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 15 | 執筆者: 林 鈴以 | |

| カワラハコ <i>Anaphalis margaritacea</i> subsp. <i>yedoensis</i> (キク科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|---|------------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 近年、個体数が著しく減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 日当たりの良い河原の砂地に生える多年草。茎は叢生しよく分枝し、30～50cm位になる。葉は白毛のある線形、長さ3～6cm位、幅約1.5mm、葉裏は特に白色の毛が多い。花は8～9月頃、散房状に多数の乾質な白色の頭花を付ける。 | | |
| 分 布 | 全国的には、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では、丸亀市、過去の記録では、内海町、満濃町、観音寺市で採集された標本がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 前回の調査では、1箇所で1株の報告だったが、今回の調査での報告は無い。河原という不安定な環境に生える種なので、今後、詳細な調査が必要である。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 河川の改修、自然遷移による生育環境の改変、変容。帰化植物などの、繁茂による、生育環境の変容。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 15 | 執筆者: 秋山 敬典 | |

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| カワラニンジン <i>Artemisia carvifolia</i> (キク科) | | 香川県カテゴリー | 情報不足 (DD) |
|--|--|----------|-----------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | 文献上の記録はあるが、標本が残されておらず、確認場所と年代が不詳であり、ここでは情報不足とした。 | | |
| 種 の 特 徴 | 茎はよく分枝する。根生葉は長さ10～15cm、幅4～5cmで2回羽状に深裂し、裂片の先は鋭く、ニンジンの葉に似ている。茎葉は互生し、根生葉よりやや小さく、鮮やかな緑色。花期は8～9月。 | | |
| 分 布 | 全国的には、本州、四国、九州に分布する。県内では、普通寺市での記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 日当たりのよい畑や川岸、荒地、海岸の砂地などに生育する。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 15 | 執筆者：林 鈴以 | |

| フクド <i>Artemisia fukudo</i> (キク科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--------------------------------------|--|-----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑧* 河口付近の砂泥地が、河川の改変によって減少することによって、生育地が狭められ、近年減少しつつあり、絶滅の恐れがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 河口付近に生育する1～越年草。葉は扇形で深裂する。葉の先は丸い。根出葉は短い主軸の先にロゼット状につく。側枝がのびて秋に多数の下向きの黄色い頭花をつける。花が咲くと全体が枯れる。全体にメロンのような香りがある。 | | |
| 分 布 | 全国的には近畿地方以西の本州、四国、九州に分布する。県内では河口域に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 海にそそぐ河口付近の砂泥地で、満潮時には植物全体が海水につかるような場所に生育する。現地調査では、観音寺市、丸亀市、宇多津町、坂出市、高松市、東かがわ市の河川河口部などで生育が確認された。個体数の多いところもある。過去の記録では、旧内海町でも生育が確認されている。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地である河川の河口域や海辺の改変によって、生育地が、さらに減少し、絶滅する恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | 執筆者：末広喜代一 | |

| ヒメシオン <i>Aster fastigiatus</i> (キク科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|---|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 県内のごく限られた地域に局地的に生育しており、個体数がごく少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 湿った草地に生える多年草。茎は高さ30～100cm、上部に密に細毛がある。葉はやや厚い洋紙質、長さ5～12cm、幅4～15mm、裏面に毛があり帯白色。花期は8～10月、茎頂に密な散房花序をつけ、頭花は径7～9mm。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しており、県内では現在の高松市牟礼町で確認されているだけで、他に記録が無い。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 1974年と1978年に高松市牟礼町原で採集された標本があるが、その後確認されていない。もともと個体数が少なく稀なものであったと推定される。最近の生育報告がなく、今回の調査では確認されなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育状況が不明であり、溜め池や湿地の改変工事で生育地が消失したか、耕作放棄で草木の侵入が起り消滅したことが推定される。 | | |
| 特 記 事 項 | 近年確認されていないことから新たに掲載した。 | | |
| 文 献 | 15 | 執筆者：久米 修 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| サワシロギク <i>Aster rugulosus</i> var. <i>rugulosus</i> (キク科) | | 香川県カテゴリ | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|---------|----------------|
| | | 環境省カテゴリ | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 生育場所は湿地という限られた生育環境にしか見られず、産地、個体数ともに稀である。 | | |
| 種 の 特 徴 | 地下茎は細長く這う。茎は高さ50～60cmで無毛。葉は線状披針形でやや硬く、縁に微硬毛があつてざらつく。頭花は少なく、長柄があり、径25mm内外。舌状花は白色でのちに紅紫色をおびる。花期は8～10月。 | | |
| 分 布 | 全国的には、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では、三豊市での生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 西讃地域の山地谷筋などで、湧水により形成された日あたりのよい酸性の湿地に生育する。キセルアザミやオミズゴケなどと混生している。産地は少ないが、生育地はある程度の広さがあり、個体数も比較的多まっている。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や湿地の埋立による生育地の消失、森林伐採による湿地の乾燥化、自生地周辺の植物の生長に伴う被圧で衰退することが懸念される。またミズゴケ採取にともなう踏圧が起きている。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者：林 鈴以 |

| タウコギ <i>Bidens tripartita</i> var. <i>tripartita</i> (キク科) | | 香川県カテゴリ | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリ | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* これまで県内の生育が不明瞭であつたが、今回調査で生育が確認された。ごく限られた地域でしか確認されておらず、農地の改修などによって絶滅する恐れがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 休耕田などの水湿地に生える1年草。茎は高さ30～120cm。無毛で切り口が円形。下方の葉は対生して3～5裂。へりには低くて鈍い鋸歯がある。上方の葉は裂けない。頭花は1cm内外、黄色で舌状花はなく、総苞片は大きくて長い。果実は扁平で、2本の長いのぎがある。 | | |
| 分 布 | 日本全土に分布する。かつては水田の強害草であつたが、大正時代に侵入したアメリカセンダングサに追われ、戦後には農薬の影響でさらに減少し、山間部の農村にたまに見る程度であると言われる。県内では、ごく限られた地域でしか確認されていない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | かつては水田雑草として香川県内に広く分布していたと考えられるが、古い目視記録だけであつた。過去の標本が見つかり、さらに、現地調査によって、高松市および土庄町での生育が確認された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地である湿地の改変や農地の改修、農業汚染のほか、管理放棄によって、生育環境が悪化し、絶滅する恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 40, 76 | 執筆者：末広喜代一 | |

| ノジギク <i>Chrysanthemum japonense</i> var. <i>japonense</i> (キク科) | | 香川県カテゴリ | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|---|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリ | — |
| 選 定 理 由 | ⑥⑦* 海岸線の岩場などの限られた生育場所にしか見られず、産地及び個体数が少ない。家菊などの近縁種との交雑により雑種化する危険性が高い。 | | |
| 種 の 特 徴 | 茎の基部は倒れ、立ち上がって多くの枝を分ける。葉は互生し、多くは5裂、ときには3裂する。基部は普通心形か切形。表面は緑色、裏面は灰白色の密毛がある。頭花は散房状につき、舌状花は白色。花期は10～12月。 | | |
| 分 布 | 全国的には、本州の兵庫・広島・山口県、四国の高知県物部川から太平洋岸に添って愛媛県まで分布する。県内では、過去の記録に、小豆郡、旧仁尾町での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 島嶼部を含め県内の海岸部に点在しており、海岸近くの日当たりのよい乾燥した岩崖地など他種の生育しない立地に生育する。近年の生育確認情報はない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 海岸の改変や道路建設により生育地が消失し、近縁種との交雑により雑種化する。 | | |
| 特 記 事 項 | ノジギクとセトノジギクをここでは区別していない。 | | |
| 文 献 | 15, 37 | 執筆者：林 鈴以 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| モリアザミ <i>Cirsium dipsacolepis</i> var. <i>dipsacolepis</i> (キク科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は県内において産地及び個体数が少なく、局地的に生育しているのが確認されている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 茎は直立して、高さ50～100cm。葉の縁の切れ込みはあまり不規則でなく揃っている。総苞片は堅くて、大きく開出する。根は太く垂直に伸びて、径2cmに達し、食用になる。花期は9～10月。 | | |
| 分 布 | 全国的には、本州、四国、九州に分布する。県内では、過去に、旧塩江町、三木町での生育が記録される。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の日当たりのよいやや乾いた草原に生育していたが、近年、生育確認情報がない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発による生育地の消失、自然遷移による草地の生育環境の変化により衰退したと思われる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 15 | 執筆者：林 鈴以 | |

| キセルアザミ <i>Cirsium sieboldii</i> (キク科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|---|---|----------|-------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 谷間の湿地に生育しているが、近年環境変化で生育地、生育数共減少が著しい。 | | |
| 種 の 特 徴 | 湿地に生える多年草。高さ50～100cm。香川では冬場も羽状に裂けたロゼット状の根生葉があり花期にも残る。茎の上部に少数の小さな茎葉をつける。花期は9～10月。茎の先に赤紫色の頭花をやや下向きにつけ、結実期に上を向く。茎の先に咲く下向きの花と茎の様子を、キセルに見立て種名となっている。 | | |
| 分 布 | 本州、九州、四国に分布。県内では丘陵部から山地部の湿地や休耕湿地、ため池周辺の湿地に点在している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 県内は生育地の湿地は少ないが個体数は相当数生育していた。近年環境変化などで生育地が減少すると共に、生育数の減少が著しい。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や道路建設、湿地の埋め立て、ため池の改修により生育地の消失。自然遷移による生育環境の悪化で近年衰退が著しい。 | | |
| 特 記 事 項 | 近年減少が著しく、評価を準絶滅危惧種から絶滅危惧Ⅱ類に変更した。 | | |
| 文 献 | 15, 60, 68, 78, 90 | 執筆者：佐藤 明 | |

| アゼトウナ <i>Crepidiastrum keiskeanum</i> (キク科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|---|--|-----------|-------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 海岸の岩場という限られた生育環境に生育し、さらに県内でも限られた生育地でしか生育が確認されておらず、生育地の海岸の改変が行われると絶滅する恐れがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 海岸の岩場に生育する多年草。葉は厚く鋸歯がある。主幹は根出葉だけを持ち、腋から出た多数の側枝がのび、秋に頭花をつける。頭花は黄色い舌状花だけをつける。果実には冠毛を持つ。 | | |
| 分 布 | 全国的には、伊豆半島以西の本州、四国、九州の主に太平洋岸の岩場に分布する。四国地方では、高知県・徳島県の沿岸部に広く分布するが、県内では東讃の限られた海岸部にのみ分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 海岸の乾燥した岩場に生育する。現地調査では、東かがわ市のみで生育が確認された。個体数は多い。過去の記録もこの地域に限られる。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 個体数は多いものの、生育地は県内で限られており、生育地の海岸の改変が行われると、絶滅する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 1, 15, 24 | 執筆者：末広喜代一 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ヨツバヒヨドリ <i>Eupatorium glehnii</i> (キク科) | | 香川県カテゴリー | 情報不足 (DD) |
|--|--|-----------|-----------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 2004年版では絶滅危惧 I 類としたが、県内に生育している当該種は分類学上問題があり、情報不足とした。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山地に生える多年草。茎は分枝せず直立、高さ1m内外。葉は3~4輪生、葉柄は短い。葉身は長楕円形又は長楕円状披針形。8~9月、茎頂に密に散房花序の頭花をつける。小花は薄紅紫色。瘦果は3mm、腺点があり、5稜形。 | | |
| 分 布 | 北海道・本州・四国に分布。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | | | |
| 特 記 事 項 | 2004年版は絶滅危惧 I 類としたが、分類学上問題があり情報不足と再評価した。 | | |
| 文 献 | 15, 45 | 執筆者: 佐藤 明 | |

| ヤナギタンポポ <i>Hieracium umbellatum</i> (キク科) | | 香川県カテゴリー | 情報不足 (DD) |
|--|---|-----------|-----------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 県内のごく限られた地域に局地的に生育している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 茎は高さ40~80cm。葉は線状披針形、長さ4~12cm、幅0.5~1.2cm。根葉や下葉は花時には無い。花期は8~9月。花は黄色、頭花は径2.5~3.5cm、茎の先に散形に数個つく。総苞は無毛で黒緑色、長さ約1cm。冠毛は淡汚褐色、瘦果は赤褐色で長さ3mm。 | | |
| 分 布 | 日本全土に分布している。県内では、古くは小豆島美しの原と南部山地の記録があるが、標本は残されていない。1970年頃には既に絶滅状態であったと言う。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の日当たりのよい湿り気のある草地に生育するとされており、古くは採草地や林縁部などに生育していた様であるが、今日まで確実な標本が得られていない。当初は既存情報から広く選定すると言う趣旨であったが、今回の評価では県内の生育根拠が不明瞭であるとして、情報不足とされた。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 採草地が不要になり、跡地に樹木が侵入したり針葉樹の植栽で草地環境がなくなり衰退した。 | | |
| 特 記 事 項 | 県内の生育根拠が不明瞭であることから、情報不足と判定された。 | | |
| 文 献 | 15 | 執筆者: 久米 修 | |

| スイラン <i>Holeileon krameri</i> (キク科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--|--|-----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は生育環境が湿地に限定される。県内は生育地である湿地が少ないため、産地、個体数は少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 湿地に生育する多年草。細長い鱗片のない地下茎を出す。高さ50~110cm。根生葉及び下部の茎葉は互生し線形、上部は線形の小さな茎葉をまばらにつける。全体ほとんど毛がない。9~10月、まばらに分岐した枝の先に1個の黄色の頭花を咲かせる。径3~3.5cm。 | | |
| 分 布 | 本州(中部以西)・四国・九州に分布。県内では島嶼部も含め、主として丘陵部から山間の湿地に点在して分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 県内では開けた明るい谷間の湿地や、ため池の水辺や周辺の湿地に生育している。生育地である湿地が少なく、産地と個体数は少ない。近年生育環境の悪化で産地が減少し生育数も減少している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や湿地の埋め立て、ため池の改修による生育地の消失。自然遷移の進行で湿地の乾燥化が進み、湿地の消滅あるいは縮小が進行している。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 15, 60, 68, 93 | 執筆者: 佐藤 明 | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| オグルマ <i>Inula britannica</i> subsp. <i>japonica</i> (キク科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内では、限られた地域でしか生育が確認されておらず、農業汚染、河川開発、管理放棄などによって、さらに減少し、絶滅する危険性がある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 湿り気のある草原などに生育する多年草。茎は高さ20～60cmで、軟毛がある。葉のへりには鋸歯がまばらにあり、やや茎を抱く。7～10月頃、上部の枝分かかれた頂に黄色い頭花をつける。瘦果には冠毛がある。 | | |
| 分 布 | 全国的には、北海道から九州まで分布する。県内では、平野部で稀に見られる。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 現地調査では、東かがわ市の1箇所ですべて生育が確認された。過去の記録では、普通寺市、多度津町、綾川町でも、生育が確認されている。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地における農業汚染、河川やため池の改修、管理放棄、自然遷移などによって、生育環境が悪化し、絶滅する恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 15 | 執筆: 末広喜代一 | |

| カセンソウ <i>Inula salicina</i> var. <i>asiatica</i> (キク科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|--|-----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 生育地の自然遷移、森林開発、管理放棄によって近年減少しつつある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 日当たりの良い草地に生える多年草。茎にはやや多くの毛がある。葉は洋紙質で薄いが、かたく、脈が目立つ。基部は茎を抱く。花は濃い黄色。果実に冠毛がある。 | | |
| 分 布 | 北海道から九州まで分布する。県内では丘陵部に分布。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 日当たりの良い草地や林縁部に生育する。三豊市、坂出市、高松市、土庄町、小豆島町で生育が確認された。過去の記録では、旧飯山町での生育記録がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地の自然遷移、森林開発、管理放棄によって、さらに減少する可能性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | 執筆: 末広喜代一 | |

| タカサゴソウ <i>Ixeris chinensis</i> subsp. <i>strigosa</i> (キク科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|---|---|----------|-------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑧* 本種は県内において森林や原野の開発による草地が喪失すると共に、主な生育地である草地の自然遷移により植生が変化。近年減少が著しい。 | | |
| 種 の 特 徴 | 日当たりの良い野原等に生える多年草。高さ20～40cm。根生葉は倒披針形で、羽状に裂けるものから全縁まで多様、基部は矢尻形にならず、ほとんど茎の下部に集まる。4～6月頃咲く頭花は、白色から薄紫色を帯び、舌状花は20～30と多く、類似種のシロバナニガナとは舌状花の数の多少で見分ける。 | | |
| 分 布 | 本州・四国・九州、朝鮮に分布。県内の既存情報は少ない。島嶼部を含め丘陵部から山地部にかけ、県内に点在分布している。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 丘陵地や山地の日当たりの良い乾燥気味の草地、明るい松林の林縁に生育するが、生育地の草地が森林開発や自然遷移で生育環境が変化したこと、松林が消滅し常緑広葉樹林化したことで、近年減少が著しい。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 土石の採掘による森林開発で生育地が消失。自然遷移の進行で日当たりの良い草地が減少等で、生育環境が変化し衰退している。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 15 | 執筆: 佐藤 明 | |

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ハマニガナ <i>Ixeris repens</i> (キク科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|-------------------------------------|---|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 海岸砂地という特殊な環境に生育するため、近年生育環境が減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 日当たりの良い砂浜に生育する多年草。茎は砂中に伸び、葉は長い柄で砂上に1枚ずつ互生して厚く、径3～5cmで3～5裂する。花は4～10月頃まで長く黄色の3cm位の舌状花を、1～2個ずつ付ける。 | | |
| 分 布 | 全国的には、北海道から沖縄まで全国に分布する。県内では、小豆島町、土庄町、直島町、丸亀市、多度津町、観音寺市に分布する。過去の記録では、さぬき市でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 主に海岸の安定した砂地の開発が及んでいない島嶼部の海浜及び有明浜に生育する。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 海岸砂地の開発及び海浜への侵入種による生育環境の悪化。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆: 秋山 敬典 |

| ネコノシタ <i>Melanthera prostrata</i> (キク科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) |
|--|---|----------|------------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 県内の海岸砂浜に群生することがあったが、近年急激に産地も個体数も減少した。 | | |
| 種 の 特 徴 | 茎は長く地を這い、節から根を下ろす。葉は対生し、長楕円形または披針形、長さ1.5～4.5cm、幅4～14mmで厚く、短い剛毛があり、猫の舌のようにざらつく。頭花は斜上した茎の上に1個つく。花期は7～10月。 | | |
| 分 布 | 全国的には、関東地方・北陸地方以西の本州、四国、九州、沖縄、小笠原に分布する。県内では、観音寺市での生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 島嶼部を含め、県内の日あたりのよい海岸の砂地に点在し、かつては群生地もあった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 人工護岸や遊歩道整備などの海辺の改変や埋立により生育地が消失し、砂地の富栄養化で他種が繁茂して被圧されることが懸念される。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 96 | 執筆: 林 鈴以 | |

| アキノハハコグサ <i>Pseudognaphalium hypoleucum</i> (キク科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) |
|--|---|-----------|------------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧 I B 類 (EN) |
| 選 定 理 由 | ⑧* かつては、山間部のため池の内面などでよく見られたが、近年急激に減少し、絶滅する恐れがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 乾いた草原に生える1年草。ハハコグサに似た黄色い花をつけるが、茎は上方で多く分岐する、葉は幅が広く上面が緑色、花柱は花冠より上に突き出す、花期は秋、といった点でハハコグサとは異なる。 | | |
| 分 布 | 全国的には、本州から九州まで分布する。県内では、山間部のため池の内面などで、まれに見られる。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査では、生育が確認されなかった。過去の記録では、まんのう町、善通寺市、綾川町、高松市、さぬき市、東かがわ市での生育記録がある。絶滅したとの報告もある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | かつては、山間部のため池の内面などでよく見られたが、河川や溜池の改変、農地改修、農薬汚染、管理放棄、自然遷移により、産地、個体数とも急激に減少した。 | | |
| 特 記 事 項 | 前回評価の準絶滅危惧 (NT) から、今回の評価は絶滅危惧 I 類 (CR+EN) とした。 | | |
| 文 献 | 15 | 執筆: 末広喜代一 | |

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ミヤコアザミ <i>Saussurea maximowiczii</i> (キク科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|---|---|-----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 山地の日当たりのよい草地や崖地に生育しているが、産地ならびに個体数とも限られている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高さ50～150cmになる多年草。茎に翼はなく、根葉と下葉は花期にも生存している。下葉は4～6対に羽状裂し、茎葉は次第に小形となり羽状裂から線形になる。花期は8～10月。花は帯紫色、総苞はくも毛があり細筒形、長さ10～14mm、幅6mm。 | | |
| 分 布 | 本州以南に分布しており、県内では平地から海岸にかけての低山地に散見される。1974年に善通寺市大麻山、1967年に旧高瀬町爺神山で採集されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 日当たりのよい草地や林縁に生育しており、数10年前のはげ山状態の頃は相当数の個体が見られたというが、近年ほとんど確認されていない。今回の調査では確認されていない。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 採石などの林地開発行為で生育地が消失する。草刈が行なわれなくなったことで高茎草本や樹木が侵入し、周辺樹木の生長により、被圧されて衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 15 | 執筆者: 久米 修 | |

| ヒメヒゴタイ <i>Saussurea pulchella</i> (キク科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|---|------------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 山地の日当たりの良い草原という限られた生育場所で見られず、自然遷移などで減少し、絶滅の恐れがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山地の日当たりの良い草原に生育する多年草。茎は直立し、120cm位。深い縦のひだがある。上部の葉は裂けなが、下部の葉は羽状に深く裂ける。8～10月頃、茎の上部が枝分かれして、多数の紅紫色の頭花が笠形に密集する。 | | |
| 分 布 | 全国的には、北海道から九州まで分布する。県内では、かつては海岸に近い山地の草原に生育していた。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の現地調査では生育が確認されなかった。過去の調査では、三豊市、高松市での生育の報告がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | かつての生育地は、森林の伐採や岩石採掘等の開発により減少した。また、自然遷移により生育環境が変化し、生育が困難になっている。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 15 | 執筆者: 末広喜代一 | |

| クマノギク <i>Sphagneticola calendulacea</i> (キク科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅 (EX) |
|--|--|-----------|---------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦⑧* 海岸に生育しており、産地ならびに個体数とも限られている。50年以上確認されていないことから、絶滅したものと推定される。 | | |
| 種 の 特 徴 | 茎は圧毛があり地上を這って節から根を出す。葉は披針形から長楕円形で長さ2～7cm、幅6～12mm、縁に2～3個の低鋸歯があり、紙質で葉面はざらつく。花期は5～9月、茎の先に1個ずつ径2～2.5cmの頭花をつける。舌状花冠は黄色。瘦果に杯状の冠毛があり、類似のネコノシタの冠毛は目立たない。 | | |
| 分 布 | 伊豆半島以西に分布しており、県内では観音寺市有明浜の標本があるだけで、他では確認されていない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 1964年に観音寺市有明浜で採集されて以降確認されていない。今回の調査でも確認されず、50年以上経過していることから、絶滅と判定された。なお一部には、この標本の信憑性に疑問を持つ意見があるが、既存情報を広く選定すると言う当初の趣旨から今回も採用した。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 詳細な衰退の原因は不明であるが、1964年当時から個体数が少なく、生育地である砂浜への人や車の立ち入り、打ち上げられたゴミによる被圧と回収作業時の除草などが考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | 50年以上確認されていないことから絶滅と判定された。 | | |
| 文 献 | 15 | 執筆者: 久米 修 | |

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| キビシロタンポポ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|-------------------------------|--|------------|--------------|
| <i>Taraxacum hideoi</i> (キク科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 県内で新たに生育している事が確認されたが、西讃の一部の島嶼部などに限られており、草地の減少、土地造成などによって減少し、絶滅する危険性がある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山里の路傍や草地にやや稀に生育する多年草。シロバナタンポポと比べると、頭花は小さく、総苞外片は圧着して、角状突起はほとんどない。花の色は薄いクリーム色で、瘦果は黒褐色。 | | |
| 分 布 | 岡山県から広島県東部に多産するが、近畿・中国・四国・九州北部にも分布する。県内では、西讃の島嶼部などに稀に生育する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 今回の調査で新たに生育が確認された。現地調査では、西讃の島嶼部での生育が確認されている。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地である草地の減少、土地造成、管理放棄によって減少し、絶滅する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | オクスギタンポポなどとまとめる見解もあるが、米倉(2012)に従って区別した。 | | |
| 文 献 | 48, 88 | 執筆者: 末広喜代一 | |

| クシバタンポポ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|-----------------------------------|--|-----------|----------------|
| <i>Taraxacum pectinatum</i> (キク科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本種は県内において生育地が限定されている。生育地である林縁や草地が道路建設、土地造成で消失すると共に、生育地の管理放棄などで環境が変化し衰退している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 典型的な葉は羽状に深く裂け、楕円状になることが和名の由来。総苞は花時に15~21mm。総苞片には小角突起が無いかごく小さい、中央部が盛り上がり、先端部はこぶ状に盛り上がる。総苞外片は多少開出することはあってもたれさがらず、外片は内片の1/2に達しない。花色は黄色。 | | |
| 分 布 | 本州(北陸・近畿以西)・四国に分布。県内では三豊市に生育。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 果樹園の林床、山地の林縁に生育している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 本種は生育地が極限に限定されている。農業事情の変化で生育地である草地等の管理が放棄され、植生が変化。土地の造成、道路建設などで生育地が消失し、衰退している。 | | |
| 特 記 事 項 | 2004年版では取り上げなかったが、新規に絶滅危惧I類と評価した。 | | |
| 文 献 | 37 | 執筆者: 佐藤 明 | |

| オカオグルマ | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|--|---|-----------|----------------|
| <i>Tephrosieris integrifolia</i> (キク科) | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑦* 本県において本種は生育環境が限定され、生育地も少なく個体数も少ない。 | | |
| 種 の 特 徴 | 日当たりの良い乾いた草地に生える多年草。高さ20~65cm。サワオグルマに似るが、乾いた草地に生えること、根生葉がやや小さく、瘦果に短毛があることが異なる。根生葉はロゼット状でへら状披針形、クモ毛が密生する。5~6月、散房状の黄色い頭花を付ける。 | | |
| 分 布 | 本州・四国・九州、朝鮮・満州・中国・台湾に分布する。県内では、観音寺市、旧琴南町、旧塩江町、綾川町で確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 日当たりの良い農地の畦、法面、ため池堰堤等に生育。1980年以前の自生地では生育が確認できないところもある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 圃場整備、田畑の畦の改修、ため池堰堤の改修等で生育地が消失。農地の管理放棄による生育環境が変化し個体数が減少している。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 15, 94 | 執筆者: 佐藤 明 | |

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| サワオグルマ <i>Tephrosia pierotii</i> (キク科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---|--|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 湿地に生育するが、近年生育地及びその環境と個体数が減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 日当たりの良い湿地に生育する多年草。茎は中空で直立し、高さ50～80cmになり、芽立ちから花が咲く頃まで葉と共に白い綿毛をまとい、開花以後無くなり葉裏に残る。花は4～5月頃4～5cmの頭花を散房状に10～20個前後を付ける。 | | |
| 分 布 | 全国的には、本州、四国、九州、沖縄に分布する。県内では、高松市、丸亀市、観音寺市に分布する。過去の記録では、旧財田町、旧満濃町でも、生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 半日陰から日当たりの良い水田跡地及び沼・湿地に生育しているが、前回の調査より生育地及び個体数が減少している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 道路建設、土地造成、湿地の埋め立てにより生育地が消失し、水田跡地の管理放棄により木やササが覆い繋り日当たりが悪くなり、乾田化が進み生育環境が悪化して衰退している。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：秋山 敬典 | | |

| ウラギク <i>Tripolium pannonicum</i> (キク科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|---|---|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ⑧* 海岸の湿地に生育するが、近年減少しつつある。生育地である河口域での河川や海辺の開発、土地造成によって、さらに減少し、絶滅する恐れがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 海岸に湿地に生育する越年草。高さ25～55cm。葉は披針形、肉質で無毛。基部はわずかに茎を抱く。秋に紫色の舌状花をもつ頭花をたくさんつける。果実には淡紫かっ色の冠毛がある。 | | |
| 分 布 | 北海道、本州、四国、九州の海岸に分布する。県内では河口域や海岸の湿地に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 河口域や海岸の湿地に生育する。満潮によって、直接、海水や汽水に浸る所よりも、やや後背湿地のような所に生育する。現地調査では、坂出市、直島町、東かがわ市で生育が確認された。観音寺市からは絶滅の報告があった。過去の記録では、高松市、丸亀市、観音寺市、さぬき市、土庄町、多度津町の生育記録がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地である河口域での河川や海辺の開発、塩田跡地の土地造成によって、さらに減少し、絶滅の恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：末広喜代一 | | |

| オナモミ <i>Xanthium strumarium</i> subsp. <i>sibiricum</i> (キク科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|--|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑧* 生育地であるため池や河川の改変、帰化種との競合によって近年減少しつつある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 一年生草本。葉は互生し、長い柄があり、3～5浅裂し、縁は不規則な鋸歯がある。オオオナモミに比べて果実は小さく、鋸歯の先がずるとい。 | | |
| 分 布 | 日本全土に分布するが、アジア大陸からの古い帰化種であろうと考えられている。県内では、水の減少した、ため池の辺縁部などで稀に見られる。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 県内では、水の減少した、ため池の辺縁部や空き地などに生育する。現地調査では、観音寺市、綾川町、高松市、三木町、さぬき市、東かがわ市、土庄町で生育が確認された。過去の記録では、三豊市、まんのう町、善通寺市、丸亀市、坂出市での生育記録がある。絶滅したところもある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地であるため池や河川の改変、帰化種との競合によって、さらに減少する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：末広喜代一 | | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| チョウジガマズミ <i>Viburnum carlesii</i> var. <i>bitchiuense</i> (レンブクソウ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|---|---|-----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
| 選 定 理 由 | ③⑤* 全国的にも、また県内でも限られた地域にしか分布しないが、園芸採取、生育地の自然遷移、森林開発、道路建設、河川の改変などによって絶滅のおそれがある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 日当たりの良い山林に生育する落葉低木。株元より良く分岐し、幹は太くならない。葉は短い柄があり、対生し、長卵形。低い鋸歯がある。葉柄、葉の表面、葉脈に星状毛を密生するが、葉の表面は少ない。花は浅桃色で芳香を放つ。果実は黒熟する。 | | |
| 分 布 | 全国的には、中国地方、四国、九州に分布する。県内では、小豆島と海岸に近い限られた山林内に分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 乾燥した石灰岩地帯や集塊岩地帯に生育する。他の樹木が灌木状に疎生するなかに混生するか、明るい林縁部に生育する。現地調査では、高松市および小豆島町で生育が確認された。過去の記録では、土庄町でも生育の記録がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 園芸採取のほか、生育地の自然遷移および森林開発がおもな危険性の要因であるが、生育地によっては道路建設、河川の改変などによっても絶滅する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 21 | 執筆者：末広喜代一 | |

| ウスバヒョウタンボク <i>Lonicera cerasina</i> (スイカズラ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|---|-----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑧* 生育地の森林開発、人工造林などによって近年減少しつつある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 西日本の山地に生育する落葉低木。葉は対生。葉の先は長くとがり、基部は広くさび形。花は黄白色の唇形花で、2個ずつならんでつく。花柄は短い。 | | |
| 分 布 | 近畿地方以西の本州、四国、九州の山地に分布する。県内では讃岐山脈沿いに分布する。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 山地の日当たりの良い谷沿いなどに生育する。現地調査では、まんのう町、高松市で生育が確認された。過去の記録では、三木町でも生育が確認されている。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地の森林開発、人工造林、自然遷移によって減少する恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | 執筆者：末広喜代一 | |

| ヤマヒョウタンボク <i>Lonicera mochidzukiana</i> var. <i>nomurana</i> (スイカズラ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|---|--|-----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑤* 本種は県内において産地がごく少なく、局地的に確認されている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高さ1～2m。枝は四角、毛はなく中実。葉は対生し、円卵形～長楕円形、先はあまり尖らない。葉腋から花柄を出し、5～6月に2個ずつ花をつける。花ははじめ白色、のち淡黄色。花冠は唇形、上唇は4裂する。果実は液果で球形。基部で合着し、小苞と共に紅熟する。葉がやや小形で丸みがあり、花も少し小さいのが特徴。 | | |
| 分 布 | 県外では、本州の東海地方・近畿地方・中国地方、四国、九州に分布する。県内では、小豆島町で生育が確認されているほか、土庄町、高松市での生育記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 標高400～1300mの山地に点在し、時に石灰岩地や蛇紋岩地に見られる落葉低木。今回の調査では、小豆島の1箇所のみで少数個体が確認された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 生育地の森林開発、人工造林や、自然遷移により生育環境が悪化し、減少する恐れがある。 | | |
| 特 記 事 項 | 個体数が少なく、産地が局限している。 | | |
| 文 献 | 15 | 執筆者：三浦 勝美 | |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| キンキヒョウタンボク <i>Lonicera ramosissima</i> var. <i>kinkiensis</i> (スイカズラ科) | | 香川県カテゴリ | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |
|--|--|---------|----------------|
| | | 環境省カテゴリ | 絶滅危惧ⅠB類 (EN) |
| 選 定 理 由 | ⑤* 県内のごく限られた地域に局地的に生育していることが知られている。 | | |
| 種 の 特 徴 | コウグイスカグラに類似した高さ1～2mの落葉低木。よく分枝し若枝には毛が多く、古くなると樹皮が縦に裂けて落ちる。葉は幅狭く、先端が細くなって鋭尖頭、上面の毛はやや短い。花期は4～5月。花冠は淡黄色、筒状で先は5裂し、筒部の上部まで合生する。漿果は球形、2個が中部以下で合生し紅熟する。 | | |
| 分 布 | 京都・大阪・兵庫と四国に分布している。県内では高松市塩江町の大滝山上部で確認されているだけで、他に記録はない。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 落葉樹林下や林孔など明るい立地に生育している。高松市塩江町大滝山で少数個体が確認されているだけである。2011年に確認されたのが最後で、今回の調査では確認されなかった。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 植栽された針葉樹の保育作業で刈払いされ、跡地にナガバモミジイチゴなどの低木が密生して被圧され、衰退した。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者：久米 修 |

| オミナエシ <i>Patrinia scabiosifolia</i> (スイカズラ科) | | 香川県カテゴリ | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|---|---------|------------|
| | | 環境省カテゴリ | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 園芸採取、生育地である草原の自然遷移、管理放棄、ため池や河川の改変によって近年減少しつつある。 | | |
| 種 の 特 徴 | 日当たりの良い草地に生育する多年草。葉は対生し、羽状に深裂する。秋に多数の黄色の小花をつける。花序の上部はほぼ平らになる。 | | |
| 分 布 | 全国的には、北海道から九州まで分布する。県内では、丘陵部から山地部まで広く分布する。しばしば、切り花用に栽培される。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 日当たりの良い草地に生育する。現地調査では、三豊市、まんのう町、坂出市、丸亀市、さぬき市、東かがわ市で生育が確認された。いずれも個体数は少ない。綾川町、東かがわ市からは絶滅の報告もある。過去の調査では、観音寺市、高松市、三木町での生育記録がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 園芸採取、生育地である草原の自然遷移、管理放棄、ため池や河川の改変によってさらに減少する危険性がある。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | | | 執筆者：末広喜代一 |

| オオバチドメ <i>Hydrocotyle javanica</i> (ウコギ科) | | 香川県カテゴリ | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |
|---|--|---------|-------------|
| | | 環境省カテゴリ | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 産地が点在して限られており、生育地の樹林の発達で被圧され、近年個体数が急激に減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 山の木陰に生える多年草。茎は長く這い、節から高さ5～25cmの斜上枝を出す。葉は径3～6cm、腎円形で基部は深く心形、浅く5～9裂し、裂片は低三角形、鈍頭、鈍歯がある。花期は7～10月、枝の葉腋に1～数個の花序を出す。花は小さく多数球状に集まって咲く。 | | |
| 分 布 | 関東地方以西に分布しており、県内では高松市藤尾神社、綾川町、まんのう町、琴平町琴平山などで確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 県内屈指の個体数があった高松市藤尾神社では、上層木の生長と共に林冠が閉鎖し、被圧により急激に減少した。今回の調査では、個体数が相当ある産地が報告されたが、確認されなかった既知産地がある。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 森林開発や道路建設工事で自生地が消失する。周辺樹木の生長により被圧されると衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | 産地および個体数が急激に減少していることから、新規に掲載した。 | | |
| 文 献 | | | 執筆者：久米 修 |

※選 定 理 由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

| ミシマサイコ <i>Bupleurum stenophyllum</i> var. <i>stenophyllum</i> (セリ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
|--|---|----------|--------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑧* 県内に広く散見されていたが、近年個体数が著しく減少している。 | | |
| 種 の 特 徴 | 茎は直立し高さ40～70cmあり、細長くて堅く、縦条がある。葉は長披針形から線形で互生する。8～10月頃に黄色の小花を散形花序につける。果実は楕円形で熟すると褐色になる。 | | |
| 分 布 | 全国的には、本州、四国、九州に分布する。県内では、多度津町、三豊市、坂出市、高松市、小豆島町での生育が確認された。過去の記録では、観音寺市、普通寺市、土庄町でも生育が確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 既存情報は比較的多く、県内の里山に広く分布している。日あたりのよい乾燥気味の草地や明るい林内に生育する。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 薬草としての利用価値が高いため、採取の危険性が大きい。他に土石の採掘などの森林開発や道路建設による生育地の消失、自然遷移により他の植物が覆い茂り、日照条件が悪化して衰退することが考えられる。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：林 鈴以 | | |

| ハマゼリ <i>Onidium japonicum</i> (セリ科) | | 香川県カテゴリー | 準絶滅危惧 (NT) |
|--|--|----------|------------|
| | | 環境省カテゴリー | — |
| 選 定 理 由 | ⑧* 生育場所が海辺で限定された生育環境であり、近年個体数の減少が顕著である。 | | |
| 種 の 特 徴 | 高さ10～50cmで、茎は下から枝を張るかときに直立する。花は8～10月、総苞片と小総苞片は細く、縁に毛がある。萼歯片は目立たず、花弁は白色。果実は扁平な球形で、隆起線が竜骨状にはりだしてよく目立つ。 | | |
| 分 布 | 全国的には、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では、東かがわ市、さぬき市、高松市、宇多津町、観音寺市での生育が確認されている。過去の記録では、三豊市、直島町でも確認されている。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 島嶼部を含め海岸沿いの日当たりのよい砂地に点在して生育している。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 河川河口部や海岸砂地の埋立や堤防建設などの開発行為で生育地が消失する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 81 | 執筆者：林 鈴以 | |

| ヌマゼリ <i>Sium suave</i> var. <i>nipponicum</i> (セリ科) | | 香川県カテゴリー | 絶滅危惧I類 (CR+EN) |
|--|--|----------|----------------|
| | | 環境省カテゴリー | 絶滅危惧II類 (VU) |
| 選 定 理 由 | ⑦* 清涼な水域に生育するため、県内では生育環境が稀で、産地および個体数は限られている。 | | |
| 種 の 特 徴 | 水辺に生える多年草。茎は中空で高さ60～130cm。葉は有柄で単羽状複葉、互生、長さ20～60cm。小葉は3～9対、鋸歯があり、披針形。花期は7～9月、複散形花序となる。花は白色、花弁は5、平面～やや盛り上がった丘状に密集して咲く。 | | |
| 分 布 | 北海道以南に分布しており、県内では丘陵から平地にかけて、点々と生育している。坂出市、普通寺市、まんのう町等の記録がある。 | | |
| 県 内 で の 生 育 状 況 | 日あたりのよい清水の湧き出水や湿地、その下流の水路などで少数確認されている。近年減少が著しく、既知産地の一部で辛うじて生育しているのが確認された。 | | |
| 絶 滅 危 険 性 の 要 因 | 湿地の埋立や河川改修、出水改修工事で生育地が消失する。除草剤の散布による枯死が見られ、水流が滞留すると水質汚濁が起こり衰退する。 | | |
| 特 記 事 項 | | | |
| 文 献 | 執筆者：久米 修 | | |

※選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

◎植物◎

- | 番号 | 文 献 |
|----|---|
| 1 | 阿部近一. 1990. 徳島県植物誌. 教育出版センター, 徳島. |
| 2 | 藤井伸二. 2013. ハマネナシカズラ (ヒルガオ科) の国内分布. 分類 13(2) : 103-107. |
| 3 | 藤井伸二. 2018. 寄主植物を用いたマメダオシ (ヒルガオ科) の生育環境の推定. 植物地理・分類研究 66 : 177-184. |
| 4 | 藤井伸二・牧 雅之・國井秀伸. 2014. 島根県新産植物3種の記録 (シログワイ, ノダイオウ, ヒメタデ) とアオヒメタデに関するノート. 分類 14 : 169-176. |
| 5 | Fujita, N. and Tamura, N. M. 2008. Two new varieties and one change of status in Hosata (Asparagaceae). Acta Phytotax. Geobot. 59(1) : 31-36. |
| 6 | 藤原滝雄. 1989. 四国におけるカシワ (ブナ科) の分布について. 香川生物 (15・16) : 49-58. |
| 7 | 古市光信. 1984. 香川県高松市地下から産出した縄文前期～中期の大型植物遺体. 香川生物 (62) : 29-36. |
| 8 | 原 寛. 1953. 新種カンカケニラ. 植物研究雑誌 28 : 30-31. |
| 9 | 原 寛. 1973. ショウドシマレンギョウ. 植物研究雑誌 48 : 32. |
| 10 | 橋本 薫. 1994. 小豆島讃花. 月刊「びーぶる」, 香川. |
| 11 | 林 鈴以. 2003. 香川県産スミレ目録. 高知県の植物 (17) : 161-168. |
| 12 | 林 鈴以. 2013. 香川県下にてゲンジグスミレ発見!! 香川植物の会会報 (492) : 43-44. |
| 13 | 星野卓二・正木智美・中村松寿・市原和政・池田 博・狩山俊悟・榎本 敬・任 炯卓. 2010. 瀬戸内地方に隔離分布する絶滅危惧種アッケシソウの起源. J. Jpn. Bot. 85 : 180-185. |
| 14 | 茨木 靖・久米 修・小山隆義. 2013. 四国におけるハネガヤ (イネ科) の分布. 植物研究雑誌 88 : 330-334. |
| 15 | 香川県環境保健部自然保護課編. 1980. 香川県植物誌 合弁花. 香川県. |
| 16 | 香川県環境保健部自然保護課編. 1981. 香川県植物誌 離弁花. 香川県. |
| 17 | 香川県環境保健部自然保護課編. 1983. 香川県植物誌 単子葉・裸子. 香川県. |
| 18 | 香川県環境保健部自然保護課編. 1984. 香川県植物誌 シダ植物. 香川県. |
| 19 | 角野康郎. 2014. ネイチャーガイド 日本の水草. 文一総合出版, 東京. |
| 20 | 環境庁自然保護局編. 1988. 第3回自然環境保全基礎調査 特定植物群落調査報告書 追加調査・追跡調査. 大蔵省印刷局, 東京. |
| 21 | 片本 毅. 1979. 小豆島におけるチョウジガマズミについて. 香川生物 (8) : 1-4. |
| 22 | 片本 毅. 1989. 島の植物誌. 私家版. 勁草出版サービスセンター, 東京. |
| 23 | 小林禧樹・丸岡通行・黒崎史平. 2015. 兵庫県瀬戸内地域の岩山に残存するトサオトギリ (オトギリソウ科) の分布特性と生育環境. 植物地理・分類研究 63 : 17-24. |
| 24 | 高知県. 2009. 高知県植物誌. 高知県・財団法人高知県牧野記念財団. |
| 25 | 国分 寛・納田美也. 1972. 香川県のアツケシソウ. 香川生物 (5) : 81-84. |
| 26 | 久米 修. 1988. 小豆島の植物. 日本の生物 2(11) : 28-34. |
| 27 | 久米 修. 1991. 香川県産クロフネサイシンの生活様式. 香川生物 (18) : 11-17. |
| 28 | 久米 修. 2005. 竜王山のツチトリモチ科植物について. 香川植物の会会報 (391) : 4. |
| 29 | 久米 修. 2008. 香川県のミクリ属. 水草研究会誌 (90) : 20-23. |
| 30 | 久米 修. 2011. ハタバカンガレイがまんのう町長尾に生育. 香川植物の会会報 (462) : 4. |
| 31 | 久米 修. 2011. 香川水草便り11 流水中のハタバカンガレイ. 水草研究会誌 (95) : 39-40. |
| 32 | 久米 修. 2011. 香川水草便り12 アサザ. 水草研究会誌 (96) : 33-34. |
| 33 | 久米 修. 2012. まんのう町勝浦の山中でアサノハカエデを発見. 香川植物の会会報 (474) : 5. |
| 34 | 久米 修. 2012. 高松市屋島東町壇浦にオオバナシナミズニラが生育. 香川植物の会会報 (483) : 68. |
| 35 | 久米 修. 2012. 第494回例会・観察会 (455). 香川植物の会会報 (485) : 77-78. |
| 36 | 久米 修. 2012. 香川県のミズニラ属. 水草研究会誌 (98) : 35-39. |
| 37 | 久米 修. 2015. 香川県産植物目録・補遺1. -在来種子植物-. 香川生物 (42) : 25-59. |
| 38 | 久米 修. 2015. 香川水草便り17ヒメミズワラビ. 水草研究会誌 (102) : 40-41. |
| 39 | 久米 修. 2016. 香川県産植物目録・補遺2. -在来シダ植物-. 香川生物 (43) : 1-10. |
| 40 | 久米 修. 2017. 高松市菅沢町でタウコギを発見. 香川植物の会会報 (544) : 86. |
| 41 | 久米 修. 2018. 香川水草便り19イトクズモ. 水草研究会誌 (106) : 35-36. |
| 42 | 久米 修. 2019. 香川県産植物目録・補遺4. 香川生物 (46) : 29-40. |
| 43 | 久米 修. 2019. 香川水草便り21 スプタ類. 水草研究会誌 (106) : 51-52. |
| 44 | 久米 修・納田美也・和気俊郎・大石泰輔. 1987. 新川水系のため池における水生植物相. 香川県自然環境保全指標策定調査研究報告書 (新川水系ため池) : 16-42. 香川県. |
| 45 | 久米 修・和気俊郎・新居正敏・藤原滝雄・末広喜代一. 1994. 大滝大山県立自然公園地域の植物相. 大滝大山県立自然公園地域の自然と人文景観 (3) : 1-22. 香川県. |
| 46 | 久米 修・末広喜代一・藤原滝雄・新居正敏・和気俊郎. 199b. 間川緑地環境保全地域の植生と植物相. 香川県自然環境保全調査研究報告書 藤尾山自然環境保全地域・間川緑地環境保全地域 : 41-59. |
| 47 | 久米 修・篠原 渉・佐藤 明・末広喜代一. 2014. 屋島の植物相とその特徴. 天然記念物屋島調査報告書 : 175-203. 高松市・香川大学天然記念物屋島調査団, 香川県. |
| 48 | 久米 修・藤本博文. 2015. キビシロタンポポの再発見. 香川植物の会会報 (516) : 53-54. |

- 49 倉田 悟・中池敏之. 1987. 日本のシダ植物図鑑 5. 東京大学出版会, 東京.
- 50 正宗巖敬・里見信生編. 1963. 小豆島の植物. 北陸の植物の会, 金沢.
- 51 三谷 進. 1987. 小豆島羊歯目録. 日本シダの会会報 2 (69) : 34.
- 52 三谷 進. 1991. 香川県羊歯目録Ⅱ (八栗山, 柏原溪谷, 白峰山). 日本シダの会会報 2 (86) : 19-20.
- 53 三谷 進. 1992. 香川県のカヤツリグサ科の記録 (Ⅰ). すげの会会報 (3) : 25-27.
- 54 三谷 進. 1993. 香川県のカヤツリグサ科の記録 (Ⅱ). すげの会会報 (4) : 29-30.
- 55 三谷 進. 1993. 香川県植物目録 (Ⅳ). 高知県の植物 (11) : 21-31.
- 56 三谷 進. 1995. 香川県植物目録 (Ⅴ). 高知県の植物 (12) : 39-51.
- 57 永原純子. 2004. 香川県中部域におけるガガブタ (*Nymphoides indica*) 2型花の分布について. 香川県自然科学館研究報告 長期研修生の部 24 : 1-10.
- 58 Naruhashi, N. 1973. A New Species of *Aletris* with an Interesting Corm. *Acta Phytotax. Geobot.* 25(4~6) : 131-135.
- 59 鳴橋直弘・和田賢次. 2006. トクシマコバイモ *Fritillaria tokushimensis* (ユリ科) は自然雑種と考えられる. 植物地理・分類研究 54 : 35-44.
- 60 新居正敏・末広喜代一・久米 修・藤原滝雄. 1997. 綾歌町森林公園の植生と植物相. 香川県自然環境保全調査調査研究報告書 大高見峰緑地環境保全地域・綾歌町森林公園 : 79-119. 香川県.
- 61 新居正敏. 2006. 琴平山でタシロラン. 香川植物の会会報 (412) : 5.
- 62 納田美也・大石泰輔. 1986. 香川県東讃地域における水生植物の分布. 香川県自然環境保全指標策定調査研究報告書 (香川県東讃地域) : 147-156. 香川県.
- 63 織田二郎・久米 修. 2017. 瀬戸内海の牛島でオオクグ *Carex rugulosa* (カヤツリグサ科) の生育を確認. 香川生物 (44) : 49-51.
- 64 小笠原善実. 1998. 香川県塩江町大滝山周辺のシコクカッコソウの生態と環境について. 香川県自然科学館研究報告 20 : 1-8.
- 65 大橋広好・門田裕一・邑田仁・米倉浩司・木原浩編. 2016. 増補改訂新版・日本の野生植物 3・バラ科～センダン科. 平凡社, 東京.
- 66 大平 豊. 1997. 四国産植物短報 (1). 高知県の植物 (13) : 35-40.
- 67 大平 豊. 1999. 四国産植物短報 (2). 高知県の植物 (15) : 45-50.
- 68 佐藤 明. 2007. 国営讃岐まんのう公園自然生態園の植生・植物相. 香川の生物 (香川県高等学校生地部会・編) : 87-94.
- 69 佐藤 明. 2011. 新規県内記録確認セイトカズムシソウについて. 香川植物の会会報 (469) : 63.
- 70 佐藤 明. 2015. クロヤツシロラン初記録の記. 香川植物の会会報 (520) : 86-87.
- 71 佐藤 明. 2016. 植物つれづれ草 : 折々の記 2 ミズアオイ. 香川植物の会会報 (523) : 13.
- 72 佐藤 明. 2016. 植物つれづれ草 : 屋島の記 2 マルミノウルシ. 香川植物の会会報 (526) : 40.
- 73 佐藤 明. 2017. イトクズモ再発見. 香川植物の会会報 (541) : 62.
- 74 志賀 隆・藤井伸二・瀬戸 剛. 2009. 三木茂博士寄贈水草さく葉標本目録-附三木茂水草コレクション目録・タイプ標本画像CD-. 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第41集.
- 75 Shimizu, T. 2009. *Carex benkei*, a new species of *Carex* (Cyperaceae) from Japan and China. *Acta Phytotax. Geobot.* 60(1) : 41-46.
- 76 篠原 渉・久米 修. 2016. 香川大学教育学部生物学教室所蔵さく葉標本に基づく香川県産希少野生植物の記録. 香川生物 (43) : 15-18.
- 77 末広喜代一. 1982. 香川県の「暖かさの指数」と「寒さの指数」. 香川生物 (10) : 39-42.
- 78 末広喜代一・和気俊郎・新居正敏・納田美也. 1985. 讃岐丘陵公園予定地の植物相と植生. 国営讃岐丘陵公園 (仮称) 地域の動植物現況調査報告書 : 53-86. 香川動植物の会.
- 79 末広喜代一・久米 修・藤原滝雄・新居正敏・和気俊郎. 1994. 藤尾山自然環境保全地域の植生と植物相. 香川県自然環境保全調査調査報告書 藤尾山自然環境保全地域・間川緑地環境保全地域 : 17-40. 香川県.
- 80 末広喜代一・久米修・藤原滝雄・新居正敏・和気俊郎. 1994. 大滝大川県立自然公園地域の植生. 大滝大川県立自然公園地域の自然と人文景観 (2) : 1-47. 香川県.
- 81 末広喜代一・久米 修・佐藤 明・篠原 渉. 2014. 屋島の海岸植物. 天然記念物屋島調査報告書 (高松市・香川大学天然記念物屋島調査団 編) : 224-229.
- 82 鈴木和雄. 1990. 日本のイカリソウ 起源と種分化. 八坂書房, 東京.
- 83 高田 順. 2017. ホシクサ属植物ガイド. 私家版, 秋田市.
- 84 高家和彦・三谷 進. 2003. 香川県仲南町のシダについて. 高知県の植物 (17) : 151-160.
- 85 高家和彦・三谷 進. 2007. 香川県産のシケチシダ類に関する新知見について. 高知県の植物 (20) : 55-89.
- 86 高瀬町編. 2003. 高瀬町史 民俗・自然編. 高瀬町, 香川.
- 87 高島かな・末広喜代一. 2006. ショウドシマレンギョウ *Forsythia togashii* Hara の異型花柱性と種子生産. 香川生物 (33) : 31-41.
- 88 タンポポ調査・西日本実行委員会編. 2016. タンポポ調査・西日本2015調査報告書. タンポポ調査・西日本実行委員会, 大阪.
- 89 上杉龍士・西廣 淳・鷺谷いずみ. 2009. 日本における絶滅危惧水生植物アサザの個体群の現状と遺伝的多様性. 保全生態学研究 14 : 13-24.
- 90 和気俊郎・新居正敏. 1984. 財田川・柞田川・高瀬川水系及び荘内半島の植生. 香川県自然環境保全指標策定調査研究報告書 (香川県西讃地域) : 7-129. 香川県.

- 91 和気俊郎・藤原滝雄・久米 修・新居正敏・末広喜代一・高橋良平. 1985. 香川県中讃東部地域の植生. 香川県自然環境保全指標策定調査研究報告書(香川県中讃東部地域) : 13-129. 香川県.
- 92 和気俊郎・久米 修・新居正敏・藤原滝雄・末広喜代一・高橋良平. 1986. 香川県東讃地域の植生. 香川県自然環境保全指標策定調査研究報告書(香川県東讃地域) : 15-97. 香川県.
- 93 和気俊郎. 1991. 岸上・帆ノ山台地の植物. 香川県仲多度郡岸上・帆ノ山台地および綾歌郡綾上町(羽床上)高尾付近の動植物現況調査報告書 : 29-71. 香川動植物の会.
- 94 和気俊郎. 1991. 綾上町(羽床上)高尾付近の植物. 香川県仲多度郡岸上・帆ノ山台地および綾歌郡綾上町(羽床上)高尾付近の動植物現況調査報告書 : 97-134. 香川動植物の会.
- 95 和気俊郎・末広喜代一・久米修・藤原滝雄・新居正敏. 1993. 弥谷山自然環境保全地域の植生と植物相. 香川県自然環境保全調査調査研究報告書 弥谷山自然環境保全地域・七宝山緑地環境保全地域 : 19-58. 香川県.
- 96 吉田一代. 2007. 香川県の海岸植物. 香川の生物(香川県高等学校生地部会・編) : 211-214.